

語り継ぐ 16

教訓・記憶・想いを繋ぎ未来へ残す
～「あの日」の語り手であるために～

兵庫県立舞子高等学校
環境防災科3年

題 名	名 前	頁
語り継ぐ	浅 野 博 斗	1 ～
「忘れない・忘れられない・忘れたくない」	浅 見 一 葉	5 ～
語り継ぐ	揖 澤 敬太朗	9 ～
想定外を考える ～21世紀に生まれた、私たち～	石 井 比 奈	13 ～
語ること ～私の語り～	海 野 百 花	17 ～
Dear 防災に関心がない人へ	大 塚 美 紗	21 ～
震災を経験していない今の私にできること	大 西 由 輝	25 ～
語り継ぐ	奥 田 桃 加	29 ～
語り継ぐ	川 島 凜々花	33 ～
私の防災のかたち	木 谷 太 成	37 ～
「過去から学び、私たちができること」	北 村 達 也	41 ～
語り継ぐ	木 下 龍 斗	45 ～
過去から学び、今日のために生きる	久 米 峻 平	49 ～
語り継ぐ	黒 木 梨 里	53 ～
はじめの第一歩	後 藤 夏 咲	57 ～
未来へ繋ぐ思い	小 山 勘 汰	61 ～
経験のない私にできること	坂 口 陽 菜	65 ～
語り継ぐ	坂 本 秀 斗	69 ～
「つながり」が「つながり」を呼んで	先 間 直 樹	72 ～
「語り継ぐ」	佐 々 大 晴	76 ～
「語り継ぐ」	佐 藤 祐太朗	80 ～
未来の命を救うために	塩 治 陽 生	84 ～
語り継ぐ	糺 川 尚	88 ～
語り継ぐ	高 橋 太 河	92 ～
明るい未来へ・・・	立 野 貴 大	96 ～
被災者から未災者へ	辻 悠 汰	100 ～
「震災を知らない私たち」	戸 田 蓮 納	104 ～
「語り継ぐ」	富 田 彩 翔	108 ～
語り継ぐ	中 阪 光	112 ～
阪神・淡路大震災、その時家族は。～語り継ぐとは～	中 谷 海	116 ～
「語り継ぐ」	中 山 虹	120 ～
「語り継ぐ」	中 山 功太郎	124 ～
明日へ・未来へ	沼 田 凌佑真	128 ～
拝啓、この誌面を読んでもくれたあなたへ	橋 本 来 夏	132 ～
語り継ぐ	平 松 弘 成	136 ～
語り継ぐ	廣 瀬 拓 海	140 ～
語り継ぐ	福 島 康 渡	144 ～
繋ぐことの大切さ ～私たちの使命～	藤 原 祐 弥	148 ～
語り継ぐ	藤 原 優 希	152 ～

語り継ぐ

浅野 博斗

1 はじめに

1995 年 1 月 17 日午前 5 時 46 分に、阪神・淡路大震災が起きて多くの人が亡くなり、長田の町が火の海になった。私はこの震災を経験していない。しかし、このような震災をもう繰り返さないためにも、阪神・淡路大震災を経験した母と祖父の話を聞き、語り継いでいきたい。

2 阪神・淡路大震災概要

名称：兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）

日時：1995 年 1 月 17 日午後 5 時 46 分

震源地：淡路島北部

震源の深さ：16 キロ

規模：マグニチュード 7.3

最大深度：震度 7

死者：6434 名

行方不明者：3 名

負傷者：43792 名

「阪神・淡路大震災について（内閣府 防災情報のページより）」

3 母の話

母は阪神・淡路大震災を経験した。母はその時寝ていた。すぐに揺れに気づいたが、これまで経験したこともないような地震で、動けなかった。そして次の瞬間、横にあるタンスが自分に向かって倒れてきた。しかし、もう一方の机も倒れてきて、助かった。もしその机がなかったら死んでいた。すぐに家から逃げ、いつもと違う風景に驚いた。阪神・淡路大震災が起こる前までは、2 階に住んでいたから町の景色が見えていた。けれども、地震で 2 階だった家が 1 階になったせいで町の風景が見えなくなっていた。家族全員が生きていることは本当に幸せだと感じる。

4 祖父の話

祖父は阪神・淡路大震災を経験した。いつも通り車で会社に行く途中にそれは起こった。トンネルを通るときに大量のほこりが舞った。その瞬間に揺れだしすぐに逃げた。家に戻り家族が不事か確認をした。1 階は崩れていて 2 階が 1 階になっていた。その当時、2 階で生活していたから家族全員の命は助かったが、もし一階で生活していたら死んでいた本当に助かって良かった。祖父は当時、鉄鋼業の会社で働いていた。会社は壊れていなかったから良かった。しばらくは仮設住宅に住んでいたが、祖父と母と叔母がいるから、お金を貯め新しい家を買った。祖父も母と同じで、家族全員生きていることが幸せだと言っていた。

5 話を聞いて

私は母と祖父の 2 人の話を聞いて、瞬時に動いていることに感心した。私がもし、阪神・淡路大震災を経験したら、何が起きているかわからない。けれども、母と祖父は、地震だとすぐにわかり、逃げていて本当にすごいと思った。逃げていなかったら、亡くなっていたかもしれない考えると怖くなった。どれだけ防災訓練や防災教育を受けていてもその地震が起こり、逃げなかったら意味がない。だから、どれほど防災訓練が重要なのか話を聞いて、その大切さを理解することができた。

環境防災科に入ってから、自分から地震だと感じ瞬時に逃げることは難しいことだと知っていたので、話を聞くことで、より逃げることの大切さがわかった。本当に防災に関心を持ち、備えをしておかないと、実際に災害が起きても逃げられないと思う。だから、私の家族にも防災に興味を持ってもらいさらに、地域の人たちに阪神・淡路大震災を語り継いでいきたい。それが私のできることだと思う。

6 南海トラフ巨大地震

南海トラフ巨大地震は、今後 30 年以内で 70%～80%の確率で発生するとされている。これは大きな

地震で津波も来ると予想され、甚大な被害が出ると言われている。兵庫県は、南海トラフ巨大地震の危険範囲に入っている。兵庫県で起こる被害予想は約3万人と言われており、これは津波によるものだ。1人1人が防災に関心を持ち、備えをしておかなくてはならない。そうでなければ、多くの被害が出てしまう。南海トラフ巨大地震の被害を最小限に抑えるためには、私たちが、地域の人たちに防災を伝えていかなくてはならない。阪神・淡路大震災の教訓をもとに、次に来ると予想されている南海トラフ巨大地震では、被害を最小限に食い止めなければならない。自分1人だけでそうそう伝えられるものではないが、環境防災科で学んだことを生かし、防災というものが大切だということを知ってもらいたい。そのためには、周囲が防災に関心をもっていなくても、私たち環境防災科はあきらめてはいけない。

南海トラフ巨大地震が起こる前に、自分の住んでいる場所は危険区域に入っていないか、さらに、高台や津波避難ビルの場所はどこにあるかなど、津波からの避難を考えておく必要がある。それだけでもしていれば、防災に関心を持っているといえるし、備えということではできている。少しでも注意しておこうと思っておくだけでも、防災はできている。難しいことだと思い込まずに、備えていくことで被害を最小限に食い止めることができ、これから起こりうる災害に対して、皆が関心を持てば怖くない。だから、私はあきらめずに伝えていく。

7 環境防災科に入学

(1) きっかけ

私が環境防災科に入学したきっかけは、消防士になろうと考えたからだ。入学したら防災の知識や消防体験で少しでも消防士に近づけると考えた。また、ボランティア活動や消防体験などに魅力を持ち、入学したいと考えたのがきっかけだ。

(2) 入学して

入学して最初に思ったことは、ボランティア活動が多いことだ。入学する前から環境防災科に関して、調べていたが、こんなに多いとは思ってもいなかった。また、授業でも阪神・淡路大震災についての講義があったり、小学校の子供たちと防災について深めたりして、風化させないことであったり、地域の人とのつながりの大切さを学んだ。

阪神・淡路大震災が起こった後、さまざまな課題が見つかった。それまでは、防災のことに関して皆、あまり関心がなかった。自分の身の回りの安全は確保できているのか、住民と日々のコミュニケーションは取れているか、次に地震が起こっても被害を最小限に食い止められるのか、などの課題が見つかった。災害対策を1人で考えようとすると不可能だ。しかし、自分の住んでいる町を災害によって壊されたくない。だから私は、環境防災科で学んだ知識を生かして、地域の人たちに伝え、皆で防災について考えたいと思う。

8 消防学校体験入校

私がこの舞子高校に入学して、一番してみたかったことがこの消防学校体験入校だ。消防学校体験入校は、1年生、2年生の時に実地された。私の夢が、消防士でもあるので、すごく興味が湧いていた。

中でも、規律訓練が一番辛かった。周りの人と合わさないと1からやり直して、1人でも乱れると命が救えないと思いながら訓練することを学んだ。緊張もあり、決して健康のために体を動かしているのではなく、実際に災害が起こっていることを想像しながら訓練をした。だから、体も疲れているが精神も疲れていることに訓練が終わってから気付いた。1年生の消防訓練では、私が号令を出し、その隊の指揮をとっていた。やりがいもあったがそれよりも緊張と焦りで、訓練中ずっと頭を使っている気分だった。それは訓練が終わってから気付いたものだが、自分のせいでその隊が怒られていることが悔しくて、みんなに申し訳ないと感じた。けれども、休憩時間の時には、友達が励ましてくれたりしたので頑張れた。後半は自分でもしっかり動けていることが分かり、本当に嬉しかった。そのこともあり、2年生の消防学校体験では、みんなに恩返しできるように訓練しようと思った。命がどれほど重要なもので、1人が乱れたらその隊が次の活動に移ることができない。責任感のある仕事だと訓練して学ぶことができた。私は16歳でこのようなことを学び体験させてもらい、これから生きていくために大切なことを経験することができた。

2年生の時では、1年生の時に体験したことを思い出しながら、訓練することができたので、精神面でも1年生の時より強くなっていた。周りの人に迷惑のかかることをしていたなど、今でも考える。消防学校体験の最後の総合訓練が一番の思い出だ。それは、みんなで連携しながら消火活動をするのが2年生最後の訓練だったからだ。1人が何をすればいいのかわからなくても、その隊の人たちがサポートし

てくれるけど、その隊の連携がうまくとれていなかったら、消火活動をしようとしている隊も迷惑が掛かり、その隊のサポートに回らなくてはならない。だから、消防士の連携をすることの重要性を学べた。私は、その時何をすればいいのかわからなかった。私の役目がわからず言われた通りにやったが、動くのが遅かった。それは、自分でもわかっていて、頭では考えていたつもりだったが、体は一切動いていなかった。だから、自分の隊のメンバーが、私をサポートしてくれたから、最後までやり遂げることができた。終わった後は反省することがたくさんあり、自分の課題も見つかった。私は消防士になりたいから、本当は困っている人を助ける側につかないといけないのに、1年生の時の消防学校体験では助けてもらう側になってしまい、本当に悔しかった。私は1年生の時に、みんなに迷惑をかけたから2年生の消防学校体験では、その恩返しをするつもりだったのに、2年生の時でも、できていないことが本当に悔しかった。そのおかげでまだまだ未熟だと思い、防災の知識を増やし、力をつけるために毎朝ランニングをした。2年生の時に考えたことだが、1年生の時の自分と比較することはすごく大事なことだとわかった。前の自分より成長しているか、逆に反省することはあるかなど、比較することは大切だと思えた。

私は消防学校体験をさせてもらい、1人1人の動きがどれほど重要なもので号令をかける人は何に気を使わないといけないかなど、たくさんのことを学んだ。また、比較することは大切だと思い、ボランティア活動でも1回行って2回目行くことが大切だと気づいた。私はそのことに気付くのは遅いと思ったが、これから大人になっていくためには大切なことだと考える。だから中学生や高校生、そして大学生の若者は様々なことに興味を持ち、1、2回でいいからボランティア活動など、体験してみることが大切だ。学生の時に一回だけボランティア活動など体験したことは、大人になって行う活動でも、思い出しながら体験できるし、過去に経験した自分を比較しながら体験することができる。先生がいつも言っている若いうちに多くの経験を積むことの重要性を、2年生の時にわかって良かった。もし消防学校体験をしていなかったら、この答えにはたどりつかないと思う。本当に内容の濃い、体験をさせてもらって良かった。

9 将来の夢

私の将来の夢は、消防士になることだ。きっかけは、消防士が消火活動をしているところを実際に見て、私もその消防士のように人を助けられる人間になりたいと考えたからだ。実際に見たときは、煙の量がすごくて、私はその場から動けなかった。消防士は連携を組んで中に入って救助していたが、私はずっと見ることしかできなかった。それがすごく悔しかった。この経験から、災害現場で活躍している消防士になりたいと考えた。それから私は、消防士について調べたが、人を助ける仕事はたくさんあるのだと知った。その中で、自分はどれをしたいか迷ったが、環境防災科に入学して、地域のつながりの大切さや命の大切さ、備えという大切さを学び、消防士になりたいと改めて思った。

消防士は災害救助だけではなく、住民自身が自助、地域で共助できるように活動しているところが魅力的だと考える。地域とのつながりが大切だと思ったのも、環境防災科に入学してわかったことだ。この高校で3年間学んだ知識を生かして、消防士になったら地域の人たちに伝えていきたい。また、火事や救助現場では活躍できる消防士になりたい。

10 最後に

阪神・淡路大震災を経験していないから、他人事だと感じている人も少なくはないと思う。しかし私は、母と祖父の話を聞き、環境防災科で学んだことを生かしながら考えることができた。

阪神・淡路大震災で多くの命を失った。そこから課題がたくさん見つかった。災害が起こってから、防災に興味がある人が増えたが、やはりまだ防災に無関心な人はたくさんいる。防災のために時間はさけない、今の仕事が精一杯という大人が多い。また、小学生や中学生も、防災が何かわかっていない人が多いと思う。私は環境防災科で防災の事について学んでいるから自然と意識が傾くが、自分から防災に興味を持って調べたり、ボランティア活動に行ったりすることは、本当に難しいことだと思う。その人たちにどれだけ防災に関心を持ってもらえるかはわからないが、私たちが諦めてしまったら、誰が過去にあった悲惨な災害を伝えるのだろうか。私たちは決して伝えていくことを諦めてはいけない。それが私たちの使命だ。

自分から防災に興味を持ち、次の災害に対して備えをする自助が一番大事だと考える。自分から防災に関心を持たないと、地域の人たちに伝えられず、自助の次の共助には届かない。防災に関して地域のつながりが大切だと言うが、一番なのは自分から防災に関心を持つことだ。だから自分の命は自分で守る事が大切だという事を伝えたい。自分が助からないと他の人を助けられない。だから、どれだけ自分の命

が大切かを知り、そして伝えていくことが大切なのだ。

「忘れない・忘れられない・忘れたくない」

浅見 一葉

1 はじめに

1995年1月17日午前5時46分に阪神・淡路大震災が発生した。これにより、多くの方々が犠牲となった。二度と多くの犠牲者を出さないためにも震災を語り継いでいく必要がある。しかし、私は震災当時に生まれておらず、自分の体験談を語り継ぐことは不可能である。そのため、実際に被災経験のある祖父と大伯父の妻のきみ子さん（仮名）から話を聞いた。その話をもとに、次の世代へ阪神・淡路大震災を語り継いでいきたい。

2 阪神・淡路大震災

名称：兵庫県南部地震

発生日時：1995年1月17日5時46分

震源地：淡路島北部

震源の深さ：16キロメートル

最大震度：7

規模：マグニチュード7.3

死者：6434人

「阪神・淡路大震災について（内閣府）」より

3 きみ子さんの話

きみ子さんは夫・娘・息子2人の5人家族で酒屋を営んでいた。当時、息子2人は千葉と九州の大学に進学していたため、神戸の家には夫・きみ子さん・娘・犬のハナと共に住んでいた。

（1）地震発生

地震発生直後、隣で寝ていた夫が揺れの衝撃で飛び、きみ子さんはその夫の衝撃で目が覚めた。揺れは続き、収まるころには家は全壊していた。娘が寝ていた部屋は屋根に穴が空いたため、娘は逃げることが出来た。しかし、きみ子さんと夫とハナは家の下敷きになり、生き埋め状態となった。身体がまったく動かない。きみ子さんは瓦礫の隙間から必死に大声を出して助けを呼んだ。しかし、なかなか助けは来ない。夫は声を出すことによって体力を奪われることを避けるため、きみ子さんに助けを呼ぶことをやめるよう告げた。生き埋めになってから2時間30分ほどが経ったとき、娘が常連のお客さんたちを連れてきて、助け出してくれた。その後も、余震が続いていたので、近くの小学校に避難することにした。そしてすぐに加古川の親戚が迎えに来てくれたため、加古川に向かうことにした。このとき、きみ子さんたちは落ち着いたら荷物を取りだそうと考えていた。しかし、地震から2日目のことだ。きみ子さんの家の裏のゴム工場で、地震の影響による火災が起きた。すぐにきみ子さんの家にも火が移り、家は全焼した。家も思い出も全て燃えて無くなってしまった。また、自宅前に設置していた120万円程度の自動販売機も燃えてなくなってしまった。

（2）ハナの苦しみ

家は全焼で住める状態ではなかったので、加古川の親戚の家でしばらく住むことになった。ハナも一緒に加古川へ行ったのだが、家の主人が犬嫌いということで、ハナを家にあげることが許されず、本来は室内で飼うはずのハナは外で放置された。生活環境が変わったことのストレスで、血を吐くぐらい鳴くようになってしまった。そんなこともあり、きみ子さん一家は加古川を出て大阪の親戚の家に行くことにした。大阪の親戚はとても優しくハナを家に上げてくれた。いつもの生活に近づいたため、ハナは前のように元気に過ごすようになった。しかし、きみ子さんは今でも当時のハナを思い出すと、悲しくて悔しくて涙が出てしまうようだ。

（3）生活の立て直し

新しい場所で生活を始めるか、また神戸に戻って家を建て直すか、究極の選択がきみ子さんを待っていた。全焼で跡形のない自宅からのスタートは、経済的にも肉体的にもつらいことは分かっていた。しかし、きみ子さんは生まれ育った場所を離れたくないという思いが強く、反対派だった家族を説得し建て直すことに決めた。

そんな時、きみ子さんの住んでいた家が区画整理の対象になった。そのため、土地の1割を渡してもう

一度建て直すか、近くに出来たマンションに住むかの決断に迫られた。夫は神戸に戻れただけマシだと考え、マンションに住むことを希望した。しかし、きみ子さんはマンションでの人間関係の心配や、東の角地が好きだったということで家を建て直すことにした。建て直すには莫大な費用がかかるため、銀行にお金を借りて建て直そうとしたのだが、銀行の書類なども全て燃えてしまい、なかなか借りることが出来なかった。そのため、きみ子さんは仕事を3つも掛け持ちして朝から晩まで働いていた。夫はマンションに住むことを希望していたため、お金の面でまったく協力してくれなかった。しんどいながらも、もう一度神戸に住むために必死に働き続けた。大学に行っている息子たちの仕送りをストップしてしまったが、その甲斐あって1年半で神戸に家を建て直すことが出来た。

(4) 絆

きみ子さんは自宅再建のために昼夜問わず働いた。そのため、家に帰ってもすぐに仕事に行かなければならず、娘と会話をする時間をなかなか取れなかった。きみ子さんは、家族の為に一生懸命働いていたが、娘に「お母さんはお金のことしか考えてない」と言われてしまった。娘は当時20歳、結婚を控える社会人だった。普通に考えれば、社会人なら働くことの大変さや、つらさを分かってくれるかもしれない。しかし、震災により娘は精神的に安定しておらず、娘自身は不安な時に母親にそばにいてほしかったのだと思う。だが、きみ子さんは仕事をする事で手一杯で、娘に構ってあげられずにいた。今でも関係性はなかなか戻らず、ギクシャクしたままだ。

震災が必ずしも家族の絆を強くするとは限らない。関係を壊されることもあり得るのだ。

4 祖父の話

(1) 地震

祖父は、祖母・娘3人・息子2人の7人で兵庫県三木市に住んでいた。地震発生時、祖父はインフルエンザにかかっていた私の母と一緒に寝ていた。大きな揺れにすぐさま反応して飛び起きた。恐怖で布団にまるまっていた母たちをすぐに一階のリビングに集め、机の下に潜るよう指示した。普段は声を張り上げることがない性格の祖父が初めて声を張り上げたそう。とっさの判断で倒れてくる家具などから子供たち全員を救うことが出来た。今ではこれが祖父の武勇伝となっている。

(2) 仮設住宅建設

祖父は2級建築士の資格を持っていて、外構工事の自営業をしていたため仮設住宅の土台作りやスロープ、手すりの設置を行った。ボランティアではなく正式な仕事の依頼を受けたうえでの作業だったが、仮設住宅に住むことになった方々からたくさんのお礼を言われ、お金を受け取るのが申し訳なかったそう。しかし、一家の大黒柱として家庭を支えていくために働き続けた。祖父が実際に建設に携わった仮設住宅は、舞子高校と同じ神戸市垂水区にある公園と、神戸市鹿の子台に建てた住宅だ。

神戸市鹿の子台の仮設住宅完成後、祖父は入居者が入っていく姿を見守っていたそう。その時、ある夫婦に、「今まで来たことないようなところに飛ばされてしまった。知り合いなんかおらん。」と愚痴を言われた。祖父は心苦しかった。しかし、夫婦には「いつか神戸に戻れるように、一緒に頑張ろう」と言って握手を交わした。祖父は今でもその夫婦のことは忘れられないらしい。

(3) 助け合い

祖父は三木市で被災し、建物などの大きな被害はなかったため、祖父の家は地震により家を失った知り合いの職人さんの荷物を置く場所になっていた。被災者として復興に関わったことを踏まえ、「被災していない人のボランティアや支援も必要だが、被災者同士の助け合いも必要だ。」と祖父は言っている。

5 話を聞いて

私は話を聞いて、「協力」の重要性を改めて感じる事ができた。きみ子さんは常連のお客さんたちの協力で瓦礫の中から出ることが出来た。祖父は、逆に協力する側で、被害の大きかった人の手助けをした。「協力」することによって、復興が良い方向へと進んでいったのではないかと感じた。しかし、きみ子さんの場合は、家族の「協力」がなく、一人の負担がとてつもなく大きくなり、娘さんとの関係も悪い方向に進んでいってしまった。もしここで娘さんがきみ子さんのことを理解して、きみ子さんも娘さんの思いに気が付いて、家族みんなで「協力」していれば新たな絆が生まれていたかもしれない。だが、過ぎてしまったことを変えることはできないため、これからの災害で同じような被害を出さないためにも、「協力」というキーワードを大事にしてもらいたいと思う。また、私自身も災害時に関わらず、日ごろから困っている人がいれば「協力」していきたい。

6 環境防災科

(1) 環境防災科に進もうと思ったきっかけ

私が環境防災科に進もうと思った理由は2つある。1つ目は、私の性格の問題だ。私は昔から負けず嫌いで、友達と同じになることが嫌だった。中学3年生の夏休みに、「同級生のほとんどの人が普通科に行くから私も普通科に行こう。」ではなく、「みんなが普通科なら私は推薦入試か特色選抜で高校に入りたい。」と思うようになった。2つ目は、オープンハイスクールで受けた環境防災科の授業や、先輩方が面白く、楽しかったからだ。私が進学先の決定で迷っていた時に、母親に環境防災科はどうかと勧められた。中学生の時は女子バレーボール部のキャプテンや、クラスでの学級委員をしていたので、リーダーとして引っ張っていく場面が多かった。そのため、防災という観点ではあるけれど、リーダーを育成する環境防災科は私に向いているのではないかと伝えてくれた。そして、夏休みに実際にオープンハイスクールに参加した。本当に面白く、楽しかった。その時、ここに入ってほかの人とは違う勉強がしたいと考えようになった。

(2) 平成30年7月豪雨被災地支援ボランティア

私は、高校2年生の夏休みに岡山県倉敷市真備町へ被災地支援ボランティアに行かせていただいた。岡山県倉敷市真備町は、ニュースでもよく取り上げられていたように被害が大きい町だった。学校からバスで向かったのだが、真備町に近づくほど景色がどんどん変わっていった。真備町について私が一番印象に残っているのは、あらゆる物が泥まみれで茶色の風景が広がっていたことだ。土砂とともに水が住居等に浸水していったことが一目で分かった。そんな場所で、家の土壁の撤去を行った。初めての作業で難しく、作業もスムーズに進めることが出来なかった。また、肉体的にも楽なものではなかった。

真備町でのボランティアは、初めて自分の足で被災地を訪れた経験だった。そこには写真や映像でしか見たことがなかったような風景が広がっていた。驚きを隠せず、言葉が出なかった。実際に被災地を見て、防災の大切さを改めて感じる事ができた。ここで命を落とした人がいると考えると、とてもつらかった。だからこそ、「1人でも多くの命を救いたい。」という気持ちが強くなった。この気持ちは防災を学ぶ上で一番大切なことだと思う。今回見た景色、感じた思いを絶対に忘れないようにしたい。

(3) 地震体験

高校1年生の消防学校体験入校で、起震車に乗り、初めて大きな地震を体験した。固定された机とヘルメットがある状態での体験だったが、本当に怖かった。何も出来なかった。これが、南海トラフ巨大地震で起こると考えると、生き残れるのか不安になった。もっと防災を学んで、命を守るための行動を積極的に進めなければならないと感じさせられた。今の私は、普通の高校生より防災についての知識はあるかもしれない。しかし、実際に行動に移せてはいない。家具の固定をある程度していても、完璧とは言えない。このままだと私は死んでしまうと思った。この経験から、起震車での体験を母に話し、家具の固定を徹底することと、非常用持ち出し袋を全員分作ることを実行した。この2つの防災を実行したからと言って命が絶対に助かるとは限らない。だが、このことを行ったことにより、他に何が出来るだろうかと家族で話す機会が増えた。小さな一歩かもしれないが、いずれは大きな一歩になるはずだ。今後も課題が見つかれば1つずつ実行していきたい。

7 夢

私の将来の夢は、小児科で働く看護師になることだ。

(1) 看護師になること

私が本気で看護師を目指そうと思うようになったきっかけは、高校2年生の夏休みに、ふれあい看護体験で神戸赤十字病院に行かせていただいたことだ。実際に排泄物の処理や、お風呂の介助、診察室への搬送体験や、ICUや手術室の見学などもさせていただいた。実際に生で見て、体験してみると、常に気を張った状態で仕事をすることが多く、本当に大変な職業なのだと改めて感じる事ができた。しかし、実際の現場で働く看護師さんは、大変だということが分からないくらいスムーズに仕事をこなし、さらに、患者さんのことを笑顔にさせていた。本当に格好良かった。そんな看護師さんを見て「私もこんな看護師さんに絶対になりたい。」と思うようになった。

(2) 小児科で働くこと

なぜ私が小児科で働くことを希望するかというと、純粋に子供が大好きだからだ。私は5人兄弟の上から2番目で従弟もまだ幼いため、昔から子供と関わるが多かった。子供はとても身近な存在で、いつの間にか好きになっていた。そして、大好きな子供たちのために何かしたいと思うようになった。好きだから仕事が完全にやりきれるかと言うと、厳しい世界なのかもしれない。しかし、好きだからこそ子供に

ついて知ろうと思えるし、子供たちに何かしてあげたいという気持ちは大きくなるのではないかと思います。将来は小児科で働き、子供たちの未来を守っていききたい。

(3) 夢と防災

私が小児科で働く看護師になっても、防災を広げることと、子供たちを災害の恐怖から救い出すために出来ることがあると考えている。

防災を広げていくために、まずは、子供たちに命の大切さを伝えていきたい。命の大切さを知ってもらえれば、防災教育を受けた時に、死なないためにはどうすればいいかと前よりも深く考えることが出来るはずだ。子供は、死について考えてもピンと来ない場合があると思う。実際、私の弟（小学校3年生）に「人間って死んだらどうなる？」と聞いてみると、「分からん」と答えられた。やはり、小さい子供には死について考えることは難しい。そのため、命の最前線で働いている看護師が仕事を通して感じていることや、環境防災科で学んだことを少しずつでもいいので伝えていきたい。

子供たちを少しでも災害の恐怖から救うためには、いざという時に信頼してもらえるよう、日ごろからコミュニケーションを取っておきたい。例えば地震が起きた時、今まで経験したことのないような揺れで、怖くて泣いたり、不安でいっぱいになったりする子は必ずいるはずだ。そんなときに、大人が傍にいれば安心できると思う。しかし、それは大人なら誰でもいいというわけではない。信頼できる大人が必要だ。日ごろからコミュニケーションを取り、信頼関係を築いていきたい。

(4) 実現に向けて

2020年の春から、看護の専門学校へ通うことが決まった。将来の実現に向けて一歩ずつ歩き出そうとしている。勉強や実習はとても大変で、やめたくなるときが来るかもしれない。しかし、上で述べたように、私には看護師になってやりたいことがたくさんある。それを実現するために、ここで書いたことを決して忘れず、最後まで諦めず挑戦していききたい。

8 「語り継ぐ」こと

私は、人前で話すことが得意ではないが、環境防災科では人前で話さなければいけない場面が多かった。自分なりの言葉で思いを表現したり、意見を言ったりしてきたが満足いくことがほとんど無かった。そんな中で、3年間の集大成となる「語り継ぐ」の作成が始まった。この「語り継ぐ」では、口ではなく文章で自分の思いを表現できた。今までは、言葉を詰まらせ伝えきれなかった思いを、ここでは伝えることができた。自分の口で表現できない人は、文字を使えばいい。文章でも思いはきっと伝わるはずだ。文章化された私の「語り継ぐ」が、誰かの心に響き、阪神・淡路大震災や防災にもっと関心を持ってもらえることを願っている。

語り継ぐ

揖澤 敬太郎

1 はじめに

私は、2002 年生まれで阪神・淡路大震災を経験していない。私のように災害を経験していない人は実体験を語るができない。だが、経験者の話を聞いて語り継ぐことができる。身近に両親などの経験者がいる。両親から阪神・淡路大震災の体験を聞いて、災害のことを知らない人たちに語り継ぐことが私の役目だと思う。そして、全員が防災の知識を持っているという状態にしたい。よって、誰でもわかるように語り継いでいきたい。

2 阪神・淡路大震災

(1) 概要

発生日時…1995(平成7)年1月17日午前5時46分

地震名…兵庫県南部地震

震源地…淡路島北部

震源の深さ…16km

最大深度…震度7

地震の規模…M7.3

人的被害…死者6,434人(関連死919人) 行方不明者3人 負傷者43,792

主な死因…圧迫死(圧死、窒息死など)

住宅被害…全壊109,406棟 半壊144,276棟 一部損壊390,506棟

火災被害…全焼7036棟 焼損7574棟

[神戸新聞NEXT] 参照

(2) 震災後

地震発生から1年間で約138万人のボランティアが集まり、避難所での炊き出しや、入居者の見守りなどの活動をしていた。その後の災害でも、ボランティアは欠かせないものになり、1995年はボランティア元年と呼ばれるようになった。

震災後、耐震改修促進法ができ、国や自治体は住宅の耐震化を進め、住宅再建に支援金を給付する被災者生活再建支援法、ボランティア活動を後押しする特定非営利活動促進法も、阪神・淡路大震災がきっかけでできるなどの変化があった。南海トラフ巨大地震も30年以内に起こる可能性が高いので、阪神・淡路大震災だけでなく東日本大震災も教訓にし、備えを見直していかなければならない。

このような大規模の恐ろしい災害が起こった時、同じように被害を出してはならない。阪神・淡路大震災の体験を聞き、語り継げば被害を少なくすることが出来る。私の父と母の阪神・淡路大震災の体験を聞いて、少しでも災害の怖さを理解してもらい、この後に、私が書いている減災に必要なことを実践しようというところを読んで、実践しようという気持ちになってほしい。

3 父の話

震災当日は父が経営している寿司屋が正月からずっと営業していて、年明け初めての休みの日だった。溜まっていたビデオを見て、夜中4時頃に布団に入った。うつらうつらした頃に下から突き上げるような感じがしたと思ったら数秒後にもすごい横揺れがあった。当時マンションの7階にいたので、冷蔵庫が向かい側の壁に突き刺さり、ありとあらゆる家具がひっくり返っていた。

揺れが収まった後すぐに部屋から出て、階段で下に降りる途中兄が5階に住んでいたので寄ってみたが、ドアがひしゃげていて全く開かなかった。声をかけても返事がなかったが、何故か大丈夫な気がしたので実家の方が心配で走っていった。

道中は2階建ての家が潰れていて、ガスの臭いもしたので強い恐怖感があった。実家は全壊になっていたが、何とか玄関を開けて無事を確認できた。

その後は近所の人たちと一緒に救助活動をしていた。そのとき全く情報がなかったので地震だとは分かっていたが、規模がどれくらいなのか分からなかったのも、まさかこんな大規模な地震だとは思っていなかった。後々分かったことだが、兄弟親戚に亡くなった方がいなかったのも、ほっとした事は覚えている。

4 母の話

(1) 阪神・淡路大震災当日の話

結婚式を翌月に控え、震災当日は、最終打ち合わせをする予定だった。実家の2階で寝ていた母は、「ドン！」という音で目を覚ました。その後、家という箱が上下左右に揺さぶられているような激しい揺れがあり、身を守るために布団で身を包んだ。

しばらく何が起こったのかわからず、その内に外で人の声がし始め状況を確認し合った。家の中はぐちゃぐちゃで、外壁は崩れ落ちていて、扉もなんとか開けることが出来たが、いつ崩れるのかわからない状況だった。知り合いの何人かが、バイクで安否確認をしに来てくれた。

その後も余震が続いたので、最低限の着替えと貴重品を持ちいつでも外に出られる準備したものの電気、ガス、水道がすべて使えず、どうしたらいいのかわからないままだった。そのうち外が明るくなり、近所の知り合いが店舗外で日用品やインスタント食品の販売をしてくれた。

余震が続く中、さらに状況が悪くなっていった。2号線より南の方で火災が発生していて、その灰が遠く離れた母の家まで降ってきていた。南側に住んでいた父の事が心配になり、歩いて父が居る場所へ向かった。南側に向かうほど気温が上がるし、余震も続いていたので、とても怖い思いをした。

(2) その後

なんとか父と合流し、近くの公園で車を止めて、車内で寝泊まりしながら、避難所になっていた近田幼稚園の炊き出しを手伝うという生活を送った。

2月に控えていた結婚式を諦めていたが、炊き出しの手伝いをしていたご縁で、園長先生が私たちのために幼稚園で披露宴を企画してくださり、そこに避難されていた皆さんにも祝福をして頂いた。

震災の日から、嫁ぎ先のお店が再開するまで出来る事と言えば、片付けと知人の安否確認と炊き出しの手伝いだけだったが、電気、ガス、水道が使えるようになるまでの苦労があったので、使えるようになった時すごく嬉しかったことを覚えている。

5 話を聞いて

私は両親の話を聞いて震災当時とても大変だということと、災害がとても恐ろしいものだということに改めて分かった。揺れの感じ方はそれぞれ違っていたが、どちらも凄まじいものだと言葉から伝わってくる。私は環境防災科で学んでいるが、災害を経験していないため、本当の怖さを伝えることが出来ない。地震を体験したことない人が、備えるということの意識が低いのは、怖さを知らないからだ。怖さを伝えるためには、実際に体験をした人の話が必用不可欠である。よって、このような機会を得て話を聞くことが出来て良かったと思う。そして、兄弟親戚で亡くなった人がいないというのは、素晴らしいことだが、誰もがそうなるとは限らない。誰か1人でも失ってしまえば、心に大きな傷が残ってしまう。そのような思いをする人を減らすためにこの話を活かし、災害が来ても大丈夫なように、備えてもらえるよう語り継いでいきたい。

6 環境防災科

(1) 入りたいと思った経緯

中学生の頃サッカーのクラブチームでプレーしていた時の合宿の1つに熊本合宿があった。その時は2年生で、熊本県ではコートを貸して頂いたり、熊本県のチームと試合をさせて頂いたりしていた。とてもいい経験をさせてもらったから来年も行きたいと思っていた。しかし、3年生になってすぐ、熊本県で大きな地震があったというニュースを見た。そのときは熊本合宿どうなるのかくらいしか思わなかったが、夏休み前になって、監督に「熊本で地震があって合宿に行けなくなった。去年お世話になったしボランティアでもしたかったけどこの人数（2、3年合わせて50人くらい）でいっても邪魔になるだけで迷惑や。」と言われ、胸が苦しくなった。自分たちは普通にサッカーをすることができるにもかかわらず、熊本県にいる人たちははまともにプレー出来ず、手助けをすることすら出来ない。そのことが頭から離れないまま私は生活をしていた。

その後、オープンハイスクールをどこに行こうか迷い、探していた時、舞子高校環境防災科というところを見つけた。その瞬間「ここだ！」と強く思った。ここに入ることができれば、熊本県の方々のように、困っている人たちを助けることができるようになるかもしれない。そう考え、入試を受けることを決意した。

(2) 環境防災科で学んだこと

環境防災科に入学し、災害にも様々な種類があることや、防災にもハード面とソフト面があること、助

かればそれでいいのではなく、そのあとの心のケアまで必要だということも知った。そして、被災者を1人でも多く減らすためには“減災する”ということが大切だということを知った。ここに書ききれないくらいたくさんの事を学んだが、全てを伝えることは出来ない。よって、私が環境防災科で学んできた中で、これは特に減災するために必要だと思ったものを2つ伝えたいと思う。

7 減災するために必要なこと

私が減災するために1番必要だと思うのは“自助”である。自助とは、そのままの意味で、自分の身は自分で守るということで、自助ができる人が増えれば、助かる人が増える。さらにその助かった人たちが協力することが出来れば共助というみんなで助け合うことが出来るようになり、さらに助かる人が増える。他に公助という自衛隊などが人々を助けるものもあるが、人が助けられた場合のほとんどは、共助である。共助はまず自分が助からなければすることは出来ない。よって、減災をするために1番必要なことは“自助”である。

もう1つ特に必要だと思ったことは、自分の脳内でシミュレーションをしておくということだ。これも、自助の1つだと私は考えている。災害は、スポーツのように何度も経験をし、慣れることで対応できるようにすることが出来ない。しかし、脳内シミュレーションをしていれば、災害が起こった時、瞬時に対応することが出来る。では、何時、何処で脳内シミュレーションをすればいいのか。例えば、電車に乗っているときに「急に地震が来たら持っている鞆で頭を守ろう」と頭の中で考えるだけで良い。それだけで、もし電車の中にいる時に地震が起こってしまっても、素早く鞆で頭を守る行動をとることが出来るようになる。その一方で、脳内シミュレーションをしていない周りの人は「地震が来た！」などと叫ぶだけで、何も行動をすることが出来ない。このように1度考えるだけでも、行動を咄嗟に出来るようになる。その一瞬の違いで助かるか助からないかが変わってくる状況もある。それゆえ、普段から脳内シミュレーションしておくことが必要だ。

8 減災をするために必要なことをどうやって広めるか

(1) 将来の夢

私の将来の夢はサッカーの指導者になることだ。この夢を持ったきっかけは、サッカーのスクールに通っていた時、コーチが楽しそうにプレーをしていて、私も将来こうなりたいと思ったからだ。ここで、将来の夢と減災に必要なことをどうやって広めるかは、関係がないのではないかと思った人もいるだろう。しかし、将来の夢と防災は、つなげることが出来る。では、これからサッカーの指導者になった後、減災をするために必要なことをどうやって広めるか説明して行きたいと思う。

(2) 方法

サッカーの指導者になれば生徒ができる。私が減災をするために必要なことを生徒に伝えるためには工夫が必要である。なぜなら、普通に話すだけではサッカーをしに来ている生徒は聞こうとしないからだ。ここで考えたうちの1つが、講習会を開いてサッカーの話をした後に1つだけ簡単なことでいいから、減災のことを教えて、それを繰り返すことで少しずつ覚える量を増やしていくということだ。1つずつにする理由は、一度にたくさんの事を教えると、生徒たちが聞く気を無くし、逆に何も覚えられなくなってしまふからだ。

他に、生徒を増やすことが出来れば、減災に必要なことを広げるということに繋がる。生徒を増やすためには指導力や実績、他の指導者にはないものが必要である。指導力や実績はこれからの努力で積み上げていくしかない。しかし、今の私でも他の指導者にはないものを持っている。それは、減災をするために必要な“防災の知識”だ。これを上手く活かして保護者の方々に関心を得ることによって、子供の生徒を増やすことが出来る。子供というところがポイントで、子供が大人に与える影響は大きい。生徒に、私のところで覚えたことを親などに話してもらうことで、減災に必要なことを親も知ることが出来るだけでなく、アウトプットした子供の頭に定着させることが出来る。しかし、これらの方法だけでは広がりには限界がある。さらに広げていく方法を考えていかなければ、全体で見た時の、助かる確率は大して変わらないはずだ。よって、私1人だけで考えるのではなく、他の人と協力をしつつ、どうすれば多くの人が、減災に必要なことを知ることが出来るのかを考えながら、生活していきたい。

9 最後に

今回「語り継ぐ」を通して、様々なことを考え直すことが出来た。今まで学んできたことを思い出し、得た知識をどうやって人々に伝えていくのかは、このような機会がなければ考えなかったかもしれない。

この時点で、私自身の意識の低さを確認することができ、成長することが出来た。この「語り継ぐ」を読んだ人には、防災の大切さを知り、それを家族や友人、恋人などの失いたくない人に伝えてほしい。

私は環境防災科に入って3年間様々なことを学んできた。ここで学んだことは、自分が知識をつけて、まだ災害を経験したことが無く知識がない人たちに防災の大切さを伝えなければならない。今、私は、災害を経験した方々がいる間に、私たちのような知識を得た人が話を聞き、それを次の世代へ伝えるのが、私たちの役目だと思う。

現在の日本の状態では、興味を持った人でなければ、防災の知識を得ることが出来ない。私も、環境防災科に出会っていなければ、防災のことを何も知らなかっただろう。現在のこの状態を、興味がなくとも、知っていて当然だということまでしなければならぬと思う。しかし、私たちの世代でこれを実現させることは難しい。したがって、まずは私から人々に語り継いで、繋いでいった末にそうなればいいと思っている。小さく産んで大きく育てていきたいが、当然その状態にまでなるのは、早ければ早い方がいい。どうすれば早く、誰もが防災のことを知っていることが、当たり前前の時代にすることが出来るのかを考えながら生活していき、社会に出た際、実際に私が防災の知識を伝えていきたい。

日本は災害大国と呼ばれるほど災害が多い国であり、今もどんどん大きな災害が発生してきている。他の国よりも、災害から身を守るためにどうすればいいかを考えなければならない。さらに、南海トラフ巨大地震という絶対に来るといわれている災害もある。しかし、災害に対して意識が高く、知識をつけて身を守ろうとする人がいる一方で、災害のことを知ろうとせず、そのまま暮らしているという人が多い。そういう人が亡くなっていくと考えると、とても勿体ないことだと私は思う。その様な人達に、どのような方法で、防災のことを知ってもらえるのかを、日本はもっと考えなければならない。この「語り継ぐ」を読む人は、防災の意識が高い人がほとんどだと思う。それゆえ、防災の意識が低い人々に伝えていき、身内に防災を知らない人は誰もいないという状態を作れるようにして行ってほしい。それが語り継ぐということだと私は思う。

この「語り継ぐ」は環境防災科がある限りずっとしていかなければならないと思う。でなければ「語り継ぐ」ではないと思うし、今までやってきたことが無駄になってしまう。故に、これからの環境防災科の後輩たちも語り継いでいって、人々にはそれを見て行ってほしいと強く思う。

想定外を考える ～21 世紀に生まれた、私たち～

石井 比奈

1 はじめに

私は、阪神・淡路大震災を経験していない世代である。しかし、南海トラフ巨大地震を経験することはあり得る。過去の災害の教訓を風化させないために、この神戸の市民として、過去の災害からの教訓を語り継ぎ、広めていくことが私たちの使命だと思う。私は、母・祖母に話を聞くことにした。3年間環境防災科で学んで出来た思いを伝えたい。

2 阪神・淡路大震災

(1) 『あの日』の概要

発 生 日	1995 年 1 月 17 日
震 源 地	午後 5 時 46 分 52 秒
震 源 地	淡路島北部
最 大 震 度	7
震 源 の 深 さ	16 km
地 震 の 規 模	M7.3
死 者 数	6,434 名
行方不明者数	3 名
主 な 死 因	圧死

(2) 祖母の話

前日は母の姉家族が泊まりにきていた。

祖母は大きな揺れで、びっくりして目が覚めた。テレビが布団の上に倒れてきた。姉家族を呼びに、2階へ行った。祖母は、亡くなった曾祖母から「大きな地震がきたら、窓とドアをすぐに開けるのよ」と教えられていたので、すぐにドアと窓を開けた。窓を開けて外を見ると、倒壊した家、ゴミや砂埃で1時間くらい周りは真っ白で見えなかった。叔母家族の旦那さんの実家が姫路市にあり、「神戸におるのは無理や」といい、姫路市に車で全員が避難した。姫路の方は被害が少なく、ライフラインの被害もなかった。

姫路に着き、落ち着いてからテレビを見ると、長田の街が火の海になっていた。今さっき通った場所や道が燃えていて、「さっきは燃えてなかったのに」と思った。しかし、少し遠くで火が出ていて煙は見えた。1か月近く姫路に避難し、その後神戸へ帰った。

(3) 母の話

母は神戸に戻らず、しばらく友達の家に住んでいた。仕事が始まり、まだ電車が再開していなかったため、観光バスらしきバスに乗って出勤した。数回バスに乗ったのち、地下鉄が再開して電車での通勤できるようになった。

3 母と祖母の話を聞いて

話を聞き、母や祖母は神戸で避難生活を送っておらず、避難所での経験はないことを知った。親戚や家族が、神戸以外の他市や他県にあった場合の良い面も分かった。姫路では、ライフラインも止まってなかったのも、震災の記憶といっても多くは姫路での生活だったため、あまり覚えていないと祖母は言っていた。大きな地震がきたらドアを開けることなど、昔から言い伝えられていたことを知った。長田の街を通っていたことを知り、もっと遅く避難していたらと考えると、早く逃げる行動をとるという大切さを改めて感じた。母も電車が再開しておらず、バスで出勤していた時、時間がかかったと言っていたので、電車はスムーズに移動でき、便利だと感じた。

4 環境防災科との出会い

(1) 中学2年生での運命

私は、進路についてすごく悩んでいた時期で、この時の私の心情は、「来年は何をしているのか、良かったと思える道に進めているのか」不安だった。そんな時に、防災授業で舞子高校から和田先生が講師と

して中学校へ来校された。環境防災科という学科に出会ったのもこの時だった。私は、ボランティア活動に興味を持っていた。また、阪神・淡路大震災や東日本大震災の起こった日の特集番組などは必ずと言っていいほど見ていて、将来ボランティア団体を設立したいと考えていた。だからこそ、環境防災科についての話を聞いた時に、「私はこの学科に行くかもしれない」「行きたい」と感じた。この時から、他の学校にはない防災を取り入れた、特色のある授業を受けたいと思うようになった。

3年の受験期になるにつれ、絶対に環境防災科に入りたいという思いがさらに強くなった。推薦をもらえるか不安で、「もらえないだろうな」と思っていた。まさか、私が推薦で、しかも環境防災科に入れると思っていなかった。受験は緊張して、受からなかったらどうしようと思っていたが、後日、合格証をもらえた時には涙がこぼれた。2年生で舞子高校環境防災科の和田先生に出会ってなかったら、今頃私は笑えていなかったと想像した。この運命の出会いが私の人生を変える道へと繋がった。

(2) 今思うこと

この出会いのおかげで、私は特色のある魅力的な授業が受けることができ、3年間学んだことをもっと大学で活用したいと思った。ボランティア活動の大切さを学び、東北訪問も行かせていただき、人との繋がりが大切なことを学んだ。防災についてもっと知りたいと中学校の時に思っていた私を振り返ると本当にこの出会いに感謝しかない。

5 ボランティア活動

私が1番多く取り組んだボランティア活動は募金活動だ。募金活動は1番身近にできる活動だ。私が募金活動に積極的に取り組んだ理由としては、被災地への支援の近道であることと、地域の方とのコミュニケーションが多く取れる場でもあるからだ。また、普通科の人たちが参加できるボランティア活動でもあるからだ。募金活動を通して、その大変さも学んだ。募金活動は簡単だと思われやすい。だが、なかなか私たちの気持ちが伝わらない。「何で、ここでやっているのか」と理解をしていただけない時もある。「本当に被災地に届けているのか」と不審に思われることもある。トラブルもつきものなのが募金活動だと学んだ。しかし、やりがいを感じるのも募金活動だ。暑い中、寒い中で活動をしていると、地域の方が「いつも頑張っているね」「舞子高校でしょ」「防災科があるよね」「環境防災科の先輩です」「頑張ってるね」などと声をかけて下さる方もいっしょり、時々差し入れを下さる方までいる。そんな声を聴くと、やって良かったと思えるのと、私たちの気持ちがしっかりと届いているのだと実感できる。また、言葉選びで私たちの気持ちの伝わり方や、地域の方々の温かさを感じる機会となった。

6 今と昔の私の防災意識

(1) 昔

小学校での避難訓練では、訓練ということもあり笑っている子につられて自分も笑っていたが、阪神・淡路大震災の話を聞いて、また起こったら怖いなと思っていた。中学校では、ボランティア活動の大切さや難しさを知り、災害時に自分の命を守るためだと思い真剣に防災に取り組めた。

(2) 今

環境防災科に入り、大地震はいつ来るか分からないことを知り、当たり前前の生活はないという事を学んだ。家族に学んだことを伝えるようになり、自分から家の危ない場所を考えて、家具の固定をできるだけするようになった。また、ふとした時に「もし、ここで地震が起きたら」と考えて、シミュレーションをするように心がけて行動できるようになった。私は実際に2018年6月18日に発生した、大阪北部地震では、もし電車で地震が発生したらと考えていた時に発生し、その時冷静に行動することができた。そして、実際に3時間かけ歩いて帰ってみて、電車の有難みを知った。災害時の大変さを少しだけ体で感じた瞬間だった。当たり前前の日常はなく、毎日が奇跡だと知り、「ありがとう」「行ってきます」「ただいま」などの言葉を大切にするようになった。外出した際には、ホテルにある避難所経路や、海拔の表示などを日頃から見る癖がついた。よく、友達に防災について話すようになった。想定を信じず、想定外を考えて行動するようになった。

7 夢と防災・・・2つの夢

私の夢は、韓国と日本で女優・役者になること、ボランティア団体を設立することだ。

女優になりたいと思ったきっかけは、私が物心ついたときから、従姉はモデルをしていて自然と芸能界を目指すようになった。劇団で演劇をしていく中で、役を演じる楽しさを知った。韓国でなりたいと思ったのは、韓国で活躍する日本の俳優・女優さんの存在があった。日本と韓国のドラマを比較してみる

と、違う演技・演出の仕方を見て、日本でも韓国でも違う演技ができる女優さんになりたいと思ったからだ。女優になれたら、積極的に災害にかかわる作品に出たい。そして、環境防災科で学んだ心理学を生かして、自分なりに全身を使って演じ、災害の怖さを伝えたい。

ボランティア団体を設立したいと思ったきっかけは、世界中で発生している過去の災害を知り、貧困・発展途上国の暮らしを知ったからだ。災害時には、いち早く救援物資を届け、現地活動をしたいと思った。貧困や発展途上国にも救援物資を届け、学校がない国には学校を作り、安全なまちづくりの手助けになりたいと思った。ボランティア団体を設立したら、定期的に防災に関する訓練を行い、遊びを取り入れながら、命を守るための行動など、幅広い方々との繋がりを大切にしていきたい。韓国では日本の防災をわかりやすく伝えて、私が『防災・減災』という言葉を発表して、防災に1人でも興味を持ってもらえるような活動をして、防災を広めていきたい。これらの夢を必ず叶えたい。

8 防災・減災を広めるために

「防災」は知っていても「減災」とは何か分からない人が多くいる。災害がくる前にどんなことをすればいいのか不安な人も多くいる。まず、防災と減災の違いについて広めないといけない。災害を防ぐと書き「防災」だが、災害を防ぐことはできない。このことは多くの人が知っている。しかし、災害について授業で学んだり、避難訓練や家具の固定・耐震化などを積極的に行ったりして、出来るだけ家の被害や人的被害を減らすというのが「減災」である。被害を減らすためには、まず日頃から災害について知り、前もっていつ災害が発生しても対応できるように備えをしていくことが大切だ。今できることは、避難訓練や災害について学ぶ、家具の固定や耐震化、家に届くハザードマップの確認などをしていくことだ。しかし、耐震化や避難訓練をしている人は多いが、家具の固定やハザードマップの確認などしている人は少ないと感じるので、その必要性についてたくさんの方に伝えていかなければならない。

また、『防災や減災なんて興味ない・どうでもいい・私は大丈夫』といった正常性バイアスが働き、他人事にしている人も多い。私は、命の大切さを知ってほしい。災害時における命のはかなさをまず伝えたい。大丈夫だと思っているからこそ危ないことを伝えていきたい。

絵本でも災害に対しての備えを伝えていくことが可能だ。絵本なら気軽に手にとり、読むことができる。幼児から大人まで全ての人が読むことができる。子供が読んでほしいものを親が読み聞かせをする。一緒に防災や減災について知ることができる。また、子供の方が絵本の内容をよく覚えており、親に話をする。話すことで、ふとした時に「こんな絵本があった」と思い出すことがまず大切なことだと思う。もし地震が起こった時に、「あの本に書いてあったから、行動できた」と思ってもらえることが私は防災を伝えるために大切だと思った。

避難訓練では、実際に山に登る避難訓練や、避難所の生活体験をすることで、実際に災害時にはどう行動すればいいか何が必要なのかを考え、シミュレーションすることができる。そのため、1年に1回でもいいので、地域の方々とのコミュニケーションづくりをしながらも、避難訓練をする大切さを広めたい。

こころの反応について伝えていくことも防災だと思う。災害時、「大丈夫」「まだ逃げなくてもいい」などといった考えが自分の命を奪ってしまう。この恐ろしい心の反応が正常性バイアスである。しかし、「正常性バイアス」について知っていれば、自分自身の心がどんな状態なのか分かり、落ち着いて行動できる。多くの命が助かる。私自身も正常性バイアスについて学び、落ち着いて判断し行動することが出来るようになったので、こころの反応についても広めていきたい。

9 高校生が中心になること・・・私たちができること

私たちは震災を経験していない。もちろん震度7の恐怖の地震を経験したことがない。私たちにできることは、聞いたことを自分の言葉で伝えていくこと。経験していないからこそ、私たち自身も過去の災害や防災・減災について学ばなければならない。学んだことから、経験していない人の目線で、何を伝えていかなければならないかを考えることができる。また、避難所で高校生なりに何ができるのかを考えることができる。縦の繋がり＝上下関係を重視しがちな大人とは違い、横の繋がり＝上下関係を越えた人間関係で考えることができるのは、私たち中高生であると言われている。大人は上からの命令がないと動かず、マニュアルどおりという考え方がほとんどだが、マニュアル通りではなく、避難してくる人がどうしたら快適に過ごせるかを考えて行動することができる。災害時は、子供の判断が正しいときもあり、大人の判断が正しいというわけでもないということを東北訪問で佐藤敏郎さんの話を聞き学んだ。「2011年3月11日に発生した東日本大震災で、大川小学校では、児童が74名亡くなった。災害発生時には、山に登って避難したいという子もいたが、子供たちは先生の指示に従った。」

佐藤敏郎さんの話で忘れられない言葉がある。『助けられなかった命＝助けられた命でもある。それは、助けてほしかった命でもある。』という言葉だ。あの日先生たちは必死に子供を守ろうとした。問題だったのは、日頃の連携や備えができてなかったことだ。私が伝えたいことは、普段から防災意識を私たち若者である学生が持たなければならないということだ。行動を起こし、中高生から大人へと連携することが必要だと思うので災害時の行動について、大人だけでなく、私たちも混ざり、定期的に会議を開く必要があると考えた。その1つとして、『中高生から子供へ・子供から大人へ』といった防災教育を行うことだ。中高生が保育園や小学校の子供たちに防災教育をし、子供たちは家族の皆に学んだことを話す。実際に、小学校で防災訓練を行った時に、子供たちは一生懸命やってくれるが、周りで見ている親は突っ立ったままで、「やりませんか」とお聞きしても、「やったことあるからいい」「大丈夫です」という言葉ばかりだった。しかし、自分の子供が「やってみようよ」「やろうよ」などと言うと、一緒にやりだすという光景を目の当たりにした。子供が学び、家族に話すことが大事なことだと感じた。子供の話を親が真剣に聞き、一緒に学ぶ。私の防災を広げる1つの手ではないかと考えた。

1番重要なのは、大人がすべて正しいと思ってはいけないということだ。自分の命は自分で守るというもこの1つに当てはまると思う。これからは、私たちの判断も行動も必要となる時だと考える。そして、伝えたいことは、『想定』を信じず、『想定外』を考え、「もしかしたら」「まさか」と思い行動することだ。東日本大震災で、多くの人が想定を信じて亡くなった。だからこそ、私は多くの人に伝えたい。多くの人が「想定外」という言葉に耳を傾けない。『想定』を信じて行動している。「ここには来ない」「逃げなくてもいいし、安全」「私は、大丈夫」などと考えている人が多い。正常性バイアスの反応だが、「想定外だった」という言葉をこれからは聞きたくない。想定外を考えながら行動しても想定しきれないこともある。だが、想定外を考えて行動するからこそ、自分の命を守れたということに繋がると思う。「想定外を考えて行動したから助かった」という言葉に、これからは変えていきたい。命を守るためには、想定外を日頃から考えなければならない。「もしかしたら」「まさか」と思う大切さを必ず伝えていきたい。

10 最後に

今回、「語り継ぐ」の冊子を作成するにあたって、小学校の頃に親に阪神・淡路大震災の話を書いてくるといふ宿題があったが、私はあまり覚えていなかったのも、改めて家族に阪神・淡路大震災の当時の話を聞いて、祖母や母が避難所で生活していなかったということも知ることができた。

夢と防災は、何であってでも防災へ繋がることを知った。防災・減災を学んだことは、どの職業でも絶対に必要となる。災害時は、率先避難者として行動するために、自分の命を守るための備えをしっかりとしていかなければならない。3年間を通して、市民のリーダーになることができたかどうか分からないが、学んだことをもっと活用して、どこに居ても、周りの人が一緒になって防災・減災について考えていけるリーダーになっていきたい。

3年間通して、沢山のことを学んだ。その中でも、「大人の判断をすべて信じてはいけない」「今日、明日は奇跡でできている」「日頃から、避難・地震が今起こったら、などのシミュレーションをする。」「コミュニティづくりの大切さ」「命のはかなさ」などは忘れられない。学んだことは、経験の有無に関わらず、今を生きている人が大切にしないといけない。高校生だから、大人だからではなく、「私は、死なない大丈夫」「これは運命である」などの考えを持たず、皆が、『最悪の事態』を考えながら行動しないといけないと思った。想定を信じず、想定外を考え、「もしかしたら」「まさか」と思って行動をするという大切さ。これからは、21世紀に生まれ、震災を知らない世代が語り継ぎ、これからくる大地震に少しでも、教訓を伝えていかなければいけない。

語ること ～私の語り～

海野 百花

1 はじめに

阪神・淡路大震災から 25 年が経った。震災を経験していない世代が増えていく中で、あの日の記憶は風化しつつある。だが「災害は忘れたころにやってくる」この言葉の意味を今一度考えなくてはならないと思う。多くの尊い命を奪ったあの震災を私たちは決して忘れてはならない。その教訓を胸に、あの日あの時何が起こったのか、震災を経験していない私が、母・祖母の力を借りて阪神・淡路大震災に向き合い、ここに語り継いでいこうと思う。

2 阪神・淡路大震災

(1) 概要

日時：1995 年 1 月 17 日 午前 5 時 46 分

名称：兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）

震源地：淡路島北部（北緯 34 度 36 分、東経 135 度 02 分）

震源の深さ：16 km

規模：マグニチュード 7.3 最大震度：7

死者：6434 人（関連死含む） 負傷者：43792 人

主な死因：圧死・窒息死

住宅被害：639686 棟 焼失：7574 棟

〔神戸新聞 NEXT より〕

(2) 私が聞いた母の話

寝ていたらグラグラと揺れて、ハッと目が覚めた。その時ペン立てが 1 つ床に落ちた。当時山の上のほうにある長田の丸山に 1 人暮らししていた母は、家の外に出てあたりの様子を確認した。付近は何事もなく無事。小さな火の粉が飛んできたため、どこかで火事が起きているのかなとは思ったが、「三宮は全滅や」と叫んでいたおじさんの言葉の意味は全くわからなかったという。携帯が普及しておらず電話はつながらない、テレビがつかず情報が入ってこない中、昼から出勤する予定だった母は、仕事に行く前に板宿にある実家に寄ろうと思っていた。昼前に電気が復旧し、こたつで一眠りしてから、仕事の準備をし、駅に向かおうと山の下まで降りていったとき、驚いた。家がつぶれ、外に人がでてきていたのだ。「いったい何が起きているの？」火事を横目に見ながら、母は必死に実家まで歩いた。到着したときにはコの字型だった実家のマンションの、角の部分がパカッと割れて傾いていたそう。父と母（私の祖父と祖母）の無事を祈りながら、マンションの住民が避難しているという空地へと向かったが、父も母もそこにはいなかった。様々な場所を必死に探し回った。公衆電話には長蛇の列ができていたが、母はとりあえず兄弟に連絡を取ろうとその列に並んでいた。その時偶然兄（私の叔父）に出会い、もとの空地へと戻ったら父と母に再会したそう。そのまま車で兄の家まで向かったが、途中の道は裂けて水が噴き出し、わきの住宅は火事でボーボーと燃えていた、その光景を見つめながら、普段の倍以上の時間がかかって兄の家に到着したという。道中で燃えている場所の一角に友人の家があったが跡形もなかったそう。その後、この家に住んでいた友人は亡くなったということを知られるのである。なによりも 1 番困ったのは水だったと母は話していた。

(3) 私が聞いた祖母の話

1 月 16 日、祖母は体調を崩して寝込んでいた。あまりのしんどさにいつも寝ている 6 畳の部屋ではなく、かつて母が寝ていた 3 畳の部屋で休んでいたそう。そして 1 月 17 日午前 5 時 46 分、ガタガタというすごい音で目が覚めた。大きな縦揺れ、たくさんの物音がした。冷蔵庫のふたが飛び、下駄箱は倒れた、祖父の部屋にあった仏壇の線香たては台所を通り過ぎ、お風呂場の近くまで飛んでいったという。もしあの時いつものように 6 畳の部屋で寝ていたら、大きなタンスやその上にあった着物が入った箱が落ちてきて大けがをしていたかもしれない、「不思議なこともあるものね」と祖母はそう言っていた。電気もガスも水道も止まった。祖母は避難するため外に出ようと玄関を開けて驚いた。長田の街が燃えていたのだ。後にその火事によって職場の友人の兄がなくなったことを知られるのである。当時板宿にあるマンションの 12 階に住んでいた祖母は、エレベータが動かない中、祖父と一緒に必死で避難した。荷物を取るために何度も 12 階まで行き来し、大変だったという。避難する先は妙法寺にある息子

(私の叔父)の家、いつもなら20分で着く道が2時間かかったそうだ。その道中、公衆電話で親戚みんなに連絡した。「自分は無事だから大丈夫」と。それを聞いた東京に住んでいる祖母のいとは、冬だから寒いだろうと肌着などを送ってくれた。やっとのことで到着した息子の家は幸い電気も水道も被害を受けていなかったため、祖母はそこでしばらく生活した。しかし、祖母は地震のショックで血圧が下がってしまい、ずっと体調が優れなかったため、ほとんどどこにも行けていないそうだ。ただ、家の近くの中学校に自衛隊が来てくれて、風呂や食事などいろいろな支援をしてくれた。公園や学校などに仮設住宅がたくさん建ち、祖父はそこで1人で暮らしていたが、不便なところだったと話してくれた。

(4) 話を聞いて

今回は2人の話を聞いて、改めて阪神・淡路大震災を忘れてはいけないと強く思った。小学生のころから阪神・淡路大震災については学んできたが、母と祖母にこんなに詳しく話を聞いたのは初めてだと思う。特に母が言っていたライフラインの重要性というのは印象に残っている。私たちの生活には欠かせない水。水道が止まってしまうというのは、本当に大変なことだと思うからだ。ガス・電気も含め、今、当たり前に使えているものが使えなくなるということの重大さに気づき、危機感を持たなければならない。今後の災害への備えとして、ライフラインを寸断させないということが大きな課題になってくるだろう。

私たちの世代はどんな点においても自分が経験していない災害を、見たり聞いたりすることでしか体験することができない。母も祖母もはじめは「そんな大した話はない」と言っていたが、決してそんなことはないと思う。これはどんな人においても言えることだ。私たちにとってはすべてが大切なお話であり、体験だ。私たちは、あの震災を忘れないために、語り継いでいく。自分の経験を話してくれた母と祖母に感謝したい。

3 環境防災科に入学して

(1) 教訓を語り継ぐ

環境防災科は平成14年(2002年)に全国初の防災を専門的に学ぶ学科として設置された。市民のリーダーになれる人材を育成することを目標とし、防災の専門家と市民をつなぐ橋渡し役として、臨機応変に対応できる人になることを目指している。

環境防災科の基本的な教育理念は、次の3つである。

- ・阪神・淡路大震災の教訓を生かし、自然環境や社会環境との関わりを視点に据えた防災教育を推進することによって、共生社会における人間としての在り方・生き方を考えさせる。
- ・大学やその他の研究機関、関係機関等との連携を密にし、実践的・体験的な学習を通して、理解を深めるとともに、「環境」「防災」に関わる様々な課題の解消に向けて、主体的・自発的に考え、行動できる力の育成に努める。
- ・自然現象のメカニズムや災害と人間社会の関わりなどの学習などを通して、自己を取り巻く様々な環境に対する理解を深め、災害に対応する力を身につけるなど、「Think Globally, Act Locally」(地球規模で考え、地域で活動する)人間の育成に努める。 [舞子高校HPより]

(2) 特色のある授業

カリキュラムの3分の1が防災の専門科目である環境防災科では、国語、数学などの基礎科目に加え、地震のメカニズムや防災の基礎知識を学んだりする普通科にはない特色のある授業が行われている。その中でも特に、1年生のときに行われる「災害と人間」という授業は思い出深い。この授業では警察・消防をはじめとする様々な外部講師の方をお迎えして、阪神・淡路大震災のときの状況や対応を学んだ。それぞれの会社・組織からみた阪神・淡路大震災は、その教訓を含め初めて知ることばかりだった。中でも災害救助犬の講義はとても印象に残っている。災害救助犬(レスキュードッグ)は、地震や台風、土砂崩れなど災害で行方不明になっている人を優れた嗅覚で捜索するために特別に訓練された犬たちのことだ。多くの厳しい訓練を受けた、小型犬から大型犬までの様々な種類の犬が活躍している。その賢さには本当に驚かされた。

そして2年生になってからは、英語で防災を学ぶ「Active 防災」や、社会と防災のかかわりを学ぶ「社会環境と防災」など、よりレベルアップした内容を学習してきた。自然災害だけでなく、人為災害や、国際的な問題(貧困など)、心理的な面についても勉強する。環境防災科の専門科目はどの授業にも教科書がない、だからこそ1時間1時間の授業を大切に受けるようになり、次第に防災に対する自分の意見も持つようになったと思う。授業を通して知ったこと、分かったこと、学んだこと、すべてが私の防災の防災知識の基礎になっている。

(3) ボランティア活動

環境防災科はボランティア活動にも積極的に参加させていただいている。地域の防災訓練やお祭りのお手伝いをはじめ、街頭募金活動や、東北・熊本への被災地訪問など、様々なボランティア活動に高校生という立場で参加させて頂けたことはとてもいい経験になった。

中でも街頭募金活動は、私にとって大切なボランティアの1つだ。1学期に1回、JR 垂水駅周辺で募金活動を行わせていただく。大きな声を出し、一生懸命活動を行っている、「舞子高校の子たち？頑張ってるね」と募金をしてくださる方々がとても多かった。私は心から感動し、自分たちの思いを、そして地域の方々の思いを私たちが責任を持って被災地に届けようという強い思いが芽生えた。地域の方の温かさに触れることができる募金活動を経験できて本当に良かったと思っている。

また熊本への訪問は、私にとって初めての被災地訪問であった。熊本の小学生から大学生までと交流し、熊本地震について真剣に考え、お互いに意見を交換し合うというプログラムを行った。実際に熊本地震を経験した子供たちの言葉は、とてもストレートで私の胸に深く刺さり、現地に行ったからこそ見える景色、現地に行ったからこそ聞けるお話があると実感した。だが、いまだに熊本ではまだ山の土砂崩れがそのままだ状態で放置してある。私はこの現状をもっと多くの人に伝えたいと思っている。

4 夢と防災

環境防災科に入学してからの2年間、本当にたくさんの出会いがあった。今までの自分なら絶対に交わることのなかった人との出会い、自分の知らなかった知識との出会い、そして気付かなかった自分の気持ちとの出会い。すべてのきっかけは防災を学んだことだった。

私の夢はまだ具体的には決まっていない。だが自分の好きなこと、自分がやりたいことをしたいと思っている。今の私の卒業後の進路希望は、オーストラリアへの語学留学だ。広い世界へ行って、見たこともないような景色を見て、たくさんの人と出会い、英語に触れ、自分の夢を見つけたいと思っている。私は小さいころから英語が好きで、小学生・中学生・高校生で行われる ALT の先生との英語の授業を毎回とても楽しく受けていた。何を言われているのか、一生懸命聞き取って理解できたときは本当に嬉しかった。英語は世界の共通言語。私は英語を学び世界中の人とコミュニケーションをとりたい、防災を様々な国の人たちに自分で伝えられるようになりたいと思う。また、オーストラリアはとても自然が豊かな国で、たくさんの動物たちが暮らしている。そのため動物にかかわるボランティア活動が行われている。動物が大好きな私にとっては、それも大きな魅力の1つである。今まで自分が参加してきたボランティアとはすこし種類が違うかもしれないが、ボランティア活動を続けられるというのは嬉しいことだ。

また、学生ビザでの語学留学では、現地の語学学校に通うことが条件になっている。約1年間、語学学校に通いながら、自分のやりたい事を見つけて行う。規定はあるが、アルバイトをすることも可能であるため、現地のジャパニーズレストランなどで社会に出てからの基本的な英会話を身に着けることができる。

そして日本で様々な自然災害が起こっているように、オーストラリアでも異常気象・熱波などの自然災害が起こっている。また、近くの日ニュージーランドでは、たびたび大きな地震が発生している。2011年2月22日、東日本大震災の約3週間前に起こった大きな地震。亡くなったほとんどの方が、とある1つのビルに集中していた。要因は、建物耐震基準が満たされてなかったことだそう。私とほとんど変わらない年齢の方が、人災によって命を奪われた。そのことにとてもショックを受けた。人為災害もそう。何の罪もない方が無差別に命を奪われる。銃の所持が許されている海外は、日本よりはるかに危険であると思う。自然災害を防ぐ防災、そして人為災害を防ぐ防災、日常で生きていく中でどちらの防災も行っていかななくてはならない。そこで私は、災害の怖さを知らない国の人々に、防災の重要性を伝えていきたいと思っている。いつ・どこで・どんな災害に自分が遭ってしまうのか誰にもわからない。災害に遭ったときに自分の命を守るように、防災を言葉にして伝えていくということが必要だと思う。それは、私自身が仕事をするようになって同じことだ。どのような職業、どのような職場でも、命を守るための防災というのは大切である。建物の構造や大型家具の配置、避難訓練や防災教育など、日常業務をこなしていく中で垣間見える防災への糸口を見つけたい。出張や転勤で様々な場所へ行けば、その土地ならではの脆弱性が潜んでいるはずだ。その脆弱性をよく理解し、うまく取り除いていけるかという面でも防災の知識が役に立つだろう。自分が今生活している場所で積極的に防災にかかわっていく、それはどんな時でも変わらない。私は少しでも辛く悲しい思いをする方が少なくなるよう、自分なりに防災を伝えていき、たくさんの方に知ってもらえるようにもっと勉強していきたいと考えている。

5 最後に

今の神戸の街は、かつて大きな震災があったことがわからないほど復興した。山と海に挟まれた異国情緒漂うオシャレな街並みが広がっている。三宮には大きなビルが建ち、ショッピングモールもできた。母が被災し、焼き尽くされた長田の街には住宅街が広がり、祖母が被災した板宿には商店街が復活し賑わっている。美しい街並みが戻ったとともに、震災を経験していない世代が増えていく中で自分にできることは何か、環境防災科で防災について学んだことを、後世に伝えていく。語り継ぎだ。

以前、私はある先生からこんな問いを投げかけられた。「あなたは語り部さんと聞いて、どんな人を思い浮かべますか？」この問いに、あなたなら何と答えるだろうか。大体の人はこう答えるだろう「優しそうなおじいちゃん、おばあちゃん、そして行政の方々」と。そこでもう1つ問いを投げかけられる。「では子供は語ってはいけないのか？」これには多くの人が考え込むのではないだろうか。もちろん子供が語ってはいけないというルールはない。だが子供たちに語るという機会は、あまり与えられていないように思う。私は熊本に訪問させていただいたときに、現地の子供たちの声をたくさん聞いた。私より年下の子供たちが、私は経験したことがないこと、熊本地震という災害を経験し、その経験を自分の言葉で話してくれた。その言葉はとてもストレートで、他のどんな人の言葉よりも重かったように思う。地震が発生してから2年の間、自分の胸の内にずっとあった様々な思いを話すのには勇気がいったと思う。でもだからこそ、その思いや言葉は多くの人々の心に響くのではないだろうか。熊本のある小学校の先生が言っていた「今まで自分は語ってはいけないと思っていた。自分より大変な思いをしている人がたくさんいると思っていたから。自然と地震の話を避けていた。でも子供たちが話しているのを聞いて、みんなが一生懸命聞いているのを見て、私も語ってもいいんだと思った。」と。その言葉を聞いて、どんな人でも語っていいということをもっと伝えていかなくてはいけない、そして、そのお話は私たちが語り継いでいかなくてはいけないと思った。それが私の使命であると。

今回、改めて防災について深く考える機会をもらえて本当に良かったと思っている。私が伝えたかった思いをこの4ページにたくさん込めた。防災というのは、考えれば考えるほど難しくなる答えのない問いだと思う。だが、大切な命を守るためには防災に取り組んでいくことが不可欠だろう。その1つの手段として、この「語り継ぐ」が役に立てばいいなと思う。つたない文章ではあったと思うが、なにか1つでもあなたの心に届いていたら嬉しい。いつも心の片隅に防災を。あの日を忘れないために、私は環境防災科として学んできた3年間の誇りを胸に、これからの人生を歩んでいきたい。

Dear 防災に関心がない人へ

大塚 美紗

1 はじめに

1995年1月17日5時46分兵庫県南部地震、いわゆる阪神・淡路大震災が発生し、震災発生から24年が経過した。私はもちろん阪神・淡路大震災を経験していない。経験していない私に何ができるのか。それはこれまで学習してきたこと・お話を伺ったことを風化させないように語り継ぐことだと思う。過去の災害を風化させることは、同じ過ちを二度繰り返すことになりかねない。これから私たちは、絶対に災害を経験するであろう。防災に関心がない人でもこれを読み、過去に起こった災害を知り、備えについて、そして命を守ることにについて考えてほしいと思う。

当時私の両親とも兵庫県には住んでいなかった。よってここでは祖父・祖母からの話を語り継ぐ。

2 阪神・淡路大震災

(1) 概要

発生年月日	1995年1月17日5時46分
震源地	淡路島北部（北緯34度36分・東経135度02分）
震源の深さ	16 km
規模	マグニチュード7.3
死者・行方不明者・負傷者	6434名・3名・計43792名（重傷・軽傷）
住家被害（全壊・半壊）	104906棟・144274棟
ライフライン	130万戸（水道断水）・260万戸（停電）・86万戸（ガス供給停止）

（出典 阪神・淡路大震災教訓情報資料集阪神・淡路大震災の概要 内閣府）

(2) 震災発生までの日々

家族構成は祖父・祖母・父・父の妹である。父は当時大学生で長野県の大学に通っていた為、直接震災を経験していない。当時西宮にある5階建てマンションの2階には祖父・祖母・父の妹が暮らしており、震災発生の前日まで普段通りの生活を送っていた。むろん神戸に災害が来るなど考えてもいなかった。

(3) 祖父の経験

1月17日 祖父は仕事に出かける為5時36分頃に自宅を出た。職場まで車で向かっている途中の43号線の赤信号で止まった5時46分に地震が発生した。ちょうどその時、阪神高速道路の下の道を通っていたため、地震の揺れにより高速道路が縄跳びの縄のように2、3メートル揺れているのが見え、とっさに「落ちるー」と声が出た。即座に高速道路は倒れ、大型トラックがぶつかってきたかのように、「ドカン！」と大きな物音を立てた。もし信号が赤ではなく青だったのなら高速道路の下敷きになっていたかもしれない。その後、祖母と父の妹の安否が心配になり自宅へと向かった。道中はヘッドライトをつけても暗く、電柱が倒れていた為避けるのに苦労が強いられたと言う。自宅には着いたが中は足の踏み場もないほど散乱した状況だった。祖父は某会社の給食担当の責任者だったが、当時携帯電話などはなく、会社の電話が繋がらなかった為夜が明けるのを待ち、7時30分頃に父の妹の自転車を借りて尼崎の塚口にある職場へと向かった。

職場につくと会社から「明日から弁当を1万食作ってくれ」と言われたがライフラインが止まってしまった為、当然のごとく水もガスも使えない。この時に一番苦労したことは、食料を集めることや人員を集めることであった。その後、会社が人員を集めてきてくれた為、翌日からお弁当作りに努めることができた。日にちが経つにつれ出社してくる従業員も増えてくる。その中で1万食のお弁当を作るのはとても大変だった。それだけではなく、労働組合からカレー300人前も頼まれ、準備が忙しかったが泊まり込みでしていたわけではない。毎日自宅へ帰り、普段は20分で到着する所を1時間半かけ通勤していた。

(4) 祖母の経験

1月17日祖父が職場に行くのを見送り自分の部屋へ戻ろうとした5時46分に地震が発生した。地震の時は逃げろと言われているが、あの揺れの中で動けるわけがなかった。揺れが収まり自分の部屋に行こうにも、下には窓ガラスの破片や小物が落ちており、なかなか自分の部屋にはたどり着けない。まず外靴に履き替え足の安全を確保した。次に家の中で散乱しているものを拾おうとするが、どこから手を付けてよいのか分からない。一番苦労が強いられたことは、祖父が出勤している間の大型家具の片付けであった。祖母はこの日を振り返って言う「あの揺れの中でスリッパでは足を守ることができない。外靴で

ないとだめだ」と。もし祖父の見送りをせずに寝室で寝ていたなら命は無かったかもしれない。地震発生から3日後、祖父の母の安否確認のため、避難所に出向き聞き込みを行った。当時は携帯電話など普及しておらず、連絡を取るのが非常に困難であった。安否確認のためバイクで43号線を走っていたが、明かりの一切ついていない真っ黒な三宮を目の当たりにし衝撃を受けた。病院で祖父の母と再会し、とても安心した。だが病院から自宅へ帰るのに何時間もかかった。

(5) 補足

祖父母は当時住んでいたマンションが倒壊しなかった為、地震発生後も同じマンションに住み続けていた。その為避難所へは行っておらず、救援物資ももらっていない。食料や水に関しては祖父が職場から持って帰ってきたものや、私の父が持って帰ってきたものなどで補っていた為、困ったことは一度もなかったと言う。

(6) 祖父の振り返り

阪神・淡路大震災以後から気を付けていることは、大型家具の固定や非常用持ち出し袋を準備することだ。大型家具の固定では、タンスの下にかましを入れ倒れにくくしている。非常用持ち出し袋は、祖父用と祖母・父の妹用の二つに分け、1年に一回点検を行いながら、袋の表面には祖父・祖母・父の妹の携帯番号と非常時に集まる集合場所が書いてあり、すぐに持って逃げられるよう玄関に置いている。これらは震災後に始めた行動であり、震災前には行っていなかった。「現在は、当時住んでいたマンションではなく一軒家に住んでいる為、直近で起こるとされている南海トラフ巨大地震では、当時のように被害も最小限ではすまないだろう。平時からもっと備えをしておくことが大切だ」と言う。

(7) 話を聞いて

今まで阪神・淡路大震災に関わった人や被災された方の講話をたくさん聞かせていただいたが、祖父と祖母の話は私が今までに聞いたことのないタイプであった。仕事に関係している被災経験のお話を聞かせていただくのは、ライフラインが関係している方が大半であった。しかし、今回はライフラインでなく一企業の被災経験であった。私自身、話を伺った時に身近に感じることはできず、自分事のようにも捉えられなかったが、逆に企業の方の被災経験を聞いてみたいと思った。機会があれば、当時スーパーで働いていた方、学校の先生をしておられた方など、ライフラインに関わる方や専門家の方とは少し違う方から震災当時のお話を伺ってみたい。

祖父に震災を振り返ってほしいと申し出た時に、家具の固定や非常用持ち出し袋の話が出た。その時、当たり前を当たり前でできるすごさを感じた。私は防災学科に通っているながら、その当たり前ができてはおらず、祖父を見習わなければならないと思った。また祖母の話を聞き印象深く残ったのは、仏壇がベッドに落ちてきたという話だ。被災経験がないから偉そうなことは言えないが、一つの選択で人生が大きく変わる。そして、常に私たちは死と隣り合って暮らしているのだと感じた。これは何も災害時だけに言えることではない。どう対処して生きていくべきか、その選択肢を得る為私たちには多くの知識が必要である。だからこそ防災を学ぶ必要性があるのだと思う。

3 環境防災科

(1) 入学前

環境防災科に入学する前の私は、とても防災を考えられるような人ではなかった。振り返ってみれば、視野が極端に狭く1つのことしか考えられない人間であった。東日本大震災が起きた時、テレビの映像が切り替わり突然激しく流れ出す津波の映像に驚きはしたが、テレビに映ったその映像をすごく鮮明に覚えていますかと問われれば、二つ返事で「はい、覚えています」とは言えなかった。事態の重さを理解していなかったのである。地震と言われても昔から兵庫に住んでいたわけではなかった私にとって、全く身近に感じられたことは無かった。私は思う。過去に地震で大きな被害を受けたことがあまりなく、教訓もない、ましてや自分自身も体感したことのない地域の小学生にとって、地震というものは気薄である。実際私もそうだが、周りの友人も避難訓練について真剣に考えようとする様子や心意気など全く無かった。そんな私がなぜ環境防災科に入学したいと思ったのか。それは環境問題について詳しくなりたい、環境の悪化が災害の被害を拡大させ、未知の災害を生むのだという考えを持っていたからだ。またボランティア活動に積極的に参加できる学科だと知り、人の役に立ちたいとも考えた。今考えると、環境をメインに都市環境を学んでいく学科は他校にもある。そもそも全国で唯一の防災を専門に学ぶ学科に環境を求めていったのだから、少し矛盾があったようにも思える。

(2) 入学後

今では心の底からこの学科に入学して良かったと思う。この学科に入って人はこんなにも変わることを

ができるのかと実感した。これまで過去や未来の災害について様々な方の講話を聞かせて頂いたり、授業で学んだりして多くの教訓を得てきた。その中で私にも変化が生まれ、これまで防災に関わりもなく過ごしてきたが、知らぬ間に防災の大切さに気づき「もっと学びたい、もっと知りたい」と思うようになったのである。念願のボランティア活動へ積極的に参加する事ができる嬉しさから、これまで様々な活動に参加してきた。防災教育や幼児とのふれあい、地域の祭りの手伝い、防災ブース、大学生と共同で行うイベント、被災地訪問など、これらの活動を通しボランティア活動は、してあげるではなくさせていただいているという気持ちが大切だと気づくことが出来た。

まとめると、私はこの学科に入り、人間的にも内面的にも大きな成長を遂げたと感じている。年を重ね自然と成長することはもちろんだが、この学科に入っていなかったらここまで成長することはできなかったであろう。入学以前と比べて他視点から見ることの大切さに気づき、視野が少し広がったように感じる。本音を言えば、災害時に本当に動けるのであろうか、教訓を生かせるのだらうかと映像を見る度、過去の災害に触れる度に不安になる。こういった不安を少しでも取り除くために、もっと多くのことを学び、行動の選択肢を増やしていきたい。そしてこの膨大な情報量を、周りにたくさん発信していき、守れる命を増やしていきたいと今では考えている。

4 私の夢

(1) 夢

私の夢はまちづくり＋建築デザインを融合させた仕事に就くことだ。2個を融合させるなんて贅沢だと思われるかもしれない。私自身、環境防災科に入るまでまちづくり課に入りたいという思いしかなかった。建築デザインの夢を持ったきっかけを具体的に言えば、キャリア教育だったのかもしれない。だがそれはほんの小さなきっかけに過ぎず、興味が深まっていったのは、高校1年生の頃の災害と人間での建築や建築デザインについての講話を聞いてからだ。

(2) 何がしたいのか

現在どちらの夢も切り離したくはないが、融合させた職業は〇〇で〇〇の仕事に就きたいという具体的な職業は実際のところない。ないどころか、まちづくりだから公共物のデザインや空き家の再利用を考えたい、リノベーション設計を手掛けたいなどの思いが交錯しあっているのが現状といったところだ。だが定まっていない中にも、これだけはといった思いはある。まちづくりであればコミュニティの強化に努めたい。そして建築デザインでは、居心地が良く、その人に合った家のデザインをしたいと考えている。

なぜコミュニティの強化が必要なのか。それは授業で講話を聞いたとき、必ずと言っていいほどコミュニティの強さが災害に影響してくるといったお話が出てきていた為だ。物理的な被害をぬいて考えても、脆弱なコミュニティは生存率が低くなると言えるであろう。災害が起きてからコミュニティの強化をしても遅い。そんなはったりは災害には通用しない。だがコミュニティの関係性が強かったらどうだろうか。「誰がどこで寝ているか分かっていたから、すぐ救助に迎えた」などというお話を聞いたことがある。たとえそこまで分からずとも、近所に住む人がどんな人か分かっていたら、災害時であれ緊急時であれ、救助する優先順位や異変も察知できるのではないだろうか。それもこれもコミュニティの強化がなければ出来ないことである。私はまちづくりを通して、地域住民と密な関係を築きたいと考えており、その理由は2つある。1つ目は、平時からの関係性が災害時や非常時に明らかになる為だ。2つ目は、地域住民の意見や要望を取り入れやすくし、よりよいまちを築く為である。そのために私が行っていきたい事は、老若男女問わずに参加できる地域行事の企画・運営である。この場をコミュニケーションの場や、コミュニティを強化する場として活用していきたい。また、この行事の中に防災・減災に関することや環境保全に関することを盛り込み、地域住民の意識向上につなげていきたい。これらを行うことにより、持続可能なまち、想定外に備えられるまちにしていきたいと考えている。

次に、居心地のいい家のデザインについてである。こちらは単純で、その人のニーズに合ったものをデザインしていきたいといったものだ。環境への配慮・想定外が起きても耐えられる・居心地の良さの3点を妥協することのない家のデザインを追究していきたい。また新しく作るのではなく、既存の建物をどう生かすのかというリノベーション設計にも関わりまちづくりに繋げていきたい。話は変わるが、最近とあるものを見つけた。それは「認定まちづくり適正建築士」という資格である。この資格を取るメリットとしては、建築やまちづくりの専門家として、まちづくり条例に沿ったコンサルタントや審議会等の協議調整に関わる可能性が広がることだ。私にまさしくあてはまると思ったので、この資格を取り、将来

の幅を広げていきたい。この資格も欲しいのだが、この資格を取るためには、まず建築士として一番大切な「2級建築士」、「1級建築士」を取る必要があり、2級と1級では建築できる高さ制限、大きさ制限がある。現在2級建築士取得を目指しているが、場合によっては1級建築士取得も考えていきたいと思う。

5 最後に

今回この「語り継ぐ」を通して私が伝えたいことは2点ある。1点目に、決して防災は難しくはないこと。これは私が実際に体感したことで、決してハザードから守り固めるだけが防災ではなく、地域のコミュニティを大切にすることや居心地の良い空間を作るのも防災であるということだ。「防災」と名前を聞くだけで堅苦しい言葉に聞こえるかもしれない。だがその本質は、固定概念に囚われるべきものでも終わりが見えているものでもない。最近よく「想定外」という言葉が用いられるのもその為だと思う。結局はどの職業についたとしても、なんらかの形で防災と関わることになる。よって防災を学んでおいて損になることは1つもなく、今の時代を生き抜く為には決して欠かせないものだと思いたい。2点目に、災害時に自分にとっての最善の選択をしてほしいということ。初めに命を守ることにについて考えてほしいと述べていたが、中には自分の命を顧みず人命救助がしたいという人もいるだろう。もしその選択を自らが選んだのだとしても、決して後悔だけはしてほしくない。なぜあの時という後悔をしない為に、知識や情報を増やす必要があると伝えたい。

今まで偉そうなことをたくさん述べてきたようにも思うが、私は未災者だ。災害を経験したことは一度もない。だが近い将来、南海トラフ巨大地震が発生すると言われており、私たちは必ずその地震を経験するだろう。各地で地震が相次ぎ「想定外」という言葉が多く用いられている中で、私たちが生き延びていく為には過去の教訓と対策についてもっと知る必要があるように思う。防災に関わったことが無い人でも知らないで済まされる時代では無くなっている。今まで防災に関わったことが無くとも、防災は決して堅苦しいと思わず、最初の一步を踏み出してほしい。最初は簡単なことから、そしてだんだんと命を守ることにについて考えてみてほしい。大切な人を守る為に。自分を守る為に。これは高校生になって初めて防災に関わり、興味を持った私だから言えることなのだと思う。

震災を経験していない今の私にできること

大西 由輝

1 はじめに

私たちは、阪神・淡路大震災を経験していない。また、今までに大災害を一度も経験していない。私たちのように災害を経験していない人たちが増えている。3年間、環境防災科で学んだことを、次の世代へ語り継いでいくことが防災を学ぶ私たちの使命だと思う。

2 阪神・淡路大震災

(1) 概要

日時：1995年1月17日 午前5時46分52秒

震源：淡路島北部

規模：7.3

死者：6434人

行方不明者：3人

環境防災科の資料より

(2) 母の話

母は震災当時、香川県に住んでいた。地震が発生した時、車に乗っていて初めはめまいだと思っていた。外は暗かったので、状況があまり分からなかった。外が明るくなり、テレビを見て被害の状態を見た時、衝撃を受けた。香川県では水不足が頻繁に発生するので、ポリタンクが各家庭にあり、公園でポリタンクを集めていることを知って持って行った。

(3) 父の話

父は、香川県に住んでいた。地震が発生した時すぐにガスの元栓を閉めに行った。かなり揺れたと言っていた。家具などが倒れてくることはなかった。父もテレビで被害状況を見た時、衝撃を受けたと言っていた。

(4) 阪神・淡路大震災を学んで

今、阪神・淡路大震災を経験した人が減ってきている。これは、震災が忘れられかけていることを意味すると私は思う。阪神・淡路大震災を風化させないために、私たち「防災」を学んでいる人間としてできることは、語り継ぐことだと思う。私たちが育ってきた町、神戸で起こったことを忘れさせないために、私は阪神・淡路大震災を経験していないが、被災者の体験談や学んできた知識や技術を伝えていきたいと思う。

3 環境防災科

(1) きっかけ

中学3年生の時の担任の先生が、環境防災科の存在を教えてくれて初めて知った。その時の私は「防災」について全く知識がなく、また具体的な夢がなかったので、他の学校で普通の高校生と同じように過ごすよりも、舞子高校の環境防災科で内容の濃い3年間を過ごし、夢を見つけたいと思った。

(2) 今

私は、環境防災科に入って本当によかったと思っている。入学するまでに阪神・淡路大震災について学んだことはあったが、自ら詳しく学ぼうと思ったことはなかった。また、小中学生の時の私は避難訓練なども適当にこなしていた。授業で過去の災害について色々な視野から学んでいくにつれて、災害に対する意識が変わり、防災・減災の重要性も理解できた。3年間を振り返ると、環境防災科でしか学ぶことのできない消防学校や出前授業など、貴重な経験が多かったと思う。その3年間の経験を活かし、今の私にできることは、語り継ぐことだと思っている。阪神・淡路大震災や東日本大震災などの災害を風化させないために、私は環境防災科の生徒であった人間として、語り継いでいきたいと思う。

(3) 出会い

環境防災科で出会った仲間は一生の宝物だ。3年間クラス替えがないため、クラスでの絆が強い。これは、色々な行事で発揮することができた。部活動の仲間もいるが、本音で語り合えるのは環境防災科の仲間だけだったと思う。この出会いに感謝したい。また、環境防災科の先生方との出会いは、私自身を変えてくれた。色々な外部講師の方の講義や実際に自分自身で取り組む消防学校などの経験を通じて、広い視野や多くの選択肢を持つことができた。これは環境防災科での出会いのおかげだと思う。

4 ネパール

(1) ネパール

ネパールは、アジア最貧国の1つといわれている。また現在、人口の増加によって食糧危機の状態にもある。国の衛生状況も悪く、感染症の問題が挙げられている。これは災害時には大きな被害になると思う。ネパールは阪神・淡路大震災が発生した時、日本に支援をしてくれた。日本で暮らしている私たちは、そのことをほとんど知らないだろう。私は日本からネパールへ何か支援できることはないのかを考えるべきではないかと思う。

(2) ネパール地震

日時：2015年4月25日 11時56分

震源地：首都カトマンズ北西

規模：M7.8

死者：8460人

環境防災科資料より

(3) ネパール訪問

私は、環境防災科で防災・減災を学ぶことで、海外の防災にも興味を持つようになった。そのきっかけとなったのがネパール地震だった。ネパールは2015年に発生した地震で甚大な被害を受けた。その被害状況を知り、ネパール訪問に参加し、日本以外の国の文化、建築、防災を学びたいと思った。

私は、短い期間ではあったが、ネパールで生活してみることで思ったことがある。それは、私たちの暮らしでの「普通」と考えられていることがネパールでは「普通ではない」ことだ。私たちは普段、整備された安全な道を使っている。しかし、ネパールでは整備されている道は限られていた。また、自動車の移動が多いにも関わらず、信号が動いていない場所もあった。いつ事故が起こってもおかしくないと思った。

ネパールの学校訪問では、色々な子供たちと交流することができた。訪問3日目に障害者と健常者が一緒に学んでいる学校に訪問した。そこでは、点字ブロックやスロープなどが設置されており、様々な対策が取られていた。他にも、小学生や高校生とも交流することができた。私は、この交流で自分自身の英語力がどのくらいのレベルなのかを試したいと思っていた。実際に交流すると、単語が少し話せた程度で、全く伝えたい事が話せなかった。しかし、ここで役に立ったものが、環境防災科で身につけたコミュニケーション能力だった。私は、自分なりにジェスチャーなどを使い、要点を絞りながら会話をすることが大切だと実感することができ、学んだ技術を生かすことができた。

ネパール訪問に参加したことで、ネパールの文化や教育など深く学ぶことができた。私はこの訪問で海外の災害に興味を持った。世界には、災害に対する備えができない国がまだまだあると思う。そのような国により関わって行きたいと思う。海外には、まだ全く見たこともない場所や物、聞いたことのない言葉がある。実際に海外に行くことで、日本がどれだけ安全で、豊かなのかを再認識することができる。私は、これからも海外について「防災」を通じて、様々な角度から学んでいきたいと思います。

5 防災教育

防災教育は、これからの世代に絶対に必要となる。「防災」を学んだ私たちだからこそ、その重要性が分かる。だが、私たちの周りにも「防災」を知らない人は探したら必ず存在する。知らない以前に勘違いをしている人もいると思う。もし今、南海トラフ巨大地震が発生したら、その人たちはどうなるだろうか。生き残ることはできないと私は思う。そう考えると「防災教育」の重要性は誰にでも理解できる。自分や大切な人を守りたいと思う気持ち、生きたいと思う気持ちがあればいい。

私は「防災」を学んでいるが、まだまだ未熟だと思っている。しかし、私なりに大事なことは伝えることができる。卒業後は、年齢など関係なく、幅広い世代に伝えられるような存在になっていきたいと思う。また、将来は教師になり、災害時には生徒を全員助けたいと思っている。そのために、私自身が身につけなければならない知識や技術がまだまだある。私はこれからも「防災」を学んでいきたい。今の日本の教育には、数学や国語など、様々な教科がある。それらは将来、確実に重要になるだろう。しかし、よく考えてみると、日本の教育の中で最も重要で力を入れなければならないのは「防災教育」なのではないだろうか。

6 夢と防災

私の夢は教師になることだ。教師になりたいと思うようになったきっかけは2つある。

1つ目は、2011年3月11日に発生した東日本大震災での大川小学校での出来事だ。当時の私は、小学生だった。私は津波の映像を見た時の衝撃を今でも鮮明に覚えている。黒い波が街を飲み込んでいく。本当に怖かった。その日、家族で夜にニュースを見ていると、大川小学校の話になった。私と同じ年齢の子どもたちが亡くなっていると考えた時、悲しかった。その日から、私は教師になろうと思った。あの時、私は「危険な状況の時に、生徒を守る先生になりたい」と思った。今考えると人の命を救う仕事をしたかっただけだったのだと思う。それが消防士や自衛隊ではなく教師という職にたどり着いただけであった。

2つ目は、今までに出会ってきた先生に憧れを持ったからだ。私は、小・中・高校と色々な先生に出会ってきた。その中でも中学校と高校の部活動の顧問の先生は、とても印象に残っている。顧問の先生との出会いは、人生を大きく変えてくれた。この出会いがあったからこそ今の私がいると思っている。この経験から、私もたった1つの出会いで人生を変えられるような教師になりたいと思った。

実は、夢とは別でやりたいことがある。それは世界一周をすることだ。世界一周という夢は偶然思いついた。世界一周のイメージは、旅行をすることだと思う。間違いではない。しかし、私は世界一周をする際に訪れる色々な国の文化や防災を知ろうと考えている。世界には私の知らない国が多くあり、それぞれの国に独自の文化や防災がある。世界中の文化を知り、防災を学ぶことは、色々な場面で貢献できるのではないと思う。例えば、日本で暮らしている外国人の方を「防災リーダー」として育成することだ。そうすれば、言語の壁がなくなり、災害時に情報を伝えることができるようになる。また、世界の防災知識があることで、災害時の避難所設営でも貢献できる。これらの理由から世界一という夢をやり遂げたいと思う。

7 これからの災害

これからの災害といえば、誰もが「南海トラフ巨大地震」を思い浮かべるだろう。南海トラフ巨大地震では、対策を取らないと最悪の場合、死者、行方不明者が約23万人になると想定されている。対策がされると被害は少なくできる。そのためには備えが必要だ。私は災害時に3つのことを大事にしたい。

1つ目は、率先避難者になることだ。率先避難者とは、大人や教師の指示を待つのではなく、真っ先に逃げることだ。率先避難者になることは、非常に難しいことだと私は思う。災害時には、誰にでも「自分なら助かる」や「そんなにたいしたことはない」という正常性バイアスが働き、避難をすることをためらってしまうことがある。そのような正常性バイアスが働いた人に対して、私が「はやく逃げろ」と言うことによって、周囲にいる人を救うことができるかもしれない。勇気を出して行動することが重要になる。

2つ目は、その状況で最善を尽くすことだ。「ここまで逃げれば大丈夫だろう」という考えを捨てて、逃げられる場所まで全力で逃げるのが重要だと思う。正直、体力的な問題が発生することが考えられる。その場合に、私たち高校生が率先して引っ張って行くことが重要になる。

3つ目は、想定にとらわれないことだ。ハザードマップは人の命を救うことはある。しかし、ハザードマップは過去の災害を参考にして作成している。災害には「想定外」が多く発生する。そのため、ハザードマップだけを信じるのではなく、想定外のことが起こりうるということを考えて行動することが重要だ。

私は、この3つを災害時に大切にしたい。もしかすると、行動をしたけれども、空振りになるかもしれない。しかし、空振りだからといって気にする必要はないと思う。私は、何回でも行動することが人の命を救えるとしたら、空振りなどを気にするよりも行動するほうが重要だと思う。

8 最後に

私は、阪神・淡路大震災、東日本大震災、熊本地震などの大きな災害を経験したことがない。経験していない私にできることは限られている。実際に現地に行って、自分の目で見て、自分の手で触れてみないと分からないことが多い。また、話を聞くだけでは分からないことや、現地に行くからこそ分かることが必ずある。そこで、聞くことのできたお話、自分が体感したものを次の世代に語っていきたいと考えている。

環境防災科で3年間学んだ知識や技術は、これからの将来必ず役に立つだろう。正直、防災を勉強することは、人の命が関わってくるからこそ難しいと思う。防災を3年間学んできたからといって、私に人が救えるのか、自分の命が守れるのかといわれると、正直わからない。しかし、可能性がないわけではない。防災は日々の積み重ねが大事だ。3年間学んできたことを自分の中だけで置いておくのでは、全く意味がないと思う。私は、今以上に防災が日本中、世界中に広まるような活動がしたい。

これからの人生は長い。その中で、歴史的な大災害に、必ず遭遇するだろう。今の私は、まだまだ未熟だ。このままでは自分すら守ることができないかもしれない。だからこそ、これからも防災を学び、家族や友人を救えるような存在になりたいと思う。

語り継ぐ

奥田 桃加

1 はじめに

阪神・淡路大震災は1995年1月17日午前5時46分に発生した戦後初の大都市直下型地震である。私は阪神・淡路大震災を経験していない。しかし、この環境防災科で学んだことを後世に伝えることができる。震災から25年がたった今阪神・淡路大震災は徐々に風化しているように感じる。今のままでは、震災の教訓・体験が忘れられ、将来同じような被害を繰り返してしまうのではないかと不安になった。阪神・淡路大震災を風化させないために、私は祖母・祖父・叔母に聞いた話をもとに、この場を使って語り継ごうと思う。

2 阪神・淡路大震災

(1) 祖母の話

私は当時長田区に住んでいた。阪神・淡路大震災当時は自宅で被災した。当時2階建ての家に住んでおり、地震発生時私は2階で娘と寝っていると突然大きな揺れが始まり、目を開けると、2階の天井が目の前まで落ちていた。そして2階が1階になっており、自宅は原型を留めていなかった。しかし増築したお風呂と台所は無事であり、使用できる状態であった。私と娘、夫は無事に外へ出ることができたのだが、1階にいた義母は玄関のタンスに四つん這いの状態で挟まれており、身動きが取れない状態であった。義母がタンスに挟まれていることに気づいた夫が近所の人を呼びに行き、救助活動を行い無事救出された。しかし、腰を骨折していることがわかり、近くの西市民病院に行ったが、既に怪我をしている人で溢れかえっており診察を受けることはできなかった。病院では、頭から血を流した人が多くおり比較的軽症の人の診察は後回しになっていた。そこで、病院でオフィスチェアを借り、義母を椅子に乗せて夫の妹が住んでいる明石市の大蔵谷に向かった。義母は無事に明石市の病院に入院できた。私と娘は夫の妹の家の2階を借りて生活をしていた。2週間ほどで入院していた義母が退院し、10月まで3人で生活した。

(2) 祖父の話

私は阪神・淡路大震災当時は垂水区に住んでいた。私は当時建設会社に勤めており、会社に出勤しなければいけなかったのが、駅へ向かったが、電車やバスなどの公共交通機関は動いておらず、会社のある三宮へ歩いて通勤した。建物の震災復旧のためしばらく家に変えることができず、ホテルに寝泊まりしていた。バイクで現場に向かい、建物の復旧に携わった。また、家族から家のお風呂が壊れていると言うことを聞いていたので会社からプロパンガスをもらい家に持ち帰った。貰ったプロパンガスで無事お風呂に入ることができた。

(3) 叔母の話

阪神・淡路大震災当時垂水区に住んでいた。当時高校2年生だった。下から突き上げるような大きな揺れで目を覚ましたが、何が起きているのか状況を整理することが出来なかった。幸いなことに家族は全員無事であり、家も大きな被害はなかった。しかし、飼っていた犬の小屋が壊れてしまいひどくおびえて体は震えていた。水は止まっていなかったが、ガスと電気は止まっていたので、簡単な調理しかできなかった。母と2人でカセットコンロを探しに近くのスーパーへ行くと、商品があまりなかったのですぐに食べられるものと、カセットコンロ2台を購入して家に帰った。次の日、高校に登校しようとしたが、電車やバスが止まっており、登校できなかった。高校は1カ月の間休みだったので、友達に会うことができず、安否も分からないままだった。

(4) 話を聞いて

私は「語り継ぐ」を執筆するまで、あまり家族や身近な人に阪神・淡路大震災の話を聞いたことがなかった。私が小学生の時、テレビで阪神・淡路大震災の特集を放送していた。その時祖母が「長田では大きな被害が出たんだよ」と教えてくれたのだが、そのころの私は阪神・淡路大震災について深く考えておらず、軽く聞き流していた。中学生・高校生になり、本格的に防災へ興味が出てきて、あの時祖母の話を聞き流していたことを後悔していた。そんなときに、この「語り継ぐ」を執筆することを知った。私は、祖母や身近な人に話を聞くことができるいい機会だと思った。実際に話を聞いて感じたのは、同じ神戸市でも場所によって被害の大きさが全然違うということだ。祖母の住んでいる長田区では、全壊している家が多かったそうだが、祖父と叔母が住んでいる垂水区では、全壊の数は長田区に比べて少なく、半壊の

家が多かったと言っていた。また、水や電気の復旧スピードも地域によって差があることが分かった。

祖母の家は全壊してしまい、曾祖母も骨折という大きな怪我を負ったが命を落とすということがなく本当に良かったと思っている。長田は火災などで大きな被害が出た地域なので幸運だったと思う。少しでも寝ている場所が悪ければ、天井と床の間に挟まれて身動きが取れなくなっていたかもしれない。地震の発生時刻がお昼であれば祖父は仕事場に、叔母は学校に行っており家族はバラバラの状態であり、安否確認に時間がかかり不安な時間を過ごしていたと思う。現在であれば、情報機器が発達していてスマートフォンなどで簡単に連絡を取ることができるが、阪神・淡路大震災当時は現在ほど機器が発達していなかったと思う。

いくつもの偶然が重なったため、祖母・叔母・祖父の家族は全員無事であり、今話を聞くことができています。震災のデータやグラフを見るだけでは分からない、当時の状況を身近な人から聞くことができてよかった。

3 環境防災科

(1) きっかけ

私が環境防災科を知ったのは、小学校2年生の時だった。当時の環境防災科の先輩方が、マリニピア神戸で募金活動を行っているのを見て、私も人の役に立てる活動をしたいと思うようになった。私が環境防災科について興味を持ったことを知った両親が、インターネットで環境防災科がどのような活動をしているのかということを調べてくれたり、人と防災未来センターに連れて行ってくれたりしたことで、環境防災科への興味がより強くなった。環境防災科を受験しようと決めたのは、中学2年生の担任の先生の後押しもあったからである。その先生は私に「あなたは環境防災科に向いている」と言ってくださった。更に、環境防災科の入試で必要な小論文や地震の計算問題、面接の練習などを付きっきりで教えてくださり、特に地震の計算問題や小論文の練習では、私が理解するまで何度も教えてくださった。私が今、環境防災科に入学できているのは、中学校の先生をはじめ、多くの人の支えや応援があったからなのだと感じている。改めて感謝している。

(2) 入学してから

環境防災科は授業カリキュラムの3分の1が専門科目である。

入学当初私は、専門科目の勉強や高校で学ぶ勉強についていけるのかという不安でいっぱいだった。専門科目の勉強が本格的に始まり、驚いたのは地震の発生時刻や概要を皆がよく知っているということだ。私は入試で必要だと思い、阪神・淡路大震災などの大きな被害が出た災害の概容などは覚えていたのだが、クラスの皆が授業で発言しているのを見ると、私はまだまだ知らないことがたくさんあると感じさせられた。そのような出来事がきっかけで、災害や防災に関わる本を読んだり、映像を見たりするようになった。「災害と人間」という授業では、様々な分野の外部講師の方に来ていただき、阪神・淡路大震災当時の様子を聞いた。そして、現在行っている災害対策やこれから起こるといわれている災害に対してどのような対策を行っているのかなど、様々なことについて何うことができた。消防士、大学の教授、海上保安庁などたくさんの方に来ていただいた中で、私が特に印象に残っている講義は、兵庫県立大学・環境人間学部の木村玲欧先生の講義である。木村先生は心理学専門の方であり、災害時の人間の心理について講義をしていただいた。木村先生の講義で特に印象に残っている言葉が2つある。1つ目は「わがこと意識」だ。ある事柄について、それが自分に直接関係することでもなく、それが自分たちのことのように意識することである。簡単にいえば、他人事ではなく自分のことのように考えるということだ。災害時はこの意識が必要だと教えていただいた。自分の住んでいる地域に被害がなければ関係ないと思いがちだが、災害は自分事と考えなければならない。2つ目は「行動のパッケージ化」だ。これは普段経験しない危機的場面について「この状況の時はこうする」という事前行動計画を作り、訓練を通して徹底させるということである。例えば、地震の揺れを感じた時や緊急地震速報時に自分の身を守るまた、地震の揺れを感じたら津波のことを思い出して(地震＝津波を連想)避難行動をとるなど危機的場面に備えるためには、事前準備が大切だということである。

環境防災科では、ボランティア活動が積極的に行われている。例えば、募金活動・地域の防災訓練に参加する・出前授業である。私が参加してきた中で特に印象に残っていることが2つある。1つ目は募金活動だ。私が初めて参加したのは、1年生の7月に起こった九州豪雨災害の支援募金活動である。舞子高校と関わりの深い「さくらネット」の方で行った。最初は緊張してなかなか大きな声を出せずにいた。そんなときに町の方から「頑張ってるね」など温かい言葉をかけていただいた。その時、被害に遭われている方のためにも頑張ろうと思った。募金をしていただけることは当たり前ではない。困ってい

る人のために善意で行うことだ。しかしこんなにも募金をしてくださる方がいるのかと驚き、町の方の優しさに感謝した。私はこの活動を終えた後から街で募金活動をしているのを見ると、積極的に募金をするようになった。2つ目は出前授業である。私は人前で何かを話すことが苦手で、それを克服しようと思い出前授業に参加した。小学生や高齢者の方など、様々な人の前で防災を伝える活動を行った。活動の中で気づいたことは、年齢に合わせて伝える内容や話し方を変える必要があることだ。小学生の前で難しい話ばかりをしていると飽きてしまう。クイズや創作活動を交えて授業をすると、とても楽しんでもらえた。日常生活でも人によって伝え方を変えることの大切さを出前授業に参加することで学ぶことが出来た。

4 平成 30 年 7 月豪雨

私は2年生の夏休みの8月9日に西日本豪雨の災害支援ボランティアに参加した。

正式名称は平成30年7月豪雨である。西日本を中心に全国的に広い範囲で記録的な大雨が降った。死者224名、行方不明者8名、床上浸水8,567棟、床下浸水21,913棟など非常に大きな被害をもたらした豪雨である。(平成30年11月6日現在、平成30年度消防白書より)

私たちは「笑顔と元気を被災地に届ける」を目標に岡山県の倉敷市真備町へ向かった。災害が起きた直後の被災地にボランティアとして向かうのはこれが初めてであった。まずは、真備町のボランティアセンターのサテライトでミーティングを行い、現地の方から注意事項などを聞いた。この日は気温が高く熱中症になる危険性があったため、水分補給をしっかりとるようにとアドバイスを受けた。私たちの班は、Yさんのお宅の土壁をはがす作業のお手伝いを行った。Yさんの家は2階まで浸水し、避難所で生活していた。土壁は、水分を含んだ泥が乾燥し、はがれにくくなっており、工具類を使用しないと上手く土壁をはがすことができなかった。ほかの班は、向かいのお宅の家具などの片づけを行っていた。印象に残っているのは畳を運んでいるときだ。畳は水分を含むと腐ってしまい、カビなどが生えてしまうそうだった。匂いもきつく、思わず「くさい」と言ってしまうようになったが、被災者の方がいる前で失礼なことはいえないため、必死にこらえたと作業をしていた友達が話していた。

帰り際にYさんがお話していたことで、今でも覚えていることがある。「このような災害の現実をみんなに知ってほしい」とおっしゃっていた。私はこの時、ここで見た被災地の状況やYさんのお話、何をしたかなどのすべてを身近な人に話し、被災者の方の気持ちを伝えて繋げていかなければいけないと強く思った。被災地にボランティアとして参加したからこそ、伝えられることがたくさんある。これからも周りの人に伝え続けていきたい。そして、1度のボランティアで終わらせず、交流などを通じて現地の方と関わっていきたい。

5 将来の夢

私の将来の夢は、患者さんを笑顔にできる看護師になることだ。私がこの夢を持ったきっかけは2つある。1つ目は、怪我をして初めての入院で緊張していた時に、私に優しく接し、安心させてくれた看護師さんのように、患者さんの心に寄り添い、サポートができる人になりたいと思ったことだ。2つ目は、テレビのニュース番組で看護師の特集をしていて、その番組を見たことだ。救急車で運ばれてきた患者さんに対して、必死に心肺蘇生を行う姿や、意識のない患者さんに繰り返し声をかける姿を見て、最後まで蘇生を諦めずに1人でも多くの患者さんの命を救えるような看護師になりたいと思った。3つ目は、私の通っている学習塾の先生との出会いだ。その当時、看護師になりたいという思いはすでにあった。先生はDMAT(災害派遣医療チーム)になることを目指しており、偶然夢が同じだったため、看護師の仕事内容や、DMATが災害時どのような活動をするのかなど、私の知らなかったことを教えてくださった。先生と出会い、たくさんのお話を聞いたことから、看護師になりたいという思いがさらに強くなった。看護師といっても外科や内科など、看護師が活躍している場所はたくさんある。その中で私が看護師として働きたいと思っている場所は、ICU(集中治療室)である。ICUとは、呼吸や循環の状態が非常に悪く、生命の危機にある患者を24時間体制で治療を行う場所だ。しかし、重篤な状態にある患者だけでなく、手術後の患者がいるなど、様々な状態の人がいるのもICUの特徴である。さらに、ICUでは、災害時に様々な対応が必要になる。人工呼吸器や、心電図モニターが欠かせない患者が多いので、避難するときの役割分担や患者への心のケアなど、看護師の災害時対応マニュアルをより濃いものとし、患者の命を守りたい。災害支援ナースとして被災地へ入る場合は、被災地で臨時的医療スペースを開設して、被災者の方の怪我の手当てなど、健康的に生活できるようサポートを行いたい。看護師は患者と待ち時間や診察の時に会話する機会が他の医療従事者に比べて多くある。そういった時間に、災害

関連死を防ぐため「エコノミークラス症候群にならないように体を動かしてくださいね」と声を掛け、災害関連死で亡くなる人を出さないようにすることが必要だ。この声掛けは外部講師の方から聞いた災害関連死のことについて、患者に知ってもらう機会にもなる。平常時、災害時を問わず、患者の気持ちに寄り添うことのできる看護師になりたい。

6 最後に

「語り継ぐ」の執筆を通して、阪神・淡路大震災や将来の夢・環境防災科で学んだことについて、改めて考えることができた。現在、私たちのように阪神・淡路大震災を経験していない人たちが増えてきている。経験していない人たちにどうやって伝えていくのが今後の課題だ。阪神・淡路大震災だけでなく、過去に起きた災害を忘れず、また、同じ被害を繰り返さないように、私ができる全ての知識を伝え続けていきたい。

語り継ぐ

川島 凜々花

1 はじめに

阪神・淡路大震災から25年。私はこの地震を経験していない。これからは、私のように震災を経験していない若い世代が増えていき、防災意識は薄れていくことだろう。そのために、私たちができることは語り継ぐということだ。月日が経つにつれて、この地震が風化していくのを防ぎ、同じ被害を繰り返さないためにも、私たちは語り継ぐ必要がある。この語り継ぐでは、当時の母と父の体験について書くことにする。そして、この語り継ぐを見た人が、防災に興味をもつきっかけになってほしいと思う。

2 母の体験

(1) 震災当日

当時は長田区に住んでいた。下から突き上げるようなドーンッという響きの後に、激しい揺れがしばらく続いた。何が起こったかわからないまま、動くことが出来ず、揺れが収まるまで布団の中にいることしかできなかった。隣の姉の部屋からは「キャーッ」という叫び声も聞こえてきた。顔や体の上には物という物が落ちてきた。その内に、ほこり臭い土煙のような臭いがした。後から思うと、これは、家の壁が崩れてしまったためだった。揺れが収まった時に、家の外が安全なのかわからなかったが、とにかくパジャマの上に毛布をかぶり、そのまま外に出た。真っ暗な中、食器やガラスが割れている上を歩いたので、父の足にはガラスが刺さってしまっていた。近所の人達も皆、外に出てきて明るくなるまで立ったまま待っていた。明るくなってから家の中に入ると、どうしていいかわからない状態で、ただ茫然としていた。家に住める状況ではない事に、これからどうなるのか不安になった。長田区でも北寄りに家があったため、火事にはならなかったが、高台から見た南の景色からは煙が黙々と上がっていた。家で生活ができるような状態ではなかったため、親戚の家に身を寄せた。

(2) 翌日から

須磨区の親戚の家も被災していたので、翌日は、被害の少ない北区の親戚の家に泊らせてもらった。とにかく住むところを探さなければと、父が車で、垂水区ですぐに住めそうなマンションを探した。何日後に、住む所がやっと見つかった。ここから半年は、垂水区での生活が始まった。

当時、職場は六甲道にあったが、こちらの被害もかなりあった。駅の南側のメイン六甲という建物の中にあったのだが、ビルは倒壊していないものの立ち入ることはできなかった。

(3) その後

半年後に自宅は修繕でき、もとの家に戻り、生活が戻りつつあったが、電車が通っていなかったのも、神戸から三宮まで歩いて通勤した。歯科衛生士をしていたのだが、六甲道では患者さんが亡くなられたり、患者さんの子供が亡くなったりと悲しい出来事ばかりだった。

地震後からは、少しの揺れでも心臓がドキドキして動悸が起こり、息苦しくなってしまう。普通の生活が送れていた事に感謝した。知らない人に勇気づけられて、感動した。そして、これを気に震災の事をいろいろ思い出せてよかった。

3 父の体験

(1) 震災当日

仕事で疲れていたのか、深い眠りの中で誰かがベッドを執拗に大きく激しく揺らしている。あまりにも長く、しつこいまでの激しい揺さぶりと、ギシギシ、ガタガタ、ドンドン、ガラガシャーという異常音で、これは夢なのか、何が起きているのかと思った。揺れと音が収まって、寝ぼけ眼で深い眠りから目覚め、ベッドに座り部屋の辺りを見回した。何が起きたのか、近くに飛行機でも墜落したのか。

木造2階建ての2階の部屋は酷く荒れており、落ち着く暇もなく、また揺れた。冷静になり、地震が起きたと理解できた。家族は大丈夫か、同じく2階の部屋の妹2人を確認しに行くと、部屋は荒れているが、怪我もなく無事であった。だが、恐怖で震えが止まらない状態だった。父母の確認をするために階段を下り、1階に行き、リビングのドアを開けると、ガラスが散乱していた。玄関に戻り靴を履き、パリパリと踏みしめながらリビングに入ると、食器棚の食器が全てと言っていいほど割れていた。「地震？」父母も無事であり、声をかけてきた。「間違いなく地震やな。しかも今まで経験した事がないくらい大きな地震やな。」と言った。外を見てきてと母が言うので玄関のドアを開けると、前の家の塀が全て倒れて

おり、道路の半分まで塞いでいる状態だった。急に彼女（現在の妻）の事が心配になり、服を着替え、様子を見てくると家族に告げ、原付バイクで見に行くことにした。

私の家は垂水区高丸で、彼女の家は長田区丸山であり、当時の私の職場は須磨区板宿だった。少し走ると人々が異常に慌ただしく、通常の朝とは全く違う様子が見てわかるくらいであった。須磨区の妙法寺付近に近づいてくると道路のアスファルトが割れており、水が噴き出していた。暗いな、朝ではなく夕方みたいだなと思い、空を見上げると黒煙だった。しかも南側は、真っ黒な空だった事が記憶に残っている。彼女は大丈夫なのか、彼女の様子を見に行くと、無事であることが確認できた。良かったと一安心したところで、次に会社に行ってみることにした。会社に近づくと風景が違う。まるでドミノ倒しのよう家屋が倒れているのだ。恐ろしくて、鳥肌が止まらなかった。会社に到着した。新しかった外壁がヒビだらけの状態になっていた。会社の人々が次々に集まり、安否を確認している中で、緊迫した顔の他人が、緊急の為、原付を必ず後で返しに来るから貸して頂けないかと言ってきた。断れるはずがなく、どうぞと鍵を渡した。数時間後、原付に3人乗りで返しに来た。倒壊した家屋に家族が閉じ込められていることを聞いたが、私には何もできなかった。辛かった。これからどうすればいいのか不安で仕方なかった。その後、どのように家に帰ったかは覚えていない。

（2）翌日

ラジオで被害状況を聞いた。水道、ガスなどのライフラインが途絶えており、とりあえず水を買に行った記憶がある。

彼女と、彼女の家族も全員無事であったのが確認できたが、彼女の家は壁もなくなり住める状態では無かった為、早急に被害の少なかった地域での家探しを手伝ったことを覚えている。

（3）その後

毎日、毎食、カセットボンベでの調理をしていた。お風呂に入らず、頭を洗いたくて友人と水が出る公園までシャンプーを持っていき、寒さで震えながら洗ったことを覚えている。地域によって、ライフラインに問題なく普通に暮らせている人もいて、震災の影響がないためか、他人の様に語っているのが正直腹立たしくなったこともある。

知人に聞いた話で、電気、ガスは復旧したが、水道が出ない中で何回も水汲みを繰り返して、お風呂に水を溜めて、被害の大きかった親戚家族を招き、その高校生の娘さんを一番風呂に入れてあげ、非常に喜ばれたらしいのだが、二番風呂に入ったら湯船に3分の1しか湯が残ってなかったらしく、また水汲みを往復したとのことだ。震災前には当たり前に使っていた水、その量が非常に有難く感じたそう

4 両親の話を聞いて

私は、両親が阪神・淡路大震災で被災していたことは知っていて、なんとなく当時の話を聞くことはあったが、詳しくは聞いたことがなかった。したがって、今回この語り継ぐを書くにあたって、一番身近な人から、話を聞くことが出来てよかったと思う。母も父も、被災者だったという事に改めて気づかされた。同じ地震を経験した被災者でも、思うこと、感じたことがそれぞれに違うことがわかった。また、当時の状況について聞き、私が想像していた以上に悲惨で、二度と同じ被害は繰り返したくないと思った。そこで、私には何が出来るのだろうかと考えた。今私が出来ることは、この語り継ぐという事で、これが今の私にできる一番の防災なのではないかと思う。

私が両親の話を聞いて大切だと思ったことは、備えることだ。実際に大きな地震を経験していない私は、地震がどのようなものなのか、地震が起きたらどうなってしまうのかが、正直、あまり想像できない。しかし、両親の話を聞いて、改めて地震の怖さを知った。だからこそ、地震がいつ来ても対応できるように、常に備えをしておくことが大切だと思った。

この機会に両親から話を聞いて、家族みんなで、阪神・淡路大震災や、今後の震災について話し合うことが出来てよかった。両親の話を忘れることなく、しっかりと語り継いでいきたいと思った。

5 環境防災科

（1）入学前

私が環境防災科に入ろうと思ったきっかけは、特に行きたかった高校もなく、母に勧められたということと、知っている先輩がいたので受けてみようかなと思ったからだ。入学前までは、阪神・淡路大震災について、なんとなく知っているというくらいだった。今思うと、環境防災科に入っていなかったら、私は防災に興味を持つこともなく、災害の怖さを何も知ることがなく、備えることの大切さを知らないま

ま、今も過ごしていたかもしれない。入学前は、防災について全く知らなかったが、誰かの役に立ちたいという思いはずっとあった。

(2) 入学後

まず、環境防災科で学んできた3年間についてまとめていこうと思う。

1年生では、外部講師の方々の講義が多く、様々な角度から防災に触れ、阪神・淡路大震災の当時の状況について知ることができ、全く知らなかった防災の基礎知識をつけることが出来た。

2年生では、六甲山フィールドワークなどで観察力を成長させることが出来たり、1年生のときに身につけた基礎知識を活かし、より深く防災について学んだりすることが出来た。また、国を越えて防災を伝えていくために、防災と英語を交えた授業で、防災に関する英語力を身につけることが出来た。

3年生では、今までに学んできたことを活かして、自分の夢と防災の関わり方を見つけ、どのように防災を広めていくのかについて、夢と防災というプレゼンテーションを行った。また、防災に関することについて話し合い、考え、伝えるという能力をつけることが出来た。

環境防災科に入学してから3年間を通して、知らなかった多くの事を学び、多くの経験をすることができた。なんとなくしか知らなかった阪神・淡路大震災について詳しく学び、地震の怖さ、備えることの大切さを知ることができた。環境防災科に入学することで、防災への意識や、これから起きるかもしれない災害に、どう向き合っていくのかという意識を持つことができた。入学していなければこのような意識をもつことはできなかったと思う。入学したころは、防災について知っている知識はほとんどなく、知らないことばかりだったので、授業で聞いたことを記憶していくことしかできなかった。しかし、防災についての知識を学んできたことで、今では、今後起きるかもしれない災害に、どのように備えていくかということや、将来、どのように防災を活かしていくことが出来るのかを考えられるようになった。そして、私達は、環境防災科で学んできたことを、これから先、自分の中でとどめるのではなく、広めていくことが大切なのではないかと考えている。

6 夢と防災

(1) 私の夢

私の将来の夢は、インテリアコーディネーターになることだ。私がこの夢を目指そうと思ったきっかけは、2つある。1つ目は、私は小さいころ、家の中で自分の部屋がなくて、ずっとほしがっていた。そして、自分の部屋ができてから、机の位置や、ベッドの位置を自分で決め、自分の理想の部屋にすることが好きだった。家具を見に行った時に、あれが欲しいなど、よく言っていたのを覚えている。今も、暇なときには、ネットでいろんな人のお部屋紹介を見たりして、私もこんな部屋にしたい、こんな家具がほしいなどとよく考えている。このように、自分の理想の部屋にするために、家具を見たり、選んだりする時間が好きだ。そのため、インテリアコーディネーターに興味を持った。2つ目は、私はドラマが好きで、ドラマの中で、インテリアコーディネーターの役をしているのを見て、具体的にどんなことをする仕事なのかを知ることができ、さらに、なりたいという気持ちが強くなった。この2つの理由から、私は、この夢を目指すようになった。

(2) 防災との関わり

インテリアコーディネーターが、防災に関わってくる場面は、家具や小物などの商品を選ぶ時だ。そして、私が防災を広めていくにあたって、防災と聞いてどんなイメージをもっているのかを、身近な人たちに聞いてみた。すると、防災はハードなイメージで、準備したり用意したりするのが大変そうだ、という風に思っている人が多いことが分かった。私自身も、防災についてあまり知らなかったときは、何からしたらいいか分からなかったし、正直面倒くさいという思いもあった。そのことから、いつかやろうと思っていても、一向に手がつけられていない人が多いことが分かった。そこで私が広げていきたいのが、「美防災」だ。美防災と聞いてもわからない人が多いだろう。そこで、美防災について説明しておこう。美防災とは、防災とインテリアを結び付け、住まいの防災性を高めるとともに、生活空間に美しさと安全性を組み込んで、心豊かに暮らそうというライフスタイルのことだ。と聞いても、あまりよくわからないだろう。わかりやすく説明するために例を2つ紹介していこうと思う。まず、1つ目の例として、照明だ。照明の中でも、地震の時に特に危険なのが、ペンダント照明だ。天井から吊り下げられている照明の事で、地震時に揺れやすく、ランプを覆っているところが、ガラスの物だと落ちたときに割れてしまいやすい。それを踏んでしまうことで二次災害にもつながってしまう。そのために、ペンダント照明の中でも、ランプを覆っているところを、紙でできたものを選ぶとか、より軽量なものにすることで、被害を少なくすることが出来る。2つ目の例として、アロマキャンドルだ。部屋に置いておくと、お洒落な小物に見えるだ

ろう。だが、常にインテリアとして置いておくと、停電が起きたときなど、もしもの時に慌てることなく、すぐに使うことが出来て部屋の明かりになる。また、消臭効果があるため、東日本大震災を経験された方からは、トイレやごみ置き周辺でとても役に立ったといわれている。さらに、香りのあるものだと、気持ちを安らかにすることができ、心の癒し効果にもなる。アロマキャンドルは誰でもすぐに用意することが出来て、置いておくだけで防災につながる。このように、インテリアコーディネーターとして、商品をセレクトするときに、美防災を意識してインテリアを選んでいこうと思う。また、照明や、アロマキャンドルのように、日常生活の中で防災の役割を果たすものは、まだまだ、必ずあると思う。私はそれを見つけていき、その防災の気づきを大切にしていこうと思う。そして、私はこのように、誰でも簡単に、お洒落に楽しく、日常に防災を取り入れることができる美防災を広めていきたいと思っている。

7 最後に

今回の語り継ぐを書くにあたって、両親からたくさん話を聞いて、より災害を身近に感じる事が出来た。さらに、改めて、阪神・淡路大震災は忘れてはならない、忘れられてはならない出来事だったのだと思った。私は、環境防災科で学ぶまでは、正直、災害や防災に全く興味がなかった。しかし、そんな私が忘れてはならない、語り継がなければならないと強く思ったのは、災害や防災を学んできて、そして、この語り継ぐを通して、語り継ぐという事は、過去の災害を風化させないため、同じ被害を繰り返さないためにもとても大切なことだと思ったからだ。

私たちは、大きな震災を経験していない世代だけれど、震災を経験した人と話すことのできる世代でもある。過去の震災を風化させないためにも、震災を経験された方の1人でも多くの方から、話を聞いて、それを、私たちの様に震災を経験していない世代に語り継いでいきたいと思います。そして、現在日本では、南海トラフ巨大地震がいつ起きてもおかしくない状況で、私たちが生きている間には必ず起こるだろう。そこで、今、私には何が出来るのか。阪神・淡路大震災や過去の災害について知り、話を聞き、過去の教訓から学んだことを語り継ぐことで、助かる命が増えるかもしれない。私は、1人でも多くの人の命が助かるように、大切な人を守るためにも、これからも語り継ぐことを決してやめることなく、防災について学び、防災に向き合っていこうと思う。

私の防災のかたち

木谷 太成

1 はじめに

阪神・淡路大震災から約 25 年が経った。現在の神戸の町は、震災があったことなど感じさせないほど、元の姿を取り戻している。私は、震災から 6 年後に生まれた。もちろんのこと、今まで阪神・淡路大震災のような大きな災害を経験したことがない。しかし、これから生きていく中で大きな災害を 1 度も経験せずに一生を終えることはないだろう。よって、私には震災による苦難を乗り越えた人々の思いを語り継いでいく必要がある。二度と同じ運命を繰り返さないように。

2 阪神・淡路大震災の概要

1995 年 1 月 17 日 午前 5 時 46 分 52 秒に兵庫県南部地震（直下型地震）発生

震源地：淡路島北部

震源の深さ：16 km

最大震度：震度 7

地震の規模：マグニチュード 7.3

主な死因：圧迫死（圧死、窒息死など）

死者：6,434 人

行方不明者：3 人

全壊：109,406 棟

半壊：144,274 棟

一部損壊：390,506 棟

〈国土交通省 気象庁より〉

3 母の話

震災当時、16 歳の高校生で北区にあるアパートに住んでいた。地震発生が早朝の 5 時だったこともあり、その時はいつものように自分の部屋で寝ていた。ふと目が覚めた途端、周りの景色がガタガタと大きく揺れだした。あまりに突然の出来事だったため、混乱して何が起きているか分からず、恐怖のあまり、そこから動くことができなかった。長く感じられた揺れの後、すぐに家族とアパートを出て駐車場に避難し、数時間もの間、車の中で過ごした。その後、避難所に行くことはなかった。少し時間が経って、アパートに戻ると、家の中は食器や窓ガラスが飛び散り、物が散乱した状態だった。しかし、棚に物を積んではいなかったの、落下物は少なかったのが唯一の救いだった。電気、ガス、水道がすべて止まっていたが、すぐに電気が復旧したので、テレビで状況を確認した。また、ガスが止まっていたので、親戚の家のお風呂を借りた。当時は学生だったため、学校に行かなくてはならなかったが、地震の影響で電車が走ることができず、学校は約 1 か月間、休校になった。そして、アパートは半壊になったため、すぐに引っ越しをした。

震災当時、母はかなり老朽化したアパートに住んでいて、地震が発生した瞬間にアパートの住民は一斉に外に避難したと聞いた。しかし、地震が発生した時に、周りの住民の人達は全く避難している気配がなく、アパートの住民だけが避難している状態だった。街中大騒ぎだと思っていた私の考えとは違い、この地域ではそれほど大きな騒ぎにはならなかったようだ。

4 話を聞いて

私は阪神・淡路大震災を経験していない。また、大きな災害の被害にもあったことがない。母の話を聴くと震災が本当にあったことなのかと信じられずに疑ってしまうほど阪神・淡路大震災は大きな災害だった。私たちは阪神・淡路大震災の内容を授業などで学んでいるから知っていたが、実際に被害にあった人から聴くと、その時の地震の存在がどれほど大きなもので強大だったのかが伝わってくる。その恐ろしい環境の中で母は生きていたと考ええると、奇跡としか思えない。そして、今まで生きてくれたことに感謝している。

母の話で特に気になったことは、大地震が起こったのにも関わらず、アパートの住民しか避難していなかったことだ。私自身は地震が発生したら避難することが当たり前になっているので、少し驚いた

が、阪神・淡路大震災当時はボランティアどころか防災という言葉すら日本にはなかったも同然の状態だったのだ。避難行動が疎かになることは仕方がないことなのかもしれない。しかし、このような状況は阪神・淡路大震災にだけのことではない。東日本大震災でも、同じように避難をせずに家に引きとどまった人が多くいる。その結果、自宅で待機していた人達が皆、津波に飲み込まれた。2018年に発生した広島での豪雨による土砂災害は、垂直避難をしていた住民がいる民家を土砂が飲み込んだ。過去に何度も起こっている事例が、まるで今までなかったかのように繰り返されている。現在は、少しずつ防災が発展してきているが、まだまだ災害を自分とは関係ないものだと思っている人がいる。このままでは、また同じ被害を繰り返してしまう。したがって、私たちは防災を広めていくべきだと感じた。

母の話で、震災が起こった時に長田区に住んでいる友達の安否を確認するため、家を回った柔道部の先輩の話を聞いた。私は実際にそんなことをする人がいるのかと驚いた。彼は自分が危険な状態であっても、友達の安否確認を優先できる心は尊敬する。しかし、長田区は震災当時かなり大きな被害を受けた地域で、その街の中を彼一人で回することは危険である。この行動のすべてが良かったとは思えない。もしかすると、突然の出来事でパニック状態になり、後先を考えずに行動してしまった可能性があるが、二次災害に対する意識が欠けているようにも捉えられる。

1995年には兵庫県南部地震。そして、2011年には東北地方太平洋沖地震が起こった。この地震では、津波が発生したこともあり被害が大きかった。次に襲ってくる巨大地震は、南海トラフ大地震である可能性が高い。南海トラフ地震は、過去の災害と比べてもかなり大きな被害が出ると予想されている。日本はさまざまな災害を通して教訓を得ているが、なかなか活かされている場が少ない。しかし、教訓を活かしていくことが減災をするのに不可欠である。したがって、それを知っている私たちが行動するしかない。そのためには、自分が環境防災科として学んできたことを活かしていくべきだと感じた。

5 環境防災科

環境防災科を知る前は、阪神・淡路大震災のことや防災のことには全く興味がなかったが、なんとなく消防士になりたいという思いはあった。そこで、消防士になるためにはどんな高校に入るべきだろうかと考え、防災について学べる高校を探した。そして見つけたのが舞子高校の環境防災科であった。それから、環境防災科を進路に考えるようになった。その時から、私にとって環境防災科は憧れだった。災害時に率先してボランティアに参加する積極性やチームをまとめるリーダーシップは、私にはない全てが環境防災科の生徒にはあるように感じた。私は、不合格になることはやむを得ないと覚悟して環境防災科を受験した。結果は合格という嬉しいものだった。しかし、私は複雑な心情だった。合格したことは嬉しかったが、発表が苦手であがり症、人見知りなど性格に難がある人間で、合格と聞いた時は受験したことに少し後悔していた。実際に入学してみると、環境防災科の生徒は私の想像していたものとは程遠いものだった。大人しい人が多いと想像していたが、実際は明るい人が多くて、自分とは真反対の性格だったため、私はこの場所にいることに引け目を感じた。入学当初、先生は「コミュニケーション能力は自然とつく。」と言われた。私は「そんなことあるわけないだろ。」と思っていたが、ボランティアや防災の授業を自分なりに学んでいくと、自然と人と会話することへの抵抗がなくなった。初めて地域の方との会話が長く続いたときは、嬉しかったという気持ちもあったが、それ以上に話すことを楽しく感じた。また、ボランティアの活動を通していろいろな知識を身につけることができた。自分とは程遠くて、なることは不可能だと考えていたものに近づいている気がした。今では、環境防災科に入学していることを後悔ではなく、誇りであると私は思っている。

6 ボランティア

私は環境防災科に入学してから、多くのボランティアに参加した。地域のお祭りや出前授業、被災地訪問など、どれも私にとって未知だった。環境防災科に入る以前、ボランティアとは無縁の生活をしていた。災害に関するニュースが放送されていても他人事のように流して、真剣に考えたことなどほとんどなかった。東日本大震災の時も同じだった。私が学校から家に帰ってきて、テレビをつけると津波によって住宅が流されていく映像が放送されていた。私は客観的にしかその映像を見ることができず、ただただ波が街を襲っていると思った。それから6年後、私は環境防災科に入学し、初めて東北訪問に参加した。最初、東北に行って体力的なボランティアをするのだと思っていたが、実際は地震や津波を経験した被災者の方の話を聞くだけだった。私が思っていたものと違う内容だったので、「本当にこれがボランティアになるのだろうか。」と不審に思った。しかし、先生は「被災者の皆さんの話を聞くことがボランティアになる。そして、聞いた話を語り継ぐことが私たちの使命だ。」と言い、私は驚かされた。そして、

東北では、あおい地区、大川小学校など様々な場所を訪れ、震災について学んだ。大川小学校では、佐藤先生のお話を聴いた。大川小学校は、大川小学校の悲劇という児童や教師のほとんどの方が避難することができず、津波に飲まれ亡くなった出来事があった場所で、佐藤先生の子供は亡くなった児童の1人だったそうだ。私はその話を聴いて、思わず涙がこぼれた。これほど大変な思いしているときに私は何をしていたのだろうと思い返すと、自分の無関心さに怒りが込みあげてきた。また、あおい地区に戻ってからは、元石巻西高校の校長を務めていた齋藤先生から震災当時の学校の様子などの話を聴いた。特に印象に残っているのは、復興へ導いたのは大人ではなく子供だったということだ。映像で見た同じ年頃の学生が復興に向かって活動している姿は、私とは大きな差を感じるほど立派な存在に見えた。私もいつかこのような人になりたいと思った。東北訪問は私に人間の可能性を教えてくれた。どんなに苦しい状況になっても最後は必ず復活できるということを東北の方々は証明してくれているような気がした。

募金活動にも参加した。このボランティアは自らの意思ではなく、部活動で参加することになったので仕方なく取り組むことにした。内容は垂水駅周辺で2時間ほど募金の協力と呼びかけるものだった。初めて募金活動に参加したときは、こんな高校生に果たして協力してくれるものなのだろうかと不安に思っていたが、活動を始めてみると、いろんな方々が募金に協力してくれた。中には、「舞子高校だから。」という理由で協力してくれた方もいて、私はとても嬉しい気持ちになった。それから、募金のボランティアの募集があると積極的に参加するようにしている。このように、地域の方々が舞子高校を信頼して募金に協力してくれる理由は、今まで環境防災科で活動してきた先輩方のおかげである。なぜそのようなことが言えるのかというと、ある募金のボランティアで私たちは段取りがうまく進まず、先生に叱られてしまった。その時に、先生から「なぜ募金の活動場所が垂水駅前なのか知っているか。」と聞かれたが、私たちは全く答えられなかった。そして、先生から、駅の前は財布を取り出す場面が多いから募金をしてくれやすいことを教わった。今まで先輩方が試行錯誤して考えた末に、今の募金のかたちになっていることを聴いて驚いた。この場所にそんな意味があったなんて考えもしなかった。私がもともとあったかのように活動してきたボランティアは、これまでの努力と経験からきていると、このときに初めて気づかされた。それから、私は今まで活動してきた先輩方の努力を無駄にしないように頑張っていこうと決意した。そして、今度は私たちが尊敬されるような活動をしたいと思っている。

時が経つにつれ、ボランティアに参加することを拒んでいた私は、ボランティアに積極的に参加するようになった。ボランティアに参加して達成感などを得られるものも多く、今まで参加して後悔したことはない。一方で、ボランティアに参加して失敗することも多々あり、少し気が落ち込む日もあったが、成功して得られるものもあれば失敗して得られるものもあると学んだ。もし私が東北訪問や募金活動に参加していなかったら、様々な経験をする機会がなかっただろうと自分自身で感じている。ボランティアは私の思いを変えてくれた。私も誰かの心に届くような活動したいと考えている。

7 私にできること

何か私にできることはあるのだろうか。ボランティアや防災の授業を経て知識を積み重ねてきた。普通に生活している人よりも防災について詳しい自信はある。しかし、実際に私が社会に出たときに何ができるのだろうか。今は学校側が計画したボランティアに参加しているだけで、私が企画しているわけでもなく、すべて最初から用意されている状態にあるから、ボランティアは楽しいと思えているのかもしれない。社会に進出したら、すべて無の状態、つまり自分自身の力で始めなければならない。その状態に陥った私は、またボランティアを楽しみと思えるだろうか。残念ながら、今の私は楽しいと思える自信がない。現在、舞子高校で実施されているボランティアは、受け入れる側と活動する側の長年の関わりがあってこそ続いているものである。もし個人で参加するとなったら、なかなか厳しいものがある。しかし、私はいつか個人でのボランティア参加に挑戦してみようと思っている。すべて自分で計画してボランティアをすることで、何か得られるものがあるのかもしれない。また、現地に実際に行って活動することで、成功や失敗を経験できるだろうと思っている。

私には挑戦し、経験することができる。もちろん、ボランティアは自分の経験値を獲得することが目的ではない。被災者のために活動することが目的である。しかし、自分の経験としてしっかりと蓄えておくべきだと私は考える。なぜなら、ボランティアは1回目よりも2回目、2回目よりも3回目とボランティアの活動を充実させることで、被災者のストレスを軽減することができるからである。ボランティアは「してあげる」のではなく「させていただく」という形で成り立っており、被災者をサポートすることが目的であるため、ボランティア活動がお節介にならないように相手のことを考えて行動することが大切である。

8 未来に向かって

日本は常に災害と切っても切れない関係にある国である。そんな国で生きていくにはどうしたらいいのだろうか。そもそもこの国に絶対に安全であると断言できる場所は存在しない。その上、現在は超高齢社会に突入している。運動神経がいいとか、人間の身体能力で何とかなるほど災害は甘くない。ならば、生き残る方法は1つしかない。それは、頭を使うことだ。人間の脳は、記憶能力もあれば、学習能力もある。これだけのことができれば、災害に対抗できるはずである。しかし、もし今、地震が起きれば、そう手際よく災害という突如現れた脅威に対応できないだろう。それはなぜか。それは、災害に興味がないからである。災害を自分とは関係がないと勝手に捉えているからである。人は記憶能力などの優秀な機能があっても、その人の興味や関心、覚えておこうとする意志がなければ、いずれ風化してしまうものである。災害の場合も同じだ。災害の教訓を次の災害に活かそうとする意志がなければ、その教訓を記憶のうちに残しておくことは難しくなる。そして、また同じような被害が発生する。この繰り返しになるだろう。したがって、このような被害の繰り返しを止めるには、災害について知ることが大切である。災害について知るといっても、どうすれば災害に人々が関心をもってくれるのだろうか。人にはそれぞれの生活があり、時間は有限である。仕事や育児など、それぞれにしなければならないことがたくさんある。災害を学ぶことに時間を割けるほどの余裕がない人がほとんどだろう。だからと言って、見て見ぬふりをするわけにはいかない。時間が経てば経つほど、災害を知らない人が増えていき、震災は風化していく。もし、風化させないようにする対策を何も考えず、世代が変わり、災害が発生してしまったら、また同じ被害に遭う可能性が高くなる。それはあってはならないことだ。ならば、私たちがすべきことは人々に災害の本当の姿を広めることだと思う。広めることは簡単なことではない。関心がないことや時間がないことなど、様々な課題がある。しかし、それらを乗り越えなければ未来への道は開けない。

9 最後に

語り継ぐことは簡単なことではない。語り継ぐ者と語り継がれる者の互いの意思疎通がなければ長くは続かない。もしかすると、私の「語り継ぐ」も誰にも届かないままなくなるかもしれない。しかし、語り継いでいくことを私たちは諦めてはいけない。そこでやめてしまえば、震災の歴史は風化してしまい、未来の世代の人たちは過去の経験をこれからの防災に活かすチャンスすら得ることができない。したがって、私たちは語り継いでいく必要がある。風化を防ぐことはこれからの世代の命をつなぐことだ。

「過去から学び、私たちができること」

北村 達也

1 はじめに

私は 2001 年に神戸市内で生まれた。阪神・淡路大震災は小学校の授業で初めて知った。当時の私は、こんな大地震が地元の神戸で本当に起こったのか、ただの作り話なのではないかと懐疑的だった。記憶の限りでは、近所に復旧、復興していない地域や建物はなかったし、休日に出かけたときに車窓から見た神戸の景色にも震災によるものと思われる傷跡はなかった。しかし、母に阪神・淡路大震災は本当に起こったのかと聞くと、顔色を変えて当時の話をしてくれた。同時に、阪神・淡路大震災は本当に起こったのだと確信した。

阪神・淡路大震災を経験していない私にとって、当時の凄惨な光景や心情は想像することしかできない。しかし、体験者から話を聞いて自分なりに解釈、想像し、後世に「語り継ぐ」ことはできる。未経験者だからこそ語り継げることも少なからずあると思う。そう信じたい。

2 母の体験談

母は当時、兵庫県明石市に住んでいた。1月16日、午後6時頃、学校が終わり、自宅までの帰路の途中、妙に思った。普段、この時間帯にはあまり鳴かないカラスや犬が、大声で絶え間なく鳴いていたからだ。さらに、夜にはこのあたりでは珍しい震度2〜3ほどの地震が発生した。いつもとは明らかに違うまわりの様子に、何か不吉なことが起こりそうな予感がした。

1月17日、午前5時頃、テスト勉強のためいつもより早く起床した。午前5時46分、テスト勉強をしていると、「ドンッ！！」という下から突き上げられるような重い衝撃を感じた。その直後、まともに立てないほどの激しい揺れに襲われた。なにがどうなっているのか分からないまま、ひとまず布団の中に逃げ込んだ。1分ほど続いた揺れの間、布団の中でただただ恐怖を感じていた。揺れが収まって布団から出た後、これは地震だと理解した。「また同じような揺れが来るかもしれない」という恐怖から部屋を出る勇気はでなかった。というより、体が驚きのあまり動かなくなった。頭の中がパニックになり、自分がなにをすべきか分からなかったが、とりあえず家族の名前を叫んだ。すぐに「大丈夫か！？」という両親の声が聞こえ、安堵した。父が家の中の安全を一通り確認した後、部屋にスリッパを持ってきてくれた。ようやく部屋から出ることができた。地震発生から部屋を出るまでの間、どれほどの時間が経過していたのか定かではない。

部屋を出て1階に下りた後、両親の顔を見て今まで感じたことの無い深い安堵を覚えた。リビングを見渡すと、食器が食器棚の中で数個倒れていることと、小さいタンスが倒れていること以外に目立った損害は無かった。母から「幸いにも止まったのは水道だけで、ガスや電気に問題は無いから安心して。」と伝えられたので、すぐさま学校の友人に電話をかけた。そもそも繋がらないのではないかと心配だったが、電話をかけた友人は皆繋がった。「大丈夫やった？無事？」と聞いて、「うん、大丈夫やった。そっちも大丈夫やった？」と返事が返ってくることにとっても安心した。友人にひと通り電話した後、学校へ連絡した。地震で忘れそうになったが、今日はテストの日だ。学校に電話が繋がり、「今日、学校はありますか？」と尋ねた。担当の先生から、「交通機関に甚大な被害が出ているとの情報が入ったので、とりあえず今日は休校です。」といわれた。電話越しに聞こえた慌ただしい先生たちの声とダイヤル音に、「大変なことになっている」と改めて実感した。その後、父は可能ならば会社に来てくれという連絡を受け、自転車で神戸にある会社まで向かった。父を見送った後、母と妹とともに近所の人や近所に住む幼馴染の安否確認を行った。幸いなことに、皆けがもなく無事だった。家に帰りテレビをつけると、そこには神戸のまちが壊滅している光景が映った。どのチャンネルに切り替えても光景は同じだった。この時点で死者・行方不明者は合わせて300人程度だったが、日を重ねるにつれてその人数が急激に増えていくことにショックを受けた。

3 話を聞いて

当時を振り返って、母は「あまり覚えていない」と初めは言っていたが、震災前日の話から順を追って話していくうちに、当時のことを鮮明に思い出したようだった。ここまで大きな地震だけでなく、他の大きな自然災害を経験していなかったのに、当時の母、祖母、祖父、叔母の対応は素晴らしかったと思う。たいていの人は、大きな自然災害等の緊急事態に遭遇していない限り、取り乱したり、誤った判断を下し

てしまったりしてもおかしくない。にも関わらず、祖母は揺れが収まった直後にガスの栓が閉まっていることを確認した。その後、電気、水道の確認を行い、今できることを即座に判断した。祖父は、会社に行く際、道路の混雑、車両の通行が困難であることを予想して、片道約30kmもある道のりを自転車で行くことを決断した。母と叔母は、身の周りの人の安否確認に徹した。あれほどの地震の直後にここまで素早く、正確に行動できたことに衝撃を受けた。しかし、今では緊急対応の基本となる「避難所等への避難」はしなかったようだ。もしあの日、熊本地震のような余震が来ていたら、命は無かったかもしれない。話を聞いて初めて知った当時の様子を思い浮かべると、胸が締め付けられる思いになる。「もしあの時、震源地が少しでも西だったとしたら」「もしあの時、ガスの栓が閉まっていなかったら」と考えればきりが無いが、家族全員が無事でけがを負うこともなく、被災を免れることができて心から良かったと思う。

4 環境防災科

(1) 入学したきっかけ

私は中学3年生の頃、将来の夢もなく、行きたい高校も特に無かった。幸いなことに、それなりの成績はあったので進学先の選択肢は多かった。各校のオープンハイスクールにも積極的に赴いたが、2学期になっても行きたい高校が見つからなかった。そんなある日、たまたまテレビでとある高校生が地域の防災指導をしている特集を見た。高校生が自信に満ち溢れた態度で、大人を相手に地域防災について議論している姿に感動した。今でもあの感動は忘れられない。元々、防災には小学生の頃から興味があったので、「舞子高校 環境防災科」という名前は聞いたことがあった。しかし、私の通っていた中学校からは舞子高校に進学する生徒が少なく（環境防災科に進学する生徒は、年に1人いるかないか程度だった。）環境防災科に関する情報が極端に少なかったため、行くべきかどうか迷っていた。中学校の先生に相談すると、「成績に問題はないし、少しでも興味のある学校なら行くべきだと思う。」という助言をもらい、2学期の後半という遅めの時期に環境防災科へ進学しようという意志を固めた。

(2) 入学して

合格発表の日、自分が合格したことを確認したとき、嬉しい気持ちはもちろんあったが、それに勝るほどの不安があった。私が通っていた中学校からは私しかここに進学しておらず、頼れる存在がいなかった。この学科を受けることを遅めの時期に決めたことと、震災を経験したことが無かったため、災害や防災に対する意識や知識も十分にもっているわけではなかった。学校が始まり、環境防災科科目の授業を受けだしたときには、もうすでにボランティア活動の参加希望を出している者もいた。そのため、自分は遅れをとっているのではないかと心配になり、積極的にボランティア活動に参加し始め、学校の勉強も妥協することをやめた。環境防災科科目の授業も初めは辛かった。聞いたことのない専門用語が次々と出てくるし、常に自分の意見を考えておかないと、当てられた時に困ることが多々あったからだ。部活動をしながらの学校生活だったので、疲労やストレスも溜まるし、防災のことを考える余裕がないときもあった。

初めて参加したボランティアが「ふれあい春祭り」という地域のお祭りのお手伝いをさせていただく活動だった。このお祭りでは、単に出店をしたりするだけではなく、阪神・淡路大震災当時に撮影された写真の展示ブースが開かれたり、障がいのある方々や高齢の方々を招いて交流する機会を設けたりなど、内容は多岐に渡るものだった。しかし、改めて振り返ってみると、当時の私はボランティアというものがどういうものなのか理解していなかった。お祭りのお手伝いをさせていただくということもあって、どこかお祭り気分ボランティア活動を楽しんでいた。今考えれば、ボランティア活動において良くない心構えだったが、このボランティアを通して人々のあたたかさややりがいを感じ、ボランティア活動をする上での心構えも先輩方から学ぶことができた。震災を経験された参加者の方々から、貴重な体験談や知識を共有することができた。これがきっかけで、防災の奥深さを知り、学校の授業や講義で教わった知識を自分の家族や友達に共有しようとする意識が生まれた。

5 自分の意見を持ち、発信していくこと

人は皆、日々直面する様々な問題や国内問題、国際問題に対して何かしらの意見を持つべきだと思う。グローバル化が進み、スマートフォン等の通信機器が発達した情報社会において、世界中の情報を知ることが容易になった。現代において、それらの問題に対して何の意見も持たないようであれば、危機感を持つべきだ。しかも、単に自分の意見を持つだけでは意味がない。それを発信することで初めて意味を成すと思う。しかし、自分の意見を発信するということは、非常に勇気の要ることだ。今でこそ、SNSを活用して情報を発信していくことは誰にでも可能になったが、同時に相応の責任が伴う。その問題の背景、

原因を詳しく理解していない状態で、その場で思いついた意見を発信することは無責任だ。自分の発信した無責任な意見が大きな問題を招き、俗に言う「炎上」をしてしまう可能性もある。そういった意味で、自分の意見を発信することは非常に難しいといえる。だが、だからといって、目に映る様々な問題から目を背けるのも無責任だ。では、どうすればいいのか。私なりに考えた。先程から「発信」という言葉を多用しているが、「発信」は情報媒体を通して世間に情報や自分の意見、考えを知らしめることだけではないと思う。例えば、「家族に今日あった出来事を話す」ということも「発信」であるし、誰かに勉強を教えるなどして、知識を共有することも「発信」だ。したがって、自分の意見を発信するときは、まず初めに身近な人と話して自分の意見を共有することから始めれば良いと思う。私自身、日々の会話の中に少しずつ「発信」を加えていくことによって、物事を批判的に考える力がつき、コミュニケーション能力が向上した。この2つが身についてくると、自然と自分に自信が持てるようになる。人前で話す際もほとんど緊張しなくなったし、知らない人と関わる機会でも自分から積極的に話しかけることが簡単になった。そして、自分の意見に責任が持てると確信し、もっと多くの人に知ってほしい、特定の人物に届けたいと強く思うのであれば、SNSを活用するなどして自分の意見を発信すると良いだろう。

自分の意見を持ち、発信していくことは非常に難しい(日本人は控えめな国民性からしてさらに難しい)が、異文化と関わる機会が多くなり、コミュニケーション能力が重要視される現代において最も必要な能力の1つといえるだろう。

6 私たちができる防災

ここまでの話を踏まえて、私たちができる防災を考えた。それは、災害経験の有無に関わらず、インターネットやSNS等の情報網を駆使して防災(災害や事件、事故も含む)の知識や情報、経験を共有することだ。災害経験者であれば、災害時の光景や心境、またはその災害によって得た知識や、取り組んでいた災害対策の欠点などを共有する。災害未経験者ならば、取り組んでいる災害対策(防災意識)、防災の知識や情報、災害を報道等で客観的に観て気がついたことや感じたことなどを共有する。インターネットやSNS等を活用する方法だから、誰にでもできる方法で、手間もかからない上にお金もかからない。また、1対1でこれらを共有することもできれば、グループを形成して2人以上で共有することもでき、公開して不特定多数の人々に共有することもできる。しかし、先ほど述べたように、間違ったことや曖昧なこと、でっち上げたことや一部の人に対しての配慮にかけた無責任なことは共有してはいけない。正しい使い方でこれらを共有することができれば、いつでも利用できるネット上の意見交換の場にもなり、緊急時の対応も格段に向上するだろう。

インターネットやSNS等を使わずに私たちができる防災として、自分が住んでいる家の近所に「どのような人」が「どこに」住んでいるのかを知り、地域で行われているイベントや避難訓練に積極的に参加する方法が挙げられる。インターネットやSNS等を活用する方法よりも簡単だ。これによって、災害時の「共助」がより正確に、かつ迅速に行うことができる。実際に、阪神・淡路大震災では震源地にほど近い淡路島の旧北淡町(現在の淡路市)で、震度7を記録し、多くの人が倒壊した建物の下に生き埋めになった。しかし、日頃から住民同士がお互いのことをよく知っていたため、いち早く住民で組織された消防団は地域住民と協力し、瓦礫に埋もれている人を速やかに救助することができた。その後、警察や広域消防と協力し、約300人もの人命を救った。この他にも、阪神・淡路大震災では同じような事例がいくつもあった。日常生活における人々の交流は、普段の暮らしを豊かにするだけでなく、災害時に人の命を救う上で大きな力を発揮する。

7 最後に

阪神・淡路大震災から25年。まちの風景、建物、人々。そのすべてが被災前、被災直後よりも良くなり、明るくなって現在の神戸が形成されている。県政150周年を迎え、神戸港開港も120周年を迎えた。これからさらに発展し、より便利な美しいまちになっていくことは目覚ましいことである。しかし、それが必ずしも良いことばかりというわけではない。悪い点も帯びている。それは、阪神・淡路大震災が忘れ去られてしまうかもしれないという点だ。忘れ去られることほど悲しいことはない。日本では頻繁に様々な地域で災害が起こり、近年では「南海トラフ巨大地震」の発生が想定されている。その対策が国をはじめとする機関で行われているが、何を基にして行われているのだろうか。それは、過去の災害だ。過去の災害から学んだ教訓や知識、経験が日本にはたくさんある。だからこそ、私たちは平和に生きることができている。それを私たちは理解しなければならない。

今回、「語り継ぐ」を作成するにあたって、母からの話を聞き、過去を振り返り、改めて阪神・淡路大

震災を忘れてはいけないと強く思った。被災したすべての方々がそれぞれ思うことがあり、今もなお様々な感情が入り混じった思いを抱えている人がたくさんいること、それがどの災害にもあるということを忘れてはいけない。阪神・淡路大震災を「悲惨な出来事」だけで終わらせず、未来に語り継いでいく使命が私たちにはある。私はその使命を全うし、これから続いていく人生を生きていこうと思う。

災害大国である日本で生きていくため、また大切な人を守るために、この3年間、環境防災科で学んだ多種多様な知識を、これから進む先々の場所で自分なりに広めていこうと思う。どんな状況におかれていても、その場において最善の行動ができるように、これからも防災に向き合っていく。

この「語り継ぐ」を通して少しでも防災に興味を持ってくれるとともに、災害だけにとどまらず、過去から学び、今の自分ができることは何かを考えるきっかけになってくれたら幸いだ。社会の中に必ず存在する盲点を見つけ、そこに着目し、これまでの人生で身につけた力を十分に発揮し、応用して未災地から被災地へ、被災地から未災地へつなげていってほしい。そして、「語り継ぐ」というサイクルが途切れることなく、遥か未来まで続いていくことを心から願っている。

語り継ぐ

木下 龍斗

1 はじめに

1995年1月17日5時46分、阪神・淡路大震災が発生。その6年後の2001年に私は生まれた。もちろん、阪神・淡路大震災を経験していない世代の1人だ。また、私の生まれた京都府福知山市は神戸市から遠く、震度4程度の地震で大きな被害は全くなかった。そのため、小さいころから震災のことを聞くことはあまりなく、防災の知識や関心も神戸の人に比べると低かった。

そんなとき、小学校卒業を機に神戸へ引っ越すことになった。中学校の友人も先生も防災の知識や関心が高く、とても驚いた。「しあわせはこべるように」という歌にもなっていて、阪神・淡路大震災を風化させてはならない、という思いを強く感じた。私も神戸に育ててもらった分、防災を学び、阪神・淡路大震災を伝えていかなければならないと感じた。

ここでは、環境防災科16期生のみんなとは違う視点の震災も加えて語り継いでいく。

2 母の話

母は当時、京都府福知山市の一戸建てに住んでいた。1月16日、普段と変わらない生活を送り、眠りについていた。1月17日5時46分ごろ、いきなり「ゴゴゴゴゴゴ」という轟音が響きわたり、そこで目が覚めた。縦揺れがひどく、横揺れもきたため身動きはとてもしゃないがとれなかった。実際の揺れは震度4だったという。また、感覚では4～5分ほどの揺れに感じたが、実際は50秒ぐらいだったという。隣の部屋では娘（私からすると姉）が寝ていたので様子を見に行くと、普通に寝ていた。起こしてみても変わった様子はなく、言ってみれば姉も経験していないようなものだ。リビングに向かってみると、食器棚など家具は倒れていなかった。停電や断水などライフラインに被害が及ぶことはなく、被害はゼロだった。

7時頃、テレビをつけてみると神戸の状況が映し出されていた。長田の大火事や阪神高速道路が倒れている映像など、とてもじゃないが隣の県で起こっているとは思ってもいなかった。当時、月の1回ほどだが、神戸に遊びに行っていた。そのよく知る町が火の海、がれきの山と化し、怒号や悲鳴で溢れる映像を見て大きなショックを受けた。関西では大きな地震などは来ないと考えられていたため、本当に驚いた。何かできることはないか考えた。現地に行くのはリスクが高すぎるので募金活動を行った。

3 私の住んでいるマンションの家主の話

(1) その瞬間

震災当日の明け方、トイレに行きたくなって、目を覚ました。トイレを済まし、もう一度眠ろうとしていたところ、突然、窓ガラスが「カタカタ」と小さく揺れ始めた。それと同時に地面の下から物凄い轟音とともに、強い揺れが襲ってきた。その時、体は上下左右に吹き飛ばされ何度か宙に浮いた気がした。「うわあ!」と、無意識に叫んでいた。

これはとてつもない地震だ。家が潰れてこのまま死んでしまうと思った。タンスが倒れてくると思い、隣に寝ていた妻の上に覆い被さったが、幸い、タンスは違う方向に倒れた。家の中の家具や食器、電化製品などが壊れていく音が聞こえていたと思うが、そのあたりの記憶が曖昧であり覚えていない。なぜか、シーンと何も聞こえない時間の方が長かった。引き続き同じような揺れの大きさの余震が何度も来た。

(2) その後の行動

長男の部屋に向かいながら名前を呼ぶが、返ってこない。部屋に向かう途中で食器棚が倒れ、ガラスが散乱し、斜めになった棚が邪魔してなかなか長男の元に向かえない。もう一度大声で呼ぶと「大丈夫! こっちは無事だよ!」という返事が聞こえた。隣の部屋で寝ていた長女も、キャスター付きのベッドのおかげで横揺れと同じサイクルで揺れたため、落下物の下敷きにならず、無事に済んだ。その後、父の様子を見に1階に行くと、幸いにも本棚がベッドで斜めに止まり、助かった。」

(3) 状況の理解

太陽が昇ってきて、家の中が見えてきた。ガラスの破片がどの部屋にも飛び散っているため、しばらくの間は靴を履いておこうと言った。ラジオがすぐに見つかり、スイッチを入れたが、最初のうちは大阪でかなり大きな地震がありましたという報道で、神戸のことは何も触れられなかった。窓から見る限り、近所も倒れている家はなく、瓦が落ちていたり、少し傾いたりしている家があった。近所に住む弟が様子を

見に来てくれたため、倒れた家具を起こす作業をした。停電で暖房が使えなかったため、パジャマの上に服を着こんだが、結局1日をそのままの姿で過ごした。

まだ神戸全体が、淡路、阪神全体が被害を受けていることを知らず、会社へ後片付けため1日休みを貰おうと連絡しようとしたが、電話が繋がらなかった。1週間ほどが経ち、午前11時頃に壊れたと思っていた電話の音が突然鳴った。東京に住んでいる姉からだった。全員無事だということを伝えた。夕方、突然部屋に電気が灯った。ラジオで神戸市全体に被害が出ていることは知っていたが、テレビをつけて報道を見ると、長田の火事や三宮のビルなどが倒壊している様子が映っていて、なんとも言えなかった。自分がよく知っている場所や建物が次々映るが、壊れているか、傾いているか、燃えているかのどれかだった。しかし、それはそれだった。自分たちの生活をどうするか頭に浮かばなかった。

(4) 今、思うこと

- ・理不尽なことはどうしようもなく起こり得る。
- ・日頃から近所の人と付き合っておくと、いざという時に助け合える。
- ・たくさんの方から安否確認の電話があり、嬉しかった。
- ・整地されて綺麗になっても、慣れ親しんだ前のまちとは何かが違う。
- ・こういう経験をして、人間は段々忘れて生きていく。

4 環境防災科

(1) 入学したきっかけ

「はじめに」でも言ったが、私は小学校まで京都府に住んでいた。小学校卒業を機に神戸へ引っ越し、中学3年間硬式野球に打ち込んだ。大晦日と元旦以外はずっと練習で休みもなかったため、あまり勉強をしていなかった。高校進学も野球でいくことが9割決まった矢先に不幸が起きた。祖父が倒れたため、野球で進学するのを諦めざるを得ない状況になった。この時すでに中学3年の10月、振り出しに戻った。クラスの皆は行きたい高校も決まっていた、受験勉強もスタートしていた。どんな高校があるのか全く知らないし、どこにあるのかも全く知らなかった。この舞子高校のことも。

そこで、信頼を寄せていた先生に何度も相談した。まず将来何がしたいかを聞かれた。特にその頃は夢もなく、ただぼんやり考えていた。この有り余る体力を活かせる職業はなんだろうか、その時に警察官が思いついた。中学校の前に交番があり、毎朝の挨拶など関わる機会が多いのもあった。よく調べてみると白バイ隊員や災害救助など、どれもかっこよく目に映った。先生に相談してみると、「いいじゃないか、体力もあるし性格にも合っていると思う」と言われ、数日後に何校か合っていそうな高校を提示してもらった。「舞子高校環境防災科」が目にとまった。幸いなことに、オープンハイスクールはまだだったので、参加することにした。説明などを聞いていくうちに、だんだんこの高校で防災を学んで将来に活かしたいと思い、目指すきっかけとなった。

(2) 入学してから

合格したとき、嬉しい反面、不安もあった。勉強についていけるのかな、友達話できるのかな、様々な不安があったが、1番大きいのは防災に対する意識の差だ。京都は神戸と違い、あまりしっかりと震災学習を受けなかった。そのため、皆よりも意識が低いのではないかと考えていた。

いざ入学してみるとそんなことはなく、皆スタートラインは同じで友達もすぐにできた。1年生の頃の「災害と人間」では、たくさんの講師の方が来て下さり、防災や減災に関わる様々な知識を得ることができた。1番印象的だったのは、ひまわりおじさんこと、荒井勲さんの講義だ。まだ環境防災科に入ったばかりの私たちに、ボランティアとはなんぞや。ということを教えていただいた。自分に何ができるのか、お金はなくても知恵はタダ。常に想像力を働かせる。この教えは今でも大切なことで、これからも忘れずに大事にしたいと思う。この3年間でインプットするよりも、アウトプットすることが大切だと学んだ。得た知識を地域の皆さんに共有しようと思い、ブース展示があるボランティア活動に参加したり、出前授業などで小学生に教えたりした。伝えるときに1番大切なことは、間違った情報を教えないことだ。私たちが間違えた情報を教えたことによって、いざというときにそれを信じてしまい、重大な事故が起きたり大けがに繋がったりなど、最悪の場合死に至る可能性があるからだ。防災を伝えていくという大きな使命の裏側には、間違った情報を教えてはいけないという条件があるのを忘れないでほしい。特に、小さな子どもたちに教えるときには、どのようにすれば正しい情報を簡単に伝えることができるのか、しっかり考えることの大切さを学んだ。

5 東北訪問

環境防災科では様々な活動がある。募金活動やイベントの参加や、出前授業などがあるが、その中でも様々な人と関わることができる交流が好きだ。なぜなら、人見知りをほとんどせず、人と話をするのが好きだからだ。

そして、初めて東北の地に立った。ここで何を学べるのか、神戸に帰って何ができるのか、どのようにしてこの経験を生かせばいいのか、という不安があった。夜の10時頃に到着し、街並みを見渡した。道路も舗装され道幅も広く、建物も綺麗で、そこに震災の影は見当たらなかった。しかし、そんなことはない。次の日に分かる。大川小学校への訪問だ。この地域一帯はほとんど建物が無く、震災の被害を受けた校舎がそびえ立っていた。衝撃だった。自分が学んでいる防災は結局何の意味も持たないのではないか、という思いにまでなってしまった。窓ガラスは全て割れており、二階の天井にまで津波が押し寄せ、連絡通路もなぎ倒されていた。そんな時、あるものが目に映り一枚の写真を撮った。それは、大川小学校の校庭に生えていたヒマワリだ。とても力強く咲いていて、自分たちがやっていることは間違っていないし、負けないで。と言わんばかりの風格があった。この経験を必ず神戸に持ち帰ろうと思った。また、多賀城高校の人たちと町歩きをした。至る所に津波がここまで来たと分かる看板が設置されており、町全体が東日本大震災を風化させてはいけない、同じことを絶対に繰り返さないという強い意志を感じた。町の中心部に行くと、「町」と感じたが、建物の屋上から町を見渡したとき、あるものを見つけ驚いた。それは、東日本大震災で出来た巨大な瓦礫の山だ。それも1つだけではない。震災の痕跡がこんな町の中にあるのかと驚いた。その1つ1つに色んな人の色んな思い出が詰まっていると思うと、なんとも言えない気持ちになった。東日本大震災の被災地の現状について、テレビであまり報道されなくなったため、復興はわりと進んでいるのかと思っていたが、実際に行ってみるとそんなことはなく、問題は山積みだった。まずは、瓦礫の撤去問題。それに加え、沿岸部の方に行くと更地が目立ち、あまり町が賑わっていないような気がする。さらに、復興しても元の場所に帰りたくない。という人がたくさんいるということだ。しかし、他の県に行っても東日本大震災を経験した子供がいじめられて亡くなってしまうニュースを見た。これを見たとき、本当に行き場のない怒りがこみ上げた。どのようにすれば、風評被害を無くすことができるのか、また、どのようにすれば故郷へ帰れるのか、これは東北だけでなく日本全国で考えなければならない。また、他人事と捉えず、この経験や教訓を必ず活かさなければならない。

正直、東北訪問ではボランティアらしい活動はしていない。唯一したことと言えば、当時の状況を聞かせていただいたことだ。話を聞く＝ボランティアというのは、環境防災科以外の人はなかなかピンとこないだろう。私は何もできなくて不安だったところを「わざわざ遠くから来てくれてありがとう。話すことができてよかった」と声をかけていただいた。本当に驚いた。話を聞くことが誰かの役に立つなんて思いもしなかったからだ。その時、話すことで気分が落ち着いたり、すっきりしたりするのだと学んだ。東北の方には本当に温かく迎えてくださり、たくさんの知識やパワーをいただいた。私が東北訪問で感じたのは「つながり」の大切さだ。東北訪問は距離も遠く、時間や費用もかかるため、頻繁に実施できるようなものではない。では、どうやって関わっていくのか。募金活動に参加したり、東日本大震災を伝えたりなど、要するに忘れないことだと思う。一度、被災地に関わった以上、なんらかの形で一生関わっていきたいと考えている。

6 夢と防災

私の夢は警察官になることだ。そのきっかけは幼いころに行ったお祭りだ。私が迷子になっていたところ、警察官と一緒に親を探して助けてもらった。さらに、イベントで実施していた白バイに乗せてもらい、カッコよさ、大きさに感動し、そこから警察官っていいな、という憧れを抱き始めた。

そんな時、憧れから夢に変わる瞬間が訪れた。東日本大震災だ。東日本大震災では多くの警察官や自衛隊が殉職されたが、津波がもうそこまで迫っているのにもかかわらず、1人でも多くの市民を助けるために必死に任務を遂行している姿は今でも頭に残っていて、私もたくさんの人を救えるようになりたいと考えている。

私は、高校卒業で警察官になるのではなく、大学卒業でなろうと思っている。大学では、法学や政治学をメインに、心理学も学びたいと思っている。高校3年間で学んだ防災と、これから学ぶ、法学や心理学を合わせて、災害時に自分なりの支援をしたいと考えている。

7 最後に

今回「語り継ぐ」を執筆するにあたり、最初は不安だった。まず、これだけの量の文章を書いたことが

なく、自分の書きたいことが書けるのかが分からなかった。だが、色々な思いをここに詰めることができ、本当に良かったと思う。すべて、この3年間で関わってきた方々のおかげだと思う。これを機に家族で震災について話す機会も増えたので、これから来るとされている南海トラフ地震についても話し合うことができた。本当に些細なことでも話し合っていき、少しでも被害を抑えることができたらいと思う。また、普段は出会ったら挨拶する程度の関係の家主さんと震災のことも含め、様々なことを話すことができて良かった。この時、「私たち地域の大人は、地域の子供を見守っているよ」と言ってくださり、神戸に来て初めて、本当の意味での地域のつながりを感じた。

阪神・淡路大震災を経験した人はいずれいなくなる時がやってくる。その時に、何も知らない、過去にそんなことがあったのか。と教訓もなにもかも風化してしまえば、経験は何も意味を持たなくなる。そんな阪神・淡路大震災を知らない私たち高校生が、風化を防ぐために後世に伝えていくことは本当に大切なことだと思う。

将来はこの環境防災科で学んだことを活かして警察官になり、災害時はもちろんのこと、平時から防災に努め、市民の笑顔を守っていきたいと思う。

過去から学び、今日のために生きる

久米 峻平

1 はじめに

1995年1月17日阪神・淡路大震災が発生、死者6434人を出す大きな災害。2020年で25年目を迎えるにあたって地震を体験した人は明らかに減っている。そのなかで私は、阪神・淡路大震災のあった神戸に生まれた。そしてこの環境防災科に入学した。あの日あの時、この町で何が起こったのか私たちは知らない。そして私達以降の世代も知らない。だからこそ私は率先して語り継いでいく必要がある。それが環境防災科に与えられた使命だと思う。災害大国日本で生活していくには過去の経験から学び、備えなくてはならない。自然災害はいつか起こるものだ。そのいつかに備え2度と同じような被害を出さないためにも、私達にできることを疎かにしないよう、語り継ぎたいと思う。

2 題名の意味

過去の災害は、絶対的に変える事は出来ない。だからこそ、その災害を無駄にしないためにもたくさんのことを学ばなければいけない。大切なのは未来のための今に教えを活かすことだ。過去、現在、未来の中で大事なものは未来で、今変えることができるのは現在、未来だけだ。

失敗をただ後悔だけする事に、何の意味も無いのと同じで未来につなげていかななくてはならない。

過去を見逃がしていたら、未来に必ず同じような災害が起こる。その被害を少しでも防ぐために未来に少しでもいいことがあるようにと希望を持てるようにも、今伝えていかななくてはならないという思いを込めた。

3 概要

発生日時：平成7年（1995年）1月17日05時46分

震源地：淡路島北部の北緯34度36分 東経135度02分

マグニチュード：7.3

死者：6,434名

行方不明：3名

負傷者：43,792名

住家全壊：104,906棟

住家半壊：144,274棟

全半焼：7,132棟

[気象庁ホームページより]

4 父の話

父は当時、神戸市職員として神戸市役所に勤務していた。

(1) 地震発生した時の状況

当時入庁3年目、住宅局住宅部建設課に移動した年度で二つ目の職場だった。地震が発生した時は早朝だったので自宅で寝ていた。たまたま発生前に目が覚めてウトウトしていると、今までに経験したことのないような揺れを感じた。家の中は食器棚が倒れたり、物が壊れていたりしていた。

実家に住んでいたのも、幸い神戸市西区は揺れが激しい地域ではなかった。結果的に自宅は一部損壊で済んだ。地震発生時、両親は1階で寝ていて自分は2階で寝ていたのも、まず真っ先に家族の安否を心配した。無事だったので一安心したのを覚えている。

(2) 原付での通勤

地震当日は動けなかった。その頃の通勤経路はJRだったが、JRが止まってしまって、記憶が正しければその日は動けなかったのではなく動けなかったというほうが正しい。だが次の日はなんとか車で通勤しようとした。三宮の近くまでは何とかたどり着いたが、都市部に入るとどうしても時間がかかりそうだったので、いったん引き返して、原付に乗り換えて登庁したと思う。もともと通勤で最寄り駅までは原付で行っていた。

2日目はかなり時間が掛かったけれども、本庁、その当時の職場だった2号館にたどり着いたのを覚えている。到着すると、1号館の災害対策本部に職場のメンバーは移動していた。2号館は被災していたので、職場自体が立ち入り禁止だったと思う。しばらく特定の仕事場はなかった。事務所も被災してしま

くは1号館だったが、別の場所に移った。約一年後には、また2号館に戻った。もともとは8階建てだった2号館は、6階より上が地震で潰れて5階建てになった。

仕事場にはしばらくの間原付で通った。鉄道が復旧すると、復旧した区間は電車に乗って、復旧していない区間は歩いた。しばらくの間、毎日帰れなかったと思う。本庁では風呂も入れなかった、睡眠もゆっくり寝られるような場所はなかったので、連日泊まり込むことはなく交代で帰宅することが出た。ただし、みんなが好き勝手に動くことはできなかった。

（3）電話対応と被害状況調査

地震直後は電話の受付、救援物資の運搬にも対応した。いろいろな人から電話がかかってきたので、時には喧嘩になった人もいたようだ。地震からしばらく経つと被害状況を調査に行く仕事をしていた。

当時所属していた課は、主に市営住宅を建設する部署で、私は設備担当をしていた。機械係なので、給排水、ガス、空調の設計や工事を行っていた。工事現場に行くというよりは、市営住宅自体の被害状況の調査に行った覚えがある。たくさんの方に協力してもらって、被害状況の調査と被害を受けた住宅を使用できるように設備の復旧を進めていったと思う。さらに、仮設住宅の用地候補がでたら、その現場の調査に行った。その頃には公用車で現場に行くことが出来た。

（4）仕事上での苦労・衝撃

もともとの仕事が住宅の建設の工事を担当していて、市営住宅に移動した年だったので、市営住宅自体に関する地理的な知識が乏しかった。そのため担当していた住宅以外の被害状況を把握するのが難しかったのを覚えている。加えて求められるのが、通常の業務ではやらないことばかりだったので、なかなか自分1人で判断できなかったことだ。求められてもすぐに回答することができず周りの同僚や上司に相談するしかなかった。

私は西区に住んでいたのですが、揺れはしたが、住めなくなるようなことはなかった。周りの住宅に被害はなかった。仕事をしていて、特に東の方へ調査に行った時の被害の大きさに衝撃を受けた。壁に亀裂が入っていたり、ドアが変形していたりした。三ノ宮周辺、通勤途中でもビルが倒壊していた。想像を絶する光景だった。

（5）神戸市への思い

初めは仮設住宅を確保して、被災された方に入ってもらっていた。その業務は大変だった。神戸市だけではなく、県やURと連携しながら引っ越し、転居してもらって災害公営住宅を作っていかなければならない。通常よりもっとたくさん業務をなるべく早くと求められていたので、実際やっていくために、従来のやり方ではないやり方が求められ、貴重な体験だった。3年で復興住宅を整備していかなければならなかったもので、平成10年くらいまではかなり多くの件数の市営住宅に関わっていた。その3年は通常の人員よりも多くの人員で仕事をした。

震災があったときは、復興に何年かかるのだろうと遠い未来の話かと思ったが、やはり20年経て復興してきたことに感慨深い。というのも、最初、仮設住宅が残っている間は震災の真ただ中という感覚だった。震災から5年か6年くらいは、家の周りにも仮設住宅が残っていたと思う。とにかく、業務は過大だけれども、自分にできることは何でもやっていかなければならないという気持ちでいた。当時は正直、なかなか先が見えない辛さもあった。

（6）震災の教訓

被害状況の調査というと、住居の中へ入ることは少なかったが、共用部分での設備トラブルに対応した。まず、給水用の受水槽やタンクが破断していたので、その修復だ。そのころは受水槽や高架水槽が多かった。今は直圧化が進んでいて少ないと思うが、当時はまだたくさん見られた。ガスは震災が起きて復旧するまでしばらくかかったので、被害が大きかったと思う。

供給する側も被害が大きかった。「耐震性」というのもやはり震災を教訓にして進められた。現在だったら埋設管は樹脂製のポリエチレン管で揺れに強い設計だが、当時はライニング鋼管を使用していることが多く、揺れに強いとは言えなかった。また、排水は建物の中から外に出てくるところで破断していた。今ではある程度変位があっても大丈夫なように継手を用意する。それも教訓による耐震対策だ。

（7）父の話を聞いて

当時の話をこんなにも詳しく聞いたことは初めてだった。当時の父がどのように仕事をしていたのか、神戸に対してどのような思いを持っていたのか、自分の想像をはるかに超えていた。当時のことは明確には覚えておけないくらい必死に働いていた。このような人がたくさんいたからこそ復旧復興が進んだ。未来を考えて未来にいいものを残そうとしている人がいる事を忘れてはいけないと思った。

また阪神・淡路大震災の教訓から埋設管は樹脂製のポリエチレン管が使われるようになったなど災害

から学び、同じようなことを起こさないように考え、行動されている。教訓を無駄にしない取り組みをもっとたくさんの方面で実践していかなければならないと思う。

5 環境防災科の3年間

(1) 入学を決める出来事

環境防災科に入ろうと思ったのは、中学校3年でのオープンハイスクールでの出来事だ。話を聞いていると地震が来た。私は何の行動も取れなかった。その時オープンハイスクールに参加していた先輩方は、一瞬で身を守る行動を取った。私の中で衝撃が走った。誰の指示でもなく自ら行動を取った先輩方、これが環境防災科なのかと思った。そして同時に、この先輩方が学んできたことを自分も学びたいと感じた。

(2) 阪神・淡路大震災

環境防災科を受けるために初めて詳しく調べた。いままで1月17日は、自分の中では学校で黙とうし、「しあわせ運べるように」を歌って、避難訓練をして、というような流れ作業だった。しかし環境防災科を知り、調べていくうちに知らなかったことをたくさん知った。「今まで何をしてきたのだろう」無性に腹が立った。過去のことは過去のことと考えていた。そしてもっと阪神・淡路大震災について知りたいと思うようになった。

(3) 3年間学んできて

これまで様々なことをこの環境防災科で学んできた。その中でたくさんの人の「気持ち」に触れてきた。それは環境防災科に入らなければ全く感じられなかった事だと思う。そして感じようとしなかったことだと思う。この私たちに伝えてくださった「気持ち」を無駄にしてはいけないと思う。また3年間を通じが様々な経験が出来たことも、環境防災科の先生やその他たくさんの大人の方が見えないところで様々な事をしていただいたからだと思う。

ここで学んだ3年間は一生の財産になり、これから忘れることはないだろう。自分にしか伝えられないことを、次は誰かに率先して語り継いでいく…

6 夢と防災

私の将来の夢は教師になることだ。

(1) きっかけ

今までたくさんの先生に出会い、様々なことを教えて頂いた。その姿に憧れを抱いたからである。人の人生の手助けができ、教える側次第で学ぶ側はいくらでも変われるという魅力を感じている。環境防災科に入学してから、外部講師の方のお話や、先生の授業などを重ねていくうちに防災の見方が変わった。入学当初、防災に関心があったかと言われれば自信を持ってあったとは言えない。しかし3年間でたくさんの話を聞かせて頂いた。その一つ一つにその方の「震災を伝えていきたい」「今後のために」など、強い思いを感じるようになった。私達自身で、今後は伝えていかないといけないと感じた。

(2) 防災とのかかわり方

もし学校で授業中に地震が起これば生徒の避難誘導などは教師の仕事になる。実際に大川小学校でも先生たちが非難されているのが現実で、災害時の教職員の対応は生徒の命を左右すると言っても過言ではない。だからこそ教師は防災に重点を置くべきだと思う。

誰かが指示を出さなくてはならない場面、指示を出すのは勇気がいることだ。その指示で誰かの命を奪いかねない。その指示を躊躇なく出し、指示が出せなくても率先して意見を言える。これはいち早い避難につながるのではないと思う。環境防災科で学んできたリーダーシップと発言力が活かせる。いざ災害が起こった時、授業を教えている生徒全員のもとへ助けに行くことはできない。だからこそ、自分の身は自分で守れるような防災教育をしたいと思う。

(3) 防災を教える事の怖さ・むずかしさ

しかし防災を教えることは容易ではない。1つでも間違えたことを教えると命を奪いかねないそれが防災を教えるということだ。命はとても重いものであり簡単に奪われるものでもある。だからこそ教える側は間違えてはいけない。要するに、防災を教えるとは命の守り方を教える事だと思う。それが少しでも違ふと命を奪うことにつながる。防災を教えることは怖さとむずかしさを伴う。

7 これからの人生と防災

これからの人生で切っても切り離せないのが災害だ。2018年は特に豪雨災害が多発し、どこにいても災害に直面する時代になった。被害を最低限に抑えるには、災害の前の対策や災害後をどう乗り越える

か、など発災前に考えておく必要がある。備えあれば憂いなしという言葉そのものだと思う。自分に矢印を向けて、自分事として全員が考えなくてはいけない。

8 執筆を終えて

この執筆は、阪神・淡路大震災を経験していない自分たちに、語り継ぐことが出来るのかと考えながら執筆した。実際今まで知らなかったこともたくさん知った。執筆を行う中で、1つの答えのようなものに達した。それは、経験していないからこそ感じるものが少なからずあり、経験した方のお話と合わせて自分の言葉で新たに語り継いでいけば良いのだ。自分の言葉で伝えることに意味がある。これは環境防災科に入学し、3年間学んできたからこそ感じたことであり、それを振り返るきっかけになった執筆ができてよかったと思う。今後、災害に直面する場面は少なからずあるだろう。この環境防災科で学んできた事を実践していく場面や伝えていく場面も増えるだろう。それは発災後にしても意味がない。だからこそ、普段から防災について考えることを忘れずにいたいと思う。そしてこの環境防災科に入学し、3年間共に学んでこられた仲間感謝し、今後も仲間とともに防災について考えていきたい。

大学入学後も積極的にボランティア活動に参加し、自分なりの防災を追及していきたい。

語り継ぐ

黒木 梨里

1 はじめに

1995年1月17日午前5時46分、阪神・淡路大震災は起きた。私は、その7年後に生まれ、今日まで大きな災害にも見舞われることなく日々生活している。阪神・淡路大震災を経験していない人が増えている中で、やはり風化させないということが重要だと思う。風化を止めるには、私達のような若い世代が第一線となって語り継いでいかなければならない。二度と同じことが繰り返されないように、当時の教訓が次へと活かされるように、語り継ぐ。そのために、阪神・淡路大震災の被災者である父と母に話を聞いた。

2 父の話

(1) 当時

当時、父は23歳で大学生。家は神戸市西区に家族で住んでいた。

(2) 発生当日

早朝、地面の割れるような音がして、次に激しい揺れが来た。父は2階のベッドで寝ていた時だった。家が潰れるのでは、と思った。同じ2階の部屋に寝ていた母（父の母）の悲鳴が聞こえた。幸い家に大きな被害は無く、家族に怪我もなかった。6時半頃、妻（当時はまだ交際中）から電話があり、お互いの無事を確認した。電気はついたので、テレビを見て大地震であることを知ることができた。ガス、水道は不通。テレビでは刻一刻と被害の大きさが映し出されていて、その内容はひどいもので見るに堪えないものだった。バイクで家を出たが、信号がどこもついておらず、渋滞もあちこちで起きていた。舞子の妻の家に水とおにぎりを届けた。山陽電車の線路を歩く人、国道2号線では西に向かって多くの荷物をのせて避難する車の列を見た。

(3) 影響

風呂は数日入れず、食事はおにぎりやインスタントを食べた。大学は後期試験が中止になった。他の地域の親戚にもお世話になった。シャワーを借りたり、水の要らないシャンプーを届けてくれたりした。当時、携帯電話はまだ広く普及しておらず、固定電話が主に使われていた。NTTが無料で固定電話を設置し、被災者の長い列ができていた。

(4) 震災を経験して

バイクの有効性が見直されたが、父自身がそれを強く感じた。他の地域から被災地への移動に1番有効で、多くのバイクが活躍した。車は荷物を運べるが、渋滞につかまりベストな移動手段ではなかった。大地震を経験して改めて日常生活のありがたみを感じた。ライフラインが途切れ、生活のあらゆる面で影響を受けた。特に水の大切さ、他の事は知恵を出して対応できても水はどうにもならない。第一に確保するべきだと思った。

震災前、関西では大地震は起きないという様な考えも一部では存在した。その後、あらゆる災害を見て、いつどこで災害に遭遇するか分からないと思う。日頃の備えはしておくべきだ。平成は災害が多かったが、防げる災害はあるはずなので、どんどん知恵が出てくるようになってほしい。日本は地震大国ともいうが、火山の噴火や豪雨などいろいろな災害が起こっている。それらと付き合う心の持ちようも必要かと思う。

3 母の話

(1) 当時

母は23歳で働いていた。毎日の通勤で淡路島と海を見ていた。家は舞子駅の近くで家族と住んでいた。母は長女で下には妹と弟がいた。

(2) 地震前

数か月前から、赤潮や、「海が黄色っぽくなったり、おかしいね。」と友人とよく話していた。

(3) 発生当日

頭の中で遠くから「ゴー」と聞いたことのないすさまじい地響きが近づいてくる。目が覚めると、家が壊れてしまいそうな大きな揺れがあった。すぐに隣の妹の部屋へ行くと、ガラスまみれで布団の中で泣いていた。弟は数分前に三宮の職場へ行くために家を出た後だった。興奮気味に「えらい事になって

る」と帰ってはきたが、ATM 管理の仕事をしていたため、その後数か月、家には帰ってこなかった。父母（母の父母）も無事であった。後に自宅は半壊。

昼頃、須磨の友人が気になり、妹と歩いて会いに行った。友人は無事だった。2 号線は東から大きな荷物を担いだたくさんの人々が西へ歩いていた。その日に、夫（当時はまだ交際中）がバイクで水とおにぎりを届けに来てくれた。そのとき食べた塩のきいたおにぎりがとてもおいしかったことを覚えている。

すべての光景がカラーではなく、その日はセピア色に見えた。

（4）影響

ライフラインは切断。電気の復旧は早かったが、ガス、水道はかなり時間がかかった。2 週間風呂に入れず、明石人丸の銭湯が開いていると聞き、同僚と入りに行く。明石は隣町だが、被害の違いが大きく別世界だった。トイレの水は流せないで、風呂の水を使用していた。生活用水が足りなかったの、車で高砂の祖母（母の祖母）の家まで行き、衣装ケースにゴミ袋をはり、水を持って帰っていた。何を食べて過ごしていたかはあまり覚えていない。

数日後、三宮の職場へ舞子から 2 号線を自転車で通う。毎日が必死な思いで生活し、時間が過ぎていった。後に、JR が三宮まで開通し、車窓から見える景色に胸が熱くなり、涙をこらえる日々が続いた。

（5）母の知人の話

職場の同僚の車のナンバーが 1.17 だったことから、何か地震と関係があるのかと思い尋ねた。すると、その娘さんが生まれた日だった。病院で分娩台に上がり出産を迎えようとしていた時に地震が起きたそうだ。多くは語らなかったが、きっと計り知れない壮絶な状況だったと思う。

（6）震災を経験して

阪神・淡路大震災から 24 年が経つが、時が経つのは早く、当時の記憶は今でも忘れはしない。辛く悲しい体験、思いがあるからこそ、人は前進し生きていく事が出来るのだと痛感している。

4 話を聞いて

両親から阪神・淡路大震災について聞くのは、初めてではなかったが、当時のことをこんなにも詳しく聞いたのは初めてで、多々驚いたところもあった。父はバイクの利便性について特に話してくれた。父はバイク好きで、若いころは大型バイクなどたくさん乗っていた。その影響かもしれないが、私もバイクが好きで高校卒業後は免許を取りたいと思っている。災害時のバイクの利便性について話を聞き、自分でも調べてみた。やはり、災害時はバイクが有効だそうだ。自分自身の単なる趣味になってしまうかもしれないが、バイクに乗りたいという気持ちがますます強くなった。

母の話では、地震が起きる数か月前から、海には変化が起こっていたそうだ。犬や猫が地震の起きる前に異常に鳴いたり、不可解な行動をとったりするということは聞いたことがあるが、海が変化することは聞いたことがなかった。自然というのは実に素直に表れるものであり、そこに恐ろしさも感じた。また、母から同僚の方の話を聞いたときは、言葉が出なかった。出産を迎えることすら不安を感じると思うが、そこに突然の地震が襲い、本当に大変な状況だったと思うと、想像をするだけで胸が苦しくなった。

震災を経験した方たちにとって体験談を話すということは、当時を思い返すことであり、辛い記憶や悲しい記憶をとて簡単に話すことが出来るわけではないと思う。だが、両親は協力的になって当時のことを語ってくれた。本当に感謝の気持ちでいっぱい。そのためにも、少しでも語り継いでいけるように努力したいと改めて感じる事が出来た。

5 環境防災科に入って

（1）入学したきっかけ

私が環境防災科を知ったのは中学 3 年生の夏休み明け頃だ。部活動を引退して、これから受験モードに入るといった頃だった。自分自身行きたい学校が決まっておらず、正直焦っていた。その時に、母の友人の息子が環境防災科に通っているという話を聞いて舞子高校に興味を持つようになった。今まで防災について深く考えたり、意識したりすることがあまりなかったからなのか、環境防災科を知っていくうちに、もっと知りたい、専門的な知識を身に付けたいと思うようになった。実際に通っている人からの情報もあったことや、他の学校ではなかなか体験することのできないボランティア活動や、防災という専門分野を学ぶことができることとて魅力を感じた。誰かの役に立ちたいと思っていた私にとってぴったりの学校で、ここに通いたいと思ったのがきっかけだ。

(2) 入学して

合格発表と同時に自分の番号を見つけた瞬間、今までに味わったことのない喜びがこみあげてきた。私を含めて同じ中学校から4人志望し、全員が合格した。最後まで一緒に頑張ってきたので嬉しく、とても安心した。入学してからは様々なボランティア活動に参加した。特に印象に残っているのは、2年生のときに行ったネパール訪問だ。タイで乗り継ぎ、4泊5日で活動した。初めての海外旅行というわけではなかったが、出発するときは楽しみな気持ちと少しの緊張で、何ともいえない気持ちだった。ネパールに着くと、広がる景色や歩いている人全てが新鮮で、とても衝撃を受けた。現地の学校と交流をしたが、言語は違ってもダンスを踊ったりすることでみんなが笑顔になる事ができ、とても良い思い出になった。本当にフレンドリーな人ばかりだった。言語が違うからといって距離を置くのではなく、話すこと以外にも、仲良く、笑顔になれる方法があることに気づかされた。また、ネパールで行われている防災対策などを学び、日本とは違うネパールの環境に合わせた対策を知るなど、多くのことを学んだネパール訪問だった。日本とは全く違う環境に行くことで、自分を見つめなおす機会にもなり、防災について考える視野が広がった。ネパール訪問で学んだことは、これからの自分の力と自信になっていることを実感している。これは代表的な活動に過ぎないが、他にも様々なボランティア活動に参加させて頂いた。どのボランティアに対しても学ぶことは多く、普通の高校では学ぶことができないと思うと、本当に環境防災科に入学することができて良かったと実感している。ボランティア活動を通して、少しは人の役に立てたと実感することができ、感じる事もたくさんあった。この経験は、これからの私の人生において大きな力となっていくと共に、忘れられない経験になるだろう。

6 夢と防災

私は将来の夢がまだ決まっていない。環境防災科に入学したときは夢を持っていたのだが、この3年間で沢山の職業を知ることによって視野が広がり、自分を見つめ直すことで将来の夢に迷いが出てきたからだ。ただ、将来の職業ではなく、こうありたいという将来像はある。それは、信頼感の強い、たくましくかつこい女性になることだ。単純で誰しもが思うことかもしれないが、単純だからこそ、とても難しいことだと思う。完璧にはなれなくても少しの努力で変えられるということだ。そのために、私はこれからも何事にも努力し続けたいと思う。

私の座右の銘は、「努力は無限」だ。これは、中学時代の部活動の顧問が掲げていた言葉で、諦めてしまえばそこで終わりだが、努力は無限に続けることができる。努力した分必ず結果はついてくるという意味をもっている。私はこの言葉を聞いたときに、とても納得させられたし、大切にしようと思った。だからそのためにも、ますます努力し続けたい、諦めたくないという気持ちが大きい。自分1人で頑張ろうとするのではなく、ピンチになった時には助けてくれる仲間を作ることも大切だ。また、防災の知識も活かしていきたい。もし、将来母親になって子供ができたなら、子供を守る責任がある。災害時に父親が仕事に行っていたりして家に居なかったら、守ることができるのは母親しかいない。慌てずに行動するためにも、家族で話し合うことや普段から確認しあうことが大切になる。災害時の家族での集合場所や避難経路の確認、家で備蓄しているものに不足が無いかなど、より具体的に決めておくことが大切だ。

もう1つ重要だと思うことは、地域コミュニティだ。自分の家だけが災害に強くても、地域が強くないといざという時に力を発揮することができないと思う。地域コミュニティが強ければ強くなるほど、災害に強くなる。すれ違いの挨拶だけでも良いので人見知りの関係を減らすことが大切だ。少し覚えておくだけでも、災害時の安否確認などに役に立つ。また、地域の集まりやクリーン作戦など地域の行事にも積極的に参加したい。これも母親の義務だと思う。そして、子供は素直だからこそ、慎重に、正確に知識を教えなければならない。そのため、この3年間で学んだ防災知識を伝えていきたい。せっかく学んだ知識でも、自分自身の内に置いてしまうだけなら意味がない。母親として、自分の子供に語り継いでいくことが重要である。子供でも分かりやすいように説明したり、体験してみないと分からないことは、実際に地域の防災訓練に参加したり、防災キャンプに参加したりと何にでも積極的に行動することを心掛け、少しでも地域住民の防災意識が高まったり、子供が防災知識を覚えてくれたりすることが理想だ。

このようなことができたならば、災害にも強く、信頼感の強い、たくましくかつこい女性に近づくのではないかなと思う。今すぐの実現は難しいかもしれないが、小さなことからでも、人の役に立つことができれば幸いだ。

7 最後に

今回、語り継ぐを書いて、家族からもたくさんお話を聞くなどし、改めて阪神・淡路大震災を風化させてはならないと強く感じた。これは、阪神・淡路大震災だけでなく、他の災害にも当てはまる。思い出すということは気持ちが複雑になるかもしれないのに、当時の事を語ってくれた家族には本当に感謝したい。また近年は様々な災害が引き続いて起こっており、とても多くの被害を受けたり、苦しい思いをしたりする人がたくさんいる。だからこそ、語り継ぐことが大切であり、私の「語り継ぐ」を読んで少しでも興味を持ってもらい、防災意識が高まれば幸いだ。これから来るであろう災害に、たくさんの教訓が活かされ、1人でも多くの命が救えるように、これからも語り継いでいきたい。

8 追記

語り継ぐを制作していた当時は、将来の夢が明確に決まっていなかったが、あれから精神保健福祉士になりたいという気持ちが芽生え、10月現在、精神保健福祉士の資格が取れる大学に進学が決まった。きっかけは、私自身が悩みを抱えているときにスクールカウンセラーの方に出会い、気持ちが軽くなった経験から、私も悩みを抱える人の手助けができるようになりたいと思ったからだ。そしてもう一つ、身近に精神的な病を抱えている人がおり、本人が悩んでいるところやそれを支える周りの人達の大変さを見て、少しでも悩みや問題を解決へと導けるようになりたいと思ったからだ。もし精神保健福祉士になることが出来たならば、3年間で学んだ防災知識を取り入れて、これから社会復帰される人などへ防災を伝えていきたいとも思っている。これから精神保健福祉士や上記の将来像を実現できるよう、努力していきたい。

はじめの第一歩

後藤 夏咲

1 はじめに

私は、阪神・淡路大震災を経験していない。震災から25年がたった今、これからは震災を経験していない世代が増えていき、私たちの世代が中心となっていく。そんな世代を含め、私はできるだけ多くの人に震災の教訓を語り継ごうと思う。語り継がなければ被害は拡大すると思う。防災を学ぶ人間として語り継ぐことは大切な役目である。その一歩目がこの「語り継ぐ」だ。そんな私の語り継ぎの一歩目を表し、そしてこれまでの歩みを語り継ぐことから題名を付けた。

2 概要

発生年月日 1995年（平成7年）1月17日5時46分52秒
震源地 淡路島北部（北緯34度36分、東経135度02分）
規模 マグニチュード7.3
（マグニチュードと震度の違い：マグニチュードは地震の規模を表す。
震度はその地点の揺れの大きさを表す。）

人的被害

死者 6434名
行方不明者 3名
出典 神戸新聞NEXT

3 母の話

（1）震災当日

当時、北区の鈴蘭台に母と祖母と祖父の3人で暮らしていた。朝寝していると、急に「ドンっ」と揺れた。母は最初ポルターガイスト現象が起こったのかと思った。揺れは相当長いように感じた。「たぶん実際の時間よりも倍長く感じた。」と母は言う。しばらくは怖くて動けず、布団にもぐっていた。揺れが収まり、「シーン」という音が聞こえるくらい静かになった。そして自分が寝ている場所から確認できる範囲で家を見渡すと、家は大丈夫そうで、ガス臭いにおいもしなかったのので少し安心した。少し時間が経って、リビングから祖父と祖母の声が聞こえてきたので家族の安否は確認できた。母は起き上がり、リビングから家族で窓の外を見た。周りも家は倒れておらず、悲惨だったのは道路だった。地面が割れ、平らな道ではなくなり、信号機も止まっていた。電気が通ってなかったので、すぐにラジオで状況確認をした。午前5時46分という朝方の時間帯だったため、停電かどうかはあまり気にならなかったという。水も止まっていて、家の前の小学校へ水を汲みに行った。何回も往復した。近所の人でも混乱することなく列に並んでいたという。そんな状況に母は振り返り「家が無事というだけで割と冷静になれるのかもしれない。」と言っていた。祖父は東灘に住む祖父の妹と連絡が取れなかったため、リュックサックに水と食料を少し入れて、歩いて岡本まで行った。実際に祖父の妹が住んでいたマンションが倒壊していて、しばらくは母の住む鈴蘭台の家で暮らした。

（2）翌日からの生活

たびたび起こる余震にずっと怯えていた。北区は最初に電気が復旧した。水も早くに復旧していたが、食器などは紙で拭いたり、ラップを敷いたりして極力、水は使わないようにした。

（3）会社の状況

会社は1週間自宅待機だったので、1週間後会社に出勤した。会社は三宮の貿易センタービルの近くだったので、普段よりも遠回りをして出勤した。神戸電鉄が止まっていたため西鈴蘭台から神戸駅まではバスに乗り、三宮までJRを使った。そこからポートライナー沿いを歩いて通勤した。通勤したあと、テレビで母が通った道の横にあったビルがすぐ後に倒壊したというニュースを聞き驚いたという。通勤中も余震があり、とても怖かったと母は話す。会社では余震があるたびにみんなで机の下にもぐった。母が勤めていた支店では水洗トイレが使えなくなっていて、バケツで流す日々が続いた。普通に流せるようになった時、すごくありがたく普段の生活がどれだけ便利なものかと思い知らされた。女子社員は全員2時に帰らせてくれていた。電車が動いていないため、結局家に着くのは夕方5時から6時ぐらいだったという。

(4) 救援物資

会社には多くの救援物資が届いていた。だから食べ物に困ることはなかったが、逆に母の周りで言われていたのは「震災太り」という言葉だった。どうしても救援物資となるとカロリーメイトや缶詰などが多く、バランスの良い食事はできなかった。食料に対して飲み物が極端に少なかったと母は言う。

(5) ニュースやテレビ

三宮がとにかく変わってしまった姿で復興に20年～30年かかるというニュースを見て「大変なことが起きた」と驚いた。

さらにアスベスト（建設資材や自動車によく使われるもので、空中に飛散したアスベストを大量に吸入すると肺癌や中皮腫の誘因となることが指摘されるようになったもの）が危険だというニュースが多く流れていたのずっとマスクを着用していた。

そのほかにもテレビに流れているのは毎日毎日震災のニュースの話かCMもACジャパンのものばかりで逆に気が滅入ってしまうほどだったという。不謹慎と思う方もいるかもしれないが、そういうときこそ普段の番組が恋しく感じた。東日本大震災の時、被災地で芸能人の方がコンサートなどを行っているニュースを見て、「少しでも忘れられるときを作ってあげることはとても救われるんじゃないかなと思って見ていた」と母は言っていた。

4 母の話を聞いて

私は今回初めて母からこんなにも詳しく阪神・淡路大震災の話を聞いた。これまで環境防災科に入ってから、いろんな方のお話や企業の方のお話を聞いた。資料でも映像でもなく、実際に体験した話を家族から聞くというのは、感じ方が違った。いつも一緒にいる家族だからこそ自分のことのように感じた。母の話に出てくる人は私も知っている、私の家族だ。だからこそ、今回は母から話を聞いたが、機会があれば父や祖父母にもぜひ聞きたいと思う。今こうして私の家族が無事であることがとても嬉しく、当たり前ではないのだと気づかされた。

母の話の中で気になったことが2つある。これは防災を学んでいる私たちが考えないといけないことかもしれない。1つ目は「震災太り」という言葉が生まれるということだ。母が言っていたように救援物資には偏りが出てしまう。仕方がないことかもしれないが、これをこの先起きる災害でも繰り返してよいのだろうか。仕方がないで済ませていいのだろうか。もっと普段の食事を救援物資として送れるようになればバランスの悪い食事にならずに済むのではないかと考える。2つ目はニュースやCMのことである。たとえ、支援を促すCMや状況を伝えるニュースだったとしても、それらはすべて被災者の方々のために放送されているはずだ。ならば、被災者のことを思い、考え、母のような気が滅入ってしまう人を出さないために普段のテレビ放送もあっているのではないと思う。視野を広げ、多くの視点から被災者を支援できるようになればと思う。

5 環境防災科

(1) きっかけ

きっかけは防災にとっても興味があったわけではなかった。「しあわせ運べるように」を歌ったり、1.17が近づけば学校で防災教育があったり、人並みに真面目に避難訓練に取り組むごく普通の中学生だった。そんな私が環境防災科を知り、興味を持ったのは中学生の時から親しくさせていただいている先輩が環境防災科に通っていて、いきいきと活動している姿に憧れを抱いたからである。それから説明会に参加させていただいたとき、自発的に活動している姿にさらに憧れを抱いたのを今でも覚えている。防災の話はもちろん自分の夢を語る先輩方がとても大きく見えた。その時、本格的に防災に興味を持ち、先輩方のようになりたかった。

(2) 入学して

環境防災科に入学し様々なことを学んだ。いろんな外部講師の方のお話や、災害について、災害時の人の心について、ボランティア活動での活動の仕方や大切なこと、発表の仕方など挙げだせばきりが無い。学んだことは多く、それぞれがこれから進む道で防災を繋げていかなければいけない。伝えていかなければいけない。それが私たちにできることだと思う。また、何も防災ばかり学び知識だけを得たのではない。かけがえのない仲間と出会い、3年間共に頑張ってきた。この3年間があったからこそ、私自身これからも自信をもって防災を続けていこう、伝えていこうと思える。そんな仲間と先生方と出会い、過ごした日々がこれからの糧となるだろう。この話やこの語り継ぐを読んで少しでも環境防災科や防災のことに興味を持っていただけたら幸いだ。

(3) ネパール訪問

私は2年生の12月にネパール訪問に参加した。入学前から興味があった活動ではあったが、1年生の時には勇気が出なかった。しかし2年生になり実際にいったことのある先輩やクラスメートの話を聞いて行きたいと思い参加した。ネパール訪問では2015年4月25日に起こったネパール地震後の復旧・復興の状態を様々な場所で視察、学校に訪問して交流するなどが主な活動内容である。私たちは3つの学校を訪問させていただいたが、どの学校の子たちと交流してもすごく刺激的だった。ほとんどの学校がテスト期間であったが私たちを歓迎してくれた。つたない英語で話す私の話を一生懸命聞いてくれて、一緒にダンスをして、一緒に笑って、とても楽しく言語の壁なんて感じない空間だった。その時に私は一つ気づいたことがある。それは「同じ」ということだ。私はネパールに訪問する前はこう考えていた。「日本とどんな違いがあるんだろう？」と。もちろん使う言語も違うし、習慣も違う。しかしそれだけではなかった。私たちは“同じ”学生で、“同じ”人間だ。楽しかったら笑い、学校のテスト前になれば文句を言う。同じように学生生活を送り友達と通う。私たちと変わらなかった。ネパールに行く前は違いを探そうとしていた自分が恥ずかしくなった。そのことを気づくことができてよかった。

また現地視察で分かったことは地震の被害が大きく今でも復旧・復興作業が続いているところがある。しかし、学校や防災教育、建物の耐震化など確実に一歩ずつ復興していていることが目に見えた。私たちは日本だけでなく海外の災害も目を向け、災害大国である日本の教訓を伝えていかないとはいえないと改めて思ったと同時に、ネパール地震のことやその後の状態をこの目で実際に見た私たちが伝えないとはいえないと思った。

6 将来の夢

(1) きっかけ

私の夢は体育の教師になることだ。しかし、その夢もはっきりとは決まっていらない。もしかしたら将来違う職業を選んでいるかもしれない。だとしても私はスポーツに関わる仕事に就き、人と関わる仕事をしたいと思う。そして私が教師という職業を選んだ理由は、防災教育がますます大切になっていくこれから教師という存在は大きく欠かせないからだ。そこに携わっていききたいという気持ちが生まれた。また、今私がこうして防災を学んでいるのも先生方のおかげで、そんな環境を作ってくださっている先生方に憧れを抱いたからである。私が体育教師を目指した理由は、純粋にスポーツが好きだからということもあるが、それだけではない。防災・減災に繋がっていくと思ったからだ。スポーツは「防災教育」でもあり「支援」でもあると私は考えた。

(2) 夢と防災

人間、適度な運動は誰でも必要不可欠だ。普段は通学・通勤で歩いたり、学生であれば体育があったり、幼稚園の園児であればお外の時間や散歩があったり、お年寄りであれば地域のラジオ体操やゲートボールなどがあるかもしれない。しかし、震災時にはどうだろう。まず、体育や散歩、ゲートボールをする場所もなければ、運動をしないといけないという意識にすらならないだろう。実際、東日本大震災の時、子供たちの運動不足が問題となっていた。その理由は仮設住宅がどうしても子供たちの遊ぶ公園や校庭に建てざるを得なかったからである。だから私は被災地に出向き、避難所生活や元の生活ができないストレスからリフレッシュを図るとともに年代問わず楽しく体が動かせる体操やスポーツを考え、教えたい、そしてそんな場を作りたいと考えている。何も目的が「体を動かすこと」でなくていいと思っている。「みんなと話したいな」「ちょっと体動かししたいな」「とりあえず避難所から出てみようか」理由はそれでいいと思っている。その結果が体を動かすことに繋がればいいと思う。皆が集まれる理由になれる場所を作りたい。その活動を私は一時的ではなく定期的に取り組めるようにする。定期的に行えば運動不足は解消され、元の生活に戻るのも早くなるかもしれない。この活動は「支援」という形になるだろう。私が将来、教師という立場でそれが実現できたとすれば、子供たちにも話や相談がしやすい人でありたいし、なりたい。先程挙げた「年代問わず体を動かせるスポーツや体操」を災害後ではなく、災害前に教えていたとしたら、災害時しっかり逃げるための工夫で健康な体作りをサポートすることもできる。この活動は「防災教育」という形になるだろう。まだはっきりと夢が決まったわけでもないが、スポーツに関わっていきたいと思う。どんな道を将来の自分が選んだとしても、防災に繋げて、防災を考えることをやめないでいく。防災・減災の第一歩は「生きることを考える」ことだと思う。私はその手伝いができる仕事に就きたい。母の話で「震災太り」という話があった。また東日本大震災でも子供の運動不足や運動能力低下などが問題として挙げられていた。これも震災の教訓だと思う。だからこそ、この震災太りや運動不足を改善・解消するために私はスポーツに取り組める場所を作りたいと

考えた。教訓をこれから起こる災害に備えていかないといけない。教訓は被害だけではなく、ひとへの影響や問題も改善していかないといけない教訓だと思う。だからこそ私たちの世代はそのことを考え続け、語り継いでいかないといけないと思う。いや、語り継ぐ。

7 感謝と共に

私はこの3年間で多くの方に支えられ、「防災」というもの学んできた。まず、このことに感謝したい。阪神・淡路大震災も大きな災害も体験したことのない世代の私たちがここまで学んでこられたのは、家族や先生方はもちろん、地域の方々や企業の方、いろんな分野の先生方に支えられてきたからである。そして一番身近な存在で支えてくれたのはクラスの仲間たちだ。そんな存在に出会えたこと、ここで学べたことは私の人生の大きな財産となるだろう。私はこれからも学ぶことを続け、語り継いでいく。そして将来クラスの仲間もそれぞれがそれぞれの道で防災を何かしらの形で続けていこう。それが私たちにできることだと思う。この3年間色々な出会いがあった。この出会いに感謝し、この先の出会いも大切にしていく。今こうして生きていることや出会いというのは全て当たり前のことではない。そんなことも環境防災科に入り、気づかせてもらった。私たちは感謝と共にこれからの社会を生きていく。

未来へ繋ぐ思い

小山 勘汰

1 はじめに

私は阪神・淡路大震災が起きてから6年後の2001年に生まれた。今の若い世代は震災を体験していない人がほとんどだ。私もそのうちの1人だ。だんだん震災について話す機会が少なくなっていると思う。これでは、また災害が起こった時に同じことの繰り返しになってしまう。私たち環境防災科は3年間、阪神・淡路大震災当時の状況や復興、防災に関しての知識についてたくさんのことを学んできた。ここで学んだことをこれから担っていく若い世代に語り継いでいかないといけない。それが私たちの使命だ。

2 阪神・淡路大震災の概要

発生 日時 1995年1月17日
震 源 地 淡路島北部
震源の深さ 16km
規 模 マグニチュード7.3
最大 震度 震度7
死 者 6434名
行方不明者 3名
負 傷 者 43,792名
出典 (内閣府 防災情報のページ)

3 阪神・淡路大震災 塾の先生の話

(1) 発生当時

1月17日、明け方近くに急に目が覚めて眠かったため、もう一度寝ようとした。その時に突然、窓ガラス越しに何かが光った。その瞬間に地面が突き上げるような揺れに襲われた。これはとてつもない地震だ。家が潰れて自分はそのまま死ぬと思っていた。

気がつくと、タンスの下敷きになってもがいていた。無意識に隣に寝ていた弟の上に覆い被さっていたらしいが、それは後で聞いたそう。家具の固定をしていなかったため、家の中の全ての家具や電気製品が倒れていく音を聞いた。しかし記憶にないのは何故だか分からない。シーンと何も聞こえない時間が長かった。引続き同じような大きさの揺れと思える余震が次々と来た。この日以降、余震の揺れが来るたびに身体が硬直するそう。

(2) その後の行動

外は真っ暗だった。懐中電灯が兄の部屋で見つかり、家の中の状態がその光の範囲で見えてきた。台所は食器棚が倒れていた。兄はキャスター付のベッドのお陰で横揺れと同じサイクルで揺れ、ほとんど落下物の下敷きにならず、ピアノも倒れたがベッドの場所を外れ、怪我はなく無事だった。部屋のドアにタンスが倒れ込んでなかなか開かず気をもんだが、自分1人出る隙間をなんとか作り、犬のココアと一緒に這い出してきた。出てくるとすぐ兄がこう話した。ココアが少し前から「うー」という唸り声を出していて、前にネズミが沢山家に入り込んで来ていたから、またネズミが騒いでいるので、唸っているのかと思った。それで「静かにしろ」と、寝ぼけながら怒ったら1回静かになった。そのまま寝込んだら、暫くして今度はもっと大きな唸り声を出したから、「うるさい」と怒りながらベッドから起き上がったら、腕の中にココアが飛び込んできた。その瞬間、ベッドの上で身体が揺れて、何がなんだか解らなくなった。気がついたらさっきまで寝ていた枕の所に、上の棚にあったテレビが落ちていた。ココアが騒いでくれなかったら顔の上にテレビが落ちていた。犬が老犬になったので、寒中は夜だけどちらかの部屋に入れる事を許していたが、たまたまその夜は兄の部屋に居て、そのお陰で兄が命拾いするとは思ってもよらぬことだったという。

(3) 状況の理解

朝日が昇ってきて、家の中が見えてきた。母が「暫くのあいだ靴を履いたままでいよう」と皆に言った。ガラスの破片がどの部屋にも飛び散っていた。ラジオがすぐ見付かりスイッチを入れたが、最初のうちは大阪でかなり大きな地震がありましたという報道で、神戸の事は何も触れられていなかったという。

窓から見る限り、近所も倒れている家はなく、瓦がずれている家があるくらいで道路にも誰も出ていなかった。電気が来ないのでラジオをつけっぱなしにしていた。停電で暖房が取れないので、皆パジャマの上に服を着込んだが、結局1週間そのままだった。

まだ神戸全体が、淡路、阪神間全体が被害を受けている事を知らなかった。そのあと神戸、淡路、阪神が被害を受けたというのはラジオで知った。

夕方、突然部屋に電気が灯った。居間の大型テレビは台から落ちて倒れていたのに壊れたと思い込み、長い間別のテレビを持ってきてそれを使った。もうラジオで神戸市内全域に大きな被害が出ているのはわかっていたが、ベランダから JR 六甲道、その向こうの三ノ宮方面に黒煙が上がって見えると、ようやくテレビでも次々映し出される画面は何とも言えなかった。自分が良く知っている場所や建物が次々映るが、壊れるか斜めに傾くか燃えていた。しかしその時は、自分と家族の生活をどうするかしか頭に浮かばなかった。

4 先生の話聞いて

塾の先生は灘に住んでいた。灘は被害が少なかったということを初めて知った。地震の揺れで無意識に弟をかばっているというのはすごいと思った。また家具の固定の必要性が大切だということが改めて分かった。家具を固定しているだけで被害がもっと少なかったかもしれない。大切なことだと思った。

今回なぜ塾の先生にしたのか。それは多くの人に聞きたいと思ったからだ。小学生の頃に両親の話は聞いたことがあった。そのため、別の人に聞いてもっと多くのことを学びたいと思った。実際両親の話と全く違って、新たに被災体験を知ることができた。この語り継ぐがなければ話を聞くことができなかった。とても良い経験になった。

阪神・淡路大震災から25年が経ち、だんだんと話す機会が少なくなっていき、風化が進んでいるのではないと思う。人間はすぐ忘れてしまう生きものだから、昔のことはすぐに忘れてしまう。もうこのような被害を2度と繰り返さないために、自分たちが学んできた防災に関する知識、阪神・淡路大震災当時の様子などを今後の若い世代に語り継いでいきたいと思います。

5 私の夢

(1) きっかけ

私の将来の夢は消防士だ。なぜ消防士になりたいかという、きっかけは3つある。1つ目は、東日本大震災だった。その当時私は小学生で、テレビを見ている時に消防士の人が市民を救助している姿を見てカッコいいと思ったからだ。2つ目は、小学生の時に地域の防災訓練があり、その時に消防士の方が消火器の使い方などを優しく簡単に教えてもらい、人のためにする仕事がいいと思ったからだ。3つ目は人を助ける仕事がしたいからだ。消防士はたくさんの人々の命を守れる仕事だと思う。地域の防災訓練によく参加し、地域住民の方とのかかわりも深い。かかわりが深いからこそ、防災の知識を共有できる。現場での救助活動もするが、そのような場所からでも人々の命が救えるかもしれないと思うと、一番身近に人の命が守れるところだと私は思う。

私は神戸市消防局で働きたい。理由は2つある。1つ目は地元だということだ。生まれも育ちも神戸だ。他の知らない地域で消防士をするのも良いのかもしれない。だが今まで育ててくれた地域に少しでも恩返しをしたいからだ。将来必ず来るとされている南海トラフ巨大地震。その時に神戸市消防の一員として、1人でも多くの命が救えるそんな人になりたい。2つ目は、私は世界各地のことがとても好きで特に世界遺産などを観光するのが1つの夢だった。環境防災科に入学してから防災のことを学ぶ上で、海外で防災と絡めた仕事がしたいと思っていた。しかし当時、消防士にもなりたいたいと思っていてどうするか迷っていた。そんな時、消防士でも海外でできることがあると知った。それは、国際消防救助隊というものだ。国際消防救助隊とは、海外で大規模災害が発生した際に、各自治体の国際消防救助隊登録消防本部の救助隊から編成され、国際緊急援助隊(JDR)救助チームの一員として被災地に派遣され救助活動を行う部隊のことだ。最近では、2015年に起きたネパール地震などへも派遣されている。この国際消防救助隊に登録できるのは、政令指定都市だけだ。そのため、私は神戸市消防局で働きたい。

消防士という仕事は、防災には必ず必要な職業だ。防災の知識がなければ、人の命を守ることもできないし、災害現場での判断もできなくなってしまう。防災の知識があれば、地震や火事が起こった後の2次被害なども予測でき、1人でも多くの命が救えるかもしれない。消防士は火を消したりするのだけではなく、地域の防災訓練などにも参加している。市民の方と接する機会が多く、そこで防災のことも教えると同時に、災害発生前の対策や発生後に取るべき行動なども教えることができる。この環境防災科で3年間

学んだ知識を活かしたい。また国際消防救助隊は主に救助活動をするが、そこで積極的に話をして、防災について知識や自分が大切にしていることなどを伝えていきたい。

消防士になって大切にしたいことが2つある。1つ目は、コミュニケーション能力だ。これは同じ職場で働く人だけではない。地域の方とのコミュニケーションを大切にしたい。普段から地域の方とコミュニケーションをとることで、普段から防災について話すこともできるし、いざという時に役立つと思うからだ。それをこの2年間でよく学んだ。だからこのことを大切にしたい。2つ目は、自分の命は自分で守るということだ。災害時に多くの人を救助したい。しかし、自分が死んでしまったら、助かる命も助からない。当たり前のことだが災害時は何が起こるか分からない。だからこのことは大切にしたい。

6 環境防災科

(1) 入ろうと思ったきっかけ

私が環境防災科に入ろうと思ったきっかけは2つある。1つ目は、地域の夏祭りだ。中学生の時に友達と一緒に地域の夏祭りに行った。そこで、環境防災科の方がボランティア活動しているところを見た。当時は環境防災科というのは知らなかったため、「高校生がボランティア活動をしている」という風にしか思っていなかった。だがその時に、人のために何か活動するということをしてみたいという気持ちがうまれた。2つ目は、親に勧められたからだ。中学2年生の秋、まだ具体的な進路も決まっていなかった。ただ消防士か海外に行きたいという夢は持っていた。悩んでいると、親が環境防災科というのが舞子高校にあると教えてくれた。そこは、当時、日本で唯一の防災を専門に学べる学科ということを知ってもらい、少し自分で調べてみた。すると、ボランティア活動がたくさんあり、また消防学校の体験をできると知った。一番の決め手となったのはネパール訪問だ。高校のボランティア活動で行けるということを知って、どうしても環境防災科に入りたいと思った。

(2) 入学してから

環境防災科に入学してから2年間、多くのことを学んできた。普段の授業でも、普通科では学べない防災に関する知識、外部講師の方の講義、ボランティア活動などだ。外部講師の方の中で特に印象に残っているのは、室崎先生の講義だ。今後絶対起こるとされている南海トラフ巨大地震。2018年時点での想定死者数は約23万人である。先生はそれを約15万人～5万人までに減らしたいと言っていた。家具の固定だったり、地震が起きたらすぐに高いところに避難したり、すぐにできることで助かる命が増えるということを知った。初めてボランティア活動をしたときのことは、2年経った今でもはっきり覚えている。高齢者の方とお話をしたり、要望に応じて食べ物を買に行ったりするというボランティアだ。始まる前までは簡単だろうと思っていたが、始めてみれば全く思うようにいかなかった。高齢者の方となにを話してよいか分からず、沈黙が続いてしまうことが多くあった。そこで簡単そうに思っていたボランティア活動が、とても難しいということが分かった。そして、私がボランティア活動で1番印象に残っているのは、ネパール訪問だ。

7 ネパール訪問

環境防災科に入学する前から行きたいと思っていた。ネパール訪問は1年生の冬と、2年生の冬の2回行かせていただいた。私は将来、海外に旅行する機会があると思う。私の中で行ってみたい国はたくさんある。しかし、その中にネパールはなかった。どのような場所なのか、どんな文化なのかも知らなかった。そのため、一度行ってみたいと思った。1年生の冬、初めて訪れたネパールに私は衝撃を受けた。2015年に大きな地震が起きて約2年と数か月、ある程度の復興などはできていると思っていたが、日本とは違い壁がない家に住んでいたり、路上に座り込んでいたり、国が違うだけでこんなにも差が激しいのだと思った。日本なら、仮設住宅などができ、ある程度生活ができている。しかし、ネパールでは違った。まだまだ復興、復旧が進んでいないなと思った1回目だった。また、町の環境設備や道路整備、ライフラインの普及が不十分だったり、物乞いをしなければ食べられなかったりする子供が何人もいた。まだまだ復興、復旧が進んでいないなと思った1回目だった。それから1年たって2回目の訪問をした。特に印象に残っているのは、「カゲンドラ・セカンダリースクール」という学校訪問したことだ。1年生の時にも訪問していた。そのときは、人数が多くて新しい校舎を建設中だった。ネパールはなかなか復旧が進んでなかったのが建設はまだまだ時間がかかるのかと思っていた。しかし、2回目に訪れた時には完全に校舎ができていた。国やNSET ネパールの支援を受けて、とても早いスピードで完成していた。日本では当たり前のことだが、ネパールではそれが普通ではない。それをこの2回の訪問でよく知ることができ、特に印象に残っていた。この2回のネパール訪問で学んだことを、自分の中だけでとどめない。

日本とネパールでは、環境や文化が違うことを知っている人もいれば知らない人もいると思う。実際に見たり、聞いたり、触れたりしたことは貴重な体験だ。この学んだことを学校内に広めるだけではだめだと思う。もっと多くの人に今のネパールの現状を知ってもらうことが必要だと思った。

8 感想

私はこの環境防災科に入るまで防災の知識についてほとんど知らなかった。しかし、この2年間でたくさんのことを学んできた。日本の災害だけではなく、海外の災害のこともたくさん学んだ。学ぶ中で思ったことがある。それは、もっと防災について多くの人に知ってほしいことだ。防災を学ぶことで救えなかった命が救えるようになる。自分が学んできた一人だ。この知識を多くの人に伝え、一人でも多くの人を助けたい。防災を学ぶことがこんなにも大切だということを知ってもらいたい。それがこの2年間学んできて思ったことだ。自分ができることは限られているかもしれないが、できることから少しずつやっていきたい。それが環境防災科で学んできた使命だと思う。

経験のない私にできること

坂口 陽菜

1 はじめに

1995年1月17日、午前5時46分、淡路島北部を震源とするM（マグニチュード）7.3、震度7の地震が神戸市を襲った。神戸の街を壊し、6,434名の命を奪った阪神・淡路大震災。私は、この体験をしていない。阪神・淡路大震災のような恐ろしい体験をしていないことは幸せなことかもしれない。しかし、私が生まれ育った神戸で多くの人が亡くなり、苦しんだ事実を風化させてはいけないと思う。体験していない私なりに、阪神・淡路大震災を語り継いでいきたい。

2 Yさんの話

(1) 不思議な体験

あの日、Yさんは、家の1階で寝ていた。立てないくらいの揺れがYさんを襲った。地震で1階は潰れたが、僅かな隙間から逃げようとした。2階には、Yさんの両親がいた。両親の安否確認をとるために、今まで出したことないような声で叫んだ。しかし、水道管が破裂し、水が噴き出る音で安否確認をとることができなかった。いつもは何となく「おはよう」と言っているけれど、この時は聞こえなかった。何度も叫び続け、やっと両親の声が聞こえた。その時、声が聞けてすごくうれしかった。

家族の安否が確認できて安心し、Yさんは隙間から逃げようとした。すると、近くにあった小さな頃すごくお世話になったYさんの祖父母の仏壇から「私たちを置いて逃げるのか」と声が聞こえた。気のせいなんかではない。はっきりと聞こえた。Yさんはその声を聞いて、遺影だけでも持って逃げようと取りに戻った。その瞬間、余震が起こり、Yさん家の隣にある違法建築の建物が倒れてきた。Yさんの家は全壊となった。しかし、遺影をとりに行った部屋だけは崩れなかった。もし、声が聞こえず仏壇の部屋に戻っていなかったら、Yさんは2階の下敷きになっていただろう。なぜあの時、偶然声が聞こえたのか、なぜあの時、仏壇の部屋だけは壊れなかったのか、すごく不思議だ。その後、Yさんは、1階から穴を掘って脱出した。

(2) お茶碗リレー

神戸の街は火の海となった。Yさんの家の近くも火災が相次いだ。Yさんの家は火事にはならなかったので、無我夢中でほかの家の消火活動に参加した。「家の下敷きで、すでに亡くなっているが、無傷で外へ出してあげたい。」「私の家の火を消して。」などの声が街中から聞こえた。最初、Yさんはバケツを使ってリレーをしていた。しかし、別の場所の消火活動に参加している人にバケツをとられてしまい、水をくむものがなくなった。みんな我が一番になってしまっていた。Yさんは、少しでも火を消したい一心で、近くにあったお茶碗でお茶碗リレーをした。こんなもので消えるわけがないことは十分わかっていた。それでも、火を消したいと懸命に消火活動に励んだ。あの時、何時間消火活動をし続けたのだろうか。自分でも覚えていないくらい消火活動に取り組んでいた。「だいぶ水をくみましたね。もう消えているだろう。」と隣でお茶碗リレーをしていた人と話して後ろを振り返ると、まだ火は勢いよく燃えていた。ほかの家も消火活動をしているため、今度は水の取り合いになった。そして、ついに水は無くなってしまった。

その後、亡くなってしまった方々のご遺体は、近くの高校の遺体安置所に運ばれた。そこには1人1人ではなく、1個1個のご遺体が運ばれているようだった。物ではないのはわかっていた。しかし、物を扱うようにご遺体は運ばれていた。

(3) 歴史はここから始まった

阪神・淡路大震災が発生する前、Yさんは日産の人事課で働いていた。他府県に行って仕事をするが多かった。しかし、阪神・淡路大震災をきっかけに神戸が傷ついたため、「自分の自宅がある神戸で何かしたい」という気持ちが強くなり、今は実家で整骨院をしている。整骨院をすることで、今まで出会えなかったたくさんの人と出会うことができた。阪神・淡路大震災を通して、Yさんのあらたな歴史が動き始めた。

(4) わたしたちへのメッセージ

阪神・淡路大震災でYさんは、小学校・中学校・高校すべての卒業アルバムがなくなった。Yさんの母は、新婚旅行など思い出の写真がすべてなくなってしまった。写真や物は、いつなくなってしまうかわからない。しかし、今の私たちはスマートフォンですぐに写真を撮っている。スマートフォンで写真

を撮ることもいいけれど、まずは、心のシャッターを押すことが大切だ。Yさんの母は、言っていた。「あれもなくなった、これもなくなった、しかし私の心は満たされていた。家族の絆で。」

3 父の話

父は当時、設計事務所に就職して2年目で、鈴蘭台に住んでいた。あの日寝ていると、象が走ったと思うほどの揺れが起きた。父の会社は、「神戸市測量設計協会」に入っていたため、地震が発生後、すぐに会社へ向かった。もちろん使える交通機関はほとんどなく、唯一、神戸電鉄が長田まで動いていたので、長田からは歩いて会社のある三宮に向かった。朝に家を出て、会社についたのは昼過ぎだった。まず会社について、三宮にある建物の様子を確認するために街を歩いた。会社の近くの柏木紙業ビルが倒れたという話を聞き、父はすぐに駆け付けた。その時「建物の下に人が挟まれている」という話を聞き、本当に怖かった。

震災後、最初に仮設住宅の用地を図る仕事を行った。父はほぼ毎日、寒いなか公園やグラウンドに行き、そこには何個の仮設住宅が建てられるのかを計算した。周りには寒くてうずくまっている人、不安を抱えている人など様々な避難者であふれていた。ほかにも、震災前に設計していた漁港の倉庫が崩れてしまったため、復旧工事の仕事を行った。地震により地盤がぐちゃぐちゃになってしまっていた。漁港へ向かい、復旧工事にどれだけのお金がかかるのかを計算するために、徹夜で毎日設計をした。

4 話を聞いて思ったこと

1人目のYさんは、私が行った整骨院で出会った。環境防災科の活動を新聞やテレビで見て、いつも応援してくださっている。Yさんのお話を聞いて、私はお茶碗でリレーをして消火活動をしたという話がとても印象に残った。阪神・淡路大震災当時、道が狭く、消防車が火事の現場に行けなかった話は何度も聞いたことがある。いろいろなところが燃えて町中が火の海になり、市民の方がバケツリレーを行っていた話も聞いたことがある。しかし、Yさんは違った。バケツではなく、お茶碗リレーだった。バケツと比べてお茶碗は、水をくむ量は少ないが、人を助けるために懸命に消火活動を行ったYさんはすごいと思った。私もYさんのように、どんな状況でも諦めず、人を助けられる人になりたいと思った。また、今まで阪神・淡路大震災の話を聞いても、写真を見ても、本当にこんなことが起こったのかと現実を受け止められず、想像ができないことが多かった。実際に町が火の海になったところを見たことがないため、火の海といわれても想像できなかった。しかし、Yさんの話を聞いて、少し想像できたような気がした。バケツもなくなり、水も少ししかない状況だったことを聞いて、どれだけ大変だったのか感じる事ができた。

2人目は、私の父から当時の話を聞いた。話を聞いて思ったことは、阪神・淡路大震災によってぐちゃぐちゃになってしまった町が、今の私たちが生活している町になる過程に、父が少しでも携わっていることは本当にすごいと思った。また、いま私たちが何不自由なく暮らせているのは私の父や会社の人が毎日徹夜をして一生懸命努力したからだ。そのことにすごく感謝している。

5 私の夢

(1) きっかけ

私の将来の夢は消防士になることだ。きっかけは3つある。1つ目は、昔からよく怪我をしたり、頭痛などで体調を崩してしまったりすることが多く、周りの人に助けてもらうことが多かった。そのため将来は、人に助けてもらうのではなく、私が誰かを助けられる仕事に就きたいと自然に思うようになったからだ。2つ目は、中学1年生の時にたまたまNHKで放送されていた東日本大震災の動画が印象に残ったからだ。津波が迫ってきてどうしたらいいかわからない要救助者を、消防車の中から引き上げてそのまま避難した消防士の動画だった。きっとあの時、消防士の人も危ない状況だった。しかし、目の前の命を見捨てず、懸命に救助している姿はとてまかつよく、私の憧れとなった。3つ目のきっかけは、私の父が消防署を建築することが決まったことだ。私の父は一級建築士をしていて、学校や病院などさまざまな建物の設計をしている。そんな父に消防署を設計する話が来た。父は家に帰ってくると、消防署の話や女性消防士の話を聞かせてくれたり、一緒にどちらのデザインがいいかを考えたりもした。そのため、私はもっと消防士という仕事に興味を持った。また、私は父をとても尊敬している。なぜなら、私の父が設計した建物が街の至る所にあり、その建物がたくさんの人の生活を支えているからだ。これは本当にすごいことだと思う。そのため、私はいつか父が設計した消防署で働きたいと思っている。私が消防士になるためには、自分の努力だけでは、叶わないかもしれない。しかし、絶対に消防

士になり、たくさんの人を救い、父の消防署で働けるように努力したい。

(2) 環境防災科

消防士は火を消す、救急搬送をする、救助活動をする以外に、防災訓練などを通して防災や減災を広めるという仕事がある。消防士を目指すまでの私は、消防士は火を消す仕事と思っていた。消防士を目指し始めて、防災や減災を広めるという仕事があると知り、広める前に、私が防災や減災について学びたいと強く思うようになった。そのため私は環境防災科に入った。わざわざ高校で防災や減災を学ばなくても、大学や就職してからで遅くはないと思う。しかし、高校生の私だからこそ感じることもあると思う。災害について小さいころに感じたこと、高校生で感じたこと、大人になってから感じたことを積み重ねることによって、より幅広い人の視野から防災のことについて考え、伝えられると思った。

環境防災科では、防災のことや消防士のことなどたくさん学んだ。学んでいくにつれ、自助の大切さを強く感じた。また、ボランティア活動などにも部活の休みを見つけては積極的に参加した。特に募金活動や地域の防災訓練に参加した。地域の防災訓練に参加することで、地域の方に私が知っていることを伝える機会が増えた。消防士の方とかかわる機会も増えて、実際にどんな活動をしているのか知ることができた。特に印象に残っているのは、私の住んでいる地域で行われている防災訓練に参加した時に「わかりやすく、楽しかったよ。家で復習しておくね。」と言われたことだ。すごくうれしかった。私はこの体験をしてから、消防士になっても地域の方に自分の知っていることを伝え、何より楽しく防災や減災を知ってもらえる活動をしたいと思った。また、消防士は災害のことに詳しい人が多い。しかし、その中でも、高校から防災を学び、いろいろなボランティア活動に参加してきた人は少ないと思う。だからこそ、私が高校で学んだこと、感じたことを生かした活動がしたいと考えている。

(3) 私らしさを生かして

私の長所は、人前でもはきはきと大きな声を出せることだ。中学生のころから体育委員や部活動の部長などをしていく中で、この声を活かした活動をしてきた。例えば、大人数に指示を出すときや、応援をするときにたくさんの人に元気を与えるなど、様々な場面で私の声は役に立ってきた。そのため、消防士になったらこの声を生かしてたくさんの人を救いたい。火災現場や救急現場は、車両の音や混乱による周りの音で指示や情報が聞き取りにくい状況になる。そんな状況でも、この声を生かして現場の指示や状況を冷静に判断し、1秒でも早く、1人でも多くの命を救いたい。

また、女性を生かして多くの人を救いたい。女性消防士は増えてきているが、まだまだ少ない状況だ。私が消防士になりたいという、「女性って消防士になれるの?」と聞かれることが多い。それくらい女性消防士の認知は低い。確かに女性と男性では体力面で性差があり、厳しいことも多いと思う。しかし、そんな消防の世界でも、女性だからこそできることはあると思う。例えば、ピリピリとした現場では女性ならではの視点や気遣いを生かし、被害者や負傷者に安心感を持ってもらえると思う。また、被害者や負傷者が女性や子供の場合は特に安心してもらえる。他にも、地域の防災訓練で女性が前に立って話すことで、消防に興味を持ってもらおうと共に、防災や減災という言葉をも身近に感じてもらえると思う。

阪神・淡路大震災や、東日本大震災、熊本地震など、日本では災害が多い。多くの人々が亡くなり、悲しく、辛い経験をしている。私はそんな人をこれ以上増やしたくない。これから先、もっと大きな災害が起こる可能性もある。そのため、私は自分なりに防災や減災を多くの人に伝え、私だからできると、女性だからこそできることを生かして、多くの人々の力になる消防士になりたい。

6 未来

将来、私が住んでいるところや日本、世界はどうなっているのだろう。想像すると、しみじみとした気持ちと不安な気持ちになる。これから日本は、オリンピックや万博など大きなイベントが開催される。しかし、それと同時に地球温暖化や少子高齢化、南海トラフ巨大地震など、心配なことも多くある。南海トラフ巨大地震は、30年以内に発生する確率が70~80%といわれている。30年後の私たちは50歳くらいだ。その時私は何をしているだろう。夢をかなえて消防士になり、現場でバリバリ働いているかもしれない、消防士とは違う職業についているかもしれない。もしかしたら結婚して子供がいるかもしれない。何が起こるかわからない。そんな世の中を生きていくからこそ、私は環境防災科で学んだことや体験したことを忘れず、未来に生かしていきたい。

阪神・淡路大震災では、道が狭く、消防車が入ることができず、火を消すことができなかった。そして、たくさんの死者が出てしまった。そのため、Yさんのようにお茶碗で火を消すなど、市民の自助・共助が必要だ。このことは、環境防災科や語り継ぐを執筆することで大切だと感じた。

環境防災科で過ごした3年間は、本当に濃いものだ。普通科に行っていればすることができなかった体験や、感じたことのない感情を持つことができた。また、ボランティアでたくさんの人に出会い、3年間ずっと同じクラスで頑張ってきたクラスメイトに出会い、私は大きく成長できた。これからクラスメイトとはばらばらの道に進む。しかし、私は私らしく、みんなはみんならしく、今まで学んだ防災を生かしながら頑張っていけることを願っている。将来どんな災害が起こっても、私たち環境防災科がリーダーとなり、1人でも多くの命、自分の命を守れる人になりたい。

7 最後に

現在、私は阪神・淡路大震災の面影のないとても住みやすい街で生活できている。そんな中で暮らしていると、自然と震災の記憶は薄れてしまう。震災の面影がなくなるほど、神戸の街が復興したのは良い事なのかもしれない。しかし、震災の教訓や体験は、この先ずっとなくなってしまうといけないと思う。神戸には阪神・淡路大震災を実際に経験した人が減ってきてしまっている。このままでは、阪神・淡路大震災が風化してしまうかもしれない。そうならないために、経験していない私なりにできることを見つけ、阪神・淡路大震災を伝えていきたい。

今回、この「語り継ぐ」を作ることができて、私は本当に良かったと感じている。なぜなら、この「語り継ぐ」が震災を風化させないための手段になることや、直接体験した人のお話を聞くことで、自分の持っている知識を整理する機会となったからだ。両親からはよく震災の話聞くことはあっても、ほかの人から聞く機会は自分で作っていかなければならない。「語り継ぐ」があったからこそ、両親以外のたくさんの震災体験や教訓を聞き、学ぶことができた。また、阪神・淡路大震災のような災害を繰り返さないために、災害を経験していない私なりに学んだことを広めていきたい、そう強く思うことができた。

語り継ぐ

坂本 秀斗

1 はじめに

阪神・淡路大震災から25年もの月日が流れた。「語り継ぐ」の執筆している私は、阪神・淡路大震災を経験していない。私が知っている知識は、語り部の方や両親から聞いた情報がすべてである。震災を経験している人がいなくなっても、風化させてはならないものだ。次の世代へと語り継ぐために私ができることについて書こうと思う。

2 地震の概要

発生年月日 平成7年1月17日午前5時46分

震源地 淡路島北部

震源の深さ 16km

規模 マグニチュード7.3

人的被害

死者 6,434名

行方不明者 3名

住家被害

全壊 104,906棟 (186,175世帯)

全壊・半壊・一部損害 計639,686棟

非住家被害 42,496棟

出典「阪神・淡路大震災について（確定報）（平成18年5月19日、消防庁）」より

3 祖母の話

1月17日の朝、外はまだ肌寒い日で地震が発生するまで眠っていた。突然、身体が揺り動かされ上下に弾む感じがして、とても起き上がる事が出来ず、咄嗟に布団をかぶった。家族も地震で起きてからは何が起こったのか訳がわからず、揺れが収まるまでとても長く感じた。揺れている最中は自分の身体が自由に動かさなかった。起床してからは部屋を見回し、台所へ出ようとする、食器や鍋、食器棚までもがすべて散乱し、足の踏み場もなくなっていた。そのこともあり、外に出るのが遅れてしまい、先に外に出ていた近所の方々が心配して見に来てくれていた。皆がパジャマ姿で出てきており、そのときは誰も状況が理解出来なかったが、家族や近所の方の顔を見ると安心できた。近隣では大きな怪我人もなく、元気に見えていた。しかし、時間が立つにつれて、周りが見えてきた、道路はグッサリと割れ、水道管が壊れて吹き出し、すぐに水が止まった。また、ガスや電気もすぐに使えなくなり、日常の生活が送れないストレスが日に日に溜まった。住んでいた垂水区ではまだ被害が少なく、早めに電気は回復し、テレビで状況を把握することができた。生活に必要な水は確保が大変で重たくて、多くは運べなかった。しかし、近くの中学生在がマンションの階段のところまで水を持って上がってくれた事もあり、嬉しい気持ちになった。1ヶ月くらいたった頃には近くに給水車が来てくれて助かった。また、食べものは他県からの炊き出しが来てくれており、他県のナンバーの車を見つけては感謝の気持ちになり、当時寒かったので温かい食べ物やボランティアの方々の励ましの言葉で心が温まった。3ヶ月を過ぎればライフラインが回復し、日常の生活を取り戻すことができたが皆が心に何かしらの傷や想いが残っているように感じた。また、地震の情報もテレビを見るまで把握できず、被災していない親戚のほう地震の状況をよく知っており、ラジオなどの準備が必要と改めて実感でき、当たり前前の生活の大切さや人の優しさが一番の力になった。ボランティアや支援してもらって分、これからの災害では募金などの形で恩返ししたい。また、亡くなった方々の分の日々を大切に生きていきたい。と言っていた。

4 感想

祖母の話を聞いて、安否確認が最優先だと思う。震源地から近く、電話など通じなかったため、親戚からは、死んでしまったと思われていたらしい。そのため、すぐに連絡する手段について知り、準備する必要があると考えた。様々な講義を聞き、携帯電話よりも公衆電話のほうが繋がりやすいと私は知っているが、家族は知らなかったのも豆知識の様な情報でも広める必要があると思う。また、今の時代は阪神・淡路大震災の時よりも携帯電話に依存している部分が多い。今の私も何をするにしても、まず携帯電話

使って調べる。携帯電話無しの生活では何も分からず、ストレスも溜まってしまうと思う。それは私だけの問題ではなく、依存している現代ならではの大きな問題だ。そのためには意識的に使用を控えるべきだが、いかに災害時に大変なのか、携帯電話が使えない時間が続いたらどうするのか、を考え方から少し変えていかなければならないと思う。また、災害時の人と人との助け合いの精神を尊敬したい。祖母の話にもあったが、中学生でも咄嗟に自分が出来る事を見つけることができていた。私も防災を学んでいる高校生として、出来る事を見つけれられるようになければならないと思った。当たり前の生活の大切さを考え、後悔の無いように生きていきたい。

5 阪神・淡路大震災の教訓

大きな揺れの場合は身の安全確保が第一、テーブル、机、ベッドの下などにもぐり、座布団や枕などで頭を保護する。また、家具の配置を工夫し、家の中に逃げ場としての安全なスペースを作る。寝室にはできるだけ家具を置かない。あわせて家具の転倒防止対策が必要である。身の安全を確保できたら、揺れを見てドアや窓を少し開けて脱出口を確保する。特にマンションや団地の鉄製のドアは注意が必要である。大きな災害のときに、最も頼りになるのは、家族や近所の人々。普段から地域の人々との関わりを密にしなければならない。1人1人がばらばらに対応するより、協力し合って防災活動にあたるほうが効果的で、日ごろから地域活動を重視し、自主防災組織にも進んで参加することが必要だ。眼鏡、入れ歯、補聴器など、あらかじめ予備のものをつくり、非常持出袋の中に入れておく。携帯電話も混雑や電池の容量で使えなくなるかもしれないため、災害時は公衆電話が使えるように、あらかじめ10円玉などの小銭を用意しておく。

家具の固定など、やろうと思えばすぐに出来る事を「めんどくさい」「また今度」など、そんな理由で行動に移さないのは危険だ。少しのお金でも対策できることがあり、命よりも大切なことはないから今日、明日にも起こりうるかもしれない災害に直ぐさま備える必要があると思う。また、阪神・淡路大震災が発生した年はボランティア元年とも言われている。震災が発生せず、ボランティアが行われていなかったら、今ほど防災について学ぶこともなく、環境防災科も生まれていない。間接的ではあるが、環境防災科として防災の知識を深め、ボランティアへ積極的に参加することが、阪神・淡路大震災を風化させない為の活動になると思う。

6 環境防災科に入学してからの変化

私が環境防災科に入学して成長できた点は3つある。

1つ目は、防災について詳しくなり、興味を持つことができた。入学当初は防災にはあまり興味がなく、講義や授業も憂鬱だった。しかし、防災の勉強を進めていく上で、自分の中で講義の内容と震災当時を関連して考えることができた。そして、防災を学ぶ大切さを意識するができた。また、真剣に取り組むことで今まで見えなかった考え方や理解ができるようになる。今後、防災以外のことでも仕事も、やってみる姿勢の大切さを知り、全力で取り組むことの大切さを知ることができた。

2つ目はニュースを見るようになったことだ。今まではテレビをつけてもバラエティー番組しか見ないで、たまたまニュースがつけば見る程度だった。そんな私がニュースを見るようになったのはこの学科に入ってから心がけた。講義や授業で学ぶまでは環境防災科に入っても「なんとかなる」「実際に体験することはない」と思っていた。災害について深く知っていく中で、改めて災害の恐怖や巨大さについて考えることができた。また、クラスで「あのニュース見た？」など災害について話している姿を見て、私もこのままではいけないと思うことが多く、改めて情報を得ることの大切さを学んだ。

3つ目は、人前で話すことに慣れたことだ。中学までは発表する機会も少なく、有志で集まった人だけが話すことが多かったが、入学してからは、グループで話し合ったり、授業でスピーチをしたり、そのような機会が多く徐々に慣れることができた。自分なりの考えを持ち、知らない人にも話せるようになり、自信をもって意見することができるようになった。

7 ボランティア

私は3年間でいくつかのボランティア活動に参加した。授業で行った1.17のイベントや聴覚支援学校、幼稚園に行くこともあった。その中で、子供が小さい頃から、防災を教えることが大切だと思った。小学4年生のクラスに出前授業をした時、災害なんか起きないと思い、あまり真に受けていない子もいた。一方で、幼稚園の子どもたちへ防災を教えに行った時は、防災にも遊びにも全力だったイメージがある。全力で防災ダックなどにも取り組んでいて、吸収も早いと思った。また、小さい子は親御さんと話す機会が

多く、親御さんにも防災意識がつくと感じた。簡単な内容でも楽しんで聞くほうが身につくと考え、これから、防災を教えるときは、座学だけではなく、体験型の防災を取り入れたいと思う。

8 私の夢

私は将来、高校の体育の先生になりたいと考えている。高校1年生の時までは、体育の先生か福祉系の仕事がしたいと思っていた。高齢者や障害を持った人の世話、看護をしたいという気持ちがあった。それでも体育の先生になろうと思ったきっかけは、単純に運動好き、ということや人に自分が得意で好きなことを伝え、教えたいと思ったからだ。そして、一番大きな理由は、高校生活3年間で学んだ防災の知識を発揮し、知らない人に伝えられる職種だと思ったからだ。高校の先生になりたいと考えたのも、高校生ほどの年齢ならばボランティアに参加できる時間や機会に恵まれており、尚且つ、行動力や自らの意思を持っているからだ。子供でも大人でもない高校生にしかできないことや、災害時の活動についても一緒に深めていける。また、私は高校からウエイトリフティングを始めた。マイナースポーツの楽しさも伝えていき、指導が難しいスポーツだからこそ、経験者の私が携わっていきたいと考えている。

9 私の夢と防災

将来やりたいことが3つある。

1つ目は、運動を通して災害時、すぐ逃げられるような体づくりの手伝いをする事だ。いくら防災についての知識があっても、実行できるだけの体力や力がなければ意味がない。運動に関する仕事に就いた自分にしかできないこと、基礎体力の向上に携わっていきたいと考える。例えば、避難訓練などに参加し、自分では完璧だと思う人がいたとしても、実際に災害が発生した時も同じだけの安全な場所に逃げ切れるのか。天気、気温、避難バックを持って同じ動きができるのか、体力の推進を通して、考えてもらえるように呼びかけをすることが、私にできる最良の防災を広める活動だ。

2つ目は、避難所の運営だ。高校は大体避難所になる。その際の設定や運営にも積極的に携わりたいと思う。例えば、災害用に準備してあるものや食料はかなりの量があり、日頃から鍛えて人一倍動けるようにしたい。実際の避難所の設定や運営はできなくとも、「力仕事は任せてください」と、ぱっと見てわかるようなフレーズを胸に書き、自分の得意なことや役割をわかりやすく伝えることができると思う。

3つ目は災害が発生した後の体のケアに携わりたいと考える。災害で怪我をしてしまった人のリハビリや、高齢者や子供の健康に配慮した遊びなどを行っていきたい。体を適度に動かさないとストレスや心の面が暗くなったりするかもしれない。また、災害が起こったときには、無理をしすぎる人が多いと考える。顔を見て、無理をしているかどうかなどに、気づき、声かけを行いたい。そのような自分が得意とすることや専門とすることを生かせるような関わり方を持ちたい。

10 最後に

この「語り継ぐ」を書くまでは、祖母に阪神・淡路大震災の話を聞こうなんて思いもしなかった。祖母や私の住んでいる垂水区は被害が少なく、正直、語り部の方々の様に話す体験や考えなどあまり持っていないと思っていた。しかし、祖母なりの考えを聞くことができ、話自体を身近に感じる事ができた。祖母が私に伝えたかった事は、いくら防災を学んでいてもその状況にならないとできないことがあり、暑さや寒さ、水、食べものが不足していたとしても、人の心の温かさが一番大切だという事であった。祖母の顔を見ながら話を聞くと、講義よりも心に響き、改めて何が大切なのか考える機会になった。将来なりたい職業に就かなかったとしても、私は家族や友達を守れる大人になりたいと思う。環境防災科で3年間学んだ事を活かし、災害時だけでなく日常生活でも地域のリーダーとして社会に貢献できるような人になりたいと思う。3年間で防災を広めたり深めたりすることの難しさも知った。大規模で知識の共有ができなくても、近所の方々に伝える事はできる。私自身もっと身近である家族や友人だけは絶対に守れるだけの行動を起こせるようになりたいと思う。そんな風に考えることは今まで無かったが、これから防災とどう関わっていくのかを考えるきっかけになった。今までに、学んできた知識はある。しかし、体験したことはない。私自身の体験を語ることはできないが、今まで学んできたことを語り部の方の気持ちも考えながら、自分なりに理解して語り継ぐ事はできる。語り継ぐことは環境防災科に入った私の使命である。そして、災害で亡くなった方々の分も日々を大切に生きて行きたい。また、「ありがとう」「ごめんなさい」など感謝の気持ちを素直に言えるような人になりたいと思う。

「つながり」が「つながり」を呼んで

先間 直樹

1 はじめに

私は平成13年に神戸で生まれた。もの心ついた時には、すでに神戸の街は復興を遂げており、実際に被災体験があるわけではないし、被災状況を見てきたわけでもない。だが、小さいころから家族の被災体験を聞いてきた。阪神・淡路大震災という悲劇を繰り返さないためにも、風化を防ぐためにも、私は「聞き手」から「語り手」になることができると思っている。

2 芦屋に住んでいた家族 離れ離れの被災

震災当時、私の家族は父、母、兄、祖母の4人家族だった。奇しくもその日は祖父が亡くなった2日後の朝だった。父は山の上にある寺で祖父の葬式の準備を泊りがけでしていた。母はお腹の中に私の姉を身籠っており病院にいた。そして祖母と当時2歳の兄、兄の面倒を見るために来ていた叔母の3人で芦屋にある自宅にいた。

(1) 祖母の被災体験

私の祖母はいまから2年前の春に亡くなった。87年という永い人生に幕を閉じた。私は幼いころから祖母から震災の体験談を聞いていた。

「1階にはおじいちゃんが居るから、今晚は2階で寝ようか。」祖父の葬式を控えていて、いつも祖父が1階で寝ていたこともあり、地震発生前夜の16日は祖母と叔母と兄の3人で木造建築の2階で寝ることにした。午前6時にもうすぐなるころだろうか、「ドンッ!」という地面の下からの振動に目が覚めた。いままで体験したことのないほどの激しい揺れに悲鳴が上がった。祖母自身も一体何が起きているのかも分からないまま、天井を見ると家が崩れているのがわかった。「危ない!!」と叔母と一緒に兄に覆い被さる形をとった。芦屋にあった自宅は倒壊した。2階が1階の高さになり、1階は見えなくなった。祖母と叔母は自力で倒壊した家屋から脱出したが、兄は瓦礫の中に生き埋めになった。運良く近くで救助活動をしていた郵便局員の男性に助けられた。兄は無傷で瓦礫の山から出されたとき、笑っていた。

(2) 父の被災体験

父は祖父の葬式の準備をするために、祖父の遺体とともに灘区にある梅仙寺という寺にいた。父も祖母と同じように、いままで体験したことのないほどの激しい揺れに襲われた。倒れないようにバランスをとることで精一杯だった。高い標高だったこともあったからか、建物自体は倒壊することなく、けがもなかった。今みたいにテレビやインターネットもない時代で、ラジオからの被災情報も少なく、芦屋の実家に被害が及んでいるとは考えていなかった。

(3) 母の被災体験

母は当時、お腹の中に私の姉を授かっていた。しかし、切迫流産の危険性があったため入院していた。泊まっていた病棟が新しく建設されたところだったが、祖母や父と同様に激しい揺れに襲われた。母は真っ暗な病棟の中で埃まみれになりながら、必死に他の入院患者を率いて近くにあるパン屋を目指した。母は「私が助かったのは泊まっていた病院が新しかったからだし、被災した時には正直な話、お腹の中の子供は諦めていたから、震災後に元気に生まれて今日まで育ってくれていることは奇跡でしかない。」と語る。

(4) 祖父の火葬とその後

被災後、私の祖母と叔母、兄、母は、当時父と一緒に寺に居た叔父の車に乗せられて、一旦寺で待機することにした。こんな状況だから葬式は行えないにしても、何とか遺体を骨にして行動をとることにしたというのが家族の望みだった。しばらくすると葬儀屋が寺に到着した。霊柩車も一緒だった。震災直後、ラジオやテレビなどで報道される死者は増すばかりだった。このままでは、被災者の遺体が次々と運び込まれ火葬は間に合わないと言った葬儀屋は説明した。しかし地震で近くの火葬場は営業しておらず、北区の鶴越にある火葬場で祖父を火葬することとなった。家族全員は、もちろんのことボロボロのパジャマ姿だった。そのため被害の少なかった地域に住んでいた親戚一同は、目を丸くして「何があったんや。」と口をそろえて家族を心配した。火葬を終え、家族は避難所に向かおうとしていたが、神戸市葺合町に住む親戚夫婦が「よかったらうちにこないか」と声をかけて下さり、長い一日は終わりを迎えた。その後、大阪の豊中市に住む親戚がマンションを一室貸してくださり、被災後の生活に苦しみこと

は無かった。そのため、私の両親は「僕らはとってもラッキーな家族で、家こそ全部崩れたけど家族の中で誰も死んでない避難所生活もしていない。だから僕らに被災者という言葉は相応しくないというか、合っていないというか、震災後も他の被災者の人達に対しての申し訳なさを抱きながら生きてきたかな。」と語る。

3 被災体験を聞いて感じたこと

私自身、幼いころから家族の被災体験は聞いてきたが、環境防災科で様々な知識や情報を得たいまの私にとっては、昔とは話を聞いた際の印象が大きく変わっていた。両親は、自身の被災体験はたいしたことがなく、実際に学校の体育館で避難所生活を送っていた被災者に申し訳ない気持ちでいっぱいだったと言っていたが、その気持ちはサバイバーズ・ギルト(事故や災害などの生存者が抱く自責の念)の一種なのではないかと私は考えている。また、被災体験を聞く中で、偶然が重なって命が助かったということもあったかもしれないが、それでもやはり「つながり」というのは本当に大切なものだったと思った。

4 環境防災科

(1) なぜ環境防災科を選んだのか

幼いころから家族の被災体験を耳にしていた私は、防災への関心は周りよりも高かった。しかし、生まれてから大災害というものを体験したことが無かったため、リアルタイムで災害が起こるというのは考えていなかった。「実際に地震なんて人生の中で体験しないんじゃないのか。」と思っていた小学校3年生、もうそろそろ4年生になるといった頃だろうか。東日本大震災が起きた。大きな波が東北の大地を襲っていた。テレビの中継に当時の私は圧倒された。この大きな津波が私の街を襲ったらどうなるだろうのだろう。災害はやはり恐ろしい存在だと再認識した日になった。東日本大震災から2年が経過し、震災当時の印象も薄れてきて、地震はやっぱり起こらないのではないのか。そんな風に考えていた矢先の出来事だった。ある休日の朝、地震のせいで目が覚めた。自宅が軽量鉄骨で作られたということもあったからか、震度4の地震でも当時の私は恐怖感を抱いた。だが、翌朝学校で友人と話している中で認識の差が見えた。友人の多くは、「怖かった」という感想よりも「面白かった」や「なんか楽しかった」という感想の方が多かった。普段めったに体験することがない地震を、まるでテーマパークのアトラクションに乗った時と同じように語っていたのだ。衝撃が走った。このとき起こった「地震」も、阪神・淡路大震災や東日本大震災でたくさんの人の命を奪った「地震」も同じなのに、認識の違いでここまで差が出るものなのだと。同じことが、中学3年の秋ごろに起こった。鳥取県を震源とする最大震度6弱の鳥取中部地震が神戸を襲った。私が住んでいる地域は震度3程度の揺れだったが、やはり恐怖感はあった。だが、当時の周りの反応も、小学生のときの反応と同じだった。翌日の学校の会話ではほとんどの人が、笑い話で済ませていた。また、友人の中には「防災なんて無くても生きていけるだろう」と言う人も居た。こんなことではだめだ。心からそう思った。もしも自分が住んでいるまちを災害が襲ったときに、周りの人間が生き残る方法を何も知らないで死んでしまうとしたら、それはどんなに辛いことだろう。そんな思いから、私はすぐに舞子高校環境防災科への進学を決意した。

(2) 入学後

入学後から現在まで、環境防災科での防災を中心とした様々な学習や活動を通して一番印象に残っていることは、やはり東北訪問である。私は合計で4度参加した。1年での最初の東北訪問は、絶対に行かなくてはならないという使命感や自分の中で目標を立てるということもなく、ただ単純に被災地の現状を知りたいという、なんとなくの気持ちで参加した。3日間、過密なスケジュールでの活動を通して、私がいつも送っている当たり前の日常は、被災者にとっては当たり前ではなくなった日常で、毎日生きていることに感謝して生きなければならないという「命の大切さ」を学んだ。お話や講義、研修では被災地を知ることが出来たが、実際に被災地をこの目で見ても、被災地の現状はなんとなく分りそうだが分らない。この感覚は直感だったかもしれないが、2年の夏になっても続いた。被災地に赴いたことはあっても、現状を語ることは出来ないもどかしさは心のどこかに残ったままだった。そんな中、私にチャンスが舞い降りてきた。それは2年の冬の宮城県訪問だった。学校で先生から話を聞いた瞬間、自分のなかで東北の現状を見たいと思った。実際にこの訪問が、私の東日本大震災に対する思いを一層深くする活動となった。毎年夏に参加している東北訪問とは違い、ゆっくりと被災地の現状を見ることが出来た。訪問の際、宮城県での引率をしてくださった、東北大学の齋藤幸男先生が仰っていた言葉が深く印象に残っている。「NHKのドラマとか、最近は東京オリンピックのことばかりで、東北のことをやらなくなってきている。たしかにオリンピックに向けて国民を盛り上げることは良いことだろうけれ

ど、なんとなく、だんだんと東北のことが忘れられてきている気がして寂しいんだよねえ。」この言葉は、私が東北訪問を続ける理由を教えてくれた気がした。それは、東日本大震災の被災の記憶や記録の風化を防ぎ、神戸の人々をはじめとする1人でも多くの人に、この記憶を語り継ぐことだ。私がいままで訪問させていただいた東北の地域は少しずつ建物の復興は進んでいるが、目に見える復興だけでなくこころの復興がこれからの課題になると思う。だからこそ私はこれからも東北とつながり続けたいと思う。

5 夢と防災

(1) 社会福祉士になりたくて

私が幼稚園に入園した頃から、私の母は訪問介護(ホームヘルパー)の仕事を始めた。介護福祉士である母の姿を近くで見て育った私は、自然と「福祉」という職業の分野に興味を持ち始めていた。自分もいつか母のように高齢者の方々と関わる福祉の仕事に就くのだろうと心の中では思っていた。中学2年生の秋ごろに、「トライやるウィーク」という職業体験で高齢者介護施設に行くこととなり、念願の福祉職を体験することとなった。体験を終えて、自分が思い描いていた福祉職と当時体験した介護職は何かが違う気がした。福祉には関わっていきたいが、介護職をしたいわけではないことに気付いた。そのことを当時の担任の先生に相談したところ、自分が今まで目指してきた母と同じ「介護福祉士」とは別に、福祉の仕事を総合的に理解し、ニーズを必要とする福祉サービス利用者の方々の相談役である「社会福祉士」を勧められた。自分が目指してきた何かが見つかったようでうれしかった。

「将来の夢」というものが明確に決まったのと同時期に、友人が不登校となった(これより不登校になった友人を仮にAとする)。Aは学校に来ることも、家から出ることさえもしなくなっていた。当時の私の周りの環境として「引きこもり」や「不登校」という存在は、クラスに1人や2人居てもおかしくないような状況だった。周りの人間が不登校のクラスメイトのことを深く心配することは稀だったと私は記憶している。私もその1人だった。Aに会った際も少しだけ学校に来るように言うだけで、その子のことを深く心配して悩むことはあっても、なにか行動に移すことはあまりしなかった。いま思えば自分に自信がなかっただけかもしれない。ただ、その友人は少し変わっていた。普段は引きこもっているのに、地域のボランティア活動には参加していたのだ。Aは家族が地域のお祭りや行事のボランティアに参加していたこともあり、引きこもりになった後でも変わらずに地域と関わり続けていた。そのときのAが私にはとても輝いて見えた。そして、そのときにふと思った。こんなにも地域と関わりを持ち、輝いている人間でも学校に行っていない、家から出ていないという理由で、将来社会で生きていくことが難しいなんて、どこかもったいないと。社会の中にAと同じような苦しみを持って、深く悩む人がいるならば救いたいとも思った。この日から私の夢は、社会福祉士になって引きこもりやニートの人々を社会復帰させることに決まった。時が経ち、高校生活を送る中で1つの朗報がある。それはAが現在は通信制の高校に通いながらアルバイトも行っており、順調に社会復帰への道を歩んでいることだ。

様々なボランティア活動に参加することで、自分の夢のためのきっかけやヒントが見つかるのではないかと考えたことも、普段からボランティア活動に力を入れていた舞子高校環境防災科に進学を決めたもう1つの理由であった。

(2) 環境防災科での学びの中で

私は引きこもりやニートの人々を社会復帰させるために大切なことを、この高校生活や環境防災科での学びの中で見つけてきた。それは、「地域社会におけるつながり」を大切にすることである。ではなぜ、つながりが大切なのか。そのヒントは高校2年の冬に見た、あるテレビ番組の特集にあった。その番組では、引きこもりの現状について特集を行っていた。あまりインターネットや書物などでは出ていない引きこもりへの支援についての情報を得ることは、私にとって大きな刺激になった。その特集の中の引きこもりである男性の言葉が印象に残っている。「つながりが無い。そのことが自分を一層不安にさせる。」この言葉を聞いた瞬間、自分の中にあつた将来取り組むべき課題に対して何の情報も得ることが出来ていない現状に明るい光が差した気がした。将来の夢を叶え続けるための大きなヒントを得たのだ。自分の夢が確かなものになったとき、以前より一層深い使命感が自分の中に芽生えた。しかし、それは重荷ではなく未来への明るい希望と、自分でも引きこもりで困っている人々を助けることができるという充実感に満ちたものだった。自分の夢に対して積極的に物事を考えられるようになってからは、新しい発見の日々が続いた。ある夜、過去に受けた講義のレポートを読み直していた際に、またひとつ大きな発見をした。それは、地域社会において顔見知りの関係があることで、災害時に共助を行

しやすいという考えである。「これだ。」と、以前特集で見た引きこもりの現状と繋がった気がした。このことから、私は引きこもりの人々を救う方法を思いついた。もしも、引きこもりの人々が「社会」へ復帰することができなかったとしても、「地域社会」の中につながりを持つことで、地域社会で生きていくことが出来るのではないか。平時から顔見知りの関係を築くことで災害が発生しても引きこもりの人々が孤立してしまうことは防げるのではないか。このような状態を地域社会の中で定着することが出来たら、引きこもりの人々は自ずと社会復帰できると考えた。地域社会におけるつながりを築く方法としては、将来私が社会福祉士として引きこもりの人々と一緒に、地域のお祭りやゴミ拾い(清掃活動)などのボランティア活動に参加することを思いついた。そうすることで、地域の温もりや、つながりを直接感じてもらえると考えたからだ。この考えを地域社会に定着させるためにも、私は今後の進路で福祉について学んでいきたいと考えている。

6 おわりに

(1) 防災とは

ここからは私自身が綴ってきた「語り継ぐ」のまとめを書いていきたいと思う。今日の日本社会では地球温暖化が原因とされる異常気象や、地震、津波、噴火などの災害がいつ起こってもおかしくない状況にある。日本は災害大国と呼ばれている。だが、いつ私たちを襲ってくるかわからない災害に怯えていても仕方がない。その災害から命を守るためにあるのが、「防災」や「減災」という考えだ。防災へ取り組まなければならない時期を迎えているにも関わらずに、私の友人の中には防災なんて無くて生きていけると豪語する者もいる。私にとってその言葉は辛辣な言葉だった。こんなことでは駄目だといつも思う。環境防災科での学びを活かし、防災情報の発信者の一人として、地域社会に防災や減災の考え方を伝えていく義務が私にはある。過去の災害を語り継ぐことで災害の風化を防ぎ、人々の防災意識を維持することと同じように、防災を社会に広めることは大切だと考える。環境防災科での学びや、様々なボランティア活動などの行事に参加することで私は常に防災とは何かと自問自答してきた。もちろん答えは1つではないし、これが絶対的な定義だというものもない。その上で私は私の考える防災を示したいと思う。

「防災とは、この災害大国と呼ばれる日本で生き抜く力をつけることだ。」この思いを胸に、今後は福祉と防災を繋げる役割を担っていきたい。

(2) 「つながり」が「つながり」を呼ぶ

ここまでの文章を見返しても防災において重要なことは、やはり「つながり」であると考えている。私の家族が阪神・淡路大震災発生当時に被災した際にも、葬式に参列した親戚に後の生活を助けてもらったことは、先間家とその親戚の間に血縁関係というつながりがあったからであろうが、平時から助け合って生きてきたという深い関係があったからだとは私は推測している。震災後、私の叔父はつながりについて、手記にこう記してある。「災害という未曾有の事態であったにも関わらず、被災した私たちを助けてくれた親戚には深く感謝している。このつながりには私たちにとって心強いものであり、大きな財産である気がする。無形文化財というものがあるが、これこそ無形財産ではなかろうか。」この言葉のようにつながりには財産になるのだと感じた。また、毎年夏に東北訪問に参加する際に、宮城県石巻市にある津波で大きな被害をうけた大川小学校での出来事を語り継いでいる語り部の男性は「防災とは、震災が起きた、あの日を語ることであり、未来を語ること。また、普段から少しだけでもいいから地域と関わっておく。ちょっとしたつながり防災になる。」と語る。

このように、防災とは様々な形で多くの人と関わる機会を私にくれる。いままで私自身が神戸で、東北で、そして日本で築いてきた「つながり」を大切に、これからの一日一日を大切にして生きていきたい。

「語り継ぐ」

佐々 大晴

1 はじめに

1995年1月17日午前5時46分に阪神・淡路大震災が起きた。私は、その6年後の2001年に生まれたので、震災を経験していない。そして経験した人、「語り継ぐ」人が年々少なくなっている。しかし、この阪神・淡路大震災を風化させてはいけない。だからこそ、風化させないために私たち環境防災科が語り継いでいかなければならない。

私は母に話を聞いた。経験していない私だからこそ伝えられることもある。今から風化させないためにも、体験談を、そして私の思いを伝えようと思う。

2 阪神・淡路大震災

(1) 母の話

母は、祖父と祖母、兄、弟の5人家族だ。母の家は明石市西部にあり、海がすぐそこにある木造住宅の2階建てに住んでいた。阪神・淡路大震災発生時、家では祖母が1階で家事を行い、母は2階のベッドで寝ていた。祖父は漁師で、すでに船に乗っていた。そして祖父は船で被災した。兄と弟は家のはなれの2階で寝ていた。母は、最初の縦揺れが起きた時は誰かに持ち上げられた感覚だった。そして、横揺れで目が覚めた。起きた時はどう動いていいかわからず、そのまま動くことができなかったという。揺れが収まり、祖母が1階から母の名前を叫んだ。そして、1階に降りると食器棚から食器が落ちたり、高いところの物がたくさん落ちていたりして驚いた。離れにいた兄と弟はすぐに1階に。全員が1階に降りてきて4人の無事を確認した。「みんな無事でよかった。」と安心していたら、祖父は地震がきたら津波が必ずくると思い、急いで船から帰ってきてこう言った。「津波が来るぞ！荷物をまとめて上へ逃げろ！」と大声で叫んだ。そして、逃げる準備をしていると、テレビで「津波の心配はありません。」というアナウンスがあり、避難はしなかった。その後、長田など火事が起きている映像をテレビで見て、明石はまだ被害が小さかったのだと感じた。数日間、母は怖くて動けなかった。同じ地区の若者たちが「軽トラックに乗って長田へ行く」と言っていた。母と同じ年齢の22歳（震災当時）の若者が支援しに行くといい、母も行くことは可能だったが、母は怖くて動けなかったのでティッシュペーパーやタオルなどの日用品を渡して見送りをした。そして帰ってきた同級生たちは母にこう言った。

「直ちゃん（母の名前）、お前は行かなくてよかった。避難所はとても悲惨だったよ。」怖いと感じていたことがさらに恐怖を感じるようになった。その後、小学校の臨時教員として働く中で、先輩の先生にボランティアに行ってはどうかと勧められたが、結局怖くて行けなかった。そのことは、いつまでも後悔している。自分だけが怖い思いをしたのではないことはわかっていたけれど、行動に移すことはとても難しかった。そのため自分が環境防災科で震災について学び、それを語り継ぐ役割の一端を担っていることを、母はとても嬉しく思っている。

(2) 優しすぎた運転手さん

母の友人が阪神・淡路大震災で亡くなってしまった。その友人は母の高校の同級生で、長野へスキー旅行に出かけていた。そして、夜行バスで大阪まで戻ってきた。が、運転手は母の友人に尋ねた。「家はどこ？」と。母の友人は答えた。「明石です。」「明石か、そのまま乗っていきなさい。明石までいかなきゃいけないから。」と明石まで乗せていってくれた。しかし、その途中の高速道路で阪神・淡路大震災が起きた。母の友人も運転手も亡くなってしまった。運転手さんが優しすぎて母の友人は亡くなってしまった。このお話をしてくれた母は最後にこう言った。「震災に“もし”はない。もし運転手さんに家を教えなかったら友人は亡くなっていない。言っただけしょうがないけれど“もし”運転手さんが優しくなかったら、“もし”電車で帰っていたらと考えずにはいられなかった。」と話した。

3 将来の夢

(1) きっかけ

私の夢はスポーツトレーナーになることだ。その夢を持つようになったきっかけは2つある。1つ目は、運動することが大好きだからだ。私は保育園のときから運動するのが好きで、暇があったらよく近くの公園で野球やサッカー、バスケットボールなどいろいろな運動をしていた。祖父がマラソン好き、父が野球好きということもあり、小学校まで走ったり、野球をしたりすることが多かった。2つ目は、

からだについてもっと知りたいと思ったからだ。私は小学校、中学校とたくさんのけがをした。もしかすると、自分自身がからだのことをもっと詳しく知っていて、ストレッチなど入念にしていたらこれまでのけがを未然に防げていたのかもしれないと思うと、からだのことをもっと知っておけばよかったと後悔している。そのため、スポーツトレーナーになって選手たちの役に立ち、けがをさせないからだづくりをしたいと思う。

(2) 防災の関わり

スポーツトレーナーは、どのような点や場面で防災と関わってくるのか。それは2つあると思う。1つ目は、何か災害が起きてしまったときにけがをしてしまっている方がいたら、どこをどうけがしてしまったのかを聞き、できる範囲で応急措置をして少しでも治るようにしたいと思う。消防や医療関係の方に出るだけ手間を取らせないようにということも考えていきたい。2つ目は、日常での会話だ。スポーツトレーナーは選手たちとの信頼関係があり、気軽に話し合える人でなければならないと思う。そして、気軽に話すときに、自分がこの環境防災科で学んだことを少しでも伝え、災害時にきっと役立つのではないかと考える。

4 環境防災科

(1) きっかけ

私がこの環境防災科に入ろうと思ったきっかけは2つある。1つ目は、中学校の時に舞子高校に環境防災科があることを知って、環境防災科の説明会に行ったことだ。説明会を行っているときに地震が発生した。その時私はどうしてよいか分からず焦っていた。環境防災科の生徒と先生方が、「椅子の下に入って!」や「落ち着いてください!」など私たちに大きな声で言った。さらに驚いたことは、地震が起きた瞬間に窓とドアを開け、万が一のことを考え避難経路を確保していたことだ。こんなに迅速に対応できるのはすごいなと思った。私はその時、「こんな先輩方みたいになりたいな」と思った。2つ目は、当時の将来の夢が先生になることだったからだ。先生になって、環境防災科に入って学んだことを、震災をまだ経験していない子供たちに語り継ぐ。そうすることによって防災意識が高まり、風化させないようにできるのではないかと考えた。そして避難訓練の実施を多くしたり、その大切さを知ったりしてほしいからだ。

(2) 東北訪問

私は東北訪問に1年生、2年生と行かせていただいた。

1年生では、人生で初めての東北で、先輩方との接し方や地域との交流がうまくできるのか緊張があった。しかし、事前指導から先輩方が優しくしてくださり、学ぶことができた。印象に残ったことは2つある。1つ目は、多賀城高校との多賀城市周辺のまち歩きと、高校生たちとのフィールドワークだ。多賀城高校は、この舞子高校の環境防災科につづき、全国で2つ目の防災科である災害科学科という防災学科がある。多賀城市周辺の街あるきではイオンの最上階に行き、東日本大震災の時にそこから撮った動画を見させていただいた。津波が押し寄せ、車や瓦礫などが流されていた光景はとても衝撃的だった。現在のイオンから見た風景はとても復興が進んでいた。同時にまちの回復力はすごいなと思った。まち歩きをしていくと、東日本大震災で津波がここまで来たということを示す標識が至る所に設置してあった。それは、まち歩きの最後の駅の近くの電柱までついていて、津波の威力がどれだけ強かったのかを物語っていた。多賀城高校とのフィールドワークは、災害時の対策や私たちが今すべきことなどを話し合った。時間が押していて少ししか話し合うことができなかったが、決められた時間で意見を出し合うことができた。多賀城高校の生徒の皆さんはとても優しく接してくれ、とても良い機会になった。2つ目は、大川小学校へ訪問したことだ。事前指導やバスの移動時間などで大川小学校について学んだ。実際に大川小学校を見て、事前指導やバスの中の映像だけでは分からないものが大川小学校にはあった。建物は骨組みしか残っておらず、津波の恐ろしさを知った。そして東日本大震災当時、大川小学校に通っていた娘さんを亡くされた佐藤さんのお話を聞いた。娘さんがいつも楽しく学校へ行っていた日常生活のことを話してくださった。佐藤さんのお話を聞いて、とても辛く何も言えなかった。このようなことが二度とないように、風化しないように語り継いでいる佐藤さん。私はそんな佐藤さんの話に感銘を受けた。もし私が佐藤さんのように娘を亡くし、普段通りの生活を無くしていたとしたら、語り部をしよう、伝えようとするだろうか。精神的に病んでしまったり、心が痛くなったりして語り部はできないと思う。佐藤さんも同じようなことを思っていたと話したが、とても強くてすごい方だなと思った。「語り継ぐ」ことは大切なことだとあらためて感じた。

2年生になり、2回目の東北訪問に行かせていただいた。この東北訪問で印象に残ったことは3つあ

る。1つ目は、2日目の夜に講義をしていただいた斎藤先生一緒にいた語り部さんの言葉だ。その言葉は「1日1つ大切な思い出を」だった。これを行うのは簡単ではなく、とても難しいことだと思う。この言葉を伝えるのもとても難しいことだと思う。だからこそ、自分自身で実行に移すことが大切だと感じた。今、「1日1つ大切な思い出を」思って毎日生活しているかという、実際にできていない。しかし、できないことはない。この「語り継ぐ」で印象に残ったことの1つとして、これから大切な思い出を1日1つ見つけたいと思う。2つ目は、ディスカバリーセンターへの見学だ。まず、ディスカバリーセンターについて少し説明したいと思う。ディスカバリーセンターとは、東日本大震災後、東松島市の未来を担う子どもたちへ夢と希望を抱き前へ進んでほしいという気持ちを込めて作られた施設だ。日本初となるアメリカ海洋大気庁（NOAA）が開発した科学地球儀 Science On a Sphere を設置している施設である。Science On a Sphere とはアメリカ海洋大気庁（NOAA）から送られてくる海・陸・大気・天体に関する情報を、4つのプロジェクターを使って映し出している。世界では20カ国以上設置されているが、国内では東松島市のディスカバリーセンターが日本初の展示だ。国内で日本初展示の科学地球儀ということもあり、とても楽しみだった。説明を聞いた後に、小さなホールでお話しをしていただいた。3つのプロジェクターが球型の地球を映し出したが、その時は仕組みが全く分からなかった。初めての体験で驚いた。今でもとても鮮明に覚えており、印象に残っている。さらに地球儀で、地球温暖化がこれからどうなっていくのかを数十年後まで見ることができ、地球温暖化の対策をしていた場合としていない場合の2通りを見せていただいた。これからの地球温暖化に気をつけていかなければならないと感じ、考えさせられた。3つ目は、「つながる」ということが大切だと感じた。被災者と1回関わっただけでは、お互いあまり分からないと思う。何度も関わり続けることで信頼関係が生まれ、被災者の方のためになるのではないかと考える。東北訪問では「つながる」ことの大切さを知った。

私は、学年ごとに目標を決めていた。1年生の時は「視野を広くする」ことだった。先輩たちに指示されたことをこなすことはできた。だが、やることがない時に自分ができることを考えて行動することはできなかった。2年生の時は「積極的に周りよりも早く行動する」ことだった。1年生でできなかったことを2年生になってできるようになりたかったからだ。目標を意識しながら東北訪問に参加したが、できなかったことも多くあった。東北訪問で防災をより深く知ることによって成長し、人間的にもとても成長することができたよい経験だった。

（3）環境防災科としての3年間

この環境防災科は3分の1が防災・災害に関する授業だ。特に印象に残っていることは2つある。

1つ目は、消防学校体験入校だ。救出救助・患者搬送・放水・煙中活動訓練を体験した。知識と技術だけを学ぶのではなく、消防士になった気持ちで取り組もうと思った。1年生では1日（初級）行った。初めてだったのでとても緊張した。午前中は体育館で、集団行動と基礎体力訓練（腕立て伏せなど）を行った。指導していただいた消防職員の方は、私たちよりも大きく通る声だった。はじめ聞いたときは「すごいな」と思った。しかし、「すごいな」だけで終わらずに、私も負けないで声を出した。午後からは外に出て体育館で行ったことの応用を行った。外での活動は体育館よりも声が響かず驚いた。この1年生の消防学校体験入校で学んだことは、基礎からしっかりと行うということだ。消防の方も、まずは基礎から学ぶからこそ、人を助ける消防士という仕事に就けるのだと感じた。2年生では2日（中級）行った。2回目だったので緊張はなく、楽しく学ぶことができた。2日合わせて印象に残ったことは、ホースを延長したり、巻いたりしたことだ。普段、「前方よし！ホース延長！」などと言う場面がないので、貴重な経験をすることができた。ペアの人と息を合わせて素早く迅速に判断することが大切だと感じた。ほかに、火事を想定して消火活動を班ごとに役割を決めて行った。チームワークも大切だと感じた。この1年生・2年生での消防学校体験入校で本当に貴重な経験をすることができた。普通科ではできない体験をさせていただいたので、体育の授業でより声を大きくしたり、家族や友達に学んだことを伝えたりと、日常生活で大いに生かしたいと思う。

2つ目は、長田区のまち歩きだ。阪神・淡路大震災の時、火災で多くの方が亡くなった長田区。震災当時の体験やどのように復旧、復興していったのかを聞きながら長田区周辺を歩いた。火災で特に被災した地域や火災時に火を止めた木がある公園などを歩いた。一緒に回ってくださった地域の方が、とても分かりやすく説明してくださり、当時の長田区の状況が分かった。今の長田区は完全に復興しており、長田区をより知ることができたよい経験となった。

5 最後に

私はこの環境防災科に入ることができて良かった。なぜなら、被害を減らす役割を果たせる人になれ

だからだ。日本は地震大国だ。必ず生きていれば災害に直面する。たとえ災害が起きても被害を減らすことはできる。今後、私たち環境防災科が防災のリーダーとなり、防災を「語り継ぐ」ことを担う役割になるべきだと考える。

特に今、注目されているのは「南海トラフ巨大地震」だ。「南海トラフ巨大地震」とは駿河湾から日向灘沖にかけてのプレート境界を震源域として、概ね 100～150 年間隔で繰り返し発生してきた大規模地震だ。前回の南海トラフ地震（昭和東南海地震及び昭和南海地震）が発生してから 70 年以上が経過した現在では、次の南海トラフ地震発生の切迫性が高まってきている。この 30 年で「南海トラフ巨大地震」が 70%から 80%の確率で起こる。この「南海トラフ巨大地震」に備えるために 1 番大切なことは「自助・共助・公助」だと考える。「自助」は、災害時に自分自身の命は自分で守るということ。「共助」は、地域の方や学校区域ほどの顔の見える範囲内における地域コミュニティで、災害発生時に力をあわせること。「公助」は、公的機関が個人や地域では解決できない災害の問題を解決すること、という意味がある。この 3 つの「助」があつての防災・減災だと考える。災害時の対応ではどれか 1 つだけあれば良いというわけではない。3 つの「自助・共助・公助」のすべてが大切だと思う。防災意識を高めるためには自分、家族や友達、そして地域の方へと広げていくべきだ。この環境防災科で学んだことを身近な人たちへ伝えていきたいと思う。防災を広めるのは私たち環境防災科だ。

「語り継ぐ」

佐藤 祐太郎

1 はじめに

私は、阪神・淡路大震災から6年後の2001年に生まれたため、当時のことを体験していない。阪神・淡路大震災について学んだのは、ほとんどが高校に入学してからだ。当時被災地だった場所に住んでいるものの、阪神・淡路大震災を現実味のあることととらえたことはなかった。そんな私が後世に語り継いでいけるのか不安はある。しかし私の周りには、阪神・淡路大震災を実際に体験した人がまだ多くいる。そのお話をもとに「語り継ぐ」の作成をする。これは、震災を知らない人から震災を知らない人への語り継ぎの場の一つである。

2 母の話

(1) はじめに

母は阪神・淡路大震災発災時に神戸市西区の伊川谷にある団地で、母の姉と2人で暮らしていた。

(2) 地震発生当日

母は団地の5階で寝ていた。急なすさまじい揺れを感じ一瞬で目が覚めた。すると自分の方にタンスが倒れてくるのが見えたので、寝返りを打つようにしてかわした。それから部屋を出るために戸を開けようとしたが、廊下に荷物が散乱して戸をふさいでいた。なかなか開けることができなかったが、しばらくすると開けることができた。家の中はあちらこちらに物が散乱していた。この時姉は、普段使用しているコンタクトレンズが見つからずに困っていた。団地を降りて、ひらけている駐車場に避難すると、多くの人が集まっていた。この時駐車場から何台かの車が出ていった。そのときはなぜかわからなかったが、知識のあった人がコンビニなどに食料を買いに行っていたのだと知った。余震は続いていた。それから、次第に明るくなり、余震も落ち着いてきたのでいったん家に戻った。テレビをつけると、長田や東灘といった被災地の映像が映し出されていた。母は当時、自分の住んでいるところの被害が甚大だと思っていたがそれは違った。また、親戚の家ではこの日に女の子が産まれた。

(3) 被災生活

家は無事だったので避難所には行かなかった。家の水道の水は止まったが、散水用の水を使うことができたのでそれを使った。しばらくすると、親戚から連絡があったので1度姉と山崎町に向かった。すでに、母の両親が死亡しており、女性2人での被災生活を心配してくれていた。普通なら1時間30分の道のりがルート規制などの影響で5時間近くかかった。親戚の家に着くと、その親戚の叔父さんが農協で働いていた関係で、物資を集める呼びかけをしていた。他にも被災地への支援を考えた動きがあった。しかし母は何もできなくて申し訳ない気持ちになったらしく、2、3日すると、水や食料をもらって神戸に帰った。それからは、当時歯医者で一緒に働いていた高校生を1か月ほど自宅に泊めていた。

3 父の話

(1) はじめに

父は、神戸市長田区の鷹取山の近くの自宅で被災をした。

(2) 地震発生当日

発災時は、仕事に行く準備をしていた。大きな揺れを感じたがその時は特に何も考えずに仕事場へと原付で向かった。しかし、外に出ると信号が止まっていたりガスの充満するにおいがしたりして、これはただ事ではないことが起こってしまったと気づいた。いったん仕事場に向かうのをやめ、仲のいい友達の家そのまま原付で向かった。2、3人の家を周ったがみんな生きていて、ケガもなかった。ちなみに、父はこの時なぜ携帯電話で連絡を取ろうとしなかったかは覚えていなかった。それから、もう一度仕事場に向かった。途中で交通法規が乱れているところがあり、逆走などをしないとたどり着くことができなかった。逆走をしても警察官に取り締まれることはなかった。仕事場についたが、周りが燃え盛っていて何もできなかったため、とりあえず帰った。それからは、自宅で友達とテレビのニュースを見ながらと過ごした。夜になると火事の炎が見えて、電気がなくても明るかった。

(3) 被災生活

地震があってから一番大変だったのが水汲みだ。地震があった日から、水が出るようになった3月から4月まで水を汲み続けなくてはならなかった。また、自宅には周りで家に住めなくなった3世帯か4世帯かが居候をしていた。その中に大久保まで働きに行く人がいたので、その人が食料を買ってきてくれていた。それから少し落ち着き始めたが、仕事の再開のめども立たなかったので、友達と被災地を巡った。三宮の花時計前や倒壊した阪神高速などを見た。父は阪神・淡路大震災が起こったことで悲惨なこともあったけど復興に向かって団結もしていたと語ってくれた。

4 話を聞いて

今回、話を聞いて感じたことは、人の話を聞くことや文章を読むことは大切だということだ。今回は阪神・淡路大震災について話していただいたが、その一つをとっても、感じ方は十人十色であり、経験者一人一人に違った学びがある。また、両親に阪神・淡路大震災の経験について詳しく聞いたことは初めてだったので、たくさんの学びを得ることができた。まず、母の話の中では、姉のコンタクトレンズが見つからず困っていたと聞いて、メガネはなかったのかと聞いたが、姉は視力が悪すぎてメガネでは対応しきれなかったのでコンタクトレンズを使っていたという返事が返ってきた。これまで、目の悪い人は枕元に眼鏡を置いておくといいと思っていたけれど、母の姉のような状態の人はいったいどうすればいいのかも考えなくてはならない。また、自分自身が被災しながらも親戚の家に泊めてもらうことを「申し訳ない」とってしまうのは、被災者だからこそ思ってしまうことなのかもしれないと思った。また、遠くの親戚とはなかなか連絡を取ったりしていないので、普段から連絡を取ることが大切だとも思った。父の話からも初めて学んだことがあった。それは、発災直後の交通法規についてだ。大きな地震が発生すると電気がストップするので信号が止まり、それに加えて、火災などによる平時との道幅の変化から交通法規が乱れ、逆走する車やバイクが多くなるようだ。信号が止まった場合は警察官の手信号などで交通整理をすることは可能だが、火災による影響などたくさんの被害がたくさん重なると思つ手がなくなるのだと思った。

5 環境防災科

(1) 学び

私は、環境防災科の一員としてとても充実した生活が送れていると感じている。普通科では出来ない学習や経験ができているからだ。これまでに学校の先生方や外部講師の先生方から、阪神・淡路大震災であったことや困ったこと、阪神・淡路大震災以降に変化した点などを教わった。これまで、たくさんの人にたくさんのことを教わってきたが、これから先、やってくる未曾有の大災害から自分の命や大切な人の命を守るには、自分で考え、行動し、備えるしかない。特に備えは大切で、備えにもたくさんの方法があることを学んだ。その中でも一番大切な備えは、防災教育である考える。そう考えるにも理由がある。それはシムル島の事例を知ったからだ。シムル島はインドネシアにある、人口約9万3500人、面積は日本の東京都とほとんど同じ広さの島だ。2004年12月26日シムル島を地震と津波が襲った。スマトラ島沖地震によるものだ。震源から60kmという至近距離に位置するシムル島では、建物などは津波により壊滅的な被害を受けたものの、死者は7人とどまった。一方でシムル島よりも震源から遠いアチェ州都バンダアチェでは、スマトラ沖地震によって引き起こされた津波が原因で約7万8000人の方が亡くなった。シムル島とアチェ州都バンダアチェでこれほど差があるのはまさに防災教育の差だといえる。なぜならシムル島では先住民から「大きな地震の後には津波がやって来るから高台に逃げろ」と歌にのせて伝承されていたからだ。シムル島以外に住むインドネシアの多くの人は災害のメカニズムは理解していたが避難行動についての知識はなかった。知識がなかったがために多くの人が亡くなった。逆に言えば知識で救われる命がある。だから防災教育は大切なのだ。日本では今、すべての子供が防災教育を受けている。これはとても素晴らしいことだ。これからもずっと続いていけばいいと思う。また、防災について専門的に学べる学校や学科は、全国を見てもまだ少ない。これからの子供たちがどんどん防災について学べるように、この環境防災科のような防災を学ぶ場所がもっとたくさんできればいいと思っている。

(2) 東北訪問

私は、1年生の夏休みにジュニアリーダーとして東北訪問に参加した。大川小学校を視察したり、宮城県多賀城高校の生徒たちと交流をしたりした。大川小学校に実際に行ってみて、個人的な意見だが、取り壊してほしくないと思った。遺族の方の帰る場所であり、亡くなった小学生の思い出でもあり、生き延びた小学生にとっても大切な場所だと思うからだ。また、私たちのような防災を学ぶものからすれ

ば、絶対に忘れてはいけないし、重要な場所であるからだ。それからしばらくして、大川小学校は保存されることが決まった。また、宮城県多賀城高等学校の生徒たちとの交流のプログラムに街歩きがあった。歩いていくと、町のいたるところに津波波高の標識が設置されていることに気が付いた。それらが多賀城高校の生徒たちによって設置されたものだと知り、すごいと思った。なぜなら、自分たちから多くの大切なものを奪った津波を思い出してしまうにもかかわらず、ここには津波が来る、危険だ、と次の災害を見据える高校生の強さを知ったからだ。さらに、多賀城高校に場所を移してワークショップも行った。被災された人としていない人では、考え方や意見が違って、たくさんの発見があった。また、現地の方と一緒に夕ご飯を食べた。たくさんの人が集まって、みんな笑っていた。笑顔でいられるのはとても素晴らしいことだと感じた。このとき、東日本大震災から6年が経過していた。そこは、津波がきたことがわからないほど美しい街へ生まれ変わっていた。しかし、震災の記憶はまだ確かに残っている。この震災の記憶をいかに風化させずにとどめておくかということが今後の重要課題のひとつだと私は思う。

3年生の夏休みに「全国ジュニアリーダー育成合宿東北」に参加し、東北を訪れた。私は、この合宿で初めて知ったことが2つある。1つ目は、宮城県多賀城高等学校が行っている津波波高標識の設置には手続きが必要だということだ。しかも、国の所有しているものに設置する場合や複数の所有者がいるものに設置する場合には手続きが特に大変で、期間も長くかかってしまうことを知った。私は、市民にとって有益なことをしようとしているのに、行政によって足止めされてしまうのはおかしいと感じた。私は行政職を志望しているので、多くの人にとって利益になる行いをできるだけ行政によって制限しないような社会を目指したいと思う。また、そのための政令や条例を考えていきたい。2つ目は、岩手・宮城内陸地震での被害についてだ。この地震では日本でも最大級の地滑りが起こり甚大な被害が出た。しかし私はこの災害に対しては知らないことばかりだった。それは、すぐのちに起こった東日本大震災による影響もあると思うが、私もこの災害に関心を持っていなかったからだ。メディアの報道は話題性が高い事象や新しい事象を次々に報道する傾向にあり1つの事象や事件について継続して報道し続けることはめったにない。しかし、この合宿に参加したことを経て、岩手・宮城内陸地震の被害について知ることができた。私はこれから、まずは、この災害のことやそれにリンクすることを調べていきたいと思う。

(3) 地域ボランティア

私は、これまでに様々な地域ボランティアに参加してきた。まず募金活動がある。最初に持っていた空の箱が終わるところにはとても重たくなっていることに人々の温かさを感じた。またお祭りでブースの運営もした。その中で、防災ダッグを通して子供たちに防災を教えたことがある。この時に、防災を教えるときや、何かを伝えたいときは相手を楽しませる必要があると感じた。また、運営側という普段とは違う視点でお祭りを見ることができたので、私の視野も広がった。準備や片付けで、重たいものを運んだりすることもあり、裏方の仕事に若い力は欠かせないと感じた。さらに、地域ボランティアなどで住民とコミュニケーションを定期的にとることも防災につながっていく。日ごろからコミュニケーションを取っていてつながりの深い人であればあるほどいざというとき助け合える。これから先、もっと地域ボランティアに参加して、自分を磨き、いろいろなことを学んでいきたいと思う。

6 将来について

私は将来、厚生労働省の職員になりたいと考えている。なぜなら、人々が働き甲斐のある仕事に就いたり、必要な時に必要な医療サービスや介護サービスを受けられたりする社会を目指したいからである。環境防災科での3年間でたくさんのことを学んできた。その中でも特に、日本の災害対応が他の先進国よりも遅れていることや、海外の避難所と日本の避難所での生活の質の差、SDGs (Sustainable Development Goals) について強い関心を持った。そして、私は将来、法律や制度の面から社会をよりよくしていきたいと思っている。そのために、まずは大学で4年間法律や法制度について学びたい。大学では、日本の災害対応をもっと早くする条例や政令、制度を考えていきたい。また、海外には法制度の面で日本よりも優れた部分を持つ国もある。だから私はそのような国の持つ法制度を日本版にアレンジして、日本でも適用できないかも検証してみたい。その検証に、よりリアリティを持たせるために、海外での生活を体験するのも大切だと考える。だから、留学にもチャレンジしたい。そして日本がより良い社会となるように考えていきたい。

7 さいごに

阪神・淡路大震災による甚大な被害で 6434 名という、多くの方が亡くなったにもかかわらず、その記憶は風化されつつある。風化されることによって、また同じ被害を繰り返すことにはなってほしくない。そうならないためにも、語り継ぐことはとても大切だと感じた。また、もっとたくさんの人から、阪神・淡路大震災で経験したことを聞いておきたいと思った。人によって、阪神・淡路大震災の記憶は異なる。同じ出来事でも、障がいがあったり、外国人であったり、高校生であったり、サラリーマンであったりする人など、立場が違えば記憶も異なる。また、感じ方も違う。だから、あまりスポットの当たらない方の話を聞くことも必要だと思った。

日本は災害大国であり、様々な災害の発生が懸念されている。その中でも特に注目されているのは南海トラフ巨大地震だろう。今後 30 年での発生確率は 70～80%と言われている。この災害に対して、阪神・淡路大震災やその他の過去に起きた災害の教訓を生かし、備えていくことが必要だ。

最後に、この「語り継ぐ」について協力してくれた方、また、読んでくれた方本当にありがとうございました。

未来の命を救うために

塩治 陽生

1 はじめに

今から、25年前の1995年1月17日午前5時46分に兵庫県南部で激しい地震が発生し、6434名の尊い命が奪われた。私はその7年後に生まれたため当時の状況が分からない。このように、震災を経験していない世代が増えている。そこで、震災を体験した方から話を聞き、あの日の出来事を風化させないためにも語り継いでいくことが大切なのである。

2 概要

名 称：兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）
日 時：1995年1月17日午前5時46分
震 源 地：淡路島北部
最大 震度：震度7
規 模：マグニチュード7.3
死 者：6434名
行方不明者：3名
負 傷 者：43,792名
「内閣府 防災のページ」より

3 阪神・淡路大震災の体験談

（1）母の話

母は当時24歳で垂水区の実家に住んでいた。寝ていると突然ベッドが大きく揺れ出し、振り落とされそうになった。あまりにも突然だったため状況が分からず必死にベッドの端を掴んでいた。揺れが続いている中、タンス等の家具が倒れることはなかったが大人の背丈くらいの植木がスローモーションのようにゆっくり倒れていたことを鮮明に覚えている。揺れが収まったので起きてテレビをつけようとしたがもちろんつかず、ラジオの位置も分からなくなったため情報を得るすべがなかった。家での被害は少なかったため「とりあえず仕事へ行かない」と思い準備をしていた。しかし、1時間後くらいに電気がつきテレビを見ると長田での火災や阪神高速道路が倒れている映像が出ていた。そこでとても大きい地震だと理解した。電車も止まっているためずっと家にいたが5分おきくらいに余震があり恐怖におびえていた。1週間くらいは家にあった備蓄の食料でしのいでいたが、そのあとは姫路にいる友達からカップラーメンをたくさん持ってきてもらったという。また、ガスがつかないためお風呂に入れず母の叔母の家まで行った。普通は車で1時間くらいの距離なのだが10時間ほど時間がかかった。自衛隊の給水所からタンクに水を入れ運ぶのがとても辛かったため、そこで改めて水道のありがたさを知った。母はこの震災を通して災害と普段の生活は紙一重だということを知った。その当時兵庫のマツダに勤めていたのだが1階が無残にも潰れていた。もし、これが朝ではなく昼だったら、そう考えるととても恐ろしいが助かってよかった。今を生きられていることに感謝していると言っていた。

（2）父の話

父は当時北区の団地に住んでいた。突然起きた激しい揺れに驚き目を覚ました。なにをしいいかわからず必死に布団にくるまっていた。揺れが収まりあたりを見ると、近くにあった本棚が自分のすぐ横に倒れていた。もし、寝ている位置が少しでもずれていたら父は本棚の下敷きになっていた。家具や皿が散乱していたが、下の階に住んでいた知り合いのところに向かった。知り合いの人は大きなけがはしていなかったが同じく部屋の中は散乱していた。ここまでしか鮮明に覚えていることはないと言っていたが、初めてテレビで見た光景がとても目に焼き付いていると言っていた。

（3）この話を聞いて

私はこの話を聞いて初めて知ることがとても多かった。被害はそこまでなかったということは聞いていたが震災直後の対応や生活について知るうちに、話に聞き入っていた。状況を知りたいと思っていたらしいがテレビに映し出されていた映像が怖くて見るができなかったらしい。家を出ると強烈な光景が目の前に広がっていたと多くの方が言っている。私は映像でしか見たことがないが、それでも伝わってくるものはとても大きいものだ。私はまだ大きな被災は一度も経験したことはないがこれからの人

生の中で必ず大きな災害に直面する。この時に備えて食料や水等の備蓄をしておくことが大切だと改めて理解した。また、母は当時コンタクトを付けていたが揺れにより紛失してしまい、眼鏡も作っていなかったのでもともと困ったと言っている。自分の必要なものをピックアップして早め早めに対策していくことがとても大事なのだ。

4 環境防災科

(1) きっかけ

私が環境防災科を知ったのは中学3年生の時だ。当時はこれといって入りたい高校もなく入れるところに入ろうと思っていた。その時に舞子高校は母の母校でありとても良い学校だと勧められてオープンハイスクールに行った。その頃は防災の「ぼ」の字も知らず、正直あまり興味があったわけでもないが、環境防災科の存在や活動実績などを聞いていくうちに、これが自分のいまずべきことかもしれないと思った。それに、説明会中に突然地震が起き、私を含め周りの方がパニックになっている中、当時の環境防災科の生徒の方が率先して椅子の下にもぐっていた。勉強しているからこそ分かること、恐怖を知っているからこそ出来ること。自分の命を守るため、家族の命も守るためにここで防災を学ぶべきだと思ったことがきっかけである。また、当時から警察官になりたいという夢を持っていたため、それも環境防災科に入る後押しとなった。

(2) ボランティア

私はこれまでに地域の祭りや募金活動、被災地の高校生との交流、防災ジュニアリーダー育成合宿などにも参加してきた。募金活動には数多く参加してきたが、参加するたびに様々なことを考えさせてくれる。初めて参加した際には募金をしてくださる方はいるのかと半信半疑の状態だった。しかし、予想とは違って、多くの方に募金をしていただいた。さらに入れていただく際に「ご苦労様」や「ありがとうね」などと感謝されることに疑念を抱く。私は募金をしていただいた方に感謝しないといけない立場であるのに、地域の方々のその行動にとっても感銘を受けた。この出来事をきっかけに地域住民の方の気持ちを理解することも募金する上で大切なことだと感じた。

ボランティアの中でも岡山県倉敷市の真備綾南高校との交流が特に印象深く残っている。この機会に初めて被災地という場所に足を運んだ。現地の状況もよくわかっていなくて、被災地で人にどう接すればいいのかもわからなかったけれど、自分のできることを考え、防災を学ぶ者としてまた1歩成長でき、とても貴重な経験になった。授業だけでは分からないことをボランティアでは学べる。ボランティアの良さ、学んだ知識を語り継いでいくことも地域防災の向上につながっていくと思う。ボランティアで一番大事なのは無償性だと私は思う。手伝いをしたからお金をもらおう、お茶をいただく、状況に応じての対応もいると思うが報酬目的でボランティアをするのは納得できない。それならバイトでもしていたほうが良い。人のために自分のしなければならないことを考え、行動することが大切だと思う。

5 夢と防災

(1) 自分の夢

私の夢は警察官になることだ。

きっかけは小さい頃から人を守る・助ける職業に憧れを抱いていた。その中でも警察官は、街に交番があるようにとても身近な存在で信頼も厚く、安心感を与えられる姿にとっても興味を惹かれる。中でも私は機動パトロール隊になり市民の方々に寄り添い、パトロールを通して街の隅にある犯罪の種を汲みとり犯罪の抑止や早期発見に努めていきたい。己の肉体・精神を鍛え上げて人の役に立つことが自分の一番したいことである。警察官という職業は都道府県の公安系職員であり、社会の平和、治安を守ることを使命としている。守られていた側から守る側へと変わるため、自分に厳しく訓練や実務に取り掛かなければならない。警察組織の中には11の階級がありキャリア組とノンキャリア組でスタートする階級は異なる。小さな交番でも通報が入れば現場に直行しなければいけないし、休日でも気が休まることはなくとても忙しいが、とてもやりがいがある職業だとよく耳にする。私は自分が辛い時こそ人のことを考えられる警察官になりたいと思う。どれだけ厳しい訓練や勤務であっても自分に甘えを出してしまえば人を守ることなどできない。人を思う気持ちを強く持つことが大切だと思う。

(2) 防災の関わり

災害時に被災地で活動するのは消防士や自衛隊が多いと思うかもしれないが、警察官も被災地での活動にあたっている。救命救助をはじめ、被災地のパトロールや住民の避難誘導、交通整理なども行っている。また、警察官は、防災のプロとして位置づけられているため、災害や行方不明者の発生といった何ら

かの緊急事態にも大量に動員されることがあり、消防士や救急医療の専門家などと連携的な行動をとることもある。また、警察官は防災、災害対応のスペシャリストだから、仕事の中で直接的なかかわりがある。平時には、各種訓練を行っており、防災士の資格を取ることも勧められている。災害時には住民の避難誘導を呼びかけるだけでなく、自衛隊と同じように人命の救出活動をしたり、交通整理、交通規制、被災地のパトロール、遺体の身元確認をしたりしており、とても頼りになる存在である。その中でも各自治体の警察本部内に所属している部隊「広域緊急援助隊（広緊隊）」は救助のスペシャリストとも言われている。阪神・淡路大震災が発生した際に救助や援助に対して不慣れな隊員や警察官が多く、技術力や経験不足もあり現場での救助活動が円滑に行われなかったことを受け 1995 年 6 月に各都道府県に設置された。広緊隊はこれまでも東日本大震災や熊本地震などの数多くの災害現場に派遣されている。こういった部隊だけでなく警察学校でも災害対応の訓練は行っている。国の治安を守るだけでなく、災害から人を守ることも警察としての立派な使命なのである。このように警察組織は防災に関わる組織としてはとても高いところに位置している。私もその組織の一員になるにあたり職務に全うしていこうと思う。

6 南海トラフ地震

南海トラフ地震は、今後 30 年以内で 70～80%の確率で起こるといわれている。地震だけでなく津波による甚大な被害が出ることも予想されている。自然災害が起こることを止められない私たちに何が出来るか、それは防災しかない。私たちはこの環境防災科で様々な方から講義や震災の体験談を聞いてきた。そこから、防災は今からしておかなければならないという必要性を学んだ。しかし、一般市民の方々はどうかだろう。目の前にある出来事を超えることに必死で、先のことを考えられていない人も多いかもしれない。東日本大震災の時も多くの方が「大震災の混乱もあり、すぐに避難できなかった」「あれほどの巨大津波が来ることが想像できなかった」などと言っている。発災の確率が 70%～80%と出ている以上、目を背けてはいけないことだ。南海トラフ地震による最悪想定死者・行方不明者数は約 23 万人である。しかし、一人一人が防災に向き合って行動に移せばこの数も確実に減っていく。災害はいつ起きるかわからない。そのために私たちが率先して動かなければならない。それが使命であると思う。

7 「語り継ぐ」

次に「語り継ぐ」について書いていきたい。語り継いでいくことの重要性はこの 3 年間で学んできたことすべてに関連している。今の日本は災害大国といわれているほど毎年どこかで災害クラスの自然現象が起きている。それは地震や津波だけでなく台風、豪雨、火山の噴火などがある上にこれから先に予測されている首都直下地震や南海トラフ巨大地震などが挙げられる。科学技術の進歩など世の中がどんどん発展してきているが自然現象に勝つことは不可能だ。そのため、自分自身で対処していかざるを得ず、私たちは防災に取り組まなければならない。1 人 1 人が自分の身を守るべく行動をとらなければならないが防災を真剣に取り組んでいる人はまだ数少ないものだ。近年では、東日本大震災や熊本地震など甚大な被害が出た災害が起きたら一定の期間は人々の頭に残り災害に対する恐怖心があるものだが、時間が経てば経つほど風化していく。そこで語り継ぐことの必要性が出てくる。私はまだ大きな災害を経験したことがない。だから、語り継ぐといっても自分の体験ではなく今まで聞いてきたことばかりだ。そのため、防災の必要性や「わがこと意識」を持てなどと伝えても説得力がないと言われればどうしようもない。しかし、阪神・淡路大震災でいえばもう 25 年前であり、経験している世代が減っているのも確かである。これから月日が経てば経つほど阪神・淡路大震災は風化されていく。そこで今聞いておけること、今伝えられることを伝えることが環境防災科に入った使命だと私は思っている。

8 自分の思い

私は今回この「語り継ぐ」を執筆するにあたり、初めて家族から阪神・淡路大震災についての話を聞いた。家族から震災の体験談を聞くのはなぜか避けていた。しかし、これを機に話を聞いてとてもよかったと思っている。今まで聞いてきた中で一番身近に感じたからだ。この震災で両親が生き残ってくれたことで今の自分があると思うと親には感謝しきれない部分もある。多くの方の命が亡くなり、多くの教訓を残していったあの震災を後世に語り継いでいくために高校生活の中だけでなく、これから先、自分が社会に出ても語り継ぐことを大切にしていきたいと思う。

9 感想

この 3 年間で学んできたことは自分の生きていくなかでとても必要な知識である。自分の命を守るため・

人の命を守るためにどう行動に移すのか、何を考えるべきなのかということなのだ。また、阪神・淡路大震災だけでなく今までのたくさんの自然災害が起きてきた。多くの方の命が奪われたとともに、多くの教訓を残していった。両親に話を聞いても「もう 25 年も前だからな」と言っていた。時間が経てば忘れていくこともある。思い出したくないことであれば尚更だ。しかし災害は風化させてはいけない。後世に語り継いでいくためこれからも勉強していきたい。最後にこの「語り継ぐ」をここまで読んでくださった方ありがとうございました。

未来に繋ぐ…。

語り継ぐ

耀川 尚

1 はじめに

あの日、いま私達が住む神戸に沢山の人の全てを奪った阪神・淡路大震災が襲った。阪神・淡路大震災が発生した7年後に私は生まれたので、当たり前だがあの揺れは経験していない。しかし、環境防災科に入学して、沢山の人の体験談や両親の話を聞く機会が増え、当時の神戸の状況や復興の進み具合、支援の在り方など、色々な面からの阪神・淡路大震災を知ることができた。この体験談を未来へ語り継ぎ、阪神・淡路大震災を風化させないのが環境防災科で勉強している私達の役目である。実際には体験していないが、語り継ぐための必要最低限の知識は備わっているはずだ。ここまで防災に興味を湧き、語り継ぐという使命感を与えてくださった両親や学校の先生や外部講師の方に感謝の気持ちを込めて、いまこの場で阪神・淡路大震災を語り継ぎたいと思う。

2 阪神・淡路大震災

1995年1月17日午前5時46分淡路島北部が震源の兵庫県南部地震が発生した。最大震度7、マグニチュード7.3という大きな地震だ。発生するまで、関西では大きな地震は起きないと言われていた考えを大きく裏返した災害である。また、最大震度7とは日本国内で初の観測となる。このような大きな災害が発生すると、どうしても外部からの助けが必要となる。その需要にしっかりと応えてくださったボランティアの方もたくさんいて、1995年はボランティア元年とも言われている。このように、阪神・淡路大震災は大きな被害をもたらしたが、人に必要な沢山のことを教えてくれるきっかけとなった災害である。

3 母の話

結婚して間もない父と母は2人で六甲山の麓にある家に住んでいた。前夜、スキーから帰って疲れて寝ていた2人は、ベッドから飛び跳ねるような揺れで目が覚めた。屋外に逃げるところか、叩きつけられる揺れと怖さで起き上がることさえ出来なかった。大きな揺れが収まり、外を見てみると前の家の人たちが表に出て話をしていた。両親が住んでいる地域は震度7の揺れが襲った。しかし、我が家の被害は、食器棚のワイングラスが割れ、スキー板が倒れ、玄関の置物がずれただけで済んだ。経験したこともない大きな揺れだったが、被害が大きくなかった両親は出勤の用意をしていた。しかし、ラジオから流れてくるのは耳をも疑う緊迫した情報だった。両親は、町が大変なことになっているのではと不安に思い、いけないことは分かっていたが原付バイクに2人乗りをし、母はヘルメットも被らず、実家や会社のある南へ降りた。途中、南の方からは煙が上がっているのが見えた。道路はアスファルトが盛り上がり、ガス管が破裂し、ガスが噴き出していた。道を上がってくる警察官にガスが漏れていることを伝えたが、通り過ぎて行った。そのような被害は相手にする時間がないほど町は大惨事に見舞われていた。

両親が、怖くて動けなかったあの地震で、神戸の町は壊滅してしまった。JR六甲道駅近くにある母の実家は潰れ、電柱は倒れていた。道には部屋着のままの人たちの姿。母の実家の金属製の外階段は半分が外側にずれ、家は傾き、家の中のテレビが吹っ飛び、冷蔵庫や食器棚は倒れ、足の踏み場もないほど滅茶苦茶だった。足の悪い母の両親があの揺れの中どのように逃げ出したのか。火事場の馬鹿力なのだろう。母の両親は、怪我ひとつなく無事に外に出て、近所の方の車の中で暖をとらせていただいた。また、山手の方にある父の実家は、家も父の両親も無事だった。

連日テレビでは震災によって亡くなられた方や行方不明の方の名前が報道され、各地域の被害映像が流れていた。避難所では、入り口に避難されている方々の名前と住所が書かれ、潰れた家には無事を知らせる避難先が書いてある紙が貼ってあった。数日前に会った母の友人は亡くなった。そこで命というものの重さを痛感した。

ライフラインは全て止まったものの、電気とガスは早々に復旧した。しかし、水道の復旧には時間がかかり、トイレはお風呂に貯めていた水で流し、飲料水は自衛隊の給水車から頂いた。裏六甲まで車ですぐに行けたので、被害の少なかった北区のスーパーで買い物をし、ある温泉では無料で入浴させていただくことができた。

家の近くにある会館で支援物資を送るための不用品回収の受付をしていた。両親は家にあった生活用

品を誰でもよいので使えるものは使ってほしいと思い、たくさん持って行った。遠く離れた母の友人は、両親のことを心配してガスボンベを送ってくださった。5か月後には、母の両親は仮設住宅に入居し、その4年後に災害公営住宅に入居することに決まった。人と人が協力し合うと、こんなにも沢山の人が救われるのかと初めて知るきっかけとなった。また、人の温かみを心底感じるきっかけともなった。

4 話を聞いて

このような場がなければ、母から震災の体験談をしっかりと聞くことはなかったであろう。体験談を何回かは聞いたことはあるが、しっかりと頭の中に入ってきたことは一度もなかった。しかし、初めて最初から最後までしっかりと聞いたことによって、防災に関連する知識がまた1つ増えた。また、この知識は私にだけしか得られないものなのだ。母も真剣に語ってくれたため、当時の状況がどれほどひどかったのかを、想像することもできた。今では何事にも楽しそうにしている母も、当時はとても混乱していたと聞き、災害というものの怖さを改めて痛感した。昔は友達と連絡を取るのも簡単ではなかったため、ずっと心配をしていたと聞き、今私たちが簡単に電話をしたりメールなどでやり取りをしたりして過ごしている環境がどれほど幸せなことかも知ることができた。

このように話を聞かせてもらったからには恩返しをしなければならない。それが、語り継ぐことではないのかと思う。当時、母がどのようにして生き延びることができたのかは、話を聞いた人にしか分からない。しかし、その方法をインプットするだけでなくアウトプットもしなければならない。だから、この話を現代や後世に語り継ぎ、今後の災害に備えるよう注意喚起することが恩返しになるのではないと思う。

5 環境防災科

(1) 入学したきっかけ

私が環境防災科に入学しようと思ったきっかけは、東日本大震災のボランティアをしている環境防災科の先輩をテレビで見たことだ。それまで、環境防災科など聞いたこともなかったが、この時に初めて知り、一生懸命に活動する先輩に一目惚れした。自分に被害が出なければ震災は関係ないと思っていたが、これがきっかけで街頭募金に募金をさせてもらったり、震災の特集番組を見たり、人と防災未来センターを訪問したり、日を追うにつれてだんだん災害や防災に興味を湧いた。

中学に入学し、本格的に高校について考えないといけない時期になってから、環境防災科に入学したいと友達と話しても、環境防災科の存在を知らなかったり、入試が簡単だと言って小馬鹿にされたりもしたが、私の意思は変わらず環境防災科だった。その意思が変わらなかったのは、カッコいい先輩方の活躍する背中を追いたいと思ったからだ。だから私は入学することを決心した。

(2) 入学してから

志望していた環境防災科に入学することができ、先輩方と触れ合う機会ができたが、考え方が今まで話してきた人とは全く違い、色々な視点から物を考えていて喜びより不安が大きく膨らんだ。しかし、ある1人の2個上の先輩が日常生活時はもちろんボランティアの時も、その先輩が卒業されるまでずっと仲良くしていただき、面と向かい合って話をすることができた。その先輩から、レポートの書き方や講義中のメモの取り方、人前に立って話をするときの態度など全てを学ばせていただいた。だから、その先輩が参加するボランティアには積極的に参加し、東北訪問では同じ班で活動することもできた。これが私の望んでいた先輩であると心の底から確信した。

進級するにつれて、防災の学び方が複雑になり難しい言葉や知らない単語が並んだ紙を授業で配られると、たちまち不安になった。しかし、環境防災科の先生や外部講師の先生や、外部講師の先生の説明や、友達との教え合いがあったから、防災を積極的に学ぼうという意欲が途切れることなく過ごせている。その意欲が先生にも認められたのか、特別な行事にもお声をかけていただき参加することもできた。これほどの素晴らしい先輩や先生やクラスメイトに出会えた私は、何事にも囚われず、自分の目指したものに一直線に駆けることの大切さを自らの手で学ぶことができた。

6 東北訪問

私は、自分が興味を持っている防災についてもっと深く知りたいと思い、1年生の時と2年生の時と2回、東日本大震災で大きく被災した宮城県に訪問させて頂いた。

東日本大震災が発生した当時、私は小学3年生だった。私と同じ年代で被災した方も多くいるだろ

う。その中でも、見学させていただいた大川小学校は自分の中でも衝撃の一言だった。今まででは、写真やテレビでしか見たことのない光景を実際に見てみると、どのような感情を抱いたらよいのか分からないほどの被害のありさまだった。震災から約5年たった当時でさえ、どれだけの地震と津波が襲ったか分かるくらいの状況だった。被災された佐藤敏郎先生はこの大川小学校に登校していた娘の話をして下さった。また、震災を経験した方の話もたくさん聞くことができた。私はこの経験を機に語り継ぐことの大切さを痛感した。人の話に感情移入することが苦手な私が、ここまで心を動かされる話を聞くのは初めてだった。自分の辛い過去の経験をこうして私たちに語り継いでくださった方の存在は、私たちにとって1つの大きな財産として心に残るのである。私は、その財産を無駄にするような行動は決してするまいと心の底から決心した。今後、高い確率で起こると言われている南海トラフ巨大地震では、私たちが住む神戸の町にも津波が到達すると予想されている。しかし、その地震がいつ来るかは誰も分からない。明日かもしれないし、1年後かもしれないし、1秒後かもしれない。いつ来るか分からないからこそ、東北訪問時に得た教訓をアウトプットし、私や友人や親の頭の中に、大きな存在として残しておかなければならない。それが、私たちの今できる最大限の語り継ぐというアクションであると思う。

7 ネパール訪問

私は2年生の12月にネパールに訪問させていただいた。ネパールは日本と同じく、災害が多い国だが、災害に弱い国でもある。

私は現地に行く前に、ACTIVE 防災の授業で、ネパールの街や建物、過去の災害について学習した。しかし、その授業は衝撃的なものだった。コンクリートではなく砂を固めて作られた道路や、1階と2階がずれている建物、建物の柱は、まっすぐとは到底言えない木で、筋交いなどは使わずPPバンドで壁と柱をつないでいた。日本ではほとんど見ない光景がネパールでは当たり前のように街中にあった。しかし、その授業が、私をネパールへ訪問する後押しとなった。日本では当たり前の日常が当たり前でない国が目の前にあるのにも関わらず、放っておける訳がない。日本より災害に脆弱なネパールが、これまでの災害でどのように復旧や復興を進めてきたのか。現地では、どのような防災教育をしているのか。これからの災害についてどのような対策をしているのか。たくさんの学びたいという気持ちが芽生えた。

ネパールで死者を多く出した地震の死因の多くは、崩壊した建物による圧死であった。しかし、この被害は未然に防げたはずだ。建物の補強を、バンドや紐でしているのでは危険だ。しかし、日本のように頑丈な筋交いを入れるというような、「教訓」を伝えていけば防げたのかもしれない。ネパールが過去に経験した災害の教訓と、災害対策を行っている日本の教訓を合わせれば、より良い街づくりができるに違いない。その教訓を伝えるのが私たちの役目である。

ネパールの学校の先生や、NSETの方から災害に対する取り組みについて教えていただき、言語は違うが、国境を越えて防災の話をするのはとても貴重な体験である。合計で3つの学校に訪問させていただいたが、やはり、全ての学校が防災に対する取り組む姿勢が日本以上のものだった。これは、1つの教訓として国内に持ち帰り、広めるべきだと思った。また、現地の方は日本人の何倍もフレンドリーで、私たちの片言の英語でも優しく接してくれた。これが何よりも心が温まったことだ。しかし、自分の目で見たネパールの街並みや建物は非常に危険な状態であると思った。授業で見た写真のように建物の階層ごとにズレがあり、少しの衝撃を加えただけで崩れそうな建物まであった。また、道路は舗装されておらず、車に乗って移動していた私たちはずっと遊園地のアトラクションに乗っているように縦に揺さぶられていた。しかし、私はそんなことも関係なしにネパールが大好きである。大切なことを学ばせてくれたネパールは、1つの故郷のように思える。これからもこの関係が絶えることの無いよう、頂いた愛情を大切にしたい。

8 最後に

今回「語り継ぐ」を作成して、何よりも重要なのはやはり、語り継ぐことだと思った。母の話や東北で出会った方々の体験談を、どれだけ世に広められるかは私には分からない。しかし、この話が、今の世に中に求められる本当の防災なのかと言われれば、考えさせられる。「想定を信じるな」といわれることがあるが、想定が現実という訳ではない。想定を下回るのであれば被害は少なく済むが、想定を上回ると逆に被害が多くなる。しかし教訓は違う。教訓は、過去に発生した災害を基にそこから得た知識である。教訓というのは、決して覆らないものである。無駄な教訓など一つもない。なぜなら、過去の経験を踏まえているからだ。その教訓を後世に伝えていくことを「語り継ぐ」と言う。今まで私たち環

環境防災科は、たくさんの人の教訓を聞いてきた。また、防災について3年間も勉強してきた。外部講師の先生は、自分が得た教訓を私たちに語り継いでくださった。しかし、私たちは、語り継がれた教訓を語り継いでいるだろうか。レポートにまとめたり、メモを取ったりすることだけが語り継ぐことではない。自分から他人へアウトプットしないと、聞いた話が無駄になる。だから、私たちは、今この場で「語り継ぐ」を執筆している。もっとたくさんの人に防災の大切さを広め、今後の災害に備えてもっと災害対策に努めないといけない。なぜなら、私たちには南海トラフ巨大地震が待ち受けているからだ。ほぼ必ず発生すると言われているので、各自治体は対策などを立てている。高台や防潮堤の建築、ハザードマップの作成など様々な対策がある。その対策は、想定と教訓を入り混ぜたものであろう。このように、教訓というものは、人に命を守るものである。だから、語り継ぐということも、人の命を守る行動であるのだ。私たちは、そのような大切でありかっこいいことをしているのだ。その語り継ぐという行動をすることが私たち環境防災科が目指している市民のリーダーとしての使命であると思う。

語り継ぐ

高橋 太河

1 はじめに

私は阪神・淡路大震災を経験していない。また命を落としてしまうような大きな災害も経験していない。だから、いま私たちが住んでいる町で、震災当時何が起こり、どれだけの被害があったのかはわからない。しかし、私たちの周りには阪神・淡路大震災を経験している大人がいる。そこで震災を経験した人の話を詳しく聞き、私たち若者が次世代へと語り継いでいきたいと思う。

2 阪神・淡路大震災の概要

名称：兵庫県南部地震

日時：1995年1月17日午前5時46分

震源地：淡路島北部（北緯34度36分、東経135度02分）

震源の深さ：16km

地震の規模：マグニチュード7.3

最大震度：震度7

人的被害：死者…6434名

行方不明者…3名

負傷者…43,792名

「阪神・淡路大震災について（確定報）（平成18年5月19日、消防庁）」より

3 阪神・淡路大震災の体験談

（1）父の話

父は当時24歳だった。父は大鉄工業所属近藤軌道という会社に勤めていた。仕事は夜勤ばかりで、主にJR新幹線の線路工事をしていた。

震災の前日はいつも通り仕事は夜勤だったので、夕方から仮眠をとっていたが、8時ごろに弱い地震で目が覚めた。久々の地震だったので、仕事に行く途中で仕事仲間と何かの前触れじゃないかと話をしていた。仕事が終わりと、午前5時頃に家に帰宅し、ご飯を食べていた。丁度布団に入り、寝ようと思っていた瞬間に、ゴーーーーーッという地鳴りが鳴り響き、直後に大きい揺れが襲ってきた。当時マンションの7階に住んでいたため、マンションが倒れるくらいとてつもなく揺れ、死んでしまうと思った。父の両親と3人で家にいたが、全員無事だった。揺れが収まり、少ししてからすぐに仕事場から召集がかかり、それから少しの間、線路の復旧作業に取り掛かっていた。当時は明石市に住んでいたため、宝塚や西宮の現場に行くだけで8時間ほどの時間がかかった。そこで3、4時間ほど復旧作業をして、また8時間かけて帰宅していた。仕事でも余震があり危険だったが、朝から晩まで仕事をしていた。休みの日には、西宮の仲の良い友達から水が欲しいと連絡が入り、20Lの灯油タンクに水を入れ、原付で明石から西宮まで水を届けていた。

（2）母の話

母は当時16歳だった。母の親は、神戸市西区で自宅兼お好み焼き屋を営業していた。母は東灘区にたくさん友達がいて、その友達の家で遊んだりすることが多く、自宅に帰ることが少なかった。しかし、阪神・淡路大震災が起きる前の日はたまたま西区の自宅に帰っていた。そこでいつもと変わらず自分の部屋で就寝した。すると突然、うなるようなゴーーーーーッという音が鳴り、その音で目が覚めた。その直後に、ドンッと縦に激しく揺れ、次に横に激しく揺れた。その時間はとても長く感じた。

震災当日、親は旅行でおらず姉弟3人だけだった。家には危ないと思い、とりあえず外に出た。自宅にあったバイクで弟とコンビニへ行き、懐中電灯の電池や必要なものを買いに行った。しかし、お店もぐちゃぐちゃで当然買うことはできず、近くの大きな公園へ避難し、その日は過ごした。

（3）私の姉の仕事場の人の話

朝いつも通り明石の商店街の仕事場に向かうため、車に乗って家を出た。自宅から仕事場に行くまでに高速道路を通るので、インターに向かって下道を走らせていた。入口に着いたところでドンッと地面が縦に揺れ、その瞬間は何が起こったのか状況を把握できず、あたふたしていた。すると、ゴーーーーーッと大きく揺れ始めた。今までに体感したことのない大きい揺れに困惑し、どうしてよいかわから

ず、ただじっとしていることしかできなかった。

揺れが収まり、ある程度状況を把握できたところで、車を降り周りを見渡した。すると目の前の道路が何メートルもずれ落ちていて、とても通れる道ではなかった。後ろも車が詰まっていた、どうすることもできず、車を置いて歩いて自宅まで引き返した。周りは火事になっているところも多々あり、通勤で見慣れた景色がもう元には戻らないと思うくらいに滅茶苦茶になっていた。当たり前のように仕事に行こうとしていただけなのに、一瞬の出来事で今後の生活が変わってしまい、ショックだった。

自宅に帰ると家具や棚が倒れて色々なものが部屋全体に散らばっていた。どれだけあの時の揺れが凄かったのかと思いきや知らされる一面だった。とりあえずこの先の、食料を確保しないといけないと思い、近くのスーパーやコンビニを巡った。しかし、お店の中はぐちゃぐちゃで買うことのできる状態ではなかった。それでもたくさんの人が食料を確保しようと集まっていた大変な状況だった。私の住んでいる地域は水道が完全に止まっており、親戚が住んでいる所は幸い水道が問題なく通っていたので、そこまで行き、水を確保させてもらった。

4 お話を聞いて

私は、阪神・淡路大震災の体験談をこんなにも詳しく聞いたのは初めてだった。両親には震災当時の話は少しだけ聞いたことがあったけれど、今回はより詳しく聞くことができ地震の恐ろしさというものが改めて感じた。

地震は一瞬にして当たり前のように過ごしていた生活を奪っていくものだと分かった。いつ、どこで、何をしている時に地震が起きるなんてわからない。そのような中で生き延びるために、自分の命は自分で守ることの大切さを知った。また、私の母は当時16歳という若い年齢で親もいない中、姉弟と助け合っていたという話を聞きとても驚いた。もし自分がその立場になっていたらどうなっていたかと考えると、防災の知識がなくては本当にパニック状態になり動くことはできなかったと思う。しかし、環境防災科として防災を学んでいる今では動ける自信はある。自信があっても冷静な判断をするにはより多くの防災の知識が必要だということも感じた。

阪神・淡路大震災という大きな災害を経験していない。そして、震災を経験していない私たちのような若い世代がどんどん増えていく。こんなにも恐ろしい震災を絶対に忘れさせてはいけない。そのため若い世代の人たちが、阪神・淡路大震災の教訓を語り継いでいかなければならないと改めて強く感じた。語り継いでいかなければ、また同じことを繰り返してしまう。

私は、3人の方の震災体験談を聞かせて頂いた。今回聞いた話を無駄にしたいとは思わない。実際に直接お話を聞くことでしか感じられないことはたくさんあった。阪神・淡路大震災の教訓を風化させないために次の世代へ語り継いでいくことが私たちの役目である。

5 環境防災科

(1) きっかけ

私が舞子高校の環境防災科を初めて知ったのは、中学2年生の頃だった。その頃からどこの高校に行こうか悩んでいた私は、進路がすでに決まっていた部活の先輩の話をよく聞いていた。その先輩の決定した進路先は、舞子高校環境防災科だった。そこで初めて環境防災科を知り、少しずつ興味を持ち始めた。先輩が無事舞子高校に入学することができてから環境防災科で学んでいることや主な活動内容を聞いて、さらに興味を持つようになった。

(2) 入学して

私は、環境防災科に入学してから「災害と人間」という授業で阪神・淡路大震災について詳しく学んだ。そこでは、各地域の被害状況や避難所での様々な問題など、自分の知らないことがたくさんあった。今まで阪神・淡路大震災や東日本大震災などの災害に大きな恐怖心を抱いていただけで、災害を知った気になっていたのだと実感した。それから私は、いつ起こるかわからない災害時に市民のリーダーとして人を助けられるのかと不安な思いでいっぱいだった。また、授業以外にも様々な地域から外部講師の方が来て講義をしてくださり、災害や防災に関する外部の施設を見学することも多くあった。そこで自分の知らなかった災害を知って、学んでいくとともに自分の無力さというものも痛感した。しかし、今後起きるかもしれない災害への関心や意識というのは、入学する前と今では確実に大きく変わっていると思う。私はこの3年間で過去の災害を知り、様々な問題について深く考え、防災の知識をつけてきた。

6 私の夢と防災

私は、入学する前から具体的な将来の夢というものは決まっていなかった。しかし興味を持った職業がある。それはインテリアデザイナーという職業だ。インテリアデザイナーは家具やカーテン、照明などのデザインをする仕事だけでなく、家の内装すべての設計や計画を様々な職人さんと打ち合わせをしながら行っている。このようにインテリアデザイナーは細かい作業を積み重ねて依頼人の満足のできるような家を演出していく。

このような仕事が防災とどう関わってくるのか。自分が生活する場所が、どれだけデザインがきれいで素敵な空間ができたとしても、安全に安心して生活できないと意味がないと思う。今後心配されている南海トラフ巨大地震や大きな災害から命を守るために防災が必ず関わってくる。

災害が多いこの日本で防災対策をやったほうが良いと分かっているにもかかわらず、実際に何も対策をしていないという人が多い。防災袋や非常食を準備することや、お風呂の湯船に水を張っておくなどの対策をしている人は多くいて、それは十分に大切である。しかし「生き延びる」ということを忘れてはいけない。室内では、家具や家電が転倒してけがをしてしまうだけでなく、命を落とす危険性もあるため、家具の固定や配置などが重要になってくる。

今の日本にはインテリアと防災を結び付けた新しいコンセプトの「美防災」という言葉がある。この「美防災」という言葉をもとに耐震性の高いおしゃれな壁や家具が増えてきている。家具1つ1つに防災の要素がついていてすごく良いことだが、私が特に重要だと思うことは、何か起きた時に逃げられるルートを確認することだ。そのルートを常時確保するには、その近くの空間にモノをおかないことが大切になってくる。そのためにモノを置くのではなく、しまえる収納計画を立て、電気がなくても外の光を家全体に取り込めるような設計にすると、スムーズに避難することができる。まずは命を落とさないために空間の工夫が大事だと私は思う。

このような具体的な防災の観点を1から依頼人の方と話をし、コミュニケーションをとりながら、依頼人に満足してもらえる素敵なデザインが、安心・安全に暮らせる空間をつくっていく。空間のことから壁や家具のことまで防災のことを考え、たくさんの人と向き合って話をできるのは、インテリアデザイナーだけだと私は思う。家族全員が安心して暮らすための防災対策をするにあたって「これで大丈夫なのか」と不安になる人が多くいる。そんな人たちにアドバイスをする力や、防災の重要性を伝える力が必要である。何よりコミュニケーション能力が必要な仕事だ。環境防災科でつけた力と知識をインテリアデザイナーの仕事と関連させて、関わる人全員が「素敵なデザインかつ、災害時は安全なのか。」と何よりも先に、第一に防災のことを考えてくれるようにしていくことが目標であり、私の夢だ。

7 南海トラフ巨大地震

私は南海トラフ巨大地震を知ったのは中学生のころだった。その時は30年以内に70～80%の確率で発生すると言われていて、とても恐怖を感じていた覚えがある。

南海トラフとは、日本列島が位置するユーラシア大陸プレートの下に、海洋プレートのフィリピン海プレートが南側から年間数センチ割合で沈み込んでいる場所である。この沈み込みに伴い、2つのプレートとの境界にひずみが蓄積されている。過去1400年間を見ると、南海トラフでは約100～200年の間隔で蓄積されたひずみを解放する大地震が発生している。近年では、1944年に発生した昭和東南海地震、1946年に発生した昭和南海地震がこれに当たる。昭和東南海地震と昭和南海地震が起きてから70年近くが経過しており、南海トラフにおける次の地震発生の可能性が高まってきている。今までにないほどの甚大な被害を出すかもしれない災害が今すぐにも起きてもおかしくないことはわかると思う。30年以内に70～80%で発生すると聞いて、危機感を感じない人はいないと思う。しかし、実際に防災対策をしている人は少ない。まずは、1人ひとりの意識を変えていかないと被害は大きくなる一方だ。今の日本では常に防災と向き合っていくことが必要だと思う。

8 最後に

私は今回「語り継ぐ」という授業のおかげで、両親の阪神・淡路大震災の体験談をより深く詳しく聞くことができた。私は親の仕事をしている姿や、ご飯を作っている姿など、元気な姿を見続けてきた。だから震災当時に自分が死にそうになった話や、知り合いが亡くなってしまった話を聞いて、正直驚きを隠せなかった。1人ひとり体験談の内容は違った。しかし、3人の方のお話からは、いつどこで起こるかわからない災害の恐ろしさと、自分の命は自分で守ることの大切を、改めて学ぶことができた。人それぞれ話を聞いて、思ったり考えたりすることは違うと思う。だが、阪神・淡路大震災の教訓を風化させな

いために、その思いや考えを自分の中だけでとどめておかず、私たち若者が勇気をもって、次の世代へと語り継いでいくことが大切である。

災害は本当にいつ起こるかわからない。そしていつ起こってもおかしくはない。だから今すぐにでも「防災対策」や「備え」をしなければならない。災害が多いこの日本で、1人ひとりが常に防災と向き合える習慣を作ることが大切だと思う。

今回聞いた過去の災害の教訓を次の世代へと語り継いでいきたい。またこの3年間で、環境防災科で学ぶことができた知識を、次の自分の道で自分らしく伝えていきたい。

1 はじめに

私は阪神・淡路大震災が起きたあの日、まだ生まれてさえいなかった。なにが起きたのか、どんな被害だったのか、映像や写真で見る事しかできない。私達があの日の出来事を直接経験することは不可能である。だが、経験していなかったとしても伝えていかなければならない。それは、阪神・淡路大震災の教訓を伝え、二度と同じ被害を生まないためだ。そして、この災害があった事自体が忘れられないようにするためだ。

今回、私の両親はどちらも奈良に住んでいたもので、離れた所から見た震災について両親から、そして、実際に被害の中心にいた、私が中学生の時の担任の先生の3人に話を聞いた。

2 阪神・淡路大震災が起きたあの日

(1) 母の話

1月17日 午前5時46分 ー奈良県磯城郡田原本町

震災当時、母は奈良県北西部の田原本町にある一軒家の2階で寝ていた。いつもは6時頃に起きていたが、その日だけはなぜかわからないが突然目が覚めた。その瞬間、揺れが襲った。たいして揺れは大きくなかったものの、経験したなかでは大きい方だった。

揺れが収まると、不安になり1階に降りた。家族は全員無事で家に被害も無かった。外を見るが何の変哲もない普段通りの様子だった。揺れに気付かなかったのか、電気のついていない家もあった。「あまり大した揺れではなかったのかな」と感じた。6時前にテレビをつけると、地震があったという報道をしていた。だが、特に被害はなかったからか家族もあまり関心は無かった。ただ、鉄道、高速道路が不通というニュースを聞き、一般道が混むのではと考えいつもより家を早く出た。

7時頃に車で家を出発。15km程離れた高校に母は教師として勤務していた。家の近くは問題無く通れた。「大したことなかったな」と思っていると、高校のある町に入った所で渋滞に巻き込まれ動けなくなってしまった。普段は渋滞することなんてない道だった。結局、2時間程遅刻して学校に到着。だが、他の先生も遅刻してまだ来ていない人もいた。生徒が来ているか安否確認をしたが、テレビが倒れてケガをしたという生徒が1人だけで済んだ。授業の時間になっているものの、近鉄が不通になっていて登校できていない生徒も多くいたので、その日は授業ができなかった。担任を持っていなかった母は職員室でつけっぱなしになったテレビを見て、「えらいことになった」と感じた。それからしばらくは授業中に余震が来ることがあった。

2月か3月に初めて神戸に来た。夫(私の父)が神戸市の教員として4月から働くことになっていたもので、勤務先の学校に挨拶に行った。御影辺りまでは電車で行ったが、その先はまだ復旧しておらず、バスで学校のある須磨区まで向かった。父が挨拶をしている間、母は近くの公園で待っていた。ふと、公園を見てみるとキャンプ用のテントが張ってあった。最初は「公園でキャンプをしている」と思った。避難している事に途中で気づいたとき、非常に申し訳ない気持ちになった。「どうしても他人事と考えてしまっていた」と話した。

(2) 父の話

1月17日 午前5時46分 ー奈良県橿原市

当時、賃貸マンションの1階に住んでいた。いつもは6時頃に目が覚めるのに、その日は地震の1分程前に目が覚めてうとうとしていた。一瞬、ドーンという縦揺れが襲ってきて、本棚の上にあった雑誌が落ちてきた。震度は4だった。テレビをつけると“神戸で地震”と放送しているものの、詳しい情報は入っていなかった。7時すぎには職場である学校へ向かうため、車で出勤した。県内を南下して出勤中、停車していると余震が来た。学校に着いたが、普段通りに授業を行った。しばらくすると、段々被害が大きいという事が分かってきて、春から神戸での勤務が決まっていたので、不安になった。

3月末に赴任先である神戸市須磨区の学校に向かった。住吉から先はまだJRが復旧しておらず、灘まで満員の代替バスに乗った。学校の校舎は地震で被害を受け、解体工事中だった。職員室のある棟は残っていたが、グラウンドには仮設校舎が建てられていた。奈良から神戸へ引っ越そうとするが、震災の影響で家を借りようにもなかなか借りられなかった。学校は始まったが、まだ避難所が開設されていたので、ゴールデンウィークまでは学校に交代で泊まり込んでいた。野球部の顧問になったものの、仮

設住宅と仮設住宅の間の通路で練習をしなければいけない状況がしばらく続いた。

(3) 中学の時の担任の先生の話

1月17日 午前5時46分 一兵庫県神戸市東灘区

家の2階で寝ていると突然、下から押し上げるような揺れに襲われ、その揺れの力で立ち上がっていた。揺れは長く続き、その間叫び続けていた。部屋にあった家具はどれも倒れていた。同じように家具の多い1階で寝ていた父が気になり、2階から声を掛けると返事があった。無事だった。台所へ行くとここも色々な物で散乱していて、落ちていたガラスか皿の破片で足を怪我してしまった。情報を手に入れようとしたが、テレビは倒れてしまい使えなかった。外に出ると、暗くて周りの状況はわからなかったが、近所の人が外に出てきていた。家の前に止めていた車のラジオを聞くと、地震があったという事は伝えていたが、詳しい事はまだ放送されていなかった。

あたりを見ると、2軒隣に住んでいるおじいさんとおばあさんの姿が見えなかった。気になって家から外へ出てみると、「窓も扉も開かない」という返事がきた。了承を得て窓をブロックで割り、助け出した。

6時過ぎに若い女の子が向こうから興奮気味で走ってきた。「どうしたの」と聞くと、「おじいさんとおばあさんが埋まっている!」と言った。その子に引っ張られるように行くと、倒壊したアパートが目に入った。だが、女の子の言っていたアパートではなく、その隣のアパートが先に目に入った。1階が押しつぶされて2階が目の前にあり、「助けてくれー」という青年の声が聞こえた。女の子に誰か他の人を連れてきてほしいとお願いし、自分は生き埋めになった青年に対し、声を掛け続けた。見捨てていない事を伝える為、世間話をし続けた。女の子が3人男性を連れてきた。2階からアパートに入ると、近くにあったバットや金槌で床に穴をあけ、そこから青年を助けた。青年は「何が起きたんですか?」と聞いてきた。地震の瞬間に崩れてしまったので何が起きたのか分かっていない様子だった。

次に女の子の言っていたアパートへ向かった。ここでも「助けてー」という声があちこちから聞こえた。落ちていた物や車のジャッキを使ってやっと穴があいた。穴から入ると、おじいさん、おばあさん、犬がうずくまっていた。助けようとするも怖がってなかなか動いてくれない。一番若かった自分が穴に入って助け出した。助け出している間も「余震で崩れないか」と不安な気持ちで一杯だった。

さらにその隣の崩れたアパートの前に、おばあさんが茫然と立ちすくんでいた。おばあさんは「私は新聞を取りに外にいたが、お父さん(夫)は1階にいて死にました」と言った。「そんなことまだわかりませんよ」といっておじいさんを助けようとした。端の部屋だったので穴をあけると毛布が見えた。毛布を引っ張ると足に触れた。だが、おじいさんの足は冷たかった。「どう?」と聞かれたが、わからないと答えた。引っ張り出すとおじいさんは傷やケガのない綺麗な状態で亡くなっていた。「ほら死んでいるでしょ」おばあさんに言われてしまった。

そんな風に、当日はあちこちで救助活動に参加した。興奮していたのか、寒い事も空腹も喉の渇きも何も感じなかった。近くの山手幹線には人が綺麗な列をなして歩いていた。どこへ行くかもわからないが、これが避難なのかと驚いていた。その日は、余震も怖かったので車の中で夜を明かした。3日か4日後に、勤務先の学校に無事を連絡するため、自転車に乗って垂水区を目指した。長田区を通ると、火災によって焼野原になっていた。須磨区の板宿に着くと、バスや地下鉄が動いていることに驚いた。学校に着いて無事ですと伝えて、夜が怖いので直ぐに帰路についた。

話の最後に質問をした。「震災を経験した人が減っていますが、どんな事、またどうやって阪神・淡路大震災を伝えていきたいですか」先生は「若い先生を1月17日の朝の追悼式典に連れて行くようにしている。若い世代に伝えようとしても想像しにくいし、難しい。でも、あの式典の5時46分になると会場の空気が変わる。あの瞬間だけ、あの場所が95年の1月17日になる。若い先生にはそこで感じた事をクラスで伝えたらいいよと教えている」とおっしゃった。

3 環境防災科での活動

(1) 入学して

私が環境防災科を志望したのは防災というよりかは“災害”について学びたいと思ったからだ。「地震が起きるとどんな被害が起きるのか」「過去にどんな災害があったのか」など災害が発生した後の方に興味があった。

4月、私は晴れて環境防災科に入学することができた。入学して直ぐ、まだ防災の授業を1つも受けていないのに、石川県の中学生との交流事業が行われることになった。当日、1年と先輩達が交流会をする体育館に集められた。担当の先生が要項のプリントを配って軽く説明をすると、先輩達は直ぐに準

備に取り掛かった。このことにとっても驚いた。中学校の頃は何か行事があると、何日も前に説明され、事前の打ち合わせもあった。だがここでは違った。開始の数時間前に説明があり、そこから動き出す。だが先輩方はテキパキと準備を進めていく。「これが環境防災科か・・・」そう思った。

(2) 東北訪問に参加して

1年生の時の東北訪問は私にとって初めての宮城県だった。東日本大震災から6年経ち、報道も減り今どんな状況にあるのかということとはなかなか想像できなかった。そのような状況の中で、被災地での差が生まれている事が印象に残っている。バスで13時間かけ宮城県に入って見えた景色はいたって平凡な様子で、巨大地震がここを襲ったという事は全く感じさせなかった。だが、2日目に訪問した大川小学校は違った。学校の周りはどこも更地で何もなかった。しかし、最初から何も無い所に学校を作ったわけではない。ここには何軒もの住宅が建っていたが、津波で流されてしまったのだ。現在は災害危険区域に指定され、住宅を建てることは出来ない。ここでは復興は中々進んでいなかった。一方で3日目に向かった多賀城市はまた違った。1階が完全水没する程の津波が襲ったが、地震、津波が起きた事は全くわからない程に元通りになっていた。同じ被災地でも一方は元通り復興しているのに、もう一方はそこに家を建てることさえできなくなり、差が出ていた事が印象に残っている。

2年生の時はリーダーについて学んだ、この時私は立候補して全体リーダーになった。もっといろんな経験をしておきたいという思いからだった。とはいうものの、仕事は少ないだろうと自分で勝手に考えていた。点呼をして、挨拶をする。それぐらいだと思っていた。確かに最低限すべき事はそれだけだったかもしれないが、実際はまったく違っていた。

まず、リーダーは自分の考えを人に伝え、自分自身で指示を出さなければいけないという事が分かった。それまでリーダーというのは、上からの伝達を皆に伝える役だと思っていた。しかし、活動をしていると、生徒だけが先に活動場所に着いて先生方は挨拶をしたりしているということがあった。先生のいないなかで、指示を出すべき人間は誰かということリーダーである。間違っているかな？勝手に指示して怒られないかな？なんて思いは捨て、自信を持って皆に物事を伝えないといけないと学んだ。

もう1つ、リーダーとは面白い人でなければいけないことだ。私は堅苦しい人間だったので、きっちりして、真面目でいるのがリーダーだと思っていた。これが間違いというわけではないと思うが、中高生が集まる場では逆に煙たがられると感じた。最初は大声を出したりするのが恥ずかしかったが、やってみると意外と楽しいものだった。リーダーは場の空気を和ませ、皆に笑顔や元気を与えられる人でなければいけないと感じた。

3年生の時は東北の未来を感じた。訪問中に聞かせていただいた話は「目の前で人が流された」など恐ろしいものだった。だが恐ろしいだけではなく、生きること、希望を持つことなど、明るい話もあった。震災により東北は凄惨で課題を抱える場所となった。だが、その様な状況でも語り部活動などを通して頑張っている人がいた。前を向き、未来を見て頑張っている人と出会う事が出来た。

(3) ボランティアに参加するという事

環境防災科の特色であるボランティア活動。様々な種類のものがあり、頻度も非常に多い。

ボランティアというのは無償性が大事と言われている。最近でこそ有償ボランティアなんて物があるが、ボランティア活動に対し現金などの報酬などを受け取らないという理念だ。これだけ聞くと、ボランティア＝タダ働きという考えを持つ人がいても仕方ないと思う。自分の時間を削って他人に尽くして何がいいのかと考える人もいるかもしれない。

だが私は、実はボランティアは報酬を受け取っているのではと考える。それは“経験”という報酬だ。今までの3年間で様々な活動に参加してきた。夏祭りで綿あめやフランクフルトを売ったり、三宮の地下街で発表したりなどだ。普通の高校に通っていて、こんな経験ができるだろうか。絶対にできないだろう。では、経験したことの何が良いのか。綿あめを作った経験がどこで役立つかなんてわからない。もしかしたら、あまり人生に影響はないかもしれない。

だが、“経験”したという事実には変わらない。人生を生きて行く上で様々な経験をするという事は、その人の豊さにつながると考える。様々な事を経験すれば、新たな知識を得たり、違った角度から物事を考えたりすることができる。小学校の時の夏祭りは遊ぶだけだったが、ボランティアで初めて売る側に回ったことで、売る側の苦勞、子供とのふれあいの楽しさを知った。

ボランティアに参加するのは他人に奉仕するだけではない。参加するほうも数多くの事を学ばせてもらっていると考える。だからこそ、私は大学に進学しても、さらにその先でも様々なボランティアに参加していきたい。

4 これからの私と防災

先日、31年間続いた平成が幕を閉じ、新たな令和という時代が始まった。1995年の阪神・淡路大震災を機に、日本は災害時代へと突入したと言われ、また平成は災害の時代だったとも言われている。

地震が起きること、台風が発生することなどを食い止めるのは不可能である。だが、阪神・淡路大震災では通電火災やボランティアについて知られるようになった。東日本大震災では津波について改めて考えさせられる機会となった。2015年に岩手県を襲った洪水では、避難に関する警報の名称が変更され、わかりやすくなった。発生を防ぐのは難しいが、その被害を少なくしようとする防災、減災の意識は、徐々に高まっているのではないか。例えば、家電量販店に行けば防災コーナーが設置され、様々な種類の防災グッズが売られている。また、防災に関する授業が普通科や工業科などの学校でも取り入れ始められている。

だが、防災というのはそれでもまだまだハードルの高いものだと感じる。まず、お金がいる。タダでできれば嬉しいのだが、そうはいかない。備蓄、家具の転倒防止、耐震補強工事など来るかもわからない災害に対して出費するのは厳しい。また、防災は面倒である。やはり来るかもわからない災害について考えるのは面倒であり、その時間で他の事もできてしまう。そもそも防災は難しそうという考えがあるかもしれない。急に「耐震化」と言われてもどうしたらいいかわからないし、なにを備蓄すればいいのかわからない。防災とは関わりにくい難しいものだと感じ取られても当然だろう。

それでも、南海トラフ巨大地震、首都直下型地震などの巨大災害が危惧されている。南海トラフ地震は30年以内で70～80%の発生確率、首都直下型地震も30年で70%と言われている。これ以外でも北海道根室地方や大阪平野など日本各地で巨大地震の発生が予測されている。さらにはゲリラ豪雨、大型台風などの発生も考えられている。もはや災害と縁なく生きていくのは不可能な時代となった。

この様な時代の中で、防災、減災を広めていくことが私たちの使命だと考える。もし30年後、巨大災害が発生したら、私たちは48歳である。職場で重要なポストを担っているかもしれない年齢だ。そんな時、部下や職場を守らなければいけない。10年後ならどうだろうか。結婚して、大事な家族や可愛い子供がいる時期かもしれない。両親や妻(夫)、子供を守らなければいけない。明日だったなら・・・私は守られる側になっているかもしれない。だが、どんな時であっても防災が必要となってくるのは明白だ。職場であれば、職場の防災対策、家庭であれば備蓄や耐震化、そして自分自身を守る行動。これらは災害が起きた瞬間に知っても意味が無く、そんなことをしていれば手遅れになる。災害が起きる前から知っておかないといけない。そして、私たちは他の人よりも多く防災について知り、考えているのだ。自分、最愛の家族、大切な仲間を守るためにも、これからの時代、私達が防災の大切さを伝えていく必要があるのではないだろうか。

5 最後に

今回、この執筆をしたことで阪神・淡路大震災、防災、そして自分と向き合う事が出来た。私の両親は神戸から離れた場所に住んでいたため、これまで震災の話を聞いたことはほとんど無かった。だが、逆に聞く機会が少ない被災地外から見た被災地について知る事ができ、良い経験となった。

執筆に協力してくださった私の両親、そして中学生の時の担任の先生にはこの場をお借りして感謝を申し上げたい。

環境防災科に入学した時は、防災とは「備蓄、耐震化、家具の固定」など個人レベルの小さな活動だと思っていた。だが、ここまで学んできて分かった事は、防災とはとても幅広い活動だという事だ。個人レベルの活動は勿論だが、地域、企業、国、さらには世界まで、ありとあらゆる場面で防災が行われている事を知った。

また、災害、防災、減災などの問題は様々な分野と密接に関係していることも分かった。教育、福祉、建築、交通、産業、情報、原発、国際、など例を挙げればきりが無いほどだ。どんな分野にいても防災は必要になってくる。だからこそ、将来どんな職業に就いたとしても、防災に関わっていくようにしたい。

最後に、私は無力である。この70億人の世界の中のたった1人に過ぎない私には、たいした力も無い。だが、そんな中で無力と嘆くのではなく、できる限り抗って生きたい。それは、東北訪問で出会った方々が自分よりも苦しい環境であるだろうに、語り部活動などを行い、前を向いて生きていられたからだ。ならば私も頑張らなければいけない。無力なんて関係なく生きていきたい。

被災者から未災者へ

辻 悠汰

1 はじめに

私は25年前に起きた阪神・淡路大震災を経験していない。そして、震災を経験していない人たちが増え続けている。そんな私たちに何ができるだろうか。それは、震災を経験した方から体験談を聞いたり、教訓を学んだりして震災を経験していない人たちに広めていくことだと考える。そして、防災を学ぶ私たちには次世代へと語り継ぐ使命がある。そこで、私は阪神・淡路大震災を経験した父と母に当時の体験を聞くことにした。父と母の記憶を伝えていきたいと思う。

2 父の話

(1) 地震発生

当時、18歳の高校3年生で神戸市垂水区に住んでいた。地震発生時は2階のベッドで、就寝中で突然雷が落ちたような音で目覚めた。寝ぼけていたこともあって、地震の揺れは感じられなかった。すぐに部屋のカーテンを開けて外の状況を確認したが異常が確認できなかったため、もう1度寝ようとした。すると、母親が大きな声で地震が発生したことを知らせてくれた。

(2) 地震後

地震発生後、1階に降りて行ったところ、台所の食器棚から食器が飛び出し、床に散乱しているのを確認した。また、母親は断水に備え、浴槽に水をはろうとしていた。しばらくすると、水は出なくなり停電にもなっていた。母親は台所の片づけ、そして妹と、こたつに集まりしばらく茫然としていた。その間にも余震が繰り返されていた。当時は、地震に対する知識が乏しく、正直どう行動していいのかわからなかった。数時間後に電気が供給されテレビで、大災害が起きているのがわかった。

(3) その後の生活

数日間は、断水が続いたため近くにある給水所を往復する日が続き、ガスについては数週間使用できなかったため、入浴する時には親戚の家に通っていた。後に知ったことで、自宅の基礎に損傷を受けていたようだったが住める状態であったため、避難所生活はしなかった。

地震がおきてから数日間は、雪のようなものが時々降っていた。後に調べるとそれは、雪ではなく長田区で起きた大火での灰が風にのって垂水区まで来たものであった。

(4) 教訓

いつ起こるかわからない地震に対して、日ごろから備えることの大切さを痛感した。地震の揺れが起きた時は知識がなければ、とっさに行動することができない。すぐに頭を守り安全な所へ避難することを平時から実践しておかなければならない。そして、災害時は一番に情報が必要で、得ることができないと不安になりどのように行動すればいいのか分からなくなる。

3 母の話

(1) 地震発生

当時、18歳の高校3年生で長田区に住んでいた。2階で寝ていると今までに感じたことのない下からの突き上げがあった。その瞬間体が宙に浮いた。実際の揺れは数10秒ほどであったが、それよりも長く感じた。

(2) 地震後

揺れが収まり、とにかく外に出ようと思い階段を降りようとした。しかし、普段はあるはずの階段が地震後には無くなっていた。おかしいと思い2階の窓から外を見てみると、そこは地上だった。つまり、1階が潰れていたのである。幸い家族は1階で寝ていた人がいなかったため犠牲になった人はいなかった。

(3) その後の生活

長田区はあちこちで火災が起き全壊の家屋が多かったため、近くにあった長田消防署に避難することになった。冬の季節の中パジャマ姿で逃げてきたため、避難所生活は凍えるような寒さを味わっていた。すると、1人の消防士の方が自分の着ていた上着を着せてくれて、寒さから耐えることができた。避難所には、十分な食料が届かず冷えきったおにぎりなどを家族で分け合った。時には、大人たちが限りある食料を奪い合い喧嘩が起きた。はじめはみんなで助け合おうという気持ちになっていたが次第に

生きるために必死になっていった。

(4) 教訓

平時から家族で地震が起きた時のことを想定して、話し合い、避難場所を決めるなど準備をしておくこと。自分の住んでいる街を知り、近所の人たちと普段から交流を持ち、日々声を掛け合うこと。そして、一番大切なことは、毎日後悔しない日々を送り、いっぱい笑って幸せになること。また、阪神・淡路大震災ではたくさんの方が亡くなった。今私たちにできるのは自分を信じること。命を大切にすること。今を生きるということ。あたりまえの日常に感謝することを忘れないこと。これが阪神・淡路大震災での教訓である。

4 環境防災科

(1) きっかけ

私は高校受験する1年以上前から、この環境防災科に入学すると決めていた。小さい頃から消防士になると考えていた私に、母が環境防災科を勧めてくれたことがきっかけだ。1年次と2年次には消防学校の体験入校があり、また、外部講師の講義で消防士の方の授業が受けることができるという特色に惹かれ環境防災科に入学すると決意した。そこからこの学科のこと調べていくと、ボランティア活動に参加できることを知った。出前授業や被災地訪問、募金活動など多様な種類のボランティア活動がある中で、私は毎年夏休みにある東北訪問に興味を持った。なぜなら、当時小学生だった私は、テレビの画面越しに映る津波の映像に目が釘付けになったのを今でも覚えているからだ。そして、画面越しでしか見ることができなかった被災地を自分の目で見てみたいという気持ちと、被災された記憶や感情を被災者の方々に直接伺いたいという気持ちを持ったからだ。

(2) 入学後

環境防災科に入学すると、できる限り多くのボランティア活動に参加することを心掛けた。初めてのボランティア活動は、西神南の「ふれあい祭り」で、会場設営やブース展示、地域の方との交流など多くの役割や目的があり、何をしたらよいかわからなかった。しかし、環境防災科にはとても頼れる先輩方がいて、親切に指導していただき本当に助かったのを覚えている。

このボランティアの中で特に、あるおばあさんと一緒にお話をしたことが印象に残っている。1人で座っていたおばあさんに自ら声をかけ、売店の食べ物を食べながら色々な話をしたあと、おばあさんが笑顔で「お話をしてくれてありがとう。おかげで元気になった。」と言ってくださった。私はおばあさんを元気にすることができてとても嬉しかったことを覚えている。初めての経験で緊張することが多くあったが、ボランティア活動に参加することで、自分にとって貴重な経験ができることを知った。

ほかにも数多く参加した中でも特に大きな経験ができたボランティア活動がある。それは、聴覚障害を持つ子供に防災を教えるというものだ。授業の内容は、地震が起きた時の避難行動と、津波が起きた時の避難行動を教えるというものだった。聴覚障害を持つ子供たちにどうやったら災害時の避難行動が教えることができるのか案を出し合った結果、みんなの前で災害時の避難行動を劇にしたら教えることができると考えて、手話も勉強しながら劇を作成した。この劇を子供の前で行うと、避難行動を理解してくれて、聴覚障害のある子供たちにも防災を広めることができるという大きな自信にもなった。

(3) 東北訪問

入学前から必ず参加すると決めていた東北訪問は、1年の夏に参加した。そもそも参加するまでは、被災地に行って私たちが何かできることをしに行くのだと思っていた。しかし、日程の多くは、震災を経験した方の講義や被災地の町歩き、被災地の高校生とのワークショップなど、私たちが学ばせていただくために訪問するというものであった。多くの行程を通して、被災地の過去と今を知ることができ、被災者の思いや東日本大震災での教訓を学ぶことができた。それと同時に、この学んだことを広めていかなければならないという責任を感じることもできた。

さらに、この東北訪問のもう1つの目的を知ることができた。それは、被災者との繋がりである。このことを知ることができたのは、被災者の方々との焼きそばパーティーで、色々なお話をしたり全員で円になって「しあわせ運べるように」と「花は咲く」を合唱したりしたことがきっかけだ。こういった交流がなければ、被災者の方々はこの震災が風化していくと感じてしまう。交流を定期的に続けることが大切だと学んだ。そして、環境防災科の後輩たちもこの繋がりを継続して欲しい。

(4) 消防学校

環境防災科では1年次と2年次に神戸にある消防学校の体験入校がある。この体験は環境防災科に入学する前から楽しみにしていた。消防士になるという夢は小さいころから持っていて、このような貴重

な体験ができることが、この学科に入った理由の1つでもある。1年次には1日、2年次には2日体験することができ、内容としては講義、規律訓練、ロープ結索、搬送法、消火活動などがあり、主に2年次に実践系の体験がある。

一番印象に残っていることは、5人の小隊を作り消火活動の訓練を行ったことだ。火災を消火する時や救出活動をする時にはチームワークが大切だと考え、小隊の1人1人が自分の役割を素早く行うことを目標にして1分1秒でも早く消火することを心掛けた。訓練する前は、全員頭の中で動きのイメージは出来ていて上手く活動できると予想していたけれど、訓練してみるとホースがスムーズに延ばせなかったり、ホースとホースを結合するのに時間がかかったりして想定外のことが起きてしまった。結局、5人で協力して消火することができたが、訓練の中での良かった点や悪かった点が出てきた。訓練を通して、活動を行うときには想定外は付きものだと言ふことができた。これがもし、火災現場などの災害現場だったなら他にも多くの想定外が起こることが考えられる。消防士が様々な想定をして訓練を行う理由は現場で起こりうる様々な想定外に対応できるようにするためだと感じた。また、消火活動を行うときにホースを結合するのにも、水を出すために弁を開放するのにも1人では決して出来ないことを痛感した。チームワークの大切さを改めて知ることができた。

もう1つ印象に残っていることがある。それは2年次に行った搬送法の体験である。これは、怪我人を人の力で安全なところへ運んだり、病院まで運んだりするときに役立つものだ。助ける人の数に応じて運び方が全く違っていた。そして、人は怪我をして全く力が入らない状態になると、運ぶときにとっても重くなるということに気づいた。そのため1人で運ぶときは力が強い人でないと安易に運べないと感じた。しかし、担架などの道具があると人の手だけで運ぶときと比べて小さい力で運ぶことができる。救急車に備わっているように、各家庭に担架等の救助するときに役立つものを備えておくこと災害時に役に立つと痛感した。災害時には率先して怪我人を正しく運べるようにしたい。

5 南海トラフ巨大地震

これから30年の間で南海トラフ巨大地震が70%~80%の確率で起こるとされている。そして、2019年5月31日の中央防災会議では約23万1千人の方が犠牲になると公表された。主な要因としては東日本大震災と同様に、地震のあとの津波で多くの方が犠牲になる。いかに素早く高台へ行って津波から避難することができるかが、重要になるのだ。今の日本では高齢化社会が進んでいることにより、1人で避難することが困難な人が多くいる。消防などの公的機関に任せるのは難しいし、津波が早く到達する地域は地震後5分もしないうちにやってくるため、周りの住民と協力して避難しなければならない。普段から地域単位で避難訓練を行っておくことが大切である。また、津波避難タワーを建設したり、発災前から高台に住居を移したりする対策がある。こういったハード面の対策も重要だが、1人1人の防災に対する意識を高めるためのソフト面の対策も重要である。例えば、家族がバラバラになったときはどこで避難して待ち合わせをするか決めておいたり、災害時伝言板ダイヤルの確認をしておいたりすることで、どこへ避難するか迷わなくなり迅速に避難することができる。このように日常からできる対策をしておくことが1人でも多くの命を救うことにつながるのである。

6 夢と防災

私の将来の夢は消防士になることだ。きっかけは2つある。1つ目は私の父が消防士で、小さい頃から父の背中を見てきて、父のような消防士になりたいと憧れを抱いたからである。2つ目は母が阪神・淡路大震災で被災したときのエピソードだ。母は当時、長田区で被災し近くにあった長田消防署に避難した。冬の季節でパジャマ姿だったため凍えるような寒さを耐えていると、消防士の方が自分の着ていた上着を背中にかけてくれ寒さからしのいでくれたのだ。そのことを聞いて消防士は優しさもある、ヒーローのような存在だと感じ、私も市民への優しさをもった消防士になりたいと考えた。

消防士には消火・救急・救助・防災・予防の5つの任務があり、市民の安全と命を守る使命がある。出動するとき以外は、地域住民への啓発活動を行っていて、消防士になったらこの啓発活動に力を入れたいと考えている。3年間、環境防災科で学んだ知識や、周りの人へ伝える技術と経験から地域の防災訓練や、学校の避難訓練を通して災害の恐ろしさと災害時の命の守り方を発信していきたい。

消防士は出動要請があつてから1分1秒を争っている。そのために多くのことを想定した訓練を日々行っていて、私はその訓練を父の職場で目にすることがある。その訓練は、消防車から4人の隊員が協力して動き、火元までホースを延長し消火活動を行うというものだった。1人1人が素早く行動し、どうやったらもう少し早く消火できるかを相談し合う姿を見て、とても強い連帯感を感じ、チームワーク

の大切さを知ることができた。

7 さいごに

日本に住む以上はどこにいても災害からは避けることはできない。災害が起きるたびに悲しみと教訓をもたらす。そして私たちは次の災害に向けて過去の教訓から学び、備えなければならない。この「語り継ぐ」の制作を通して、阪神・淡路大震災の恐ろしさを改めて学ぶことができた。また、震災を体験した方々、1人1人が25年前の出来事を未だ鮮明に覚えていて、様々な思いを抱き続けているということを知った。その思いを聞いた1人として、次の世代へと語り継がなければならないという使命を感じている。阪神・淡路大震災で被害があった地域では、震災を経験していない人が増えているという問題がある。この震災を風化させないために将来、消防士になって環境防災科で得た知識や防災の技術を地域の防災訓練や学校の避難訓練を通して広め、語り継いでいきたい。

「震災を知らない私たち」

戸田 蓮納

1 はじめに

私は、阪神・淡路大震災から6年後の震災を知らない世代に生まれた。だが震災から得た教訓は時間が経つにつれて風化していくものだ。それを防ぐためには、私たちのような震災を知らない世代が震災を体験した方たちのお話を聞き、次の世代に語り継いでいくことが大切だと考える。

ここでは、私の母や母の叔父と叔母にインタビューし阪神・淡路大震災当時、どのような状況で被災したのかをまとめて書きたいと思う。

2 阪神・淡路大震災の概要

名称：兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）

日時：1995年1月17日 午後5時46分

震源地：淡路島北部

震源の深さ：16km

規模：マグニチュード7.3

最大震度：7

死者：6,434名

行方不明者：3名

負傷者：43,792名

（阪神・淡路大震災の概要について 内閣府 防災情報のページより引用）

3 阪神・淡路大震災

（1）母の体験

阪神・淡路大震災発生の1週間前から自動車の免許を取得するため、山形県での合宿に参加していた。

（2）震災当日

合宿先の寮で朝ご飯を食べながらテレビを見ていると、地震発生直後の映像が流れてきた。「すごい映像やな～これどこやろう。」と思った。そのときはまだ他人事だと思いながら見ていた。ニュース番組を詳しく見ていくうちに自分の住んでいる神戸だと知り、とても驚き混乱した。

その後は当時、春日野道に1人で暮らしをしていた母の祖母と連絡が取れず心配になり、すぐに神戸に帰ろうと思った。だが、寮母さんや教習所の先生に強く止められ、神戸に帰る交通手段もなかったため、その日は諦めるしかなかった。

（3）震災から1週間

震災発生直後から、JR六甲道駅を中心に大きな被害を受け、新長田駅付近の駅設備も被害を受けていたので全線で運転を見合わせていた。また、鷹取工場では建物が全壊したため、検修庫や検修設備などに甚大な被害を受けていた。

伊丹空港に飛行機が離発着できるようになり、神戸に帰れることになった。帰るときに、教習所の先生が神戸に戻ったときに困らないようにとカセットコンロや缶詰めなどの保存食を持たせてくれた。その時には、伊丹空港から大阪駅－尼崎駅間の上下線と西明石駅－姫路駅間で運転を再開していたのでJR尼崎駅から歩いて自宅に帰った。とても長い距離を歩いたことを覚えている。

（4）震災当時1人暮らしをしていた二宮の自宅に帰る

自宅に帰ると、姿見や窓ガラスが割れてベッドの上に散乱していた。もし、合宿に行かずに、神戸の自宅で寝ていたら大怪我をしていただろうと思った。しばらくして、お腹が空いたため自宅近くのコンビニエンスストアに行くと、髪が乱れている店長さんが追い詰められたような表情で、「もうなんにもないで、なんにもない。みんなが盗んでいったから売れるものはなんもないねん。」と言っていたことを今でもよく覚えている。コンビニエンスストアの店内には、被災した人たちに商品を盗まれてしまい、店内にはのど飴くらいしか残っていなかったため、水やお弁当などの食料品は買うことができなかった。コンビニエンスストアは24時間営業なので、普段は店舗に鍵をかけておらず、地震の揺れで鍵が見つからなくなり店長さんだけが家に帰ることができず店内に残っている状況だった。

自宅では、ライフラインが全て途絶えていたので、近くの二宮小学校に避難した。だが、座る場所もないくらい小学校の体育館や教室には避難者でいっぱい、とても避難できる状態ではなかった。小学校で配っていた救援物資の調理パンを1つだけ貰いその日は自宅に帰った。

その後は、何度も余震が続き眠れない夜が続いた。幸い自宅近くでは、小学校以外の場所でも炊き出しをしてくれている団体がおり、「ちゃんと明日もちゃんと来てや、待ってるから」などと声をかけてくれた。何も食べられない日もあったが、そういった人たちに助けてもらいながら日々を過ごした。本当にありがたいと思った。

4 母の体験を聞いて

私は今まで、母の震災体験を聞く機会がなかった。だが、今回の「語り継ぐ」を通して、震災当時の母の状況やその周りの人たちの混乱した状況を知ることができた。神戸の被災状況や被災者の混乱など今まで知らなかったことがたくさんあった。これからは母やいろいろな方々から震災当時の状況を詳しく聞き、知りたいと思う。

5 母の叔父と叔母の体験

(1) 震災当時

震災当時、叔父と叔母はNTT 西日本に勤めていた。叔父と叔母の住んでいた家は地震の揺れの影響で家全体がねじれて歪んでいたため、裏口から避難した。幸いすぐ近くにある叔母の実家には大きな被害はなかったので、実家に借り住まいとして一時避難していた。住んでいた家は、瓦が何枚か落ちていたものの特に目立った被害は見られなかったので大丈夫だと思っていたが、建物調査の際に家全体と柱自体が歪んでいるため倒壊の危険があることを知り驚いたという。余震が続いているなか、家が目の前の道路に倒壊する危険があるため、建て直しをするまでの間は柱と柱の間に筋交いを入れて応急処置をして倒壊するのを防いだ。

(2) しばらくして

自宅に帰ることができなかったので、三木市内にある NTT 西日本の社宅に希望する社員は入居できるようになり申し込んだ。

最寄り駅である神戸電鉄が運行しておらず、車がとても渋滞しており移動手段はバスと徒歩しかなかった。道路の渋滞がひどかったため、本来なら神戸駅からバスで自宅に帰るまでは約30分かかる道を1時間以上経ってもまだ自宅に到着できない状況だった。そのため当時勤務先だった元町にある職場から自宅の2つ手前のバス停まで歩き、そこからバスに乗っていた。やっと乗ったバスは道路の渋滞でなかなか進まなかった。

NTT では、復旧作業をいち早く終わるために全国から応援が来ていた。職場には、宿泊設備がなかったので、廊下やソファにはたくさんの社員が寝ている状況だった。全国から応援で来ていた職員の方たちには、会社からお弁当が支給されていた。母の叔母は実家から通勤していたので、お弁当は持参していた。JR が運行を休止しているなか、明石方面から通勤している社員もいた。そのため、当時運行していた明石から出港するフェリーでハーバーランドまで行き、そこからは歩いて通勤していた。会社では、徒歩で通勤していた社員も多かったのでビルや高い建物が倒壊する恐れがあるところは、その近くは歩かないようにと注意を促されていた。

母の叔母の当時の仕事は、震災で破損した電話回線などの修理の手配をする電話窓口だった。混乱のなかで毎日、休む暇もなく何時間もかかる道のりを通勤した。叔母は震災があった年の6月末に退職した。

(3) 母の叔父

叔父は震災当時、NTT 西日本の大阪にある本社に勤めていた。だが、JR が運行しておらず通勤できなかったため、大阪から神戸の長田にある電話局に勤務することになった。震災当時、叔父は地震で破損した電話 LAN の通信設備の復旧作業に携わっていた。NTT の回線を使用している企業を一軒ずつまわり、修理していた。しばらくしてから、長田から三宮での勤務に変わったが、交通手段がないので、三木の社宅から自動車以西神中央まで行き、三宮の電話局に通勤するという生活が約1年続いた。JR が動き出してから大阪の元の職場に戻ることもできた。

震災当時大変だったことを聞いてみると、2つある。まず1つ目は、神戸のNTT から修理をするため各企業に出向く際に、道路の通行止めによる車の渋滞で、到着するまでに何時間もかかっていたこと。その影響で、思うように復旧作業が進まず、仕事にならなかったこと。2つ目は、会社と自宅の往復に

時間を費やしたことだった。と言っていた。

6 環境防災科

(1) 入学するきっかけ

私が、環境防災科に入学することを決めたのは中学3年生の秋頃だった。中学3年生の秋頃には私の周りの友人たちのほとんどは、どこの高校に進学するのか決まっていた時期だった。私が全く決められずに悩んでいると、その当時担任だった先生が環境防災科に入学することを勧めてくれた。理由は、中学3年生の夏休みに参加した「こころの絆プロジェクト」で東日本大震災の被災地を訪問したことだった。被災地を実際に自分の目で見て体験し感じたことや、被災された方との交流で震災当時のお話などを聞かせていただいた。そのこともあり、東北訪問はもちろんその他にも、募金などのボランティア活動をしている環境防災科の説明会に参加したのが大きなきっかけとなった。

今思うと、中学3年生のとき東日本大震災の被災地訪問をしていなかったら、この環境防災科に入学はしていなかっただろう。

(2) 入学してから

環境防災科に入学してからは、たくさんのボランティア活動に参加し、充実した高校生活を送っていた。しかし、中学生の時は自宅から学校までの通学時間が徒歩5分だったのに対して、高校に入学してからは、慣れないバスと電車を乗り継ぎ、約1時間の通学時間だったので、入学当初はよく電車を乗り過ごしていた。中学校では、文化部の美術部だったのに運動部の水泳部というとてもハードな部活に入部したため、練習についていくことに必死だった。そのため、「勉強」・「部活動」・「ボランティア活動」を並立するのは難しく簡単ではないことを学んだ。

1年生の時は、「災害と人間」という授業ではたくさんの外部講師の方々に講義をしていただき、震災当時の応急対応や被災状況から復旧するまで詳しく講義をしていただいた。その他にも、地震発生のメカニズムの説明を聞いたり、阪神・淡路大震災の原因となった断層が保存されている「野島断層保存館」に見学に行ったことをよく覚えている。

2年生になってからは、阪神・淡路大震災で甚大な被害を受けた長田の復興をみる、まち歩きをした。まち歩きでは、区画整理された街並みや、震災から復興した商店街の人たちの話を聞くことができた。また、防災や災害に対する備えや、1年生の時に学んだことを活用して応用することが多かった。消防学校の体験入校では、2日間という短い期間で一般の人でも初期消火ができるように作られた応急消火栓などの使い方を学んだ。

3年生になると、3年間学んできたことを活かして防災をどう広めていくのか、被災体験を風化させないためにはどうすべきなのか考える機会がたくさんあった。

環境防災科に入学して、これまで普通科では体験できないたくさんの経験や授業を受けてきた。卒業後はこの環境防災科での3年間を一緒に過ごしてきた大切な仲間たちと、今のように毎日会えなくなるのは寂しいが、ここで出会った仲間を大切にしていきたいと思う。

7 私の夢

(1) きっかけ

私は将来、DMATの看護師になりたいと思っている。DMATの看護師になるという夢を持つようになったきっかけは、中学3年生の時、環境防災科に入学することを決めたことだった。環境防災科に入学するためには小論文が必要だったためそこで将来の夢を考えるきっかけとなった。将来の夢を探していくうちに、「人の役に立つ職業に就きたい」「一人でも多くの命を救いたい」と思うようになり、看護師という職業に興味を持ち始めた。

(2) 夢と防災

私が普通科とは少し違うこの環境防災科で学んだ防災の知識はいつ、どのような場面でも役立てることができると思う。看護学校に入学してからも、その中にいるどの同級生よりも防災や災害について学んできて、それらについての知識を持っているため、環境防災科以外の同級生には負けない自信がある。そして、進学してからも、DMATの看護師になってからも災害現場や被災地などに派遣された先での救護活動をしているときでも活用できる場面が多くある。

(3) 大切にしたい事

看護師という職業のなかで、大切にしたいと思っていることは「命に向き合うこと」と「人の気持ちを考えること」の2つだ。環境防災科に入学してからこれまで以上に、地震や自然災害についての学習

のなかで、人の命の大切さを実感する機会が多くあった。それらを通して学んだことは、命はすぐに消えてしまうということだ。そのため、命は大切に扱わなければいけない。1人でも多くの命を救うためにも、看護師としての立場から、たくさんの人に命の大切さや防災・減災の大切さを広めていき「自分の命は自分で守る」ことを伝えて、広めることができれば災害で亡くなる人を減らせるのではないかと考える。

8 まとめ

(1)「語り継ぐ」

私は、今まで家族の震災体験を聞く機会がなかった。だが、今回の「語り継ぐ」を通して、母や母の叔父や叔母から阪神・淡路大震災当時の状況や、その周りの人たちの混乱した状況を知ることができた。神戸の被災状況や被災者の混乱など今まで知らなかったことがたくさんあった。せっかく被災体験をたくさんの方々から聞いた。それを、私のなかだけで終わらせては「語り継ぐ」ことにはならない。しかし、高校生の震災を体験していない私は無力で、今できることは限られている。でも、小さい声ながらも被災体験を語り継ぎ私たちのような震災を知らない世代にも防災や減災の大切さを広めていきたい。そのためには、これからも家族以外にもいろいろな方々から震災当時の状況を聞き、さらに詳しく知りたいと思う。

(2)最後に

阪神・淡路大震災を忘れてはいけない、忘れないと今まで以上に強く思った。この「語り継ぐ」を書くにあたって、私に震災当時の体験を話して下さった方たちのそれぞれの震災への思いや感じ方などを知ることができた。その思いを大切にしていきたいと思った。

私たちが生きていくなかで、「災害」から逃れることはできない。また、災害が多い日本では、これから起こると予想されている南海トラフ巨大地震やその他の災害に備え、阪神・淡路大震災から学んだ教訓を後世に残すことが大切だと思う。それに、災害の怖さや防災に対する社会全体の意識が変わればこれから起こる災害に備えることができ、1人でも多くの命を救うことができると思う。

「語り継ぐ」

富田 彩翔

1 はじめに

1995年1月17日午前5時46分に淡路島北部を震源とした阪神・淡路大震災が発生した。私はこの震災から6年後に生まれたため、震災を経験はしていない。阪神・淡路大震災から多くの月日経ち震災を知らない人たちが、この神戸の街でも多くなった。1月17日が近づくにつれてドキュメンタリー映像が流れ、1月17日には、追悼式典が行われる。名前は知っているけどもどのような震災だったかまでは詳しくは知らないといった人や、将来的には、父も母も震災後に生まれたので当時の状況を聞くことができない人や、語り部さんの高齢化などによって実際の体験談や知る機会が減り、だんだんと震災のことが忘れ去られてしまう。そうならないように私たちのような震災のことを知らない世代も当時の状況や教訓を語り継いでいかなければならない。被災者から未災者へ、未災者から未災者へ語り継いでいきたいと私は思う。

2 阪神・淡路大震災

地震名：1995年兵庫県南部地震

発生日時：1995年1月17日 午前5時46分

震源地：淡路島北部（北緯34度36分 東経135度02分）

震源の深さ：16km

最大深度：震度7

地震の規模：M7.3

人的被害：死者6,434人 行方不明者3人 負傷者43,792人

主な死因：圧迫死（圧死、窒息死など）

住宅被害：全壊109,406棟 半壊144,274棟 一部損壊390,506棟 全焼7,036棟 焼損7,574棟

【特集】阪神・淡路大震災-神戸新聞 NEXT より引用

3 K先生の体験

発生前は就寝していた。地震のひどく大きな揺れで目を覚ました。高砂市に自宅があったのだが、揺れはとても大きかったという。食器は散乱していなく、テレビも付いたままであまり大きな被害はなかった。金魚鉢からは金魚が飛び出していたという。家の壁にはひびが入っていた。後から分かったことだが、もしかしたらその揺れのせいで、少し家が傾いたのかもしれない。しかし、家は問題なく住むことができた。当時は、神戸市西区にある高校に勤務していた。その日、高校に向かおうとしたのだが、高速道路は大渋滞で、全く動かなかった。その日は高校に向かうことを諦め、高速道路を降りて家に引き返した。次の日は、高校に行った。勤めている高校で亡くなった生徒は1人もいなかった。災害後の家庭訪問や安否確認はしていないので、当時は担任をしていなかったと思う。「学校にいても仕方がない。」と思い、何かしようと考えた。一番初めに思いついたことは、ボランティアに行くことだった。

はじめに向かったのは、神戸市立西体育館だった。そこでは、送られてくる支援物資の仕分け作業を行った。次に、神戸市兵庫区にある高校へ向かった。高校は避難所になっていたのも、避難して来た人たちで混雑していた。そこで人生初めての炊き出しを行い、石狩鍋を作った。それから、東須磨にある下中島公園へ向かった。その公園では、避難所に入れなかったのか、それとも入らなかったのかわからないが避難してきた人が自衛隊のテントで生活をしていた。その公園は避難所にも避難場所にも指定されていなかった。そこでも炊き出しを行った。その場所とは、大体1年ぐらいの間、長く関わった。炊き出しだけでなく、テントの代わりに小屋を建てたりした。

1月22日は息子と一緒に長田に住んでいる友人のところへ向かった。長田といえば特に火事がひどかった場所だ。神戸市営地下鉄が板宿駅まで通っていたので、神戸市営地下鉄に乗って板宿駅まで行き、そこからは歩いて向かった。震災から5日経ったとはいえ、家などの焼けたにおいがすごかった。1階が潰れて2階だけになってしまった家などの間を歩いて、物資を届けに行ったことを覚えている。

家では電気が通っていたのでテレビを見ることができた。刻々と被害が悪化していくのが伝わってきた。死者の数が日に日に増えていったことを覚えている。

(1) 当時の大まかな年齢

中堅教員

(2) もし、次災害が起こったら気をつけたいこと

想像がつかない。しいて言うならば、地震の揺れと津波に気をつけたい。離れて暮らしている家族との連絡の取り方や、近くに住んでいる娘と避難所や避難方法の打ち合わせをすること。非常用持ち出し袋や飲料水は用意している。

東日本大震災の時に重なった三重苦、地震・津波・原発の放射能漏れ。それに対する地震の備え・津波の備えだけでなく、地域によっては原発の備え。今は稼働していないが静岡の浜岡原子力発電所による被害や、日本海側にある琵琶湖近くの原子力発電所が、福島原子力発電所のように放射能漏れを起こしてしまうことによって、琵琶湖の水を汚染してしまう。そうなってしまうと、飲料水として利用している関西圏は水不足になるだろう。そのための備えも考えておきたい。

(3) 震災を知らない世代に伝えたいこと

一番は自分の命を守ること、それから、家族、知り合いの命を守ること。

原発の災害は想定しておいてほしい。放射能は色も、においもないために軽く見られがちだ。災害によって放射能汚染があることは忘れないでほしい。そのためにも授業をしている。

4 福永先生の体験

阪神・淡路大震災が発生する前日に、たまたま神戸で卓球の試合があった。夜は、三宮で卓球仲間と飲んでいて、最終電車でドアの閉まるギリギリのところまで飛び乗った。自宅についたのは、午前1時30分ごろだった。当時は、姫路市に住んでいた。その日は、なかなか寝付くことができず、テストの採点をしていた。やっと寝付くことができたが、5時ごろには目が覚め、また、採点をしていた。採点をしていた最中に、阪神・淡路大震災が発生した。震度4の揺れが住んでいたマンションを襲った。3階に住んでいたのだからかなり大きく揺れたように感じた。マンションの壁紙がはがれたが他に被害はなかった。そのため、家には問題なく住むことができた。テレビをつけると真っ暗な神戸の街が映し出されている。そのとき何が起きているのかは、わからなかった。車で通勤しているときに、備え付けのラジオを聴いていてだんだんと状況を理解することができた。

当時は、高砂高校に勤めていた。いつも車で30分程度の道のりがこの日は4時間もかかる大渋滞だった。電車は動かず、高速道路が崩壊してしまったため、普段は電車を使って通勤している人たちが、車で通勤しようとしたからだった。この状態が、3月いっぱいまでは続いていたと思う。高校は、被害がなく、通常通り授業が行われた。そのため、ボランティアなど手伝いに行きたい気持ちはあったが、通常通り授業がありとても行ける状態ではなかった。神戸に住んでいる学生たちは、学校が避難所になっていたり倒壊したりして通うことができないので、一時的に違う学校に通ったりしていた。卓球部の顧問をしていて、顔見知りだったということもあって、「卓球がしたい」という神戸商業高校の女子生徒が高砂市のおばあちゃんの家で1か月ほど居候して、毎日高砂高校まで来て卓球をしていた。そのことが特に印象に残っている。

神戸の街は、ものすごいスピードで復旧していった。神戸が大都会だったからというのもあったと思う。阪神・淡路大震災の復興には、政治も大きくかかわっている。当時の総理大臣は、小里さんという議員に復旧・復興を全権委任で任せた。小里元防災担当相のおかげで、早期の復旧ができたともいえるだろう。東日本大震災の復旧・復興があまり進んでいないのは、この災害での復興省が置かれなかったことや、阪神・淡路大震災よりも被害が広範囲にも及んだこと、放射能のような目に見えない恐怖などの原因が大きいのだろう。

阪神・淡路大震災の際、ご年配の方たちは自分のことで手一杯だった。「最近の若者はだめだ。」とよく言われているが、昔も同じことを言われていた。しかし震災当時だめだといわれていた若者が、積極的にお年寄りのお世話やボランティアを行っていた。「自分たちがなくては」とまちの復旧復興のために頑張っていた。そのようなことが、この後の助け合いの風潮になったのだと思う。

(1) 当時の大まかな年齢

29歳

(2) もし、次災害が起こったら気をつけたいこと

「気を付けたいことはない。と言うよりかは、気をつけることが思いつかない。もし、5年以内に神戸に大きな地震が来るって言われていたら神戸から逃げるか。」と聞かれ、私は、「逃げない。」と答えた。そのあと、「それが明日絶対に大きな地震が起きると言われたら。」と聞かれ、「その時は神戸からすぐ逃

げる。」と答えた。「いつ起こるかわからない災害に対して常に気をつけることができることなんてあまり考えられない。しいていうなら、普段の日常生活の中で、できること。場所や地域によって被害は違うしタイムラグもある。長田区は火事の被害がすごかったし、地震の揺れで倒れたストーブのスイッチが入ったまま避難し、通電したときに火事になることもあり得る。災害の際に何が起こるかはその時にならないとあまりわからない。結局は何が正しくて、なにが正しくないかなんてわからない。できることは限られている。」

（３）震災を知らない世代に伝えたいこと

伝えたいことというのはあまりない。なぜなら、阪神・淡路大震災の時の反省がすべて東日本大震災でうまくいったかという、うまくいったとは言にくい。阪神・淡路大震災は地震や火事が主だった被害だが、東日本大震災は津波が主だった被害だった。伝えてわかることもあるけれども、やはり、自分で災害に遭遇してみてどう判断するかが大事。その判断をするために災害のことを学んだりしておくことは必要だと思う。

５ お話を聞き思ったこと、感じたこと

今回お聞きしたどちらの先生も、直接的に大きな被害を受けた方ではなかった。だからといって、被災者ではないとは、一概には言えないことを改めて考えさせられるきっかけとなった。直接的には大きな被害がなかったからこそその見え方や、専門分野に携わる人だからこそその災害の見方を教えていただいたと私は思う。よく、大規模な被害を受けた地域に焦点を向けて取り上げられることがあり、被害の小さい地域や、離れた地域のことはほとんど取り上げられない。取り上げられない地域の人や建物も被災している。そんな人たちだからこそその災害の見方がある、と感じた。

６ 私の思う環境防災科とは

環境防災科に入りたいと思ったのはとても些細なことで、ボランティア活動をしてみたいというものだった。「そんなのどこでもボランティアなんてできるじゃないか。」と思う人もいると思う。最近、ボランティアは多くのところで募集・活動されている。地域のクリーン活動やイベントごとのお手伝いなど、活動内容も違えば、規模も違う。ましてや年齢などさまざまである。そんな中で、私が環境防災科でボランティア活動をしたと思ったのは、高校生として被災地でのボランティア活動や交流、募金活動を行いたいと思ったからである。

一市民としてではなく、高校生として活動を行うことによって見えてくるものがあつた。特に防災学習・ボランティア活動を行っていて、自分なりの防災の見方を持っていたからだと言えるだろう。募金活動をしているさなかに、「頑張って。」と声をかけてくれる方がいる。そう言う言葉をかけてもらえると、とてもうれしい。そんな中で、「これは何の募金活動でどのように渡すの。」と聞かれる時がある。その際、しっかりと災害のことを調べていれば的確に答えることができるのだが、何も知らないと答えることができない。今では災害のことを調べていくのは当たり前のことだと思っているが、もしこれが一般参加の募金活動だったら何も知らずに活動に参加し、募金活動を行っていたらどうだろうか。ボランティア活動を行う上で、活動の内容やその意図を知ることが大切で、気持ちの持ちようも全く違うものだと感じた。

活動をしていて、様々な方と関わりを持つことがあつた。小学生、中学生、高校生、大学生などの児童や生徒や学生。若者や高齢者など、年齢層はかなり幅広い。特に、同年代の高校生とは多く交流した。県外に出ていくと、考え方の違いなどから、交流するには少し難しいこともあつた。関わった人の中には、今も繋がっている人たちが大勢いる。すぐに会えなくなってもいい、一度できた繋がりをそこで切ってしまうずに、大切に、その繋がりをさらに大きく広げていきたい。それが、コミュニケーションを行う上で大切なことだと思った。

環境防災科で、防災のことを学び、様々なボランティア活動に従事してきて学んだことや培ってきたことをこれからの未来に役立てていかなければいけない。私にとって環境防災科とは、「新たな知識や力を身につけ、それをどう生かしていくか」ということを考えさせてくれる場であつたと私は思う。

７ さいごに

阪神・淡路大震災から多くの年月がたち、「本当にこの神戸の街に地震などあつたのだろうか。」と思うぐらいに変わってしまっている。神戸から阪神・淡路大震災の傷跡はもうほとんどなくなってしまった。阪神・淡路大震災のモニュメントが設置されていたり、施設があつたり、追悼行事が行われていたりす

る。その中には、震災を知らない若者の姿も多く見受けられる。その若者たちが、今後、30年以内に70～80%の確率で起こるとされている南海トラフ巨大地震に対して、「どう行動すればよいか。」「何をすればよいのか。」と考えていかなければいけない時代になってきている。支援される側、支援する側の両方の立場になった私たちが、災害を経験した方の「語り」や「語り継ぎ」を聞き、阪神・淡路大震災から学んだ知識や経験を、これから起こりうる災害に応用していかなければならない。過去の災害から学んだことを、これからの災害に向けて備えをする。日本が、災害大国と呼ばれるからこそ、1人の経験や知識だけでなく、様々な人から学ぶ必要がある。人それぞれ災害への見方や感じ方は違う、だからこそいろいろな人の「語り」や「語り継ぎ」を聞いてほしい。

語り継ぐ

中阪 光

1 はじめに

私は神戸市長田区で生まれ育った。そこは、阪神・淡路大震災で火災による大きな被害を受けた地域だ。何も知らなかった時期は、いつものように笑顔で見守ってくれる地域の人がいて、いつものようにあいさつを交わし、いつものように学校に登校していた。守られていたおかげでこの日常が当たり前のことになっていた。だがこの環境防災科に入学したくさんのことを学んだ今、私達は何気なく通っている通学路や遊んでいた公園には震災当時の傷跡が残っていると気づくことができた。

2 語り継ぐ

「語り継ぐことが大切だ。」と思っている反面、私のような地震を経験していない未災者が語り継ぐ役をしてよいのだろうかという思いもあった。また、語り継げることも被災した方の思いと比べると少ないだろうがそれでも多くの人に知ってほしいという願いを込めてこれを執筆しよう。

3 阪神・淡路大震災

(1) 概要

1995 年 1 月 17 日 5 時 46 分、阪神・淡路大震災が発生。マグニチュード 7.3 の大都市直下型地震は 6434 人の命を奪った。電気・水道・ガスや道路などライフライン、住まい、絆までも破壊させた。

その一方で、ボランティアによる支援や心のケアなどが注目されるという新たな風も吹かせ、いままで災害に弱かった街を変化させる機会となった。

(2) 母の話

母は近いうちに母国である韓国へ里帰りをする予定だった。審査も済んでおり準備もしていつでもいけるからいつにしようかと考えていた時にこの災害が発生してしまった。

震災当日、母と兄はベッドで眠っていた。兄は当時 1 歳と 17 日だったためベビーベッドで寝ていた。そんな時、大きな衝撃とともに母は目を覚まし、最初に見たものは天井だった。揺れのためにベッドが跳ね上がってしまいその勢いで母の体も浮いたのだ。揺れている間は動けず兄のところに行こうと思って立っていることさえ困難なためそばに行くことはできなかった。タンスや水屋などの家具が倒れてきた。家具の 1 つであったタンスは兄へと目指して倒れてしまった。だが、幸いなことにベビーベッドで寝ていたおかげでベッドが支えとなり、兄はタンスの下敷きになることはなかった。

揺れが収まり、避難しようとするがあたりは真っ暗で何も見えない。倒れてきた家具のせいで踏み場もない状態のなか外に出ようとした。だが、地震の揺れのためにドアが歪んでしまい開けることができなかった。外から「ベランダの避難口から避難してください」という指示が聞こえたので兄のミルク瓶やおむつ、服などを乳母車に乗せベランダの窓を割り近所の駒ヶ林中学校に避難した。この時、ミルク瓶などの場所を把握していたおかげでスムーズに持ち出すことができたと言っていた。

ミルクを持ってきたのはいいが、お湯がないため作ることができないと困ったらしい。3 日経った後バナナとパンがひと家族に 1 食配られた。母は大人なので多少我慢できると思い兄に食べさせた。この食料が配られなかった 3 日の間の兄の食事はどうしたのかというと 3 日間兄は熟睡していたおかげで困るということはなく母は本当に助かったと言っていた。

おむつの処理は、避難所にいるときは乳母車に乗せておき、のちに他のところで処理したらしい。

地震発生から 1 週間経ったころ、母は里帰りすることに決めた。母の弟の車で大阪を通過して空港に向かおうとしたが渋滞につかまってしまい結局何時間もかけて向かったそうだ。

20 年以上経った今でも振り返ることが怖くてつらいからできるだけ思い出したくなかったと言っていた。話してくれてありがとう。

4 廣瀬 信也さんの話

(1) 廣瀬さん

廣瀬さんは NPO 法人神戸ろうあ協会会長だ。私が現在通っている垂水区みんなで学ぼう手話講座で「聴覚障害者の生活」をテーマに講義をしていただいた。そんな、廣瀬さんのお話を綴ろうと思う。

(2) 聴覚障害

まずはなぜ、聴覚障害者の方が聴覚に障害を持ったのかという原因について述べたいと思う。それは事故、生まれつき、病気、それぞれ原因がある。高熱が出た際に服用する薬の副作用でという方もいらっしゃる。また、出産のストレス、地震のショックがきっかけの方もいるそうだ。きっかけも違えばコミュニケーションの仕方もある。生まれつきの方や3歳になるまでに聴覚に障害を持った方は、音がわからないため上手に発音はできない。7歳からそれ以上でなった方は音を覚えているため発音が上手な方もいらっしゃる。

そんな聴覚障害者の普段の生活について述べようと思う。聴覚障害者の方はほかの障害者の方と比べて一目ではわからない。手話をしている様子や補聴器を見てから判断されることがほとんどである。ここで重要なのは聴覚障害の方は目に見えない障害者ということだ。先ほど出てきた補聴器についてだが、つけさえすれば聞こえるという認識が大半だと思われるが、実際はうるさい雑音だけが耳の中に入ってくるという状況なのだ。その状態が苦手な人は補聴器を外している。廣瀬さんも同じ理由で補聴器をしていない。そうなればもっと判断ができにくくなってしまう。そのため、聴覚に障害があるということを知らない人が話しかけても反応できず、話しかけた相手側は無視をされたと勘違いしてしまいすれ違いが起こってしまう。こうならないためにも知っておくことが大切だと考える。

学校は、まず聾学校(現在は特別支援学校)に行くそうだ。教科書はなく2、3年ぐらい発音の訓練や口話の練習、読み取りをする。最近では幼稚部から始めている。そして訓練が終わり3年生から1年生の教科書を使って授業を受けるそうだ。また、高齢者の方は学校に行っていない方もいらっしゃるので文字を読めない方もいらっしゃる。

家では、家族の中にも聴覚障害者の方がいらっしゃれば手話でコミュニケーションをとる機会が比較的多いかもしれないが、自分ひとりだけが聴覚障害であれば、孤立感を感じ寂しいと感じてしまう。これは、家だけではなく会社の飲み会や遊びに行くときも同じでみんなが盛り上がっているのに自分はついていけず孤独を感じてしまう。この状況は災害時、避難所の時も同様にあり得ることだ。

ほかにも困ることはたくさんある。例えば、電話が使えないため連絡手段が限られてくる。他の人に頼んで連絡してもらおうかFAXで送ってもらっている。FAXはとても助かるが送ることが怖い。なぜなら文章を書くことが少し苦手だからだ。「て・に・お・は」がわからず聞いたとおりに書くことができない。また、平仮名、カタカナだけでは意味の区切り目がわからず読みづらい。だから送るときは文章がしっかりできているか不安なため送ることが怖い。また、送っても反応がない時が多いため寂しい。だが、最近になってSNSが発達しLINEでメッセージを送ることができ連絡がスムーズになり昔は限られた人しか使えなかったテレビ電話も今では簡単に利用できとても便利だとおっしゃっていた。しかし、タイムラグで手話の表現が途切れてしまう場合や文字が読めない人もいらっしゃるのもまだまだ困ることもある。他に朝起きる際にはどうするのか、赤ちゃんが泣いていた場合にどうやって気づくのか。音がわからないため目に見えるように視覚化する工夫が必要なのだ。時間になればライトが点滅して振動で教えてくれるような機械を用意しておくそうだ。テレビを見るにも字幕がないと見ることは難しい。文字が読めない人もいらっしゃるため手話通訳者は必須になってくるが、字幕放送も手話通訳もついたのは震災後だった。はやく手話通訳の必要性に気付くべきだと思う。病院でも通訳者がいないのが原因で順番を最後に回されることもあるのだ。

私はもっともっと手話の必要性について国規模で考えるべきだと思う。他の国で行われている政策を日本にも取り入れ、なくすべき壁を壊しみんなが住みやすい社会を作っていくべきだ。ハンディキャップを持っているという点を弱点だと思わず1つの個性だと認識しその個性をどう生かし良い部分を引き出していくのかを考えることも福祉の1つだと考えている。だから私は少しでも力になりたい。一緒に壁を乗り越えていくための1歩として今後も手話を学び、交流をし続けたいと思う。

(3) 阪神・淡路大震災の話

廣瀬さんに阪神・淡路大震災当時のお話を伺った。

突然地震が起きて電気が消え、あたりは真っ暗だった。他の人は車のラジオなどで避難の案内情報を手に入れることができ近所の小学校に避難し始めていたが、廣瀬さんは何が起こったのか把握できずどうしたらよいのかわからずじまい。しばらくしてテレビがつきそこから何が起きているのかを理解したため周りの人より時間がかかってしまった。外の避難の様子を見て周りの人が避難していることに初めて気づき友達にも声をかけ避難した。避難したのは良いがその後がもっと大変だった。

避難所では、お弁当の配布があるが、そのお知らせもスピーカーで呼びかけていたため気づかなかった。ここでも周りの人が並んでいるところを見て同じように並んでからお弁当を配布していることに気

付く。だが気づくのが遅くなってしまい最後に並ぶことになる。並んだからと言ってもらえるわけでもなく目の前で弁当がなくなってしまう。3日間は何もおなかに入れていないという状態だった。

他にも大変だったことは罹災証明書の手続きだ。罹災証明書の手続きが必要だったため区役所に行くが通訳者がいないため対応が難しかった。伝わりにくいという文字も書けずイライラもたまる。役所に週1でいいからと通訳者をお願いしたが、やはり1日では足りず日を増やしてもらおう交渉を行った。その1日を逃せば次の週、そのまた次の週になってしまうためだ。交渉を続け2日、3日、4日と増やすことができ最終的には月曜日から金曜日までにしてもらい受付時間も伸ばしてもらったそう。廣瀬さんは区役所だけでなく他の施設も同様に手話通訳者の設置を交渉しているが人数が足りず難しい状況らしい。

(4) 希望

近隣の付き合いができていなかったため、お互いに助け合いができなかった。だから、近所でいいから顔を合わせる関係をつくるのが大切だ。

避難所ではFAXを置いてほしいとおっしゃっていた。電話では難しいかもしれないがFAXでなら連絡が取りやすいのだ。また、情報が入りやすい環境を作るべきだ。全体に伝えることができる手取り早い手段は放送だろうがそれは本当に全体に伝わっているのかと1回止まって考えるべきだ。少数のために動かないといけないのかという考え方もあるだろうがそうではない。全員が情報を得る権利があり全員が食料を確保できる権利があり私達はそうあるべきだと考えを改める必要がある。ハンディキャップを持っている方でも情報が入りやすいようにホワイトボードや掲示板を用意し『見て』わかる情報にすれば誰に対しても入りやすくなる。限られた方だけでなく放送を聞き逃した人にでも優しい。また、1か所に集めて確実に伝えるようにもできればほしい。また、手話通訳者の方も遅くても3日目には来てほしい。わからないことが不安なので情報が入ってこなければさらに不安になってしまう。そして孤立がもっと不安になってしまうから防ぐために対策を練る必要がある。

私達がどこまでできるかはわからないが、少しでも力になれるように普段から地域へ呼びかけ避難所では不安の原因となるものを取り除いていきたいと思う。

5 わたしの夢

(1) 恩返し

いままでお世話になった地元や地域の方々への恩返しをしたいと思う。ここまで何事もなく大きくなり、無事高校にも入学できたのは両親のおかげでもあるがそれと同じくらい地域の方や先生方のおかげでもある。地域の方々のおかげでいつも登下校時は朝早いのに笑顔で見守り、私達が事故なく安全に学校に行くことができた。毎年恒例である地域の行事を開催し、地域を盛り上げてくれた。また、震災について貴重な話を語っていただいた。地震ですべてを奪われたがめげずに立ち上がり協力し1から立て直した。そのおかげでいまの長田がある。そして、その長田や震災について興味を持った私にこの環境防災科という防災の道へ背中を押してくださったのは中学校、自習室の先生方だ。だから支えられた私は、次は支える人になりたい。そんな私の夢は自分の好きなことでみんなを笑顔にさせ支えていくことだ。

(2) 好きなこと

好きなことというのは「絵」のことだ。私にとって「絵」は大きな存在であり夢を与えてくれるものである。身近にあり親しみがあるもので描くものと描けるものがあれば絵が描ける。そして、子どもから大人まで楽しめるものだ。描くだけではなく見ることによって楽しむことができ、感性を磨き、夢も広がる。「絵」といわれると美術館にあるアートのようなものを思い浮かべる人も多いがそれだけではなく、漫画、ゲーム、本やポスターの挿し絵、そしてノートの隅の方に描いた何気ないラクガキも絵だ。ゲームや漫画、本は人々に夢や希望を与え、時には良きアドバイザーとなる。そんな幅広く素敵な絵が私は好きだ。だから私は「絵」という相棒と歩んでいきたいと思う。

(3) 絵と防災

具体的には、絵を使って防災・減災について一緒に学ぶ活動、災害当時のおはなし、特に聴覚に障がある人や視覚障害の方などのおはなしをわかりやすく絵本にして広める活動をしたいと思っている。また、避難所などで子どもたちや高齢者の方などとコミュニケーションをするために似顔絵やおえかき、絵本の読み聞かせなどの活動も行いたいと思っている。

とある人のおはなしをきっかけにこの活動を始めたいと思った。そこから自分の好きなことで少しでも窮する人の支えになればと考えた。子どもたちだけではなく、高齢者の方にも似顔絵や絵本など好きなものを描きながらコミュニケーションのツールとしても役立てたいと思った。もちろん災害時に限らず平常時でもこのような活動をしたいと思った。

絵は防災と関係があるのかと大抵の方はそう疑問に思うだろう。だが、私は環境防災科に入学し今まで学んできたからこそ言える。まず、ボランティアで防災を広げるときに絵本や絵を使うのだ。もちろん、文字だけ、お話だけでも構わないが、しかしそれだけでは伝えにくいこともある。また、文字が読める方や話せる方は問題ないだろうがそうではない方もいる。そのような方たちにでも絵や図があれば少しでもわかりやすく身近に関わることができる考えた。ただし専門家のように詳しいことを知るためではなく防災と生活の中に取り入れる存在として重要であるからだ。そして、心のケアについても絵は関係があると考え。被災後や避難所での心のケアが必要だ。それは、誰もがストレスや不安を抱えているからだ。心の余裕もなくなれば雰囲気もギスギスし出してしまう。そんな中で、子どもと一緒に絵本を読んだり漫画やアニメの話で盛り上がったりできれば少しでも避難所の雰囲気は和らぐのではないかと考える。

以前にひまわりおじさんこと荒井さんから「子どもが思いっきり遊んだり笑ったりしたら周りの大人も笑顔になった」というお話を聞いたことがある。私は人々を笑顔にさせ、コミュニケーションの助けとなる存在の1つが絵だと認識している。

(4) 夢と願い

私の好きなものが絵だったためこのような夢を持つようになった。もちろんそのこと広めるのではなく最初で述べたように「自分の好きなことで笑顔になってほしい」という思いを私は広めたい。また、その私の夢が世間に伝わったならば次は、各々が自分たちの好きなことと防災をつなげて考え視野を開けてほしいという願いもある。「防災」という1つを原点に置きその相棒となるものと一緒に道を展開させてほしい。その好きなことは何でもよい。例えば、本が好きなら本で、サッカーや剣道が好きならスポーツで英語や数学が好きなら勉強で、それぞれ自分の好きなこと、得意なことをツールとして職業や専門など関係なく防災・減災に携わってほしい。難しい、重いというマイナスなイメージが大きい防災・減災と、自分の思うプラスの面とともに広がってほしいと願う。どうせやるなら自分の好きなものとともに歩んで笑顔をさかせたいと思う。もちろん無理のある提供や共有はせずに尋ねながら一步一步ゆっくり歩いていくことを心掛けながら夢に向かって頑張ろうと思う。

6 最後に

環境防災科に入学し様々な人に出会いボランティア活動に参加してきた。入る前は人生のことも自分のことも適当だった。しかし、震災について学び、勉強するまで知らなかったこと興味のなかったことも今では自分の一部だ。今まで私が適当に生きてきた1日は、誰かが生きたかった1日でもあり心や体に傷を負ったきっかけの1日の人もいて、大切な人を目の前で失った1日でもあるのだ。それに気づいた私は、今まで何も知らず生きてきたことがとても恥ずかしくなった。だが、今はその1日1日を知りそこから自分のすべきことを見つけ大切に生きていくことに決めた。

自分の住んでいる地元もそうだ。いつも何気なく使っていた鷹取駅前の自転車置き場も地域の方が管理していたことも知らなかった。そのおかげで治安の維持が保たれ安心して生活できる。また、いつも遊んでいた公園の木の焼け跡はみんなを守った勲章だ。これは長田のまち歩きという阪神・淡路大震災で火災の被害が大きかった被災地を歩くという授業のおかげで知ることができた。その際に案内してくださった方は、地域の方々と会えばあいさつを交わし、またすれ違う人とは世間話をしていた。この光景を見て地域のかかわりが深い方なのだと感じた。自分の住んでいる地域と真正面から向き合い、本当に長田が好きなのだ。私もこうなりたいと心から思った。自分たちにもできることは何かと考え環境防災科で勉強しながら答えを探した。恩返しという答えを見つめることができたがまだ自分のはっきりする答えではない。しかし卒業しても想いは繋げるという意志は変わらないだろう。

今後の世代に私達の1日を語り継いでいこうと思う。

阪神・淡路大震災、その時家族は。～語り継ぐとは～

中谷 海

1 はじめに

1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災。戦後、大規模な都市ではじめて起こった直下型地震は未曾有の大災害を引き起こした。そんな中で、神戸の復興に尽力した人たちがいる。

私は、阪神・淡路大震災を経験していない。そんな私たちは過去の災害と向き合い、未来への災害に備えなければいけない。そう、私たちは「語り継ぐこと」「備えること」の2つに向き合わなければならないのだ。そうした中で私たちは阪神・淡路大震災を経験している人から話を聞き、後世に伝える義務がある。しかしながら年々阪神・淡路大震災関係のイベントなどが縮小されている。阪神・淡路大震災の風化が進んでいる今、どうすれば風化されないかを考えることが必要になる。そこで私は身近な人で阪神・淡路大震災を経験した人に話を聞くことにした。この「語り継ぐ」の執筆はこれ以上ないほど貴重な体験だった。この「語り継ぐ」を通して、阪神・淡路大震災が後世に伝わることを願う。

2 阪神・淡路大震災。その時どうしたか。

(1) 私の祖母の場合

阪神・淡路大震災発生時、祖母は稲美町内にある小学校の教師だった。その朝、自宅で弁当を作っていた。その時大きな揺れが自宅を襲い、何が起こったかが分からず、必死に近くの棚につかまっていた。この事を後に祖母は、「今考えたらとても危険なことをしていた。机に潜っていればよかった。」と振り返っていた。その後起床した祖父を急いで最寄り駅に送り届けた後、その足で勤務先の小学校に向かった。幸い、勤務先の小学校には被害がなかったものの、明石市に住む同僚は家のガラスが飛散し、戸棚、タンスを開くことができず、子供とともに着の身着のまま学校に来ていた。その後、休み時間になるたびに教室にあるテレビをつけ、見るたび見るたび状況がひどくなっていく神戸を見て、「一つ町が違うだけでこんなにも被害の大きさ違うのか。」と、とても驚いたようだ。その後、稲美町内の学校の給食室と、稲美町が毎日のように神戸市におにぎりを送った。しかし冷たく、バリエーションにも限りがあるため、飽きてしまい、そこまで評判が良いものにはならなかった。そしてこの震災を通して祖母が学んだことは、「まさか自分が災害に直面するなんてありえないと思っており、他人事だと思っていた。しかしそれは大きな間違いだった。」ということだ。

(2) 祖母の話を聞いて

祖母から具体的に阪神・淡路大震災の体験談を聞くのはこれが初めてだった。普段冷静沈着な祖母もこの地震で大変慌てたようだ。阪神・淡路大震災を神戸で経験はしていないものの、神戸市の隣の町であったのにもかかわらず、被害の大きさが格段に違うことや、祖父が神戸消防に勤務していること、祖母自身が防災を教える立場である教師であったことなどにより、この阪神・淡路大震災が祖母の教師生活に大きな変化をもたらしたことになる。決して被害が少ないからと言って震災は無関係ではないということを教えてくれた。

(3) 私の祖父の場合

私の祖父は当時、神戸市役所に勤めていた消防職員だった。阪神・淡路大震災発生時は稲美町にある自宅で就寝中だった。大きな揺れとともに目が覚め、その後に自宅の点検を行った。幸い自宅の近くは目立った被害もなく普段通り大久保駅まで祖母とともに車で向かった。稲美町では目立った被害はなかったが駅に近づけば近づくほど瓦や窓が割れている家が多くなっていった。そこで祖父は「震災の記録のためカメラ持って来ればよかった」と言っていた。

駅に到着し、祖母の運転する車から降り、祖母と別れた祖父は、駅からぞろぞろ出てくる人を見て、電車が動いていないことを知った。バスは何とか動いていたので家に帰った。それから移動方法を考えて車で行けるところまで行ってそこからは車に積んだ自転車で職場に向かう事にした。カメラと少しの着替えを持って出かけた。

しばらく自動車に進んだ。そのあと、神戸市北区の消防学校に到着した。そこからは自転車で市役所に向かうことにした。ひよどりが丘のあたりで神戸の街から黒煙が次々に上がっているのが見えた。山を下ってセンター街を通過して市役所のほうへ向かった。そこでは崩れた家や建物がずらりと並んでいた。しかし、意外なことに街は驚くほど静かだったようだ。

(4) 市役所についてから

何とか市役所に着いたのはよかったのだが、最初は市役所の被害に気が付かなかったそうだ。その理由として、2号館があまりにもきれいに崩れていたのが挙げられる。市役所内はぐちゃぐちゃになっており、窓が割れ、酷い状況だったという。また雨風をしのぐためダンボールで窓をふさいで応急処置とした。

祖父は消防の中で査察課に属していた。そして災害時等に非常招集がかかると情報収集をする情報班になる。そこで各部隊から情報が入ってくるのを待ったが、現地の部隊は救助などできりきり舞だったので、本部に報告をする暇がない。そのため全く情報が入ってこなかった。そこで自分の足で行くこととなり三ノ宮のあたりまで行っただが、なんと報告すればいいのかが分からず、困ったという。

(5) 想定外

阪神・淡路大震災が想定よりも大規模であったため、普段決めていたように動けず、本来神戸消防が持っていた力をゆうにこえた災害でもあり指揮系統が混乱していた。

(6) その時、何をしていたのか

災害対策本部が神戸市役所内に設置され、全部局が交代で担当し、市民や県外の人からの電話対応を行った。主にどこの避難所に誰がいるのか、どこに避難すればよいか、食料はどこで受け取れるのか、などだ。しかし後程、指定避難所以外にも避難している人がいるため、大まかな情報しか伝える事が出来なかった。また最初の数日は主に安否確認の電話だったが、またさらに数日経つと仮設住宅の申し込み方法、電気、水道などのインフラについての質問が多くなっていった。

(7) 数日が経って

祖父は上司から被害調査に行ってもらいたいと言われた。そして被害調査のため大阪や県内の建築関係者の方が寝泊まりしている船で何度も深夜に会談した。さらに数々の家の調査を行うため多くの紙とコピーが必要になった。しかし、地震の影響でコピー機が故障したため調査に使用する予定の用紙がコピーできず困っていたところ、とある企業が、市役所のためにコピー機を貸し出してくれたおかげで無事コピーが取れ、調査ができた。しかしながら過酷な仕事で、数日はろくに睡眠がとれず全員がピリピリしており、些細なことでも喧嘩が起こる事もあった。祖父は、「全員が長時間睡眠をとれないまま、気が張り詰めていたので、相当のストレスを感じたのだと思う。」と言っていた。

(8) 帰宅

一時的に帰宅する事が出来るようになって祖父も自宅へ帰る事になった。祖父が乗ってきた自転車は数々の瓦礫などを踏み越えたためパンクしており、市役所に寄付されたミニバイクで移動する事にした。祖父は一度他の地域も見て回ろうと思い、西宮までバイクを走らせた。その後東灘の友人のもとへ行った。「普段から崩れそうな家だったので心配だった。しかしいざ着いてみるとしっかり家が建っていたのでびっくりした。」と祖父は安心したように語った。それから神戸市北区の消防学校まで車を取りに行き、やっとの事で家に帰りお風呂に入って、まとまった睡眠をとった。なんと家に帰る事が出来たのは、阪神・淡路大震災の発生から約10日後のことだった。それからしばらくは西消防署に車に置き、そこから自転車で市役所に向かう日々が続いた。

(9) 阪神・淡路大震災を経験して

計画を立てて決めておくのは大事だが、いざとなったら想定外の事が当たり前のように起こる。その時その時考えて行動しないといけない。災害のたびに問題だったことを1つ1つ計画に盛り込んでいくとよい。どんなに緻密に計画を立てていても自然災害はそれを軽く上回ってくることがあるので、慢心してはいけない。と真剣な表情で語った。

(10) 祖父の話を聞いて

私が祖父の話を聞いて思ったことは災害がいかに巨大な存在で人間は弱い生き物であるかだ。近代的な都市で起きた直下型地震は神戸市の想定をはるかに上回り多くの人々が亡くなった。自然はいつも私たち人間を見ているように振る舞っているように思う。私たちがどんなに綿密に計画を立てても軽々と想定を超え、私たちが災害を忘れてのんきに生活をしていると、突如として大規模な災害を引き起こり、多くの人々が災害の犠牲になってしまう。そして私たちは次の災害に対して新しい対策を施していく。また災害が起こり多くの人々が亡くなってしまう。この繰り返しだ。しかしこの連鎖を最小限に食い止める事が出来る可能性のあるものこそが「語り継ぐ」ことだ。いま、私が祖父に話を聞いたように多くの人々が身近な人物に経験を話してもらいそれを、次の世代に次いでいく事が重要になると思う。

3 将来の夢

(1) 将来就きたい仕事

私の将来の夢はゲームに携わる仕事に就きたいと思っている。その理由は、私自身、ゲームが大好きであり、ゲームが人に与える影響の強さについてよく知っているから。そして、ゲームでしか味わえない臨場感や、緊張感などでよりリアルに震災の疑似体験をしてもらい、防災意識を高めてもらうため。また、何かの理由で世の中に出ることが苦手な人にも防災を学んでほしいから。以上の3つだ。しかし、震災や災害をテーマとしたものをゲームにするのは不謹慎だという声もある。しかし、何かの理由があっても外に出る機会のない引きこもりの人などは、防災や減災を学ぶ機会が少ない。もしくはまったくない状態だ。そんな人たちが我々と同じ日本に住み、生活をしている1人の人間であり、例外なく命を守る・守られる権利がある。しかしながら社会からのけ者にされてしまうことがある。家に引きこもってしまうと周りからの情報が入ってこず、身の安全を守る術を学べなくなる。しかしゲームならば家にいてもできる。さらに防災は堅苦しく、難しそうだという固定概念を取り払って、気軽に防災を学ぶ貴重な機会となることが予想される。また、子供向けや携帯電話・スマートフォン向けのゲームも制作し、これから起きるであろう災害で命を落とす人を可能な限りなくしたいと思う。

(2) ゲームの仕事

ゲームに携わる仕事といっても、ゲームプランナーやゲームプログラマーなどたくさん仕事がある。その中で私がなりたい職業はエフェクトデザイナーだ。どんな仕事かというと、爆発や炎、煙、カミナリ、魔法、きらきらした光、ヒット効果など、主に「形が定まらないイメージ」や「自然現象」をゲーム上で表現を担当する。

ゲームにおけるエフェクトの役割は、大きく次の3つに分かれる。

- ・ゲームの手応えを良くする
- ・ゲーム内で起こっていることを分かりやすくする
- ・ゲーム画面をにぎやかにする

ゲーム制作はキャラクターの作成やアニメーションに目が行きがちだがエフェクトがないと面白くなってしまふ。裏方的な立ち位置だが、非常に大事な仕事を担っている。また、臨場感を持たせてくれるのもこのエフェクトデザイナーのおかげといえる。

4 仕事と防災

一見防災と関係ないような仕事だが、大きく防災と関わっている。例えば、防災を主題としたゲームを作る場合、CG映像やその他の技術は完璧だったとしても、先ほど言った通り音声やその他エフェクトがなければ全く臨場感なく、せっかく高い技術を詰め込んだ作品も台無しになる。そこで裏方でありながらもゲーム制作を支えているエフェクトデザイナーになって高い技術を身につけ、活躍したい。それに加えて、ゲームによって、若い人たちが防災・減災の意識を高めてもらうために(VR(virtual reality)・仮想現実)を使って地震・津波・その他災害を家庭で疑似体験できるゲームや、市町村と協力し、町の活性化やイベント等にも私が製作したゲームを取り入れ、より一層人と人とがつながれるようなゲームを製作したいと思う。

5 環境防災科で学んだこと

私がこの環境防災科に入ってから授業、授業外問わず多くの人と関わる事が出来た。その中で多くの話を聞く機会があり、たくさんの人から防災、減災、事前復興など様々なことを教わった。また建築、消防、警察等様々な分野の人の話を聞いて、ほとんどの人が口をそろえて言う事があると気が付いた。「備えることも大切だが、語り継ぐことが大切だ。」「大切なのは次につなげることだ。」さらに、「私は次につなげることができない人間ですが皆さんは次につなげる事の出来る人です。ぜひ災害の経験を次につなげてください。」この言葉は私が糸魚川に訪問したときに出会った元消防所長の永野先生の言葉だ。大きな災害を経験していない若い私たちだからこそできることがある。これから大人になっていくにつれて、沢山の人と関わる機会が増えていく。そのため防災・減災を語り継ぐことができる場面が増えてくるかもしれない。そのために災害が起きた時の備えを過去の人はどうしてきたか、そしてどう乗り越えてきたかをこの環境防災科で学んだ事を織り交ぜながら同僚や後世へ伝えるのが私の背負っている責務だと思う。

6 最後に私がすべき事。

今回、この「語り継ぐ」を執筆にするにあたって祖父だけではなく、1年生の時の「災害と人間」などを参考にした。それに加えて、2年生の授業「環境と科学」で行った校外学習、糸魚川の元消防所長の永野先生のお話など様々な人から教わった貴重な経験談。この3年間でたくさんのことを学んだ。そのことを心にとどめていくだけではなく、きちんと伝えていく。そして最後に私は今後起きるとされる災害に立ち向かうために新しいアイデアを持つこと、何事も柔軟に対応できる力をつけていきたいと思う。

「語り継ぐ」

中山 虹

1 はじめに

私は阪神・淡路大震災の6年後に生まれた。もちろん震災当時の体験を語ることはできない。だが二度とこのような悲劇を起こさせないため、風化させないためにも「語り継ぐ」ことはできる。

2 概要

名称 : 兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）
日時 : 1995（平成7）年1月17日午前5時46分
震源地 : 淡路島北部
規模 : マグニチュード7.3
最大震度 : 7
死者 : 6434名
行方不明者 : 3名
負傷者 : 43,792名
主な死因 : 圧迫死（窒息死など）
住宅被害 : 全壊109,406棟、半壊144,274棟、一部損壊390,506棟
火災被害 : 全焼7036棟、焼損7574棟
被害総額 : 約10兆円規模
避難者数 : 316,678人（ピーク時）

「阪神・淡路大震災について（内閣府 防災情報のページ）」より

3 父の話

（1）地震発生当日

父は阪神・淡路大震災が発生する半年ほど前から、地熱発電所の建築工事でフィリピンに出張していた。

震災発生の朝、テレビを付けなかったこともあり、地震のことは知らずにいつも通り工事現場に出勤した。仕事場につくと日本の本社から、「関西地方で大地震発生。至急家族に連絡を。」とFAXが届いていた。電話を掛けたのは午前8時頃（日本との時差は1時間遅い）だったが、やはり電話は繋がらず30分ほどでようやく繋がった。父の実家は大阪であったが被害は少なく、皆無事だった。仕事を終え、宿舎に帰るとテレビでは衝撃の映像が絶えず流れていた。横に倒れている阪神高速、真っ赤に燃え上がる長田のまち、次々と流れてくる映像をただ見つめることしかできなかった。

（2）当手を振り返って

当時は被災の映像を目の前にして、何もできず憤りを感じていたが、振り返ると日本で起きた災害を海外で知るといっても貴重な体験をしたことに気づかされた。当時私は日本でもフィリピンでも自然災害に対する知識がなく、備えを全く行っていなかった。もし神戸にいたら確実に被害に遭っていただろう。フィリピンの現地の方々も映像を見て衝撃を受けていた。フィリピンも日本と同様、自然災害が多い地域だ。この出来事を忘れずにフィリピンでも災害への備えを行ってほしい。

4 母の話

（1）地震発生当日

「とても長い揺れだった。」と母は語ってくれた。

大きな揺れで目覚め、急いで祖母の部屋へ向かった。祖母はベッドで寝ていたこともあり、とても怖がっていた。地震発生直後京都に住んでいた兄から電話が掛かり、安否確認をしたが、それからは回線が混雑し全く電話が繋がらなくなった。母は大阪で暮らしていたが、あまり大きな被害はなく、近隣住民も避難していなかった。本震の後にも余震が何度かあり、常に揺れているような感覚だった。母は被災時大学4年生であり、ピザの宅配アルバイトをしていた。そのピザ屋のバイクで救援物資を避難所に届けるボランティア活動を行った。

(2) 当時を振り返って

震災が起き、ボランティア活動を行っている中で改めて人の温かみを感じることができた。宅配のバイクを使って救援物資を届けるボランティアが決まった時、正直あまり人手が集まらないだろうと思っていた。出勤すると多くの社員やパートの人々が笑顔で届けに行っていた。皆様々な事情があるにもかかわらず、人のために動く姿に心動かされた。

震災当時に携帯電話が普及していたら、少しは連絡を取ることが容易になっていたのではないかと思う。今では災害用伝言ダイヤルがあり、とても便利になった。だが、情報機械に頼りすぎず日頃から家族で避難場所を決めておく、地域の指定避難所はどこにあるのかなどコミュニケーションは取っておかなければならない。

5 話を聞いて

今回、「語り継ぐ」を通して両親の当時の体験を聞くことができた。両親にインタビューをすることは普段ないことであり難しかったが、身近な人の被災体験を詳しく知ることでもまた新たな発見があった。被害を受けていない人の話を聞くのは初めてだった。話を聞いているうちに、被害を受けていない人々はすぐにボランティア活動に行動を移していることに気づいた。これは地域住民が「助け合い」の精神を持ち合わせているということだ。この「助け合い」の精神は被災当時にはもちろん、復興をしていく中でも大切になってくるだろう。

被災地でのコミュニケーションも大切だ。被災すると、誰であろうと心に大きな傷を負う。その時に話を聞いてくれる人がいるだけで被災者の気持ちが少しでも軽くなるはずだ。

話を聞いている中で「自分の命は自分で守る」ことが一番大切だと思った。どれだけ過去の教訓を学んだとしても、災害時誰かが助けてくれるわけではない。教訓を学び、自分自身で行動に移すことが必要である。

6 環境防災科に入るまで

私が環境防災科を知ったのは、友人の影響だった。「環境防災科の説明会に行こう。」と誘われ、あまり興味は無かったが、進路先も決めていなかったので説明会に参加した。

パワーポイントを使った説明はとても上手で聞きやすく、次第に環境防災科に興味を持つようになっていた。

その時地震が起きた。揺れ自体は大きいものではなかったが私は驚き、動くことができなかった。周りを見ると説明会に来ていた皆も私と同じ状況だった。ふと後ろにいた環境防災科の先輩方を見ると、全員が頭を守り椅子の下に潜り込んでいた。地震が起きた時に冷静に対処できる判断力と、その判断をすぐ行動に移す行動力を持ち合わせており、私はとても驚いた。その出来事から、私は環境防災科に入りたいではなく、入ることに決めた。

環境防災科に入るため、環境防災科設立のきっかけとなった阪神・淡路大震災について詳しく学び、そこから様々な災害に広げていった。その時は、二次災害や、災害がもたらす影響については考えておらず、災害そのもののしか学んでいなかった。

7 環境防災科で学んだこと

私は環境防災科で、普通では学ぶことができない専門的な知識・経験を得ることができた。その中で災害に対する視点が大きく変わった。環境防災科に入るまでは、地震が来るといわれていても実際に行った対策は、家具の固定だけだった。当時の私はそれで十分だろうと考えていた。だが、防災について学んでは、家具以外にも様々な危険や問題点を知り、今ではいつ地震が来ても良いように常に備えをしている。

ボランティア活動によって自分の言葉で伝えることの大切さを学んだ。垂水駅で募金活動を行っている時、私は始め無言で活動を行っていた。駅前の人通りが多いところだったが、募金をしてくれる人は数えるほどだった。先輩が「無言で募金を行うのではなく、はっきりと自分の言葉で募金の使い道、被災地への思いを伝えることが大事だ。」とアドバイスをくれた。そこから私は大きな声で募金の呼びかけをするようになった。すると大勢の方々が募金をしてくださり、自分の言葉で真剣に伝えると必ず相手には届くことを学んだ。

また私は多聞南地区の防災リーダーを務めていた。年に一度の夏祭りの打ち合わせでは、住民が1人1人意見を出し合い、よりよい祭り、町にするぞという姿勢が強く感じられた。防災を広めるには、正しい

知識はもちろん必要になるが、聞き手もこの知識をしっかりと吸収し、共有しようとする心構えが必要なのだった。

環境防災科に入学した当初、私の頭の中は災害救助や災害が起きてからのことばかりで、災害が起きる以前のことは考えていなかった。1年生の「災害と人間」2、3年生の「社会環境と防災」では様々な講義を受けた。その中で最も大切なのは防災だと気づくことができた。

8 夢と防災

私の夢は保育園を経営することだ。

私は子供の頃から何度も夢が変わり、様々な職業に興味を持ってきた。保育園を経営したいと思ったきっかけは、以前保育園の待機児童問題を取り上げた番組を見たことだ。前から子供が好きで保育士の仕事に興味を持っていたが、その番組を見て待機児童問題を解決するために経営の立場に立ちたいと思った。

少子化が進んでいる現在だが、保育園の待機児童の数は増加傾向にある。その背景にはまず、預ける児童の増加があげられる。夫婦共働きの世帯が増えたことにより、保育のニーズが拡大したと考えられる。また都市部の土地の減少も考えられる。都市部には小さい子供がたくさんいるが、保育園を建設するにはある程度の土地が必要になる。そこで保育園を増やせず、待機児童が増加してしまう。以上のことが待機児童の増加の原因だと考える。

保育園には大きく分けて認可保育園と認可外保育園の2つに分けられる。簡単に説明すると認可保育園は国から認められた保育園であり、認可外保育園は国から認められていない保育園ということになる。認可保育園、つまり国から認められるには保育士の数や遊技場の広さなどの基準を満たすことが条件だが、その中に防災基準も入っている。認可保育園になる条件に防災基準が入っているということは、保育の中に防災はとても大切な立ち位置だということが分かる。もちろん保育は大勢の子供を預かる仕事だ。よって防災は、1人でも多くの子供の命を守るためにもとても大切だ。

私が保育の経営の立場につくと、以下のことを実践しようと思う。

まず保育園の建物の耐震化をしっかりと行うことだ。どれだけ防災の勉強をしてもその場所が脆弱であれば被害は出てしまう。

また園児だけではなく、保育士にも防災教育を行う必要がある。保育士も子供と防災を学んでいくことによって大人では気づけない新たな視点で防災を考えることができる。保育園ごとに細かいマニュアルを作成することも大切だ。通園の途中や様々な状況でのマニュアルを作成しておくことで、災害時にきちんとした対応を取ることができる。

園の備蓄だけでなく、園児1人1人に非常用持ち出し袋を作ってもらおうと考えている。そうすることによって個人で今何が必要なのかを考えることができ、災害時にも役立つだろう。

最後に年に数回授業参観を行い、その授業の中で防災を取り扱おうと考えている。子供だけでなく親にも防災に興味を持ってもらうためだ。家庭の会話で防災が出てくることはごくわずかに限られる。だが防災と真剣に向き合い、考えてもらうためにこの機会を設けようと思う。

保育園で防災に特化した教育をするところはほとんどないと思う。だが保育園で防災教育を行うことで、園児たちが大きくなったときその地域の防災力は格段と上がる。そして若者たちに過去の災害を伝え、また次の世代に語り継いでもらおうと思う。

9 最後に

この「語り継ぐ」を読んで、自分にもできる備えをしよう。と思った人もいれば、備えをしなくても私は大丈夫だ。と思った人も様々な人がいるだろう。30年以内に70～80パーセントの確率で起こるとされている「南海トラフ巨大地震」での被害を減らすためには、すべての人が自分にできる最大限の備えをする必要がある。個人で危機感を持ち、備えをすることで被害を減らすことができる。そのためにも、私たち環境防災科は正しい知識を身につけしっかりと語り継いでいかなければならない。

この「語り継ぐ」を1人でも多くの人に読んでもらい、防災に生かしてもらうことが私の望みであり、読者の使命だと考えている。

10 感想

「語り継ぐ」を終えて最も身近である両親の被災体験を聞くことができて良かった。「語り継ぐ」によって家族の会話の中に防災の話が多く出てくるようになった。私が3年間学んだ知識はインプットする

だけでは意味がない。自ら積極的にアウトプットして防災の知識を広めていくことが大切だ。「南海トラフ巨大地震」が起きた時に、率先避難者になり、少しでも震災による被害を減らせるよう学ぶことを続けていく。また環境防災科で学んだこの知識は、将来どの職業に就こうとも発揮していきたい。

「語り継ぐ」

中山 功太郎

1 はじめに

1995年1月17日午前5時46分。阪神・淡路大震災が発生し尊い命が奪われた。今、震災を知らない世代が増えている中でどのように経験を後世に伝えていくかが今後の課題だと考える。しかし、私たちが震災の経験者から話を聞きそれを伝えることは不可能ではない。震災の経験者からの話を、震災を知らない世代が聞き、その話をまた次の知らない世代へと伝えていくことが私たちの世代の使命だと思う。日本では度々災害が発生し命が奪われていく。そのような災害に備えるためにも日頃から知識を身につけ、いつ災害が起こっても即座に対応できるよう備えておくことが必要だと私は考える。

2 阪神・淡路大震災の概要

日時 : 1995年1月17日午前5時46分
最大震度 : 震度7（国内観測史上初）
震源 : 淡路島北部
マグニチュード : 7.3
震源の深さ : 16キロ
死者 : 6434人
住宅被害 : 63万9686棟
負傷者 : 4万3792人
焼損棟数 : 7574棟
被害総額 : 9兆9268億円
義援金 : 約1793億円（当時戦後最多）
資料（神戸新聞 データで見る阪神・淡路大震災）

3 体験談

私の両親は直接的に阪神・淡路大震災を経験していない。そのため震災経験者である祖父母と叔母に体験談を聞いた。しかし、震災を経験していないからこそ持っている感情や状況を知りたいと思い、両親からも話を聞くことにした。

・祖父母と叔母は震災当時、兵庫区の4階建て鉄筋コンクリート造の家に住んでいた。

（1）祖父の話

揺れを感じた瞬間、爆弾が空を突き抜けるような音の地響き。爆弾が落ちる音と似ていたため恐怖を感じた。戦争経験者である祖父は、戦争が始まったと思った。

戦争ではないと安心したが揺れには恐怖を感じた。明るくなると二女の家族が避難してきた。家に来るまでに何軒も倒壊している光景を見たそう。街の中が異様な雰囲気、今まで経験したことのないような雰囲気だった。

当時、祖父は家業でクリーニング店4軒の店舗を経営しており店のことが心配になり、様子を見に行った。

長田区水笠通店は全壊。火災の火の粉をかき分けながら確認に行った。また、お店の2階には従業員が住んでいて建物が全壊し、生き埋めになっていたが瓦礫の中から手が出ていて通行人の方に救助してもらい奇跡的に助かった。

ポートアイランド店は目立った被害はなかった。家からポートアイランドまで自転車で向かおうとしたが、液状化で自転車では走れる状況ではなかったため押しながら店まで向かった。神戸大橋はしばらくの間通行できず、1か月以上営業を再開することができなかった。

三宮の中山手通店は全壊。近隣には、「にしむら珈琲」や「フロインドリーブ」などの店が並ぶ一角に店を構えていたが、甚大な被害を受けてしまった。

本店の兵庫区のお店では被害はなかったが、ボイラーを石油からガスに変えたばかりで、機械の損傷は少ないものの、ガスの復旧が遅かったため営業を再開することができなかった。その間、祖父は「仕事が出来なくてほんとにつらかった」と今でも鮮明に覚えている。

自宅は被害が無かったため避難所には行かず、家で暮らしていた。しかし、支援物資は近隣の避難所に

は届いていたのにも関わらず、居住地域には1つも届いていなかったため、自力で調達するしかなかった。車を走らせ、一番遠くて灘区まで行っていた。何か買うものを決めていくのではなく、途中でも何か売っていればとりあえず買うという思いだった。商店に買いに行く場合もあったが、店が潰れて営業ができないお店は路上販売していた。また、自宅から約1キロ西の場所（上沢）まで火の手が迫っていたため、自分の家まで火が回ってこないか心配だった。

震災後の街の雰囲気については、いつもあるはずの家がない。ここの家の角を曲がればいいんだという感覚がなくなり、道に迷いそうになることが多かった。

（2）祖母の話

3階の寝室のベッドで寝ていた祖母は、揺れを感じて沈んでいくような感覚がし、揺れが激しくトランポリンに乗っているような気分だった。揺れが収まり周囲を見ると足の踏み場がないくらい、いろいろなものが落ちていて割れているものがたくさんあった。テレビなどさまざまなものが落ちていた。スリッパをはいてリビングに向かうと食器棚からお皿がすべて落ちていた。キッチンも足の踏み場がない状態。隣の家は木造だったため全壊、近隣の木造の家もほぼ全壊。家の被害はなかったため避難所に避難する必要がなかった。家は4階建て鉄筋コンクリート造だったため近隣の家族が避難してき、当時最大5家族が避難してきた。食料は家にあったものをとりあえず食べるという状況であった。1月だったためお正月のお餅が残っていたから助かった。しかし、火の手がすぐそこまで近づいていて火が回ってこないかどうか心配だった。水は自衛隊の給水車から汲みに行った。所々で水道管が破裂していて道路に水が溢れていたため、そこでも水を汲んでいた。お風呂は自宅から北へ約1.5キロ（徒歩で約20分）の「平野」という場所にある銭湯に通っていた。平野地区とその周辺はほとんど被害がなく驚いたそう。銭湯も被害が少なかったためすぐに営業を再開することができたそう。

少し落ち着きだしたところ近所で1人暮らしの家の人に会いに行った。会うと無事で元気そうで、会いに行っただけで泣いて喜んでくれた。そこで、人命救助の「共助」ではなく無事かどうかお互いに確認し合い、傷を分かち合うことも「共助」になるのではないかと話を聞きながら思った。

（3）叔母

グラグラいう横揺れに気づき目が覚めると直後に激しい縦揺れが襲った。地震とわかっていたがどうすることもできなくなり、茫然自失になってしまった。両親が心配になり部屋へ駆け込んだ。廊下に物が落ちていることはなかったが、母がおびえているのを見た。祖父は「この建物は大丈夫や！」と何度も語り掛け家族を落ち着かせていた。窓から周囲の状況を見てみると近隣の住民が心配そうに外を眺めているのが見えた。ラジオから「震源が関西だ」という情報を聞いただけで詳しいことはあまりわかっていなかった。

キッチンは物であふれかえり、開き戸から物がすべて落ちていた。目が悪くコンタクトレンズと眼鏡を真っ先に探した。余震がとにかく怖かった。混乱の中、家族全員でリビングに集合し全員の無事を確認した。近所を見て回ると静かで不気味だった。空には土煙が舞っていて、もやがかかっていた。

当日、いつものように会社に行こうとしたが次女止められ、現状を再認識した。水の確保をしに向かうと近所の人に「水道管が壊れていて道にあふれ出ているところがある」と教えてもらい、そこへ向かった。また、神戸市水道局の給水拠点が近くにありそこへ毎日行き水をもらっていた。1人1日ペットボトル1本で生活していた。

東灘区の会社に勤めていた叔母は、震災から1週間後会社から「被害が少なく出社可能な社員は順次出社」という連絡があった。自宅の被害や身内での不幸が無かったため出社することに決めた。しかし、阪神電車がストップしていた。だが、代替バスが三ノ宮駅から御影駅まで運行されているという情報を聞き、自宅から三ノ宮駅まで自転車です20分かけて向かいバスに乗り込んだ。しかし車内は缶詰状態で身動きが取れなかった。渋滞で進まなくなった時には、途中で降ろされ歩いて職場まで歩いて向かい、記憶の中では終点までたどり着いたことは無かった。

依然として、混乱が続いていたため3時には仕事が終わりと、帰宅していた。帰りは徒歩で約2時間かけて帰宅していたが道を塞いで倒壊している家屋が多く、毎日通行可能な道を探しながら帰っていた。

震災当時、勇気づけられたことは友達からの差し入れや励ましの言葉だった。さらにSMAPが歌番組で「がんばりましょう」という歌を歌ったことも元気づけられるきっかけとなったそう。また、自衛隊の車を見ると頑張ってくれているなと感じた。

（4）父の話

震災当時は、大阪市内の友人宅で寝ていた。地震の揺れで目が覚めたが、少し揺れを感じただけで特に被害はなくもう一度眠りについた。その後、自宅に帰る途中、特に目立った被害はなく、自宅のテレビ台

の上に置いていたテレビが落ちていただけだった。大阪市民は震災に対しての関心が薄く、生活に支障が出ることもない普通の日常が流れていた。地震に対して騒いでいることが不思議なくらい、いつも通りの生活を送っていた。

しかし、友人が経営している運送会社では、トラックが阪神高速道路3号神戸線東灘区付近を走行中に地震が発生し、車が横転し負傷した。救急車を要請したが震災直後だったため受け入れられず、同僚が現場まで迎えに行き、大阪市内の病院に向かった。父も協力し受け入れ可能な病院を探した。

また、灘区でお寺の住職をしている友人は、参道にある灯籠が倒壊、お墓の墓石も倒壊。さらに本堂も傾くなどの被害を受けた。

父は、テレビの世界としか思っていなく地震に対して関心が薄かった。

(5) 母の話

母は、震災当時オレゴン州の大学に留学していた。地震の事実を知ったのは日本時間1月17日午後11時30頃。「神戸で大きな地震があった」と東京に住んでいた友人の家族が知らせてくれた。すぐに家族の元へ電話をしたが全く通じず、大阪や奈良に住んでいる親戚に電話をしても通じなかった。最終的には、コレクトコール(料金受信人払い通話)なら繋がるという話を聞き、電話を掛けた。通じたのは日本時間18日の午前11時だった。実家に電話を掛け、家族全員の無事を確認。その数時間後の夜のニュースで阪急三宮駅が崩れ落ちている映像を見て愕然とし言葉が出なかった。ニュース映像を見る前に安否が確認できて良かったと思った。

現地では、毎日のようにニュースで取り上げられているが実感がなく、自分の故郷という感覚ではなかった。一番印象に残っていることは、アルバイト先の職員が毎日、「家族はどう？神戸はどうなっている？」と聞いてくれたことだそうだ。「大丈夫！」と言うが「なんでもよいから話さない」と会うたびに言われた。毎日話をすると不安が取り除かれ、気持ちが軽くなったそうだ。その優しさが今でも忘れることができない。遠い故郷を思う気持ちを察してくれる、思いやりがありがたいと思ったそうだ。

震災から約1年後、日本へ帰ってきた。空港から車で家に帰るとき高速道路が使えないということが不思議だった。思わず「えっ高速乗らへんの？」と聞いてしまった。

そして、第1回神戸ルミナリエを見に行った。復興を後押しするものとはいえイルミネーションの規模と美しさに驚いたことと復興がまだ進んでいない部分とのギャップに複雑な気持ちになった。

4 「しあわせ運べるように」

私は、もうひとつ後世に語り継いでいかなければならないものがあると思う。それは震災後に作られた「しあわせ運べるように」だ。私は、小学校3年生から6年生まで「しあわせ運べるように」を作られた臼井真先生に音楽を教えてもらってきた。「しあわせ運べるように」をはじめ、震災によって作られた歌を多く歌ってきた。また、5、6年生の時には「しあわせを運ぶ合唱団」に入りルミナリエの点灯式やぼうさい甲子園など様々なイベントで歌を歌い、歌を通じて阪神・淡路大震災について深く学んできた。歌っている最中に涙を流されている方もおり、歌で人の心を動かすことができるということを初めて実感したことを今でも覚えている。

しかし、中学校になると「しあわせ運べるように」を歌う機会が減り、歌への関心が薄れているなど感じた。高校に入るとさらに歌う機会が減ってしまった。震災の経験を語り継ぐことも大切だが、震災がきっかけで作られた歌も後世に語り継いでいくことが大切だと私は考える。

「響き渡れ僕たちの歌 生まれ変わる神戸の街に 届けたい私たちの歌 しあわせ運べるように」

5 自分の夢と防災

私の将来の夢は理学療法士になることだ。目指そうと思うようになったきっかけは、人の役に立つ仕事をしたいという夢を中学校時代から持っていたからだ。家業で父が整体院をやっているのもひとつのきっかけかも知れない。環境防災科に入学し、防災を学んでいき知ったのが理学療法士という職業だ。私は、けがをされた方のケアや障害のある方をサポートしたい、その方々の役に立ちたいと思うようになってきた。理学療法士が今後起こり得る災害で役に立つのは、体のケアなどといったリハビリテーションだと考える。避難所ではエコノミークラス症候群や生活不活発病を発症するリスクが高くなり、限られた空間の中で生活をしなければならない。そのような状態の中でのケアは欠かせないと思う。

東日本大震災を機に理学療法士・医師・アスレティックトレーナー・グラフィックデザイナーといった他職種の有志で作られた「PSVT」(フィジカルサポートボランティアチーム)というものがある。このチームでは災害時、避難所に入り避難者に体操などの体のケアについての支援などを行う「災害リハビリ

ーションチーム」として日本理学療法士協会からの派遣でチームは活動を行う。私が理学療法士になったらこのような活動を積極的に行い、被災者の方のケアをしていきたいと思う。また、ボランティアとして現場に入り、被災者の方々のケアや運動などといった理学療法士からの目線での支援を行いたい。

しかし、理学療法士は国家資格であり取得には、かなりの根気が必要だ。だが、それを乗り越えた先には患者さんとの出会いやそれに対する達成感があり資格を取っただけでは終わらないと私は考えている。

6 感想

今回、「語り継ぐ」を作成するにあたり、祖父母・叔母からの体験談を聞き改めて阪神・淡路大震災の被害の大きさを改めて感じる事ができた。また、震災を直接経験していない両親からも話を聞き、未経験者と経験者の両面から、互いの震災に対する気持ちを知ることができた。

今、阪神・淡路大震災を経験していない市民が半数以上となり経験を後世に語り継いでいくことが課題となっている。そこで、未経験者が経験者から話を聞き、伝えていくことがわたしたちの使命ではないかと考える。将来起こるとされている「南海トラフ巨大地震」に備えるためにも経験を伝えていくことが大切だ。

そのような災害に備えるためには日ごろからの備えも大切だ。家具の固定や非常用持ち出し袋の準備、ハザードマップの確認など起こる前にできることは多くあると考える。しかし、想定を超えてしまうことは起こり得る。「ここは想定浸水水域には入っていないから大丈夫」と想定にとらわれてしまうと迅速な避難ができない。そのためにもどんな災害でも必ず想定は超えるという気持ちを忘れてはいけない。

環境防災科で3年間学んできたことを忘れずに、これからの人生を過ごしていきたい。

明日へ・未来へ

沼田 凌佑真

1 はじめに

私は、1995年1月17日午前5時46分に発生した阪神・淡路大震災を経験していない。だから、その当時の状況や被災体験をしていない。阪神・淡路大震災から25年が経ち、震災は過去のものとなり、私たち若い世代が「風化」さすのではなく「語り継ぐ」ことが大切だと思った。これが舞子高校の環境防災科で学んできた人の使命だと思う。私なりに学んだことをまとめ、1人でも多くの人に最後まで読んでもらいたいと思っている。

2 阪神・淡路大震災の概要

名称：兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）
日時：1995年1月17日午前5時46分
震源地：淡路島北部
震源の深さ：16km
規模：マグニチュード7.3
最大震度：震度7
死者：6,434名
兵庫県内の死者のうち災害関連死による死者は919名
主な死因：圧迫死（圧死、窒息死など）
行方不明者：3名
負傷者：43,792名（当時の戦後最悪の都市型地震災害）
住宅被害：全壊104,406棟 半壊144,274棟 一部損壊390,506棟
火災被害：全焼7,036棟 焼損7,574棟
「内閣府より」

3 母の話

（1）地震発生

寝ている時に「ドンッ」と下から突き上げられた後、横揺れがきて、その横揺れは止まることがなくすごく恐怖を感じた。

（2）震災直後

母は3人兄弟で先に家を出た弟が家に帰ってきて、線路が歪んでいて電車が走っていないと聞いた。地震当日は、社員の安否確認で追われた。

（3）震災から数日

震災当時は証券会社に勤めていた。その証券会社は全壊した。その間の1か月以上は自宅待機となり、家の手伝いをした。家の水道が止まっていたので、近所の井戸がある家に水を汲みに行くのが母の仕事となった。銭湯に行っても、1月という寒い中たくさんの人が並んでいて、やっと入れたと思うといつものようにお湯が勢いよく出ず、湯船につかれた時は幸せだった。

（4）復興

母が働いていた証券会社は大阪にあり、震災から1か月以上経ってから、会社近くまで電車で行きそこからバスに乗り換え出勤することができた。

4 父の話

震災当時、伊丹のほうにある牛乳屋さんで働いていた。震災が起こった時もうすでに仕事をしていた。倉庫にある牛乳をトラックに積んでいた時に揺れが襲った。もし、大量の牛乳がある倉庫の中で仕事をしていたら、大けがをしていたか命を落としていたに違いなかった。

5 祖母の話

（1）地震発生

家で寝ていて、突然今までで経験したことがない揺れがいつになっても収まらなかった。

(2) 震災直後

寝室はテレビが落ちたぐらいで大きな被害はなかった。その日は小学6年生の息子のスキー合宿の当日で、朝早く起きてお弁当を作っていた。スキー合宿は中止となった。テレビをつけてニュースを見て初めて被害の大きさを知った。

(3) 震災から数日

当時、兵庫区にある会社に勤めていた。そのビルは5階建てで、1階の駐車場の部分が地震の影響で壊れビルは斜めに傾き、3階の事務所は書類・パソコンなど散乱していた。もし、仕事をしている昼間に地震が起きていたことを考えると、命拾いした。

(4) 復興

仕事に行く途中の大開駅の上の道路が陥没し、駅は全壊した。しかし、皆が復興のために協力し、大きなことを成し遂げたことは大きな感動だった。

6 祖父の話

(1) 地震発生

地震が発生したときに西の空が光ったので、北朝鮮がミサイルを飛ばして、それが落ちたと思った。

(2) 震災直後

地震発生後すぐに家族全員を連れ避難所へ向かった。特に住んでいる家には問題がなかったが、1日目は家族全員避難所で寝た。翌日、祖父が帰ると言い、家族全員で家に帰った。

(3) 震災から数日

家のお風呂が使えないため、家の近くにある銭湯へ行った。たくさんの人で銭湯には行列ができていた。祖父は、銭湯を営業している人と知り合いだったらしく、裏口から入れてくれようとしたが、断った。

祖父は、今でこそ優しくなってきたが、昔は相当怖かったと皆口をそろえて言う。そんな祖父でもつらい思いをしているのは皆も一緒だと理解をしていて、しっかり並んだことに感心をした。

7 叔父の話（長男）

(1) 震災直後

関西電力に勤めており、電車が止まっていたことで電車での出勤はできず、当時小学6年生の弟の自転車を借りて、垂水から兵庫まで自転車で出勤した。兵庫に向かう途中の長田周辺は火事が発生しており、消火の手助けをしようと思ったが、水が出ず消火できないと思い会社に向かった。

(2) 震災から数日

関西電力に勤めていたため、他の地域からきた電力会社の人たちの道案内をしていたが、家屋等の倒壊により道が寸断されていて通行できず、目的の現場までなかなかたどり着かず、到着まで通常の何倍もの時間がかかった。震災発生後に出勤したが仕事が忙しく、1か月ほど会社で寝泊まりをしていたため疲労が溜まり、死にかけていた。ただ、停電の復旧によりお客様が笑顔になるのを見れば、疲れも吹っ飛んだ。

電力会社は地域の住民すべてがお客様であることから、仮復旧のお手伝いが完了した後、すべてのご家庭の現地調査をした。

(3) 復興

震災直後は、とりあえずの停電解消を目的に折れた電柱を使うなど、仮の復旧をしていた。その後、街の再建とともに電柱や電線も本格的に復興していった。関西電力で働いていることで街の復興の手伝いもでき、嬉しかった。

電気の復旧が早く、ガスや水道の復旧は遅かった。自分が震災後に一生懸命頑張った証がこのように数字に出て、あの時頑張ってよかったと言う。

8 叔父の話（次男）

当時、小学6年生だった。スキー合宿に行く当日で、家の周りは倒壊などの被害が少なく、あまりひどくなかった。そのため、合宿に行く気満々で用意をしていた。しかし、テレビをつけると長田の町が燃えていたり、高速道路が破壊されていたり高速道路からバスが落ちそうになっていたりと、被害の大きさを知った。そこで、ようやくスキー合宿に行ける状況ではないと気付かされた。

9 話を聞いて

私は、今までにも話を聞くことはあったが、これほど興味深く聞いたことがなかった。私の家族が住んでいた場所は、あまり大きな被害が出ている場所ではなく、家族が亡くなることはなかった。母の友人でもう結婚を決めていた人が、亡くなった。家族の周りで人が亡くならなかったわけではない。私の家族は誰も亡くなることはなかったが、家族の身近な人が亡くなったと聞いて、私の家族が誰1人亡くなっていないことがどれほど幸せか、母の友人のようにこれから幸せの家庭を築こうとしていた人を亡くして、どれだけ辛い思いをしているのかなど、色々なことを感じた。亡くなった人が0であろうとその後自宅を失ったり、後遺症を負ったりする人はいる。どこかで辛い思い、悲しい思いをしている人は必ずいると思う。

10 環境防災科での3年間

環境防災科は、全国に2校しかない防災を専門とした学科だ。カリキュラムの3分の1が防災の専門科目だ。学校設定科目のため決められた教材はなく、先生方がいいものを選んで授業をしてくれる。環境防災科に入る前までは防災に関することは一切知らなかった。3年間でたくさんのことを学んだ。過去に起きた災害、その災害が起きてできた法律など初めて知ることばかりだった。この3年間で色々な感情を抱いた。驚きや悲しみ・喜び・不安・恐怖。このような経験をした3年間は、防災や災害の知識が全くなかった私でも、人並み以上の知識を得ることができた。これからの将来で学んできたことを生かせるようにする。

11 将来の夢

私の将来の夢は、教師になることと、開業して自宅で整骨院を開くことだ。

(1) 環境防災科に入ろうとしたきっかけ

私が環境防災科に入った理由として、将来、教師になりたいと思っていた。災害の多いこの国で暮らす以上生きている間に何らかの災害に直面する確率が高いと思う。そして、教師という職業は、人に教えることのできる職業で、生徒と一緒にいる時間が長く災害が起きた時にはともに避難しなくてはならない。これからの時代は教師が防災の最前線に立つべきではないかと思う。だから、人並み以上の知識をつけておかねばならないと思った。

(2) なぜ、教師？

学校という場所は、教師がいて、礼儀や人間関係を学ぶ場でもあり、教師が生徒の人生の土台となるものを作り上げなくては行けない。だからこそ、防災について小さい時から触れてほしいと思い、私が3年間で学んだことは最低限教えたいと思った。

12 夢と防災

まず1つ目の夢である教師は、何百人といった集団が学校ではほぼ1日を一緒に過ごしているなかで地震や火災が起きた時にいかに冷静になって判断し行動出来るかが問われると思った。だから、日々の生活で避難訓練をしたり備えをすることの重要性を自分が教師になった時の若い世代に伝えていき、家に帰ってから家族で話し合ったりして人に伝えることで自分も再確認することもできる。こうすることで、災害の多いこの国でも生き抜くことのできる確率は上がると思う。防災に関しては年齢関係なく小さい時に学んで早く自分の身につけることが大切だ。また私は、今までに起きた災害の記憶というものを風化させないことが大切だと思った。その災害で今を生きたくても生きることができなかった人がたくさんいて、教員の判断ミスや防災に関しての知識不足で、実際に行動に移せなかった・想定を超えるようなことが起きてしまったことなど今までの災害から得た教訓を教えたい。そして、災害の多いこの国でどうしたら助かるのかを自分自身で考えさせ、他の人との意見を交換、共有することで自分のものにしてほしいと思う。教師というのは、学生に勉強だけでなく社会に出て周囲の人に認めてもらえるような人間に成長させたり、礼儀や命の大切さなど普通に生活しているだけでは学ぶことが出来ないことを自分の子供のように教育させたりする仕事だと思っている。一人ひとり性格も違えば学力も違うので大変な職業だが、私が環境防災科に入って勉強していく中で驚きや衝撃・悲しみといった感情を抱いたこともあり、だからこそ、災害に向き合い1人でも多い命を救いたい、そして今この瞬間を生きたかった人達の時間を大切にしてほしいと思う。

もうひとつの夢の柔道整復師は、あまり防災そのものには関わってこないと思う。しかし、災害が起きた後で避難所生活をしていて、普段とは違う生活のために体のどこかを痛めた時に治療をすることがで

きる。災害後の過酷な避難所生活をしている人たちには、欠かせない存在ではないかと思った。患者さんとコミュニケーションをとることが多く、防災についての話をしたり、避難行動を紙に書いて張っておくことで、電気をあてている患者さんがそれを目にできるようにしたり、自分自身がダンスに突っ張り棒や本棚の下に新聞紙を入れて倒れてこないようにしたりして備えをしているだけで治療を受けに来た患者さんがそれを見て参考にしてもらうことができる。さらに、自分自身の地震対策にもなって一石二鳥だと思った。

13 最後に

私たちは、これまでたくさんの外部講師の方々の講義を受けてきた。その中でも風化させないということが一番大切だと思った。災害が発生すると人々はその災害に目を向けるが、月日が経つにつれて忘れられていく。災害の規模が大きければ大きいほど報道は大きく取り上げられたり、一周忌になると再び報道されたりするが、あまり規模が大きくなかった災害は忘れ去られていく。風化は、抑えることができないのだろうか。私なりに考えた結果、この「語り継ぐ」を書き、色々な人に読んでもらうことで危機意識が少しでも高まるのではないかと思った。語り継ぐという言葉は環境防災科に入って初めて知った。私たちのように災害を経験していない世代は、どのようにして過去の災害を知り、そこから得た教訓をもう一度フィードバックすることが大切だと思った。次に災害が起きてからでは遅い。災害に対する環境や人間の脆弱な部分を改善していくべきである。私たちは、過去の災害で亡くした人の命を無駄にしてはいけない。それは、色々な形・色々な方法で行うことができると思う。私たちのように、防災を専門として3年間学んできた人は、正しい情報・防災の知識を促すことが大切だ。

これからの日本では災害と向き合わざるを得ない。今後30年以内に南海トラフ巨大地震が起きると言われている。その災害に打ち勝つためには、日ごろからの防災訓練や勉強、自分の住んでいる町の状況を理解することだと思う。ひとりひとりの命は大切である。無くしていいものなどはない。忘れていいものもない。自分の命は自分で守ること。みんなで協力することが大切である。

拝啓、この誌面を読んでもくれたあなたへ

橋本 来夏

1 はじめに

今から私が後世に語り継ぎたいことを綴っていきたいと思う。しかし、これは私の経験談でも、経験をもとに書いたものでもない。なぜなら、私は阪神・淡路大震災を経験していないからだ。「経験してもいないのに何を語り継ぐのだ」と言われるかもしれない。聞いた話を綴るのは本来の語り継ぐ形とは違うかもしれない。それでも、私は私にできる形で文章に残したい。震災当時、私が今お世話になっている人たちがどのような苦労をしてきたのか。伝えなければいつかは薄れて消えてしまう声を、私が家族に代わって伝えたいと思う。

2 震災が発生する前

震災は前触れもなく突然発生した訳ではない。自然は震災前にも小さくではあるが、神戸の街に異変を示していた。祖父の兄は地震が発生する前、地震雲が空に浮かんでいるのを見た。また、地震が発生する数日前には魚が大量に釣れたそう。その他にも、鳥が突然いなくなったり、早朝に空が夕暮れ時のように真っ赤に染まっていたりと、思い返せば沢山の不思議なことがあったと話を聞いた人の多くが語ってくれた。

3 父の話

(1) 発災当時の様子、ライフラインの停止

私の父は、震災当時垂水区に住んでいた。父は地震が起こる前から起床しており、地震が発生する直前に今まで聞いたこともないような轟音を聞いた。その直後に感じた揺れはとても激しい縦揺れで、瞬間的にこれはただ事ではないと感じたそう。幸いにも家が崩れる、家族が家具や家の下敷きになるなどの大きな被害はなかったが、もしも家が崩れるようなことがあった場合には2階から飛び降りて脱出しようと思っていたほど恐ろしいものだった。ライフラインに関しては、電気はその日のうちに復旧、ガスはプロパンガスを使用していたため問題はなかった。しかし、水道は使えなくなっていたため、勤め先が西区にあった父が会社の帰りに水を汲み、持って帰っていたそう。

(2) 勤め先の被害

父は勤め先の被害が比較的少なかったことから、道路はところどころひび割れてはいたが、地震が起こったその日のうちにいつも通り車で会社に出勤することができた。被害が少ないといっても、やはりいつも通りに仕事を行うことはできなかった。父は当時、菓子扱うような企業に勤めていたが、菓子を作るための材料であった醤油がひっくり返って床中醤油だらけになっていたり、ひなあられのケースが崩れていたりした。また、菓子を大阪方面に出荷するトラックは道路の渋滞でなかなか帰ってくることができず、朝一番に西区を出発しても、西区に帰ってこられるのは次の日の朝という事態も起こったそう。父は地震が起こった直後に会社へと向かったのも、震災のもたらした被害の全貌を知ったのは昼休みの時だった。テレビの向こうで長田の町が燃えているのを見て「地震でこんな大火事が起こるなんて想像もしていなかった」と長田の町の状況に大きな衝撃を受けたそう。

4 母の話

(1) 発災当時の状況

母は震災当時、父と同じく垂水区に住んでおり、両親と祖母（私から見ると祖父母、曾祖母にあたる。ここからは私から見た血縁関係で書かせて頂く。）の4人で暮らしていた。母は発災当時、まだ起床前であった。母は寝ていたためか父のように轟音を聞いたわけではないようだが、同じように大きな揺れを感じたそう。揺れが収まって自室から出てみると、祖父が寝ていた場所のすぐそばにあったテレビがテレビ台から転がり落ち、あらぬところに転がっていた。また、揺れが収まった後に鍋の中を覗くと中身が空になっており、曾祖母が作ったはずの味噌汁がすべてこぼれてしまっていたことから、揺れの大きさを改めて感じたそう。

(2) 会社へ

母の当時の勤め先は大阪にあった。震災当日から1週間ほどは電車が通っておらず、大阪までたどり着く術がなかったため、自宅待機となっていた。電車の復旧が始まると大阪方面に行く電車を乗り継

ぎ、時には線路沿いを歩いたり、船を利用したりしながらなんとか大阪まで毎日通っていた。乗り合わせが悪く、誰もいない無人駅で30分ほど1人待っていたこともあった。しかし、それでも大阪までたどり着くのはかなりの時間を要した。7時に家を出発しても、大阪の勤め先に到着するのは12時、13時になる。当然帰宅するのにも同じくらいの時間がかかるため、会社に滞在できる時間は30分、多くても1時間ほどだったようだ。

5 祖父の話

(1) 実家の全壊

祖父の実家は六甲道駅の近くにあり、震災の影響を受けて全壊した。幸い犠牲者が出ることはなかったが、祖父の兄の奥さんが長時間タンスに挟まれて脊髄を損傷し、一時期立つことも困難になった。その後、奥さんは舞鶴駅で奥さんの兄と落会って実家のある福井県へと帰り、赤十字病院で半年間療養し、事なきを得ることができた。しかし、震災で犠牲になってしまった方も多く、多くの家の前に花がたむけられている光景は震災がもたらした影響の大きさを物語っていたようだ。

(2) 実家の援助へ

当時、祖父の実家は呉服屋を営んでいた。全壊した家の中には得意先から集金してきたお金や商品が貴重品とともに家の下敷きになっており、その貴重品たちの行方を探した。また、実家が全壊してしまったため、親戚の家に寝泊まりさせてもらっている祖父の兄の元に飲料水を5Lと食料品、大石川で汲んだ下水用の水を毎日バイクを利用して親戚の家まで運び、実家に住んでいた人たちを支援した。

祖父が住んでいる垂水から六甲道まで通う道中にも様々な光景を目にした。信号機は垂水から東はすべて消えており、事故が多発。実際にバイクが車の上に乗り上げるのも目の前で見たようだ。国道2号線の厚生年金会館の辺りでは車が通れないように交通規制がかけられていたため、道に行くのは小さなバイクだけ、という異様な光景が広がっていた。またその他にも、ガソリン不足のため他県から支給されたガソリンの給油量が決められていた光景。鷹取で発生した火災の消火活動をするために品川ナンバーの消防車が来ていたが、川の水がなく水道も止まっているため、なす術もなくじっと火事の様子を見つめる消防士の姿。崩れかけのボーリング場に若者が入っていき、中からボーリングの球を盗んで逃走する姿とその犯行を目撃しているはずなのに、誰もが見て見ぬふりをする傍観者の姿。灘区の駐車場で連日たき火をしていたが燃やすものが無くなると、駐車場近くの全半壊した家から勝手に塀の一部や木材の一部をとってきて燃やす材料にしている姿など、私が体験談や写真でしか見たり、聞いたりしたことのないようなことも祖父は実際に目の当たりにしていた。

6 祖母の話

祖母は震災直前まで自室のベッドで寝ていたが、端に掴まってもベッドから落ちそうになるほどの大きな揺れで目を覚ました。揺れがおさまって部屋の中を見てみると、整理箆笥と和箆笥の2本の箆笥が倒れて歩けない状態になっていた。箆笥の裏をはってリビングに出ると、食器棚からお皿やコップが全て外に出てきてしまっており、割れた食器類が床を埋め尽くしていた光景が一番印象に残っているようだ。

夜が明けて明るくなると、周りの被害が少しずつ見えてきた。マンションの屋上にあった水を溜める大きなタンクには亀裂が入り、中に入っていた水が全て外に出て大きな水たまりが出来ていた。また、外からは焦げ臭い匂いがし、新聞紙など燃えた残骸のような物が風に乗って飛んできていた。不思議に思ってテレビをつけると、長田の町の大火事の報道がされており、燃え尽きた新聞紙が飛んできていた理由が分かったようだ。

ライフラインの中で電気だけがすぐに復旧したため、その当時家にあった電気鍋を使って、おでんやクリームシチューなどを調理し、それを食べて生活していた。また、六甲道に建っていた祖父の実家が全壊し、祖父の姪達が祖母の家で一時的に一緒に暮らすことになった。一気に家族が増え、7人家族になったので、寝る場所がない、普段よりも多く料理を作らなければならないなど、家族が増えることによって発生する問題が多く浮上した。その問題は物理的なものだけでなく、人間関係を友好に保つのがとても大変だったなど心理面の問題も多くあったようだ。

7 その他

「震災を通して水・電気・ガスのある生活の有難さが分かった。」や「震災が発災したことで、普段はあまり意識したことのなかった人と人の繋がり大切さが改めて感じられた。」など普段、当たり前

にあるからこそ、あまり感じることをできないものの大切さが再確認できたという感想を全員から聞くことができた。

8 体験談を聞いて

私の周りの人たちは幸いにも被害の少ない場所に住んでいる人が多かった。だから、誰に話を聞いても、「住んでいたところの被害が大きくなかったから、書けるような話はないかもしれないけれど」と前置きをしてから話してくれた。しかし、実際に聞いてみるとやはり全体からみると被害が少ないといわれているような場所でも、沢山の不便や苦労があることが分かった。当時の報道を見返すと、震災が神戸にもたらした爪痕の深さが手に取るように分かる。しかし、報道されていることだけが震災のすべてではないのだ。乗れる電車を乗り継いで、普段の何倍もの時間をかけて会社に出勤していた母。毎日六甲道までバイクを走らせて食料や水を届けていた祖父。甚大な被害を受けた場所の報道によって陰となり、見えにくくなっていた苦労を、今回話を聞くことによって知ることができた。

9 環境防災科

私が環境防災科に入ろうと思ったきっかけは、中学生の時にボランティア活動に参加する機会を頂き、高校生になってもボランティア活動を続けたいと思ったこともあるが、一番は「お前にはこの学科が合っていると思うから受けてみてはどうか」という父の勧めがあったからだ。

父の勧めとボランティア活動を続けたいという2つをきっかけに環境防災科に入学した訳だが、入学した当時の私の防災の知識はほとんど無いに等しかったと思う。しかし、この3年間を通して様々な防災知識を身につけた。街を歩いているときに緊急避難場所の看板を注意して見たり、家族や友人に防災の知識を教えたりできるようになった。防災は学べば学ぶほど災害の恐ろしさや自然の前では人間はとても小さな存在であるという事を思い知らされる。しかし、それと同時に人間の強さや助け合いの大切さを学ぶことができる。阪神・淡路大震災が発生し、街が壊滅的な状態になったとしても、その経験を踏まえ、神戸は現在多くの観光客が全国各地から訪れる美しい街へと復興していった。発災後はボランティア元年と呼ばれるほど多くの方が神戸に駆け付け、ボランティア活動をしてくださった。これらは全て、人間が助け合いや絶望的な状況にあったとしても挫けずに前を向いて進んでいく強さがあったからこそ得られた結果であると思う。

もし、私が中学3年生の時に環境防災科ではなく、普通科へ進学する道を選んでいたら、また違った今日を迎えていたかもしれない。しかし、私は環境防災科に入学したことを後悔したことは一度もない。いざという時のために、防災、減災を学ぶことはとても大切なことだ。そうとは分かっているが、具体的に何を学べば良いのか分からないというのが多くの人の現状だと思う。私はこの3年間を通して様々な方面から防災を学んできた。しかし、それだけで終わってしまえば本当の意味で防災を学んできたとはいえないと思う。自分が蓄えた知識を、防災をどう学べばよいのか迷っている人達に今度は自分が先生となって防災を広めること。それが本当の意味で防災を学ぶということであるだろうと考えている。

今まで様々な方面から防災の知識を教えてくださいました方々には本当に感謝している。今まで沢山の方に教えて頂いた知識を今度は私が周りの人にも伝え、地域の防災力を上げること。そうすることが防災を学んだ者の使命であり、私のできる感謝の気持ちを表現する方法だと思う。

10 私が語り継ぎたいこと

ここまで、私の身の回りの人の体験談を綴ってきたが、私自身も後世に語り継ぎたいことがある。それは、「災害を過小評価しない」ということだ。確かに、多数の犠牲者が出るような大きな災害は度々起こるものではない。だからこそ、日常の忙しさばかりに目がいき、自然がもたらす恐ろしさを忘れてしまう。

「正常性バイアス」と「同調性バイアス」という言葉がある。正常性バイアスとは日常と違う事が起こっても、自分に危害を加えないものだとして認識し、普段通りの行動をしてしまうことだ。また、同調性バイアスとは、自分は異常を感じていても周りの人に合わせ、周りの人が行動していないから自分も大丈夫だと認識してしまうことだ。この2つのバイアスはどの人にも備わっているものであり、とても大切なものだ。そうでなければ小さな変化にも過剰に反応し、精神的に疲弊してしまうだろう。しかし、災害時にはこれらのバイアスが働くことによって命を落としてしまう可能性がある。では、そうならないためにはどうすればよいのか。私なりにではあるが、対策を考えたいと思う。

まず、災害は誰の身にも平等に必ず起こることだと認識することだ。どこか他県で災害が起こった時にも「あの県は大変だな」と他人事のように考えるのではなく、「もし、あの災害が自分の身の周りで起こったらどのように行動すれば良いだろう」と考える。そんなこと自分の周りで起こるはずがないと心のどこかで思ってしまうかもしれない。それならばそれで良いと思う。その場合はこう考えるのだ。「一応考えておこう」と。

こんな経験はないだろうか。宿題ではないけれど、先生が近々授業で問うといていた問題がある。だから、一応次の授業までにやっておこうと保険をかけておく。一応であってもその問題に備えておけば、もし先生に授業中当てられても焦らずに答えることができる。これと同じことが防災についても言えるのではないかな。備えておけば、万が一、大きな災害が自分の身に降りかかってきたとしても適切な対処をとり、自分の身の安全を確保することができるのだ。

また、地域みんなが共通の高い防災意識を持つておくことも大切である。前述したように、誰の心にも「みんながやっていないから(やっているから)私も・・・」という同調性バイアスがある。これが災害時に悪い方向に働いてしまえば、最悪の場合命を落とす結果となってしまう。しかし、同調性バイアスを逆手にとって、災害時良い方向にバイアスが働けば多くの人が命を落とさず生き延びることができる。そのために共通の高い防災意識が必要なのだ。例えば、小さな災害だと自分が判断した場合でもとりあえず逃げる。逃げていない人の方がおかしい。このような共通認識を作るとする。そうすれば、「自分だけ逃げて大げさだと思われるのではないかな」などという余計な考えが巡り、逃げることを先送りにしてしまうようなことはなくなるだろう。「命が一番大切。そのためにどんなに小さな異常事態にも用心して行動するべきだ」という地域の雰囲気がいざという時に生き延びることができる鍵となるのだ。

「今災害が起こったらどうしよう」と考えながら毎日を送ることは非常に大切なことではあるが、そのことばかりを考えていると日常を楽しむことができなくなってしまう。しかし、過去に災害が起こった日にはぜひ防災・減災について考えてみてほしい。いきなり大がかりな防災対策などでなくてもいい。非常時に家族とどこで待ち合わせるのかを決める、などの小さなことからでも構わない。その小さな積み重ねがいつか命の危険を伴うような災害に出会った時に、自分の身を守ってくれるはずである。

11 最後に

執筆活動を始める前に、私は語り継ぐことの大切さを感じると同時に、不安を感じていた。この中に書かれてある経験談の中には私が実際に目にしたり、感じたりしたことは1つとしてない。そんな中で執筆をすれば、震災を実際に経験した人を傷つけることになるのではないかなと思った。経験を語り継ぐことの重要性は分かっているながらも、私は心のどこかで、語り継ぐことができるのは実際に経験をした人だけであり、話を聞いただけの私が震災を知らない人たちへ「語り継ぐ」というのは苦労や悲しみを乗り越えてここまで神戸を復興させてきた当時の人たちへの失礼にあたるのではないかな、と思っていたのかもしれない。しかし、4人の震災経験者に話を聞いて、それでも私は執筆したいと思った。なぜなら、最大震度7を記録した当時の神戸を生き抜き、誰1人として欠けることなく今を生きている奇跡を伝えたいと思ったからだ。あの時もしも、誰かが命を落としていれば私は生まれていなかったかもしれない。今の私があるのは辛く、不自由な状況でも懸命に生きてくれた当時の人達がいたからだと思う。

震災の経験を聞くことはとても辛いことだ。しかし、その辛さから目を背けずに体験者の話に耳を傾けて欲しい。そして、今生きている有難さと後世に語り継いでいくことの大切さを感じて欲しい。語り継ぐ話は自分の体験ではなく、自分の身の周りの人の体験であっても構わない。大事なのは過去の災害を繰り返さないこと、命のバトンを繋いでいくことだ。

もしも、執筆する前の私のように自分の経験ではないことを話すのは憚られると思っているのなら、舞子高校が「語り継ぐ」の執筆活動を行っていることを広めて欲しい。少しでもこの誌面が多くの人の目に留まり、防災・減災のことについて考えるきっかけになることを私は望んでいる。

語り継ぐ

平松 弘成

1 はじめに

1995年1月17日午前5時46分に発生した阪神・淡路大震災から25年が経った。私のように震災を経験していない子供たちが増えてきた。そして、これからも増え続けていく。経験していないから震災が起きた時に、どう行動すればいいのかわからない。だからこそ、震災を経験した人から話を聞き、それを語り継ぎ、風化させないことが大切だと思う。その中心とならなければいけないのが環境防災科で多くのことを学んだわたしたちだと思う。

2 阪神・淡路大震災の概要

発生日時：1995年（平成7年）1月17日午前5時46分

震源地：淡路島北部

震度：7

規模：M7.3

死者：6,434名

行方不明者：3名

負傷者：43,792名

《Wikipediaより》

3 父の話

（1）震災発生時

前日の1月16日、祖父の葬儀が淡路島で行われ、17日は仕事が休みだった。本来であれば淡路にそのまま宿泊する予定だったが、父が疲れており神戸垂水の自宅に夜遅くに帰った。もし、そのまま淡路で泊っていたら暫く帰宅できていなかっただろう。

私の父も疲れてこたつで寝ていた。夜明け前、突然地響きが聞こえてきた。最初はトラックが家に突っ込んできたと感じ目が覚め、その直後に家が横に揺れ始め、地震だと認識した。尋常でない揺れが続く中、父の弟を守ろうと上から覆い重なり、窓の外を見た。揺れている間、空がオレンジ色に染まっていた。揺れが収まった時には暗くなっていた。20～30秒間の揺れだったが、それ以上に揺れているのではないかと感じるほどの不思議な時間だった。運よく家の倒壊は免れ、放心状態の中、ガスの元栓を閉めに行った。明るくなると、家の中の状態も見え始め、損傷の状況も把握でき、家が無事であることを確認するとともに奇跡だと思えた。その後、情報を把握するために車のラジオで確認しようとしたが情報が錯綜していた。神戸中心部が深刻な状況であることを知らずに通学に向かう子供たちもいた。すると、突然空から灰が降ってきたことから、ただならぬ事態が起きていることが分かった。次第に情報を入手することができ、阪神地区の被害や震源地が淡路島である事を知った。また、神戸は地震が起きない、と育てられてきたので、全く予期していない災害だった。

（2）勤務先

地震の状況を知り、当日は休暇を取っていたが長田区にある勤務先が気になり車で向かうと会社は火災で全焼状態だった。消防署が目の前にあることから消防車が来ていたが、消火栓から水が供給できずに放水出来ないと言っていた。その時消防士の方はどうすることもできずにいた。その後、父の会社だけではなく火災した地域全体がそうであったと須磨消防署の方から聞いた。

数日後、仮事務所を立ち上げ仕事に復帰した。今のように情報インフラ（携帯・インターネット）が普及していなかったため、顧客との連絡を取るのが困難であった。

4 母の話

母は、自宅2階で寝ていた。大きな揺れと音で目が覚めた。その時、タンスの上からガラスケースの置物が落ちてきており、周りはガラスの破片が散乱していた。揺れが収まり1階にいた祖母が心配になり降りていき、無事を確認した後2人で落ち着くのを待った。

2階で寝ている母の弟を見に行くと、地震に気付かず寝ており、その横にはブラウン管テレビが落ちていたが、間一髪のところで当たらずに無事であった。その後、自分の寝ていた部屋に戻ると、寝てい

た場所には大きな柱時計が倒れ落ちていた。もし1階に下りていなければ下敷きになっていたかもしれない。

ライフラインは、当初電気は止まっていたが、暫くすると復旧し、ガスも通った。しかし、水道だけは幾日も止まっていたので水の確保に苦労した。家の損害もなく、被害が酷くなかったのが不幸中の幸いだった。

5 両親の話を聞いて

今まで阪神・淡路大震災での経験や感じたことなど、講師の方や学校の先生からは話を聞いたことがあったが、両親の話は聞いたことがなかったのも、こんなに被害を受けていたとは思っていなかった。このような機会がなければ、一生聞くことはなかったと思う。父の話の中にもあったように「神戸には地震は来ない。」という勝手な思い込みをすることの恐ろしさや、当時はそのように考える人がたくさんいたと聞き、驚いた。地震発生時にはライフラインが止まってしまう、水の確保に苦労したと母が言っていたので、災害時に水を確保できる場所を知っておくことが大切だと思う。

6 環境防災科

(1) 入学前

中学3年生の時、私はどこの高校に行くか迷っていた。自分が将来したいことやどんな大人になりたいかを考えた。考えた結果、誰かの役に立ちたいという気持ちから消防士に少し興味があった。高校を調べる中で舞子高校環境防災科という学科があることを知った。環境防災科を受けると決めた1番の理由は消防学校の体験ができることだった。

(2) 入学後

高校に入るまでは防災や災害に関する知識は全くなかった。自分の街で起こった阪神・淡路大震災のことも全く知らなかった。小学生の時も中学生の時も阪神・淡路大震災や東日本大震災について詳しく学んだことがなかったのも防災の授業が新鮮だった。ライフラインの会社をはじめ、消防士などの公安機関や防災の専門家の方から、災害当時に行った対応や今後起こる可能性のある災害への対策などさまざまな角度から防災について学ぶことができた。その他にも小学校に出前授業に行き、小学生に地震や津波についての仕組みや地震が起きた時の行動を説明した。出前授業を通して、自分では理解していても防災について学んでいない小学生に分かりやすく伝える難しさを感じた。また、これから防災を広めていくには自分で理解しておくのも必要だが、どうしたら小学生や子供たちに防災に関心を持ってもらえるのか、相手にわかりやすく説明できることも大切だと思った。説明する力をつけるために、授業で前に立って自分の将来就きたい職業ややりたいことなどを発表する機会が多かった。また、消防学校体験入校や阪神・淡路大震災で大きな被害を受けた長田の街を見て歩いた。長田の街は火災によって大きな被害を受けた。当時の写真を見ると比べながら歩くと、見違えるほどきれいになっていた。その他にも環境防災科だから経験できたことがたくさんあった。

(3) ボランティア活動

ボランティアを通して小さい子供から年配の方まで年齢問わずたくさんの人と関わった。私は、人見知りだったので初めて会う人とうまく話すことができなかったが、活動を通して克服することができた。最初のボランティアでは、何をすればいいのかわからず、先輩方や先生の指示待ちになっていると、先輩方がアドバイスをしてくれた。先輩方が自分で考えて行動している姿を見て、自分もいつかあのようになりたいと思った。2・3年次には本多聞地区のボランティアリーダーを務めた。夏祭りの打ち合わせに参加することや祭りの出し物、設営を地域の人で行った。また、1つの行事を開催するには、何か月も前から打ち合わせや準備をしないといけないことを知り、祭りを設営する側になったことで大変さを知ることができた。ボランティアを通して感じたことがある。それは、自分が良かれと思い、行動したことが相手の人には迷惑になっているということだ。ボランティアを通して自分に足りないものがたくさん見つかった。それと同時にたくさんの方に「ありがとう」という言葉をかけてもらい、人の役に立つことの素晴らしさややりがい、共助の大切さを感じた。

(4) 消防学校

環境防災科に入って一番印象に残っているのが、1学年と2学年の時に体験した消防学校だ。私は消防士になりたいと思っていたので消防士の人たちが普段どんな訓練をしているのか興味があった。

1年次には規律訓練、煙体験、地震体験をした。規律訓練では、最初は掛け声が小さかったり、整列の速さが遅かったりして何回もやり直しをした。煙体験では、真っ白な煙の中を進んだ。何も見えなくて驚

いた。実際には煙だけではなく炎もある中で救助していると思うとすごいと思った。地震体験では、阪神・淡路大震災や東日本大震災の揺れを体験した。震度7になると身動きができなくなり、何かにしがみつけないといけなかった。家具の固定や家の耐震強化などの大切さを感じた。

2年次には人員搬送やロープの結び方などを教わった。人員搬送には1人で運ぶ方法や2・3人で運ぶ方法を教えてもらった。目を隠して運ばれる側の体験をした時に何も言わずに階段を下りたり道を急に曲がったりすると怖いことが分かった。階段を降りるときに一言掛けてもらうことで安心できることを知った。どんなに急がないといけないうきでも相手の気持ちを考えながら行動することが大切だと感じた。最後に1班6人で総合訓練をした。うまくいかないことがたくさんあり、消防士の方は当たり前のようにこなせていることがすごいと思った。普段行っている訓練を体験することができ、自分も将来消防士になって多くの人の命を助けたいと思った。

(5) 東北訪問

私は今年の夏休みに東北を訪問した。私が東北訪問に参加した理由は、1年生の時から東北に行きたいと思っていたが部活動の関係で行く機会がなかった。また、高校3年間で東日本大震災について学んだうえで、現地に行き、自分の目で復興している姿を見たり、語り部さんの話を聞いたりすることができると思ったからだ。東日本大震災についてはテレビの映像や学校の授業を通してたくさん学んできたが、実際に現地に行くことで映像などでは感じるこのできない経験ができた。その中でも印象に残った活動が2つある。1つ目は大川小学校の訪問だ。写真では感じるこのできない衝撃を受けた。また、1つの判断ミスでたくさんの命を奪ってしまうということを知った。2つ目は語り部の方の話を聞いたことだ。私は、話を聞く前までは被災体験を人に話すことはつらいことで、もし自分が被災した側なら話せるはずがないと思っていた。しかし、被災体験を話すことによって気持ちが楽になったという話を聞き、驚いた。また、斎藤先生の話を聞き、高校生だからできること、高校生にしかできないことがたくさんある事を教わった。東北訪問を通してたくさんの方が話をしてくださり、多くのことを学べた。また、学ぶだけではなく、現地の人や他校の生徒とも交流を深めることができた。自分がいつも通りの日常を送ることができていることは、当たり前なことではないということに改めて実感した。

7 将来の夢

私の将来の夢は消防士になることだ。

私は4歳の時、けいれんを起こして救急車で運ばれたことがあった。初めての経験で戸惑っていた私を安心させるために救急救命士の方が声をかけてくれた。どんな言葉をかけてもらったかは覚えてはいないが、ほっとした気持ちになった。それから何年か経ち、東日本大震災が起きた。学校から家に帰り、いつも通りテレビをつけると津波の映像が流れていた。どのチャンネルも津波の映像が流れていたことを覚えている。大きな波が車で逃げようとする人たちを飲み込んでいく映像を見て、恐怖を感じた。当初は、この光景が日本のどこかで起きているということが信じられなかった。それから数日経って、ニュースを見ていると夜の暗闇の中、行方不明者を捜索している救助隊の姿が取り上げられていた。街灯もなくライトのようなもので照らしているだけの状態で休むこともなく探している姿を見てカッコいいと思った。消防士に憧れを持ったが、小学5年生の時に阪神・淡路大震災のことについて少し勉強したがあまり興味がなかった。

環境防災科に入って、消防学校体験の他にも防災のことについて学んだり消防士の方の話を聞かせていただいたりするうちに消防士を目指すようになった。

私が消防士になることができたなら防災に強い街を作りたいと思う。なぜなら、阪神・淡路大震災の前からも大きな災害は起きていたが、語り継がれることもなく忘れられている災害がたくさんあり、同じような災害で被害を受けていることを知ったからだ。自然災害をなくすことはできないが、語り継ぐことで同じような災害が起きた時に対応することができると思う。そして、消防士になったら伝えたいことが3つある。

1つ目は自助の大切さだ。講義をしに来てくださった方のほとんどが自助は大切だとおっしゃっていたからだ。また、地震などの災害が起きた時、パニックになり、自分のことで精いっぱい周りの人を助ける時間などないと思う。だから、自分の身を自分で守れるように最低限の知識を持っていることが大切だと思う。

2つ目は、共助の大切さだ。阪神・淡路大震災の時は消防や自衛隊などにより助かった件数よりも近隣の人の救助で助かった人数のほうが多いという結果が出ている。だから、普段から近隣の人とのコミュニケーションを心がけて、助けが必要になったときにすぐ救助してくれる関係を作っておくことが大切だと思う。

3つ目は備えの大切さだ。災害は何年か周期で同じ場所で起きていることがこれまでの記録で分かっている。今後起きると予想されている南海トラフなどの災害が起きる前に備えることができれば被害も最小限に抑えることができると思う。災害はいつ起きるかわからないからこそ後でやるではなく今やるという意識を持つておくことが大切だと思う。避難訓練も備えの1つだと思う。小学生、中学生の時も避難訓練は学校で行っていたが、私を含めほとんどの人が真剣に取り組んではいなかったと思う。震災を経験していない世代は災害が起きた時のことを想像するのが難しいからだと思う。ただ単にやるのではなく、小学生の時から避難訓練がなぜ大切なのかを教えてもらうことによって取り組み方や意識も変わってくる。しかし、私の地域では避難訓練を行ったことがない。地震はいつ起きるかわからないからどこで起きてもおかしくない。地域で避難訓練をすることも大切だと思う。津波が発生した場合には高台に避難しなければいけないし、東日本大震災の時のように予想をはるかに超える津波が来る可能性もある。高齢化が進んでいることもあって、私の周りにも高齢者の方がたくさんいる。足が悪い人や避難することが大変な人もたくさんいる。そのような地域で避難時に誰が助けを必要としているのかを地域の中で把握しておくことが大切だと思う。

8 最後に

語り継ぐ16を作成していく中で、自分が環境防災科に入ったきっかけや自分がこれからやりたいことを改めて考え直すことができた。私は消防士を目指しているので高校で学んだ知識を生かしていきたいと思う。また、自分だけではなく、家族や友人、これから関わる人に防災の大切さを伝え、広めていくことが自分の役目だと思う。語り継いでいくことによって、少しでも災害に強い街になってほしい。そして、阪神・淡路大震災を風化させないように頑張ろうと思う。

語り継ぐ

廣瀬 拓海

1 はじめに

今から 25 年前、1995 年 1 月 17 日午前 5 時 46 分に阪神・淡路大震災という災害によって多くの方が命を落とした。加古川で生まれた私は、ここで学ぶことがなかったらこの先も考えることはしなかったと思う。

だが、こうして学んでいる限り、何かを伝えていく義務があると考えている。この災害を、神戸だけに留めるのではなく、兵庫全体、日本各地にまで広げることこそ意味があると感じる。私が感じたことや思ったこと、考えたこと、学んだことをこれからの世代に語り継いでいき、そして、この災害の記憶が風化することなくこれからの世代の記憶に刻まれていくようにしていかなければならないと思う。その手助けをしていきたい。そして私は、これから先におきる災害やテロに対応できる街づくりをしていきたい。

2 阪神・淡路大震災

(1) 神戸市

1995 年（平成 7 年）1 月 17 日午前 5 時 46 分、淡路島北部を震源とする最大震度 7、マグニチュード 7.3 の大地震が神戸市を襲った。6434 名の方が命を落とし、行方不明者 3 名、4 万人以上の方が負傷、全壊または半壊の住居が約 25 万棟、火災が 281 件、道路、鉄道、電気、ガス、水道、電話回線などのインフラはすべて遮断され広範囲において機能しなくなった。今までにない都市直下型地震となった。

(2) 加古川市

同時刻、加古川市では震度 4 の揺れが襲った。私の祖父母と母と母の姉、妹は、その時実家に暮らしていた。これは聞いた話だが、ダンスが倒れそうになるほど大きく揺れたり、支えがなければ立つこともままならない状況だったり、かなりの揺れだったそうだ。

その後、加古川市にもたくさんの仮設住宅が設置されることとなった。

3 祖父母の話

震災当時、私の祖父母は、加古川市に私の母と母の妹の 4 人で一軒家に暮らしていた。震災前日まで何事もなくごく普通の暮らしをしていた。阪神・淡路大震災発生と同時に家族全員が目覚めた。祖母は、「今までに感じたことのないほどの揺れに感じた。」と言う。

祖父は「戦争がまた始まったのかと思うほどの地鳴りと揺れだった。」と思うぐらいの大きな揺れを感じた。加古川市でもそれほど大きな揺れだったということがわかる。

祖母は、すぐにテレビをつけ、何が起きているのか確認を取った。そこに映っていたのは想像を絶するものだったと、祖母は言う。神戸の街が見る影もないほどに崩れ、あちらこちらから真っ黒な煙が立ち込めていた。

母はすぐに街の外を見たそうだが、加古川市はそれほどの被害を受けている様子ではなかった。しかし祖父が、神戸の東灘区に引っ越した母の姉がどうなっているのか、と聞かれたときに血が体から抜けたように祖母は感じた。母が慌てて電話を掛けようとしたら、向こうから電話がかかってきて、無事を伝えるものだったようで一気に体中に力が緩んだように感じた。

その後、ニュースを見てみると、街のあちらこちらで火の手が上がっているのを見て、「まるで空爆があった後みたいやった。」と祖父は思った。祖父は戦争で両親を亡くしており、あの光景と震災直後の神戸の街は何か似ているものがあった。

ほどなくして、最寄りの駅前に仮設住宅がずらりと並び、たくさんの救援物資が届けられる光景を目にして暮らし、あまりいい気分ではなかったと言う。理由は、もし神戸でなく加古川の真下に地震が来ていたらどうなっていたのだろうということと、同情というか何とも言えない感情が渦巻いたという。

祖母が「私生きている間には、もしかしたらまた大きな地震が来るかもしれないが確率的には低いだろう。しかし、これから生きるあなたたちには大きな災害が起こるだろうから、しっかりと生きなさいよ。」と言われたとき、ここで習ったことをしっかりと活かしていこうと思った。

4 母の姉の話

震災当初母の姉（以下は姉とする）は、神戸市東灘区に暮らしていた。早朝だったためまだベッドの中にくるまっていた。なぜかその時の夢は今も忘れられないそうだ。通勤の帰り、電車に乗っている夢だったが、夢の中で電車が脱線したのかと思っていたら顔の上にタンスの荷物が雪崩のように落ちてきた。一体何が起きているのかわからないままとりあえずベッドから這い出て、机の下に隠れた。隠れるとほぼ同時にタンスがベッドの上に倒れてきた。

姉はその時も結婚しており、夫はちょうど支度をしようとしたときに震災に遭い、慌ててダイニングテーブルの下に潜り込んだそうだ。揺れが収まると同時に夫の叫ぶ声が聞こえたそうだ。

その時マンションに住んでいたがひびが入っていたりしたためとりあえず避難所で何日か過ごした後、実家に帰ってきた。実家に帰るとなぜか涙があふれた。家族と別れて神戸に住み始めてすぐにこの震災が起こったものだから、不安と恐怖が溜まっていたのだろうと今となってはそう思う。

夫は祖父がいるということと、仕事先が神戸の方だったので、さすがにそこまでお邪魔はできないと言い、仮設住宅を借り2人で暮らした。数か月たって、神戸の街も少しずつ回復していったところに垂水の方に引っ越しをした。

今は、あの日を忘れないために家具の転倒防止として家具を突っ張り棒で固定したり、ねじで止めたりするなどをし、非常用持ち出し袋などを用意している。家族で避難場所も確認をしている。

5 母の妹の話

母の妹（以下は妹とする）は、当時実家暮らしで寝床は2階だった。その日はなぜか早く寝ていた。震災が起きる少し前になぜか目が覚め、その時は特に何も思わずに寝てしまった。

震災発生時、何かがベッドの下から突き上げるような感覚があった後、今まで感じたことのないほどの揺れが襲った。「何かにしがみついていないと立てないほどの揺れで、足がすくむような感覚だった。」と妹は感じた。

急に扉が開いたと思ったら、私の母が地面を這って入ってきた。母は家がつぶれるのかと思ったらしく、慌てて逃げ込んできた。揺れが落ち着き部屋をのぞいてみるとタンスの荷物があちこちに散乱していた。

慌てて部屋の電気をつけ窓の外を確認すると、あちらこちらで家の電灯が付き始めていたので、自分の家だけではないと思いほっとした。母は医療大学に努める看護師だったのだが、どうすればいいのかわからなかった。ガスや電気などのライフラインは停止しなかったが、交通がストップしたため通勤などにかなり困った。

6 環境防災科

（1）きっかけ

環境防災科に入ろうと思ったきっかけは、ささいなことで、伯母から紹介されたからだ。

中学2年の時まで環境防災科という学科があることも知らなかった。しかし防災について無知だった私は、この環境防災科が将来大きな変化をつけてくれると思いながら入学を決意した。そのころには自衛隊への入隊は考えており、環境防災科に入って少しでも将来の糧となるような学習や考え方がついていけるような学校生活にしたいと思っていた。

（2）ボランティア

私は、断じてボランティアに行った数が多いとは言えないだろう。その程度の数しかボランティアには参加していないからだ。

しかし、私は数少ないボランティアの中で学んだことはたくさんある。ボランティアがないとこの世の中は成り立たないことや、ボランティアはボランティアで周りの方に支えてもらって成り立っているということだ。その中でも私は、人の温かさということが重要だと思う。

人の温かさというのは、ただ笑顔で接するだけでも温かさだと思うし、優しく対応するだけでも温かさだと思う。そう言った心で接するという気持ちさえあれば、その温かさというのは、伝わるということがわかった。そしてこれから先、ボランティアに参加するにあたって自分もその気持ちを忘れずに接するようにしていきたい。

さらにボランティアを通じて感じたことがある。ボランティアは人のためではなく、自分のためだという気持ちで行うとはどういう意味なのだろうと言うことだが、すぐに答えは見つかった。

ボランティアを終えて帰りの時に、ボランティアに来てくれてありがとう、そう言われた。私は、そ

の時はただ参加しているに近かったので、軽く会釈をする程度で済ませてしまったが、後で気付いたのだが、こういった地域のつながりがあるこそボランティアがあるし、自分たちもいると実感した。

だから最近は地元の方たちとの交流を大切に、ボランティアに参加した時にはいつも感謝の気持ちを持って行っている。

(3) 3年間を終えて

私はこの3年間で大きく変わることができたと思う。多くの経験を積んで、多くの知識を身に付けることもできた。苦手だった小さな子供とも触れ合うことが出来るようになった。苦しいこともたくさんあり、何回も心が折れそうになったが、いろんな方々の支えもあって乗り越えることが出来た。

その中で私が一番感じた事は、苦しい時に一番支えになるのは家族ということだ。この高校生活で、幾度となく苦しい場面にあってきて、何回も負けそうになったことがあったが、家族がそばにいたと思っただけで、気持ちが少し軽くなることがたくさんあった。今こうして振り返ってみると家族には数えきれないほどの恩があると思う。だからこれから先、家族に少しでも恩が返せるように、立派な1人の大人となって、これからの社会に貢献できるようになりたい。そしてここで学んだことを、これから先につなぐことのできる存在になりたい。

7 将来の夢

今からは、私の夢について話していきたい。私の夢は陸上自衛隊に入隊することだ。きっかけは、トライやるウィークで消防署に体験をしに行ったことで人命救助に興味をわき、さらに航空自衛隊の救難隊「メディック」も特集を観て自衛隊に興味をわいた。そのあと自衛隊について調べていくうちに陸上自衛隊の特殊作戦群と呼ばれている部隊に興味を湧いた。おもにこの部隊は対テロ・対ゲリラ部隊とされ、はっきりとした詳細は述べられていない。

家族には初めは猛反対され、いつ戦争に駆り出されるかもわからないところになんか入れさせないと言われたが、環境防災科に入り、意欲を表したら渋々理解してくれた。しかし絶対に災害救助の方の部隊に入りなさいと言われているが、自分は初めからこの部隊に入りたいと思っていたので落ち着いたら、家族にも話そうと思う。

なぜその部隊に入ろうと思ったかという、2020年の東京オリンピックや、2025年の大阪万博が行われる日本で今後最も警戒しなければいけないことといえば、やはりテロである。

日本にある対テロ対ゲリラ組織は警察の特殊急襲部隊（SAT）、陸上自衛隊の特殊作戦群、海上自衛隊・海上保安庁の特別警備隊、航空自衛隊の基地警備教導隊がある。古くて1977年、新しいものだと2014年にできた部隊もある。そのくらい日本はテロに耐性がないことがわかる。

日本は災害の国と呼ばれるくらい災害が多いのは確かだ。だから災害が起きた時の対応はすぐに行われる。起きた災害名を聞かれてもパツと出てくるものや、名前は知らなかったが、災害の内容は知っているということがほとんどだと思う。

しかし、今まで日本で起きたテロと言われてすぐに答えられるものといえば数少ない。それほど日本で起こったテロというのは認識が薄い。私も調べるまでに知っていたテロといえば、オウム真理教による地下鉄サリン事件と浅間山荘事件ぐらいだった。しかもこれを知ったのもテレビで放送されているのを見たからだ。しかし、2001年9月11日に起きたアメリカ同時多発テロや、まだ記憶に新しい2013年のボストンマラソン爆弾テロ事件、2015年パリ同時多発テロのような銃火器を使ったテロや、国会議事堂などと言った中枢となる建造物を狙ったテロというのは日本ではまだ起こっていない。

この先、日本では多くの国際イベントが行われる。今年行われる東京オリンピック、5年後の2025年に行われる大阪万博などまだまだたくさんある。多くの人が集まるということは、その分テロが起きるリスクも上がるということだ。イスラム過激派組織（IS）がいつテロを起こしてもおかしくない状況になってきている。現に日本人をターゲットにした事件は起きている。2015年シリアで日本人2名が拉致、その後殺害された。ISがアメリカ人とイギリス人以外を殺害したのは初めてで異例極まりないことだ。つまり、この先日本がターゲットになってもおかしくないということだ。

だから私は、この日本を守る最前線に立ち、日本をテロという脅威におびえずに暮らせる街にするためにこの部隊に入り活躍していきたい。

8 最後に

私がこの語り継ぐを書くにあたって感じたことは、阪神・淡路大震災で学んだことは人それぞれで、そこからどう感じ、それぞれどう変えていくかだと思う。

悲しさや苦しさ、無力感といった感情も、私にはあった。しかし私は、その感情に流されず、この感情を受け止めることで、また1つ前に進むことが出来ると感じた。

これから先、自衛隊で働くようになってもしっかりとこの感情を忘れることなく過ごせるようにしたい。

ここで学んだすべてが、今の私を支えている土台になっていると思う。その土台をしっかりとこの先も活かせるようにしていき、そしてこの3年が無意味ではなかったと思えるようにすることが、私にできる最大の事だと思う。

語り継ぐ

福島 康渡

1 はじめに

1995年1月17日午前5時46分兵庫県南部地震発生。神戸は甚大な被害を受けた。兵庫県南部地震が発生してから25年が過ぎた今では、阪神・淡路大震災を知らない人が増え続けている。つまり風化し、忘れられる可能性が高い。風化させないためには私たちができることは何だろうと考え、やはり後世に語り継ぐことだ。震災を経験した人から体験談を聞き、未経験者から未経験者へ語り継いでいきたい。神戸に住む限り、阪神・淡路大震災を忘れてはいけない。だからこそ高校生活3年間で学んだことを語り継いでいきたいと思う。

2 阪神・淡路大震災

(1) 概要

名称：兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）

日時：1995年1月17日午前5時46分

震源地：淡路島北部

震源の深さ：16 km

規模：マグニチュード7.3

最大震度：震度7

死者：6434名

行方不明者：3名

負傷者：43,792名

住宅被害：639,686棟（うち全壊104,906棟）

被害総額9兆9268億円 国予算のほぼ1割の規模にも及ぶ大災害となった

「特集」阪神・淡路大震災-神戸新聞NEXT（被害の概要のページ）より

(2) 母の話

当日（1月17日）5時46分明石の自宅で寝ていた。始めはゴ〜ゴ〜と地響きのような音が遠くから聞こえて来た。すると横になっていた母はそのまま空中に体が浮いたような気がした。すると、次は体が地面に叩きつけられた。また、大きな音がゴ〜ゴ〜と聞こえた。しばらくして何か大変なことが起きていると感じた。幸い家族全員、同じ部屋で寝ていたので、母と父と一緒に家を飛び出し、避難場所である小学校に向かったが同じように避難してきた家族が沢山いて道路いっぱいに溢れて立ちすくんでいた。遠くの方から小学校の扉が閉まっていると言っているのが聞こえた。父がラジオを持っていたのでラジオをかけてボリュームを大きく皆に聞こえるぐらいにすると、どうやらそこで初めて地震だった事に気が付いた。震源地ははっきりしていなく神戸方面が大きな被害が出ていると知った。そこですぐに会社に向かった。会社の3階から外を見ると、周りは炎や煙でいっぱいだった。それを見てすぐに避難した。

(3) 学んだこと

阪神・淡路大震災では、ブラウン管式の大型テレビやタンスが倒れてきた。震度7規模の大地震となれば、どれほど頭を働かせても想定不能な事態が起きるかもしれない。せめて、就寝時に何もわからないまま命を落とすような事態を避けるためにも、特に寝室まわりで防災意識を高めておくことが重要だと感じた。兵庫県の調査によると、阪神・淡路大震災での県内の死者5483人のうち、72%の死因が「窒息・圧死」だった。やはり、寝室の防災対策は必要で、家具の転倒防止が大事だと学んだ。

3 東日本大震災

2011年に日本における観測史上最大の地震となった東日本大震災が発生した。被害総額は16兆円を超える大災害となった。主な死因は津波による溺死であった。しかし、阪神・淡路大震災と同じ被害もある。なぜ災害で同じような被害が繰り返されるのだろうと私は思う。これからは同じ災害を繰り返さないために、対策をする必要がある。阪神・淡路大震災での教訓は、災害時、ブレーカーを落とさずに避難したため電気が復旧したときにストーブなどから火災が発生する通電火災が起きたので、避難するときにはブレーカーを落とすことや地域コミュニティの重要性や避難所や応急仮設住宅の生活支援には

ボランティアが必要であるなどその他にもたくさんある。しかし、東日本大震災では阪神・淡路大震災の教訓があまり生かされていない。例えば、地域コミュニティがあまり確保されていなかったため、津波が来ると分かっているのに自分1人で高台に行き、近隣の人は津波に呑み込まれるケースがあった。もし、阪神・淡路大震災の教訓が頭に入っておれば、普段から地域の人とコミュニケーションを取り、災害時にも共助できたり、一緒に避難できたりしたと思う。

同じ災害が起こる原因に私は防災に興味がある人や災害の備えをしている人が少ないからだと思う。だから、災害が起きる前に市民の方に備えをしてもらえるように防災を広めたい。

4（1）環境防災科に入りたいと思ったきっかけ

私が環境防災科に入りたいと思ったのは小学3年生の時だ。その年は東日本大震災が発生した年でもある。家に帰ってテレビをつけると、全てのチャンネルが同じだった。また、映っていたのは全て海だったことが記憶にある。私は始め、何が起きているのかわからなかった。しかし、テレビに耳を傾けると「高いところに避難してください」とアナウンサーが必死に避難を呼びかけていた。私はその言葉を聞いて津波が来ると感じた。しかし、母がここには来ないと教えてくれた。その後、町が津波に呑み込まれる映像を見て体に鳥肌が立った。それから数日後、自分に何かできないかと思いお店に行くと募金箱があったので募金した。また、駅前を歩いていると高校生が募金活動をしていた。それが環境防災科の生徒だった。それを見て、環境防災科に入ると災害時・災害後に被災者の役に立てること、また、環境防災科のホームページを見ると防災や減災についても学べることを知り、災害と向き合っていきたいと思い、環境防災科に入学しようと思った。

（2）環境防災科に入ってから

私は環境防災科に入って学んだことは今までの人生の中で一番深い学びになったと実感している。普通科とは違う専門科目があり、防災を学ぶことができた。私が一番防災で大切だと感じたことは「自分の命は自分で守る（自助）」の大切さだ。また地域コミュニティの大切さも実感した。なぜ地域コミュニティが大切かというと、地域コミュニティが充実していると、災害時にお互い助け合うことができるからです。普段家の近くの人と話していないとここには何人の人が住んでいて体は不自由でないかなどわからないからだ。もし分かっていなければ、足が不自由なのに助けてもらえず命を落とすことも重々ある。阪神・淡路大震災では自助・共助で助かった人がほとんどだ。だからこそ、1つしかない命を大切にしないといけないのだ。

しかし、私たちは震災を経験していない。だから、ボランティア活動をしている時に批判を浴びることも数々あった。また、本当に地震が起きた時に行動できるかはわからない。けれど私は、震災を経験していない人が後世に伝えていかないと震災は必ず風化していくと思う。確かに説得力はないし、相手の心に残るような防災の話をできるかはわからない。しかし、専門的な話ばかりではなく、些細なことでもいいので多くの人に知ってもらいたい。批判を浴びながらも防災を広めていきたい。それが私たちにできることだ。

（3）ボランティア活動

環境防災科はとてもボランティア活動が盛んな学科だ。私が一番印象に残っている活動は、耳の不自由な子供たちと一緒に防災を学ぶというボランティア活動だった。

障害のある人は災害時要援護者とも呼ばれる。その人たちにどう教えたら災害時に自分で避難できるのか、みんなで考えて劇をした。実際に劇をして、本当に伝わっているのかわからなかった。けれど、みんなに話を聞くと手話で「わかった！」としてくれた。そこで私は障害のある人でも防災を学びたいと思っている人はいるんだなと感じた。災害時要援護者だから災害が起きたら一人では避難できない、その考えは私は嫌だ。障害のある人でも自分の命は自分で守ってほしい。それをサポートするのが私たちだと思う。これからいろいろな人に防災を伝えていきたい。また、環境防災科に入ってボランティアの大切さを学んだ。ボランティアには

- ① 自主性・自発性＝やってみようという気持ち
- ② 社会性・公共性＝協力しながら、力を合わせる行為
- ③ 無償性＝個人的な利益や報酬を目的としない
- ④ 先駆性・開拓性＝自由な発想で、方法や仕組みを考える

という4つのことが大切である。その中で私が一番大切にしていることは、自主性だ。ボランティアは自分でやりたい気持ちがないのにボランティアをしても被災者の方に迷惑だと思う。だから、ボランティアをする時は自主性を意識し、被災者の役に立てるように活動すると決めている。

5 災害と生きる

日本に生きている限り絶対に災害は起こる。災害と生きていかなければならない、逃げることはできない。では、被害を最小限度に抑えるためにはどうすればよいのか、何をすれば被害を拡大せずに済むのか、考えて行動することが必要であると思う。環境防災科に入っているいろんなことを学んだ。例えば、阪神・淡路大震災では、電気が復旧されたことにより、火災が発生した。ではそれはどのように防ぐことができるのか、例としては、災害が起きたらまずブレーカーを落とす、または感電ブレーカーを利用するなど、学んだことが多くある。それを自分だけの知識にせず、市民に伝えていきたい。

今後 30 年以内に 70%~80% の確率で来ると予想されている南海トラフ巨大地震から生命や財産を守るためには今何をすべきなのか。南海トラフ巨大地震では、マグニチュード 8~9 クラスの地震と非常に大きな津波が必ず来る。では、それを知った上で何ができるのか。まずは脳内でシュミレーションすることが大切だ。例えば、寝ている時に地震が来た場合、前に本棚があれば倒れてきたら命を落とす危険性があるとシュミレーションする。本棚に転倒防止の器具をつけたり、寝る場所は何もない場所にしたことで、事前に被害を少なくすることができる。

災害はいつ起きるかわからない。災害が起きてから後悔することは誰でもできる。災害を予め予想し、被害を少なくする必要があると思う。

6 将来の夢

私の夢は消防士になり市民の安全と命を守ることだ。また直接、人命救助に携わりたいという思いから、特別救助隊になり、数々の困難を乗り越え、多くの命を救いたい。

まず、消防士を目指そうと思ったきっかけは家の近くの団地が火事になった時に、燃え盛る炎の中、救助隊が侵入し小さい子供を抱きかかえて出てきたときに心の底からかっこいいと思ったからだ。また、高校 1 年生と 2 年生の時に消防学校体験をした際に、必死に指導してくれる教官に憧れを抱いたからだ。はじめの規律訓練で、初めて会った教官の人に厳しく指導された。そこで消防士になることは厳しいと改めて感じた。しかし、厳しい訓練を乗り越えることで現場に出た時に活躍できたり、やりがいを感じたりすると思う。だから、火災時や災害時に多くの命を救えるように、心が折れそうになっても妥協せずに頑張りたい。また、人の役に立ちたいという思いもあり、消防士になろうと決意した。もし消防士になれたら、全国の消防で行っている防災活動を共有する環境を作りたいと思っている。その時に南海トラフ巨大地震がまだ発生していなければ、どうすれば被害が拡大せずに済むか、どうすれば共助がうまくいくかなどを市民に伝えていけたらと考える。また、ただ座って教えるのではなく、実践的に教えていきたい。

阪神・淡路大震災が起きる前は「神戸に大きな地震が起きることはない」と言われていた。このような甘い考えが大きな被害を生んだ 1 つの要因かもしれない。だから、消防士になったら今までより防災を広め、市民が甘い考えをしないように伝えて行きたい。また、阪神・淡路大震災の死因の多くは圧死だった。木造家屋の倒壊や家具の転倒によりそれらの下敷きになり呼吸ができなくなる。もし、事前に備えるという考えがあれば、家を耐震化することができたり、家具も固定することもできていたかもしれない。そのように、たればのことを考えることも防災には必要だと思う。ただ救助隊になって人を助けるだけでなく、地域の防災訓練や小学校の避難訓練などに出向き、地域の人や子供たちと一緒に防災を伝えていきたい。

7 最後に

今回、語り継ぐを書いて、阪神・淡路大震災を忘れてはいけなと改めて強く感じた。阪神・淡路大震災が起きてから 25 年がたった今、神戸は震災が起きたことを忘れさせるぐらいに復興した。そのため、風化されつつある今、私たちが後世に語り継いでいかなければならない。風化されることで、将来防げたはずの災害で犠牲者が出るかもしれない。犠牲者が出てからでは遅い。だから本当にみんなに防災の知識を身につけてほしい。こう思うのも環境防災科に入ったおかげだと思っている。

平成はたくさんの災害が起きた。特に平成最後に起きた地震、豪雨災害、台風は、平成最大の被害が出た災害が多い。日本というこの災害大国に住んでいる限り、災害は常に隣り合わせであること、災害の恐ろしさを改めて感じた。人間は、正常性バイアスが働き、「大丈夫」と思いがちだが、災害は忘れたところにやってくるという言葉忘れずに、備えることが大切なのだ。

これから南海トラフ巨大地震が来ると予想されている。最大 32 万人もの死者が出るといわれている。この数字を見て、本当に備えをしないといけなと思うのは自分次第だ。そこで私は語り継ぐ大切さを

改めて感じた。市民に防災の大切さ、災害の恐ろしさを真剣に伝えていき、災害時に防災力を発揮してほしいと思う。

私は将来、消防士になって人の命を救うとともに、環境防災科で学んだことを発揮していきたい。また、これからも環境防災科であるという誇りを持ちながら語り継いでいくことが私たちの使命だと思う。

繋ぐことの大切さ ～私たちの使命～

藤原 祐弥

1 はじめに

私は、平成 14 年生まれの 17 歳の高校生である。阪神・淡路大震災が発生して、次の 1 月で早 25 年が経とうとしている。2021 年には阪神・淡路大震災を経験していない人が市内で 5 割を超えられている。

「高校生のくせに」や、「阪神・淡路大震災を経験してないのに大きい口叩くな。」などと言われたことがある。しかし私はそうは思わない。高校生だからこそできることもあるし、阪神・淡路大震災を経験していなくても聞くことはできる。それらを聞いて私たちより下の世代に語り継いでいくことができる。「あの悲惨な体験はもう誰にも味わってほしくない」と外部講師の方々は口をそろえて言った。

私は、舞子高校環境防災科に入学し、阪神・淡路大震災や東日本大震災の学習に力を注いできた。だからこそ私たちの世代で風化させてはいけないという使命感が強くあった。

この冊子には私たち環境防災科 16 期生だけではなく家族・先生・友人などそれぞれの想いが詰まっている。これから防災を学ぶ人だけでなく、いろいろな人に読んでほしいと思う。そこで私は、祖母に話を聞いた。

2 祖母と祖父の体験

当時祖母と祖父は須磨区の東落合に住んでいた。その当時の体験を聞いた。

(1) 震災前日

- 震災前日の夜、今までに見たことのない量の羽アリが窓一面についていた。
- そしていつもより大きくとても赤い月が出ていた。

まさか次の日に大きな地震が起きるとは全く思っていなかった。

(2) 震災当日

いつも通り 5 時 20 分に起床した祖母と祖父。1 階のリビングに祖母と祖父は居て 2 階の寝室に子供 2 人が寝ていた。(残り 3 人は違う家にいた。)

5 時 46 分その時が来た。

最初は小さな揺れで「地震？」と思った瞬間に「ドンッ」と下から突き上げるような大きな揺れが襲った。祖母はとっさに焚いていたストーブとコンロを消し、祖父の指示で机の下に潜った。体感 1 分以上の大きな揺れが続いたという。揺れが収まると家族の安否確認に行った。

三男はテレビを抑えていた。長男のところへ行き、全員をリビングへ集めようとした瞬間また大きな音がした。見てみると長男の部屋の壁が落ちてきたのだ。間違いなくそこにいたら下敷きになっていただろう。家の中で危険なところがないか探したところ、食器棚は倒れ割れた食器があたり一面に散らばっていた。この時にスリッパの大切さを学んだ。外に出てみると、家の屋根瓦が落ちていてとても危険な状態だった。

私の祖父は当時土木工事会社の社長をしていた。その事務所が長田区の手賀町にあった。テレビをつけると、長田区が大きな火災に襲われていて近所の駒ヶ林町も燃えていると聞いた。すぐに祖父は「このままやったら会社が燃えてしまう。すぐに行かんと。」と言って手賀町の会社へ行こうとした。しかし祖母は止めた。行っても道路が寸断されて帰って来ることができないかもしれないし、万が一火災に巻き込まれたらと思うとぞっとした祖母は「行ったらアカン」と言って止めた。しかし、祖父も譲れない。なぜなら自分が一から建てた会社を見殺しにできるわけないからだ。その強い意志に押され、祖母は承諾し、祖父が会社へ急行した。その間祖母は心配で仕方なかった。

手賀町の会社では曾祖母が住んでいたが無事を確認した。そこで曾祖母を東落合の家に連れて行った。その後、会社の建物は「半壊」判定された。断水していたため、近隣の東落合小学校へ水をもらいに行った。そこに残り 3 人の子供も帰ってきたため、一緒に手伝ってもらった。その時は子供がいたからすごく助かった。

土木工事会社の支社が妙法寺にあり、幸いそこは被害がなかった。そこで祖父は 4 トントラック 2 台分のお湯を積んで自宅へ戻り、近所付き合いが濃かったため、近所の方たちに風呂用に給水した。近所の方たちはとても感謝していたことが今でも頭に残っている。

その当時一番困ったことは食事である。3日まではカセットコンロのガスボンベで調理できたが、底を尽きると祖父が子供を連れて明石や加古川まで買い出しに行った。

数日後、長田区の会社へ行くと戦争が起きたようにあたりは焼け落ち、どっちが北かわからなくなっていた。東落合に戻り、数日たった頃、近所に長田区から来た人がいた。その人はこう言った「長田は今ひどいことになるとるのに何でここはこんなに被害ないんや。不公平やろ」と。その時、自然災害に逆らうことができないと痛感した。そこで祖父は何か出来る事はないかと考え、自分が土木工事会社の社長ということもあり、出勤できる社員を集め、無償で道路を舗装した。また、市から委託され、避難所での仮設住宅建設にも協力した。自分も被災した社員さんもたくさんいたのにすぐに事務所、現場へ駆けつけてくれてとても助かったという。この震災で失ったものも計り知れないが、得たものもたくさんある。それは社員との信頼関係だ。被災しているのにもかかわらず、すぐに現場へ動いてくれる信頼関係はとても重要だと感じた。

この震災で一番学んだことは、買い溜めをしておくことの大切さだ。実際に震災当時それで助かった部分もたくさんある。これを読む人にはぜひ防災リュックなどを用意してほしいと強く願っている。

3 環境防災科に入学した理由

私が環境防災科に入学した理由は、小学生の時に東日本大震災で激しく揺れる映像や、大きな津波が町を襲っていく映像を見て、たくさんの人が亡くなっている光景に心を動かされたからだ。

中学生になり、あるDVDを見た。その中には、東日本大震災の時に被災地へ行き、一生懸命泥出しや家具の片付けをしている高校生がいた。よく見るとそれは舞子高校環境防災科の生徒だった。その時に私は環境防災科のことを初めて知り、それと同時にもっと防災について知りたいと強く思った。

中学生の頃、ボランティア委員会というものがあった。私は中学校1年生の時に、そのボランティア委員会に入り、もっと人前に立ってこのボランティア委員会を大きくしていきたいと思い、2年生には募金副部長となり、3年生にはボランティア委員長になった。その活動の内容は定期的にある赤十字募金や、近隣小学校との地域清掃ぐらいであった。それだけではないと思っていた矢先、熊本地震が発生した。私は何か行動に移そうと思い、すぐに先生に相談し、現地へ送る募金活動の許可をいただいた。それからボランティア活動について興味を持ち出した。志望校を調べていると、環境防災科では募金活動をはじめ、小・中学校への出前授業、地域の防災訓練などのボランティア活動を行っていることが分かった。また、夏休みには毎年東北訪問をしているということも分かった。ぜひこの活動に参加したいと思った。

防災を学べてさらにボランティア活動もできる学校はここしかないと思い入学したのがきっかけである。

4 入学後

環境防災科に入り、まず一番始めにライフライン関係の方たちの講義があった。阪神・淡路大震災の時、ライフラインが止まってしまいでどのように復旧していったのか。また、災害を経験して今後どのようにしてこれから起きるとされている災害に備えているのかを学んだ。そこから 災害救助犬や警察・消防・自衛隊・海上保安庁などの公安職に関わる方たちの講義があり、阪神・淡路大震災では公助を待っていたら遅いので自助・共助を大切にしていかなければいけないと学んだ。

それと同時に中学生のころから興味があったボランティア活動にも積極的に参加した。広島県豪雨災害の時はNPO法人さくらネットの方と共同で被災地へ募金活動をした。また、防災出前授業で淡路島の福良小学校に行った。淡路島の福良地区は約9mの津波が兵庫県で一番早く来るとされていて、授業にも気合が入ったことを覚えている。当日は福良地区総合防災訓練の日で、その授業には一般の方もたくさん参加しており、参加者は550人を超えていた。とても緊張したが、今私が伝えたいことなどを話していくうちに自然と緊張は解けていった。私たちの授業で少しでも被害が少なくなったらと思う。

2年生になり、災害のメカニズムについて学び、災害時の心のケアや長田のまちあるきでは地域のつながりを感じた。それと同時にボランティア活動についても学んだ。

今私が住んでいるのは長田区の駒ヶ林というところだ。阪神・淡路大震災当時は震度7を観測し、それと同時に大きな火災が色々なところで発生したと聞いた。また、長田のまちあるきでは、鷹取駅南地区の区画整理事業では行政と市民の意見が合わず、真っ向に対立したということも学んだ。長楽町、本庄町では、戦争時に大きな被害が出ていなかったのも木造長屋の建物がたくさんあったが阪神・淡路大震災でほとんど倒壊してしまった。また、長楽小学校（現在は合併して駒ヶ林小学校）に

震災当時広さ 50 畳の部屋に 57 人の人が避難した。それだけではなく、この区画整理された街には防犯カメラがたくさんある。そのおかげで犯罪数が格段に減った。安心して安全な街に変化することができた。

これだけ長く駒ヶ林という町に住んでいるのに、こういった事実を知らなくて恥ずかしい思いをしたのを今でも覚えている。だから私は母校である駒ヶ林中学校へ出前授業に行き、防災の大切さや今後起こるとされている南海トラフ巨大地震の備えについて授業をした。しかし、母校だけだとあまり防災が広がらず、万が一災害が発生した場合減災ができないと思う。例えば、津波が来ると想定されているところでは津波を想定した授業や、山の近くでは土砂崩れなどを想定した授業を高校生の間でやっておきたいと考えている。この高校生活で学んだ防災知識やボランティア理論などを私はいろいろな人に伝えていきたいと思う。そして万が一大きな災害が起こったときに少しでも被害が少なくなるようにしていきたい。

5 東日本大震災

舞子高校の環境防災科に入学して特に力を入れて学習したのが東日本大震災である。2019 年(平成 31 年)3 月 8 日時点で、死者は 1 万 5,895 人に上った災害だ。もちろん、阪神淡路大震災や新潟中越地震についても力を注いできたが、環境防災科の志望理由にもあるように、今まで生きてきた中で一番印象に残った出来事が東日本大震災だった。当時小学校 3 年生だった私がここまで印象に残っているのには 2 つの出来事が関係している。

(1) 釜石の奇跡

東日本大震災の地震発生直後、釜石東中学校の生徒達は直ちに学校を飛び出し、高台をめがけて走った。彼らを見て、近所の鶴住居小学校の児童や先生達もあとに続き、さらには多くの住民もそれに倣った。岩手県釜石市の 3,000 人近い小中学生のほぼ全員が避難し奇跡的に無事だった。しかし本当に奇跡だったのか。私は奇跡だと思わない。理由は下記に示している。

なぜこんなにも助かったのかというと定期的に行われていた避難訓練とある教えがあったからだ。避難訓練では、釜石東中学校の生徒と鶴住居小学校が合同で避難訓練をするといったものがあった。東日本大震災発生当時釜石東中学校の生徒が鶴住居小学校の児童の腕を必死に引っ張って逃げていた。それを見て自分たちも避難しないといけないと思い近隣住民も避難していった。

彼らには避難 3 原則という言葉がある。

原則 1：想定にとらわれるな

原則 2：その状況下で最善を尽くせ

原則 3：率先避難者たれ

というものであった。

さらに釜石市では昔から「津波てんでんこ」という言葉がある。これらにはこういった意味がある。てんでんこは各自のこと。海岸で大きな揺れを感じたときは、津波が来るから肉親にもかまわず、各自てんでんばらばらに一刻も早く高台に逃げて、自分の命を守れという意味だ。東日本大震災が発生すると、釜石東中の副校長は教室から校庭に出始めた生徒たちに、「(避難所へ) 走れ!」「点呼など取らなくていいから」と大声で叫んだ。

(2) 旧石巻市立大川小学校の出来事

旧石巻市立大川小学校では児童 108 人のうち 70 人(教職員を合わせると 74 人)が死亡あるいは行方不明になった。なぜこんなにも多くの死者・行方不明者が出たのか、授業をはじめ、自分でも大川小学校のことについてたくさん調べた。そして、高校 3 年生の夏休みに実際に現地へ行き当時そこに通っていた方のお話を聞いた。教職員が避難経路をどのようにするか等わかっておらず、校庭に避難させられ、津波がすぐそこまで来ているとわかってから動き出した。今だから言えることだが、上に書いてある避難 3 原則をもっと多くの学校に広めていたらこんなにも多くの人が亡くなることはなかったのだろうと思う。あの時大川小学校の裏山に逃げていれば……。そういつても亡くなった人は帰ってこない。とても悲惨な気持ちになる。

(3) これらの出来事のまとめ

この 2 つの出来事はとても対照的だと思う。私はこれから防災教育をしていく場面がたくさん作っていくつもりだ。その時に、この釜石の奇跡、大川小学校の出来事について詳しく伝えていけたらいいと思う。

また、3 年生の夏休みに実際に東北訪問に参加した。地元神戸で防災を広めていけたらいいなと思

う。大川小学校の悲劇からもっと頻繁に避難訓練を実施していたらこんなに大きな被害が出なかったの
だろう。避難訓練の大切さを実感した出来事である。小学校や中学校の避難訓練を見ているとまじめに
やっている生徒もいればまじめにやっていない生徒もいる。そういった生徒をなくすことが、減災につ
ながると私は思う。そして、今自分たちが東日本大震災の学習をはじめ、防災や減災を学ぶことは、亡
くなった方の命を生かすことだと私は東北訪問で感じた。

6 神戸ルミナリエ

「ルミナリエ」この言葉を聞いて何を想像するか。それは様々であるが1つ忘れてはいけないものがある。
ルミナリエは阪神・淡路大震災で亡くなられた方の鎮魂と神戸の街の復興だという事だ。令和2
年1月で阪神・淡路大震災から25年が経つ。今年初めて「若者の語り部ブース」が設置される。私も
ご縁があり、その語り部ブースに参加することになった。震災を経験していない自分が、阪神・淡路大
震災について継承できるのか不安な部分もあるが、自分が語れば忘れない人が増えると様々な方から言
われ自信が溢れたのを覚えている。これから先、若者がどんどん語れる場を作ってほしいと思うし、自
分も作っていききたい。

7 感想

阪神・淡路大震災のことについて祖母と話す機会が今まで全くなかった。今までこんなにも大きな被
害が出ていて、祖母と祖父がこういった活動をしているなんて知るはずもなかった。しかし実際に話を
聞いてみると、被災しているにもかかわらず、行動に移せた祖父と祖母を私はとても尊敬している。今
回教わって本当に良かったと思う。それと同時に今回聞いたことを絶対に語り継いでいかなければなら
ないと思った。

今、我々が神戸に住んでいる意味。その中には阪神・淡路大震災を風化させてはいけないという使命が
あると感じている。絶対に忘れてはならないもの、忘れたくないもの。必ず伝える。辛い経験を真剣に
話してくれた祖母にはとても感謝している。本当にありがとう。

8 最後に

今回執筆するにあたって一番最初に悩んだのがサブタイトルである。私はぜひこの文を読んでほしい
と思っている。だから、隅から隅までこだわってこうと考えた。サブタイトルは「～私たちの使命
～」だ。この環境防災科に入って一番強く思うことは、絶対に過去の災害を風化させてはいけないとい
うことだ。特に地元で起きた阪神・淡路大震災については忘れないでほしい。こんなにもたくさんの人
が辛く悲しい思いをしているのに、風化してしまうことは絶対にあってはならないことだと思う。

だから私たちはこの語り継ぐで絶対に風化させないよう誓いたい。その他にも伝えていく方法はたく
さんある。例えば、出前授業。これは実際に私が3年生の夏休みに東北訪問に行かせていただいた後、
自分の母校での出前授業をした。こういったことで少しでも防災に興味を持って、この授業を聞いた人
から聞いていない人へとつなげて行ってほしい。

今後起こるとされている南海トラフ巨大地震では32万人亡くなるとされている。しかし私はもっと
減らすことができると思う。耐震化や家具の固定、防災教育などで減災に努めていきたい。

そして、これからも阪神・淡路大震災に関わっていききたい。毎年1月17日に東遊園地で行われてい
る追悼行事にこれからも参加する予定だ。将来は実行委員会に入りたいと考えている。絶対に忘れな
い。心に誓える瞬間だった。

語り継ぐ

藤原 優希

1 はじめに

今から 25 年前の 1995 年 1 月 17 日午前 5 時 46 分に阪神・淡路大震災が起こった。私たちはその当時、当たり前だが生きてはいない。あの震災を経験していない。経験した方々の気持ちになることはできない、共感することもできない。できることは経験した方々の貴重なお話を聞かせて頂き、経験していない子供たちにいろんな形で伝えていくことだ。また、防災を学ぶことで様々な職業で活かすことができ、防災を広める方法は沢山ある。そして、防災は色んなことを気づかせてくれた。毎日、当たり前で温かいご飯を食べることや、家に帰れば家族が「おかえり」と言ってくれること。「当たり前と思って過ごしてきたことが、当たり前ではない」ということを忘れてはいけない。日々色んな人やモノや出来事に感謝しながら生きてほしい。

2 阪神・淡路大震災の概要

名称：兵庫県南部地震

日時：1995 年 1 月 17 日午前 5 時 46 分 発生

震源地：淡路島北部

震源の深さ：16km

規模：マグニチュード 7.3

最大震度：震度 7

死者：6,434 名

行方不明者：3 名

負傷者：43,792 名

「阪神・淡路大震災について(内閣府 防災情報ページより)」

3 お母さんの話

私の母は、震災当時、看護師として働きだして 2 年目で震災を経験した。医療者目線よりも自分の体験した感想が主な内容である。

(1) 震災当時の状況

初めは弱い揺れで目が覚め「地震？」と思っていたら、トランポリンの上にいるような感じで何度も体を持ち上げられた。揺れが収まり外へ出ると辺りにはガスの臭いがした。周囲の人たちも外へ出てきていた。明るくなるにつれて周りの状況が少しずつ見えた。崩れた家、割れた道路、火の手が上がっている建物・・・。

何とか車で灘区にある病院へ向かった。元町の辺りを通ると線路が垂れ下がっていた。三宮のそごうや新聞会館のビルの窓ガラスがすべて割れ、中のブラインドがひらひらとなびいていた。傾いて今にも倒れそうなビルもあった。

(2) 急性期

病院に着き、まずは自分の寮の部屋に入ると、冷蔵庫が倒れ食器が散乱し、ひどい状況だった。その後急いで病棟へ向かうと、同僚の看護師が救急入口のアスファルトの上にマットレスを敷き詰め、病院内へ入りきらなかった患者の救急処置に当たっていた。救急車ではなく自家用車や畳の上にけが人を乗せて運んできていた。午後 3 時ごろ、ようやく助け出されて来たのか、おがくずだらけのおばあさんが畳の上にさせられて運び込まれた。意識はあった。次に 4、5 歳くらいの女の子が母親に抱きかかえられ連れて来られたが、全身が青紫色をしており、すでに亡くなっている状況だった。意識のある人は処置を行い、すでに亡くなっている人は警察の検視を受けるため、病院の検査室の廊下に並べられた。病院の中に 1 歩入ると、停電のため薄暗く、廊下にはマットレスが敷かれ、地震によって負傷した人たちが治療を受けていた。まるで野戦病院のようだった。自分の勤務していた 7 階の病棟に行くと、詰め所にあったカルテやレントゲンのフィルムが床に落ちて散乱していた。緊急時に作動したスプリンクラーで病院中のあちらこちらが水浸しになっていた。廊下には天井から落ちてきたコンクリートの塊が落ちていた。駆け付けた看護師や病院職員は皆、トレーナーにジーンズ、スニーカーの格好に予防衣を着けて勤務に当たった。

(3) その日の夜

夜、懐中電灯の明かりで患者さんの点滴をしに周った。停電のために外は真っ暗だったが救急車のサイレンが常に響いていた。いたるところで火災も起きており、赤い炎や黒い煙が神戸の空を覆っていた。その日は会議室に集まり床に横になり一夜を過ごした。まだ病院が揺れているのではないかと、傾いて今にも倒れるのではないかとという錯覚に陥った。地震が起こる前から働いていたスタッフ、地震後に駆け付け、着の身着のまま勤務に当たったスタッフ。自分の事には構わず目の前のことを淡々とこなしていたが、緊張とストレスがピークにきたのか、パニックになった。20～30代の若いスタッフが多い病院だった。ある看護師長さんが「顔を洗いなさい。そして少し休みなさい」と声をかけてくれた。患者を看る看護師も非日常の業務の中で壊れかけていた。

(4) 亜急性期

急性期の対応がひと段落すると、今度は院内の患者を外の病院へ転院させる作業に追われた。正常な機能をしていない病院での治療は限界があり、医師たちが医師名簿を持ち寄り、何日もかけて転院先を探した。混乱している道路状況の中、岡山や草津の遠方の病院へも患者を転院させていった。患者さんへの業務と並行して病院内の片付けにも追われた。カルテやフィルムの整理、トイレの汚物の掃除などを看護師、看護学生が主に行った。やってもやっても終わりのない気の遠くなるような作業だった。隣接する寮には戻らず病室の一室で寝食を共にした日々も続いた。

(5) 生活

シャワーも使えず、看護業務に使っていた陰洗ボトルや洗髪車で自分たちも体をきれいにした。1週間経ったころ、三田にある同期の親戚の家にお風呂へ入りにいった。電車に乗り、神戸を離れるにつれて街並みが別世界のように感じられた。何日前には自分たちも当たり前のようであった日常の風景が今はなく、ほんの少し離れたところにあることにショックだった。自分たちが取り残されたように感じた。夜にスタッフや医者と三宮の街を探索に行った。いつも行っていた三宮の街が廃墟のようになっており、お店の電気もなく真っ暗な街、倒壊したビルがあちこちにある。無言で歩いた。2週間後に、やっと実家に帰ることができるようになり、高速道路が使えるところから姫路に帰った。西へ進むにつれ、街並みが正常化されていくことに自分たちの現状とのギャップに虚しくなった。

(6) 経験して思ったこと

この震災を機に国を挙げて災害について考えるようになった。当時は、震災に対しての対応が手探り状態の中での医療活動であった。自衛隊の方や他府県のユニホームを着た消防・警察の隊員の方が多く街にいた。全国、世界からの応援の手が多くあったのを記憶している。この度、娘からこのような依頼を受けなければあの日を自分なりに振り返ることはなかった。あの当時、実際にそこで生活していた人と外の人との間には温度差があったと自分は感じた。体験した人にしかわからないこととし、あまり他人に詳しくは話してこなかった。震災後20数年が過ぎ、その間にも大きな震災が何度となくこの国に起こった。環境防災科で学ぶ娘の姿を見て「語り継ぐ」ことの大切さを理解した。

4 話を聞いて

母は自分の話をしない人で、震災当時の話をこんなにも深く聞いたのは、初めてだった。そして、悲惨な経験。想像するだけでも、心が締め付けられるような思いになる。災害前と災害時と災害後からの復興のその映像や写真を見ても、同じ場所なのか、本当にここで起きたのかと疑うほど街が復興した。こんなにも、一瞬の出来事で街が変わり果てるのか。その現状を目の前にしたときに、自分はどうなるのかと考える時もある。今、私たちが生活をしている場所には、色々な方々の大切な人が亡くなった場所であり、モノや仕事や団らんが失われた場所でもある。そこに、計り知れないほどの苦労があったからこそ、こんな素敵な街に戻った。私は、神戸に生まれてよかったと思うほど、神戸の街が好きだ。そんな場所をまた、災害によって失いたくないし、大切な家族や友達を亡くしたくない。だから、阪神・淡路大震災の教訓をみんなに伝えたいと改めて感じた。

5 環境防災科に入ろうと思った理由

元々環境防災科を第1志望の高校には考えておらず、説明会にも行かなかった。しかし、部活動でボランティア活動を3年間していたこともあり、顧問の先生がずっと勧めていてくれていた学校でもあった。中学3年の2学期に入り、進路のことですべて悩んでいた。そのような時、11月に最後の学校説明会があり、なぜか参加してみようと思い、参加した。中学生の頃、生徒会執行部に所属しており、大勢の前で話をしないといけない時があった。しかし、一番伝えたい事を緊張のあまり伝える事ができず、悔しい思

いをした。その経験をした直後に、学校説明会で、3年生の先輩方が今まで学んできた防災とこれから進む将来のことや夢について話をしてくれた。その時に私は「こんな人になりたい、人の前で堂々と自分の夢を語れる人になりたい」と強く思った。説明会を受けるまでの自分の失敗とその説明会で聞いた先輩方の話がタイミングよく重ならなかったら、環境防災科に入ることにはなかった。すごい偶然が重なった。その説明会に参加していなかったら、この学校を受験することはなく、今のクラスの皆と出会うことはなかったと考えたら、参加して本当によかったと思う。

6 ボランティア活動

私は、様々なボランティア活動に参加させて頂いた。どれも環境防災科でしかできないことで、普通科や違う学校に入っていたらできなかったことである。

〈私が行ったボランティア活動〉

- ・東北訪問
- ・絆の架け橋プロジェクト
- ・全国ジュニアリーダー育成合宿
- ・「語り継ぐ」の会
- ・地域の防災訓練、夏祭り
- ・活動発表

7 私が環境防災科で学んで伝えたいこと

「自分の命は自分で守る」そして、「災害時に率先して避難ができる人になってほしい」ということだ。普段の学校生活では、常に指示を出してくれる教師がいるが、災害時には自分の判断によって避難しなければならない。また、教師の判断が正しいわけではないという事を知っていてほしい。教師も1人の人間であり、冷静に判断ができない事や間違えてしまう事もある。そして、子供ながらの危機感や恐怖を教師や周りの人に言ってほしい。その一言で、命が救われるかもしれない。

8 将来の夢

私の将来の夢は看護師になることだ。看護師になろうと思ったきっかけは、小学校低学年の頃、お母さんの職場の病院に行った時に、今まで見たことのないお母さんの看護師の姿がかっこいいと思ったからだ。そして、中学生になり、現実的に進路を考えたときに、看護師になりたいと思うことへの不安が出てきた。生と死の境目で患者さんがいきなり亡くなってしまうことは日常茶飯事だと思う。その中で、自分は耐えられるだろうか、逃げ出したくなるのではないかと思い、かっこいいという理由だけではこの夢を追うことができず、夢を変えるべきなのではないかと思った。しかし、看護師以外の職業を考えたことがこれまでになかったことと、なにか人の役に立つ職業に就きたいと思っていたので、卒業後は看護師になるための進路に進むことを考えている。

看護師になってやりたいことがある。それは「防災教室」を病院で開くことである。これを行いたい理由としては、日本にいる限りどこでも災害が起こり得ると授業で学んだからだ。看護師や病院のスタッフだけが防災知識を持つのではなく、被害に遭うかもしれない患者さんやその家族の方々に防災知識を身に付けて頂きたいと思ったからだ。また、病気にかかった患者さんにしかわからない事がある。自分の体の少しの変化で不安になる事や、ネガティブになってしまう事、そのようなことを少しでも解消してあげたい。そこで患者さん同士での会話のきっかけをつくることのできる防災教育は、自分と同じ病気で治療しているのであれば、お互い励まし合いながら、治していって欲しいという思いも入っている。

具体的な内容は、月に1回程度で、病室や家での家具やものの置き方と固定の仕方、自分専用の非常持ち出し袋の作り方、簡単に作れる防災カップや新聞スリッパなどその患者さんの病状や性格や障害に応じて工夫しながら、教えることだ。そこで、私が環境防災科に入って学んできたことが活かされる。自分が学んできた事を人に教える、そんなうれしいことはない。

看護師になったの最終の目標は「DEMT」という災害派遣医療チームに入り、災害急性期の人命救助活動に携わり、人の命を助けることだ。看護師になったら、必ず災害現場の最前線で働きたい。そのために、突発的な外傷、急性疾患、慢性疾患などのさまざまな状況によって、救急処置が必要な対象に実施される看護活動を行う救急で実務経験を積み、学びたい。そして、欲を言えば、生まれた場所での経済状況や環境により、病気にかかっても、治療を受けることができない人たちに医療サービスを提供できる施設を造り、自らその人たちの治療に関わることである。小さい頃から、「なんで、同じ地球に生まれた人間が

生まれた場所の環境によって、栄養失調や病気にかかっても治療を受けることができず、亡くならないといけないのだろう。」と不公平に感じていた。少しでも人の役に立ちたいと思う。

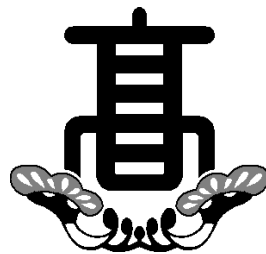
9 感想

この「語り継ぐ」を書くことで、今までの復習やこれからしたいことが分かってきた気がする。環境防災科に入学してから、何度も、「なぜ、ここに入ろうと思ったのか、入って何がしたかったのか」とわからなくなり、自分に問いかけては答えが出ず、ただ単に学校に行っているだけに感じるときもあった。防災を学んでも、自分たちに出来る事は限られている。意味がないと思うこともあった。しかし、3年生になってやっと、防災はこの先のどんな時でも役に立つし、自分たちが学んできたことをいろんな形で広めることができると分かってきた。そう思えたときは、この2年間学んできたことは無駄ではなかったと思えた。そのため、冒頭の「はじめに」で「防災を学ぶことで様々な職業で活かすことができ、防災を広める方法は沢山ある。」という言葉を書くことができた。

私はあまり計画を立てない人間で、決める直前になってすごく焦るタイプだ。先のことを考えても答えは出ない。考えている時間があれば、今やらないといけない事を一生懸命している方がいいと思ってしまう。しかし、今回将来のことを考えて、将来の夢に防災をどうやって繋げていこうかと考えることができ、どこまでその夢が叶うか分からないが、やりたいと思ったことは実現させたいと思った。

10 最後に

「語り継ぐ」を書くにあたって色々な人のおかげで書き終えることができた。私はこれからも防災を色々な人に語り継いでいく。



兵庫県立舞子高等学校

〒655 - 0004 神戸市垂水区学が丘3丁目2番

Tel : 078 - 783 - 5151 Fax : 078 - 783 - 5152